

# 舞台遺跡(2)

(古墳時代編)

北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域  
埋蔵文化財発掘調査報告書 第24集

2004

日 本 道 路 公 団  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



『舞台遺跡(2)』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第331集

正誤表

- 写真図版 PL. 42 E3・129号住居跡 2(誤)→10(正)  
PL. 91 A1・5a号住居跡 41(誤)→42(正)





# 舞台遺跡 (2)

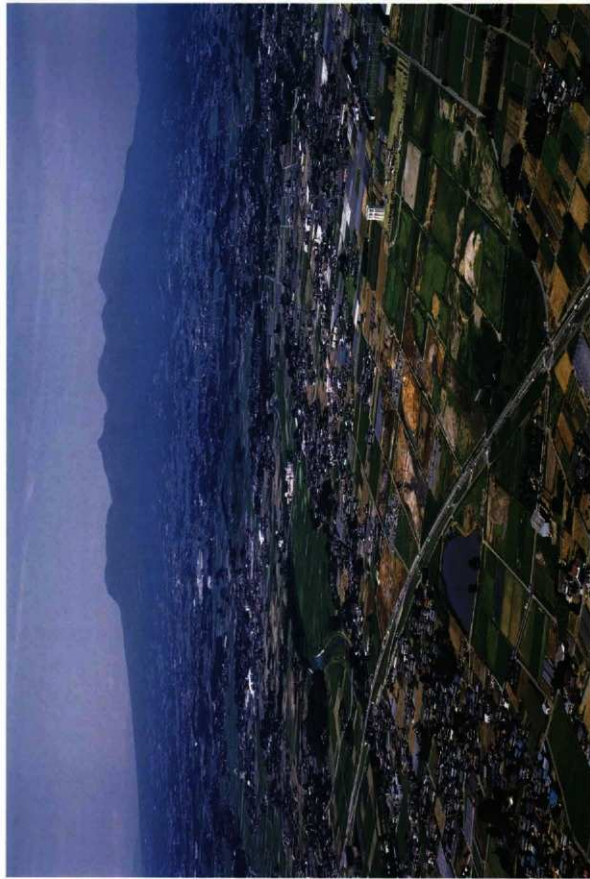
(古墳時代編)

北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域  
埋蔵文化財発掘調査報告書 第24集

2004

日 本 道 路 公 団  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団





舞台道路通景 上縁の山並みは赤城山。左下方の弧状道路は国道152号。中央部方面地帯が運動地帯で三和工業団地遺跡もこの一帯に連なる。



北上空より望む舞台遺跡周溝墓群 前方後方形2基、方形8基がある。画面左右は三和工業団地遺跡で10基の方形周溝墓が検出されている。



周溝墓群近景 画面右下緑地帯にかかる部分に6号周溝墓の一部が見える。方台部の規模は前方後方形の1号・9号周溝墓の後方を凌駕する大きさをもつ。



1号周溝墓（前方後方形） 周溝内より多くの小型二段口縁壺が出土する。



1号周溝墓出土遺物 小型二段口縁壺は底部穿孔で肩部に二段の縄紋文様帯を施文するが、9号周溝墓（前方後方形）出土の壺に同類品がある。



9号周溝墓（前方後方形）出土遺物 周溝墓群中で最多の遺物量をもつ。二段口縁密には大・中・小があり、縄紋文様帯を施す小型二段口縁密は1号周溝墓より少なく無紋のものが多数である。



10号周溝墓（方形）出土遺物 出土壺類は折り返し口縁または単口縁が多い。二段口縁密は矮小化し個体数も少ない。



絵画土器 古墳前期A2-163号住居跡出土。肩部に筆描きの絵画様の刻線文を施す。意匠は判然としないが、鳥類の羽ばたきを表現しているようにも見える。口縁部内側は太めの朱線で5区分を、これに対称して肩部に朱線文を配す。



古墳前期の住居跡から出土した垂圍鏡（銅鏡）とガラス製飾り玉。鏡はD-146号住居跡出土。直径6.8cmの小型鏡で赤色顔料の痕跡が残る。住居跡は南に隣接する10号周溝墓と重複し、周溝墓より古い。ガラス玉はF-93号住居跡出土。



古墳後期の住居跡から出土した耳環と馬形模造品。耳環はE3-204号住居跡出土。銅地に銀・金を重ねる。馬形模造品はA1-25号住居跡出土。滑石製。



## 序

北関東自動車道は、本県高崎市の関越自動車道から分岐し、茨城県那珂湊にいたる延長150kmの高速自動車道であります。その間、群馬・栃木・茨城各県の主要都市及び東北自動車道・常磐自動車道を結び、地域社会の発展に大きな役割を果たすものと期待されています。

この北関東自動車道の高崎～伊勢崎間約15kmの建設に先立って、平成7年6月から36の遺跡で発掘調査が行われましたが、当事業団ではその内、31の遺跡の発掘調査を担当いたしました。また、それらの遺跡の整理作業は平成10年度から実施しており、本書『舞台遺跡(2)』は、その発掘調査報告書第24集として刊行するものです。

本遺跡は、伊勢崎市三和町に所在し、発掘調査は平成7年度から11年度まで、整理は平成10年度から実施しました。その結果、旧石器時代、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の住居跡や遺物が数多く発見されました。既に『舞台遺跡(1)』として刊行しております平安時代の須恵器窯跡は平地に築かれた県内でも希な窯跡群です。

本報告書は主として古墳時代の遺構・遺物について報告いたします。古墳時代前期と古墳時代後期の住居跡を中心ですが、この中で注目される遺構として10基の方形周溝墓があります。古墳時代前期の墓域としては隣接する三和工業団地遺跡と合わせ、その数20数基からなる県内でも最大規模の方形周溝墓群として特筆されるでしょう。北関東自動車道の建設に先立ち発掘調査された他の遺跡とともに、波志江沼周辺地域の古代を明らかにしていく貴重な資料となるものと確信しております。

最後になりましたが、日本道路公団東京建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会文化課、伊勢崎市教育委員会、地元関係者の皆様には、発掘調査から本報告書刊行まで終始ご協力を賜り心から感謝の意を表します。

平成16年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小野 宇三郎



## 例 言

1. 本書は、北関東自動車道（高崎～伊勢崎）地域建設に伴い事前調査された、舞台遺跡（遺跡略号KT-320）の発掘調査報告書である。本書は、全3巻中の第2巻で、舞台遺跡から検出された諸時代のうち古墳時代を対象とする。なお、第1巻は『舞台遺跡(1)』（奈良・平安時代他編）2002 として刊行した。
2. 舞台遺跡は群馬県伊勢崎市三和1690-1、1691-1、1691-2、1703-1、1704-1、1704-2、1705、1706、1707-1、1708-1、1730-1、1731-1、1731-2、1732-1、1733-1、1739-1、1741-1、1742-1、1743-1、1744-1、1745、1746、1747-1、1748、1749、1750、1750-2、1751-1、1752-1、1753-1、1754-1、1755-1、1756-1、1756-2、1757-1、1757-2、1758-1、1759-1、1789-4、1791-1、1792-1、1793-1、1794-1、1794-8、1795、1796、1797、1798-1、1798-2、1798-3、1798-5、1798-6、1799、1802、1803、1804、1805、1806、1807-1、1823-1、1824、1825、1826、1827、1828、1892-1にまたがって所在する。
3. 事業主体 日本道路公団
4. 調査主体 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
5. 調査期間 平成7年4月1日～平成12年3月31日
6. 整理期間 平成13年4月1日～平成15年3月31日
7. 調査・整理組織
  - 事務担当 小野宇三郎・吉田 豊・神保侑史・水田 稔・能登 健・菅野 清・原田恒弘・赤山容造・萩原利通・渡辺 健・小淵 淳・巾 隆之・津金沢茂吉・真下高幸・植原恒夫・坂本敏夫・大島信夫・中東耕志・西田健彦・小山建夫・笠原秀樹・高橋房雄・井上 剛・国定 均・須田朋子・吉田有光・森下弘美・柳岡良宏・田中健一・宮崎忠司・岡島伸昌・片岡徳雄・大澤友治
  - 調査担当 井上哲男・伊平 敬・金子伸也・久保 学・熊谷 健・小室綾子（旧性立澤）・須田正久・関口美枝・津島秀章・友廣哲也・長沼孝則・新倉明彦・深澤敦仁・  
総貫邦男
  - 整理担当・Staff  
総貫邦男・大勝桂子・鳥村玲子・長岡和恵・長谷川公子・福島和恵
  - 遺物写真 佐藤元彦
  - 保存処理 関 邦一・土橋まり子
  - 遺物実測 一部機械実測班
8. 石器石材鑑定 飯島静男氏（群馬県地質研究会）
9. 発掘調査資料・出土遺物は群馬県埋蔵文化財センターに保管してある。
10. 発掘調査及び報告書作成には次の方々からご協力・ご指導いただいた。  
伊勢崎市教育委員会・地元関係者各位・荒川正夫・昆影生・佐々木幹雄・須長泰一・高橋紘・平田貴正
11. 本書執筆 第1章 第1節 中東耕志  
第2節 新倉明彦  
第2章～第3章 総貫邦男
12. 本書編集 総貫邦男

## 凡 例

1. 本書における遺構名称は区名を示す Alphabet 及び算用数字と遺構形状や機能による慣例的名称を用いて表す。Alphabet および数字は調査の進行に伴って便宜上付与してあるためいかなる順位をも示すものではなく、遺構固有名詞とする。なお、竪穴住居跡と竪穴跡の区別は基本的に竈・炉跡の有無による。
2. 本書の遺構図版中にある+印とそれに付記される3桁2種の数値は、国家座標値X・Y値を表す。ただし、5桁数値のうち前2桁のX値38、Y値54は省略してある。
3. 遺構の位置及び範囲を示すに国家座標値X・Y値を用いる。ただし、5桁数値のうち前2桁のX値38、Y値54は省略してある。範囲を示す座標値単位は1㎡である。
4. 本書における遺構図版にはそれぞれ縮尺比例尺を付したが、基本的には次のようである。  
竪穴住居跡・竪穴跡：1/80 竈・炉跡：1/40 方形周溝墓：1/150 土坑：1/40 但し図によってはこの限りではない。
5. 本書における遺物図版にはそれぞれ縮尺比例尺を付したが、基本的には次のようである。  
金属器・石器類・土製品等の小型品：1/2 土器類：1/4 ただし遺物によってはこの限りではない。
6. 本書における遺構図版中の断面水平基準は標高値でこれを表した。単位はメートル (m) である。
7. 本書における各遺構図版中の遺物・遺物図版・遺物写真図版・遺物計測表の遺物に付された同一番号は同一遺物を示す。
8. 土器の実測図は原則として四分制法をとった。但し残存量が二分の一以下のものは180度展開して図上復元とし、中心線は点線でこれを示した。
9. 「主軸方位」は、竪穴住居跡・竪穴遺構・周溝墓などのうち、竈付設の遺構については付設される壁線に直交する軸を基線にした。それ以外については、真北に対する長軸線の東ないしは西方への傾きを、また、長・短軸長差のない場合は北面あるいは北面近似の壁線に平行する軸線の傾きをもってこれを示した。
10. 遺物の撮影及び展開・断面は基本的に一角法で示した。
11. 土層及び土器の色調名は『標準土色帳』農林省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修に基本的に準じた。
12. 本書で使用する浅間山及び榛名山噴火による降下火砕物・泥流堆積物の呼称については以下のように表記する。  
As-A : 浅間山噴出の火砕物 1738 (天明三) 年  
As-B : 浅間山噴出の火砕物 1108 (天仁元) 年  
FP 泥流 : 榛名山二ツ岳噴出の火砕物泥流堆積物  
FP : 榛名山二ツ岳噴出の火砕物  
FA 泥流 : 榛名山二ツ岳噴出の火砕物泥流堆積物  
FA : 榛名山二ツ岳噴出の火砕物  
C軽石 : 浅間山噴出の火砕物
13. 遺構平面図・断面図・土層に示した網のうち、焼土・炭化層・粘土はそれぞれ下記の網目でこれを示した。  
焼土は点網・炭化層は黒網・粘土は散淡線網

# 目 次

序

例 言

凡 例

目 次

挿図目次・写真目次

報告書抄録

第1章 発掘調査の概要 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 調査の方法と経過 .....	2
第2章 遺跡の立地と歴史環境 .....	5
第1節 遺跡の立地 .....	5
第2節 歴史環境 .....	6
第3章 検出された遺構と遺物 .....	9
第1節 古墳時代における遺跡の概要 .....	9
第2節 古墳時代後期の遺構 .....	12
1. 竪穴住居跡 .....	12
第3節 古墳時代後期の遺物 .....	68
1. 土器の器種分類 .....	68
2. 住居跡出土遺物 .....	74
3. 円形周溝遺構・遺物 .....	135
4. 土坑・遺物 .....	137
5. 谷地出土遺物 .....	139
第4節 古墳時代前期の遺構 .....	168
1. 竪穴住居跡 .....	169
第5節 古墳時代前期の遺物 .....	277
1. 土器の器種分類 .....	277
2. 住居跡・竪穴跡の出土遺物 .....	284
3. 土坑 .....	355
第6節 周溝墓と出土遺物 .....	356
1. 周溝墓 .....	356
2. 谷地出土遺物 .....	391

写真図版

# 插图目次

第 1 图 北関東自動車道開通連絡地位置図 .....001	第 57 图 E <sub>p</sub> -138号住居跡 .....053	第116图 F-66号住居跡出土遺物(2) .....093
第 2 图 舞台遺跡調査区劃図 .....003	第 58 图 E <sub>p</sub> -140号住居跡 .....054	第117图 F-66号住居跡出土遺物(3) .....094
第 3 图 周辺遺跡分布図 .....004	第 59 图 D-149号住居跡 .....054	第118图 E <sub>p</sub> -90号住居跡出土遺物(1) .....095
第 4 图 伊勢崎市城地形区分図 .....005	第 60 图 E <sub>p</sub> -159号住居跡 .....055	第119图 E <sub>p</sub> -90号住居跡出土遺物(2) .....096
第 5 图 舞台遺跡立地環境 .....005	第 61 图 E <sub>p</sub> -169号住居跡 .....056	第120图 E <sub>p</sub> -92a号住居跡出土遺物 .....096
第 6 图 周辺遺跡位置図 .....007	第 62 图 E <sub>p</sub> -170号住居跡 .....056	第121图 E <sub>p</sub> -94号住居跡出土遺物 .....097
第 7 图 古墳時代後期遺構分布図 .....010	第 63 图 E <sub>p</sub> -171号住居跡 .....057	第122图 E <sub>p</sub> -96号住居跡出土遺物 .....098
第 8 图 古墳時代後期住居跡単位想定図 .....012	第 64 图 E <sub>p</sub> -177号住居跡 .....058	第123图 E <sub>p</sub> -98号住居跡出土遺物 .....098
第 9 图 古墳時代後期住居跡面積分布図 .....013	第 65 图 E <sub>p</sub> -182、197号住居跡 .....059	第124图 E <sub>p</sub> -99号住居跡出土遺物 .....099
第 10 图 A <sub>1</sub> -2号住居跡 .....014	第 66 图 E <sub>p</sub> -203号住居跡 .....060	第125图 E <sub>p</sub> -101b号住居跡出土遺物 .....100
第 11 图 A <sub>1</sub> -3、4号住居跡 .....015	第 67 图 E <sub>p</sub> -204号住居跡 .....061	第126图 E <sub>p</sub> -105号住居跡出土遺物(1) .....101
第 12 图 A <sub>1</sub> -6号住居跡 .....016	第 68 图 E <sub>p</sub> -209号住居跡 .....061	第127图 E <sub>p</sub> -105号住居跡出土遺物(2) .....102
第 13 图 A <sub>1</sub> -8号住居跡 .....017	第 69 图 D-212、211号住居跡 .....062	第128图 E <sub>p</sub> -108号住居跡出土遺物(1) .....102
第 14 图 A <sub>1</sub> -13号住居跡 .....017	第 70 图 D-214、224号住居跡 .....063	第129图 E <sub>p</sub> -108号住居跡出土遺物(2) .....103
第 15 图 A <sub>1</sub> -14号住居跡 .....018	第 71 图 D-215号住居跡 .....064	第130图 E <sub>p</sub> -109号住居跡出土遺物(1) .....104
第 16 图 A <sub>1</sub> -17号住居跡 .....019	第 72 图 D-218号住居跡 .....065	第131图 E <sub>p</sub> -109号住居跡出土遺物(2) .....105
第 17 图 A <sub>1</sub> -18号住居跡 .....019	第 73 图 D-220号住居跡 .....065	第132图 E <sub>p</sub> -109号住居跡出土遺物(3) .....106
第 18 图 A <sub>1</sub> -20号住居跡 .....020	第 74 图 E <sub>p</sub> -223号住居跡 .....066	第133图 E <sub>p</sub> -110、E <sub>p</sub> -112号住居跡出土遺物 .....107
第 19 图 A <sub>1</sub> -23号住居跡 .....021	第 75 图 E <sub>p</sub> -226号住居跡 .....066	第134图 E <sub>p</sub> -114号住居跡出土遺物(1) .....107
第 20 图 A <sub>1</sub> -25号住居跡 .....021	第 76 图 D-87号住居跡 .....067	第135图 E <sub>p</sub> -114号住居跡出土遺物(2) .....108
第 21 图 A <sub>1</sub> -31号住居跡 .....022	第 77 图 土器分類 (環) .....068	第136图 E <sub>p</sub> -115号住居跡出土遺物(1) .....109
第 22 图 A <sub>1</sub> -33号住居跡 .....023	第 78 图 土器分類 (高坏) .....069	第137图 E <sub>p</sub> -115号住居跡出土遺物(2) .....110
第 23 图 A <sub>1</sub> -34号住居跡 .....024	第 79 图 土器分類 (鉢) .....070	第138图 E <sub>p</sub> -116号住居跡出土遺物 .....110
第 24 图 A <sub>1</sub> -36号住居跡 .....025	第 80 图 土器分類 (甕 1) .....070	第139图 E <sub>p</sub> -122号住居跡出土遺物(1) .....111
第 25 图 A <sub>1</sub> -37号住居跡 .....026	第 82 图 土器分類 (甕 2) .....071	第140图 E <sub>p</sub> -122号住居跡出土遺物(2) .....112
第 26 图 A <sub>1</sub> -39号住居跡 .....027	第 83 图 土器分類 (甕 3) .....071	第141图 E <sub>p</sub> -123号住居跡出土遺物 .....112
第 27 图 A <sub>1</sub> -41号住居跡 .....028	第 84 图 土器分類 (甕 4) .....071	第142图 E <sub>p</sub> -124号住居跡出土遺物(1) .....113
第 28 图 A <sub>1</sub> -45号住居跡 .....028	第 85 图 土器分類 (甕 5) .....072	第143图 E <sub>p</sub> -124号住居跡出土遺物(2) .....114
第 29 图 A <sub>1</sub> -46号住居跡 .....029	第 86 图 土器分類 (甕 6) .....072	第144图 E <sub>p</sub> -125、126号住居跡出土遺物 .....114
第 30 图 C-53号住居跡 .....030	第 87 图 土器分類 (甕) .....073	第145图 E <sub>p</sub> -130号住居跡出土遺物 .....115
第 31 图 C-57号住居跡 .....031	第 88 图 A <sub>1</sub> -2号住居跡出土遺物 .....074	第146图 E <sub>p</sub> -134号住居跡出土遺物(1) .....115
第 32 图 F-66号住居跡 .....032	第 89 图 A <sub>1</sub> -3号住居跡出土遺物(1) .....075	第147图 E <sub>p</sub> -134号住居跡出土遺物(2) .....116
第 33 图 E <sub>p</sub> -90号住居跡 .....033	第 90 图 A <sub>1</sub> -3号住居跡出土遺物(2) .....076	第148图 E <sub>p</sub> -138号住居跡出土遺物 .....116
第 34 图 E <sub>p</sub> -92a号住居跡 .....033	第 91 图 A <sub>1</sub> -3号住居跡出土遺物(3) .....077	第149图 E <sub>p</sub> -140号住居跡出土遺物(1) .....117
第 35 图 E <sub>p</sub> -94号住居跡 .....034	第 92 图 A <sub>1</sub> -5b号住居跡出土遺物 .....077	第150图 E <sub>p</sub> -140号住居跡出土遺物(2) .....118
第 36 图 E <sub>p</sub> -96号住居跡 .....035	第 93 图 A <sub>1</sub> -6号住居跡出土遺物 .....078	第151图 E <sub>p</sub> -140号住居跡出土遺物(3) .....119
第 37 图 E <sub>p</sub> -98号住居跡 .....036	第 94 图 A <sub>1</sub> -8、14号住居跡出土遺物 .....078	第152图 D-149号住居跡出土遺物 .....119
第 38 图 E <sub>p</sub> -99号住居跡 .....037	第 95 图 A <sub>1</sub> -14号住居跡出土遺物 .....079	第153图 E <sub>p</sub> -150号住居跡出土遺物 .....120
第 39 图 E <sub>p</sub> -101a、b、c号住居跡 .....038	第 96 图 A <sub>1</sub> -17、18号住居跡出土遺物 .....079	第154图 E <sub>p</sub> -169号住居跡出土遺物(1) .....120
第 40 图 E <sub>p</sub> -101a、b、c号住居跡 .....039	第 97 图 A <sub>1</sub> -20号住居跡出土遺物 .....080	第155图 E <sub>p</sub> -169号住居跡出土遺物(2) .....121
第 41 图 E <sub>p</sub> -105号住居跡 .....040	第 98 图 A <sub>1</sub> -23号住居跡出土遺物 .....080	第156图 E <sub>p</sub> -170号住居跡出土遺物(1) .....121
第 42 图 E <sub>p</sub> -108a、b号住居跡 .....041	第 99 图 A <sub>1</sub> -25号住居跡出土遺物(1) .....081	第157图 E <sub>p</sub> -170号住居跡出土遺物(2) .....122
第 43 图 E <sub>p</sub> -109号住居跡 .....042	第100图 A <sub>1</sub> -25号住居跡出土遺物(2) .....082	第158图 E <sub>p</sub> -171号住居跡出土遺物(2) .....123
第 44 图 E <sub>p</sub> -110号住居跡 .....043	第101图 A <sub>1</sub> -25号住居跡出土遺物(3) .....083	第159图 E <sub>p</sub> -171号住居跡出土遺物(3) .....124
第 45 图 E <sub>p</sub> -112号住居跡 .....044	第102图 A <sub>1</sub> -31、33号住居跡出土遺物 .....083	第160图 E <sub>p</sub> -171号住居跡出土遺物(3) .....125
第 46 图 E <sub>p</sub> -114号住居跡 .....045	第103图 A <sub>1</sub> -34号住居跡出土遺物 .....084	第161图 E <sub>p</sub> -177号住居跡出土遺物(1) .....125
第 47 图 E <sub>p</sub> -115号住居跡 .....046	第104图 A <sub>1</sub> -36号住居跡出土遺物 .....085	第162图 E <sub>p</sub> -177号住居跡出土遺物(2) .....126
第 48 图 E <sub>p</sub> -116号住居跡 .....047	第105图 A <sub>1</sub> -37号住居跡出土遺物 .....086	第163图 E <sub>p</sub> -182号住居跡出土遺物 .....127
第 49 图 E <sub>p</sub> -122号住居跡 .....047	第106图 A <sub>1</sub> -39号住居跡出土遺物 .....087	第164图 E <sub>p</sub> -197、E <sub>p</sub> -203号住居跡出土遺物 .....128
第 50 图 E <sub>p</sub> -123号住居跡 .....048	第107图 A <sub>1</sub> -41号住居跡出土遺物 .....087	第165图 E <sub>p</sub> -204号住居跡出土遺物(1) .....128
第 51 图 E <sub>p</sub> -124号住居跡 .....049	第108图 A <sub>1</sub> -45号住居跡出土遺物(1) .....088	第166图 E <sub>p</sub> -204号住居跡出土遺物(2) .....129
第 52 图 E <sub>p</sub> -125号住居跡 .....050	第109图 A <sub>1</sub> -45号住居跡出土遺物(2) .....089	第167图 E <sub>p</sub> -209号住居跡出土遺物(1) .....129
第 53 图 E <sub>p</sub> -126号住居跡 .....051	第110图 A <sub>1</sub> -46号住居跡出土遺物(1) .....089	第168图 E <sub>p</sub> -209、D-212号住居跡出土遺物 .....130
第 54 图 E <sub>p</sub> -127号住居跡 .....051	第111图 C-53号住居跡出土遺物 .....091	第169图 D-214号住居跡出土遺物 .....130
第 55 图 E <sub>p</sub> -130号住居跡 .....052	第113图 C-57号住居跡出土遺物 .....091	第170图 D-215号住居跡出土遺物 .....131
第 56 图 E <sub>p</sub> -134号住居跡 .....053	第114图 C-59号住居跡出土遺物 .....092	
	第115图 F-66号住居跡出土遺物(1) .....092	

第171回	D-218号住居跡出土遺物	132	第231回	A <sub>2</sub> -163号住居跡	189	第294回	D-148号住居跡	233
第172回	D-220号住居跡出土遺物(1)	132	第232回	A <sub>2</sub> -164号壑穴跡	190	第295回	D-156号住居跡	234
第173回	D-220号住居跡出土遺物(2)	133	第233回	A <sub>2</sub> -165号住居跡	190	第296回	D-160号住居跡	235
第174回	E <sub>2</sub> -226号住居跡出土遺物	133	第234回	B-71号壑穴跡	190	第297回	D-186号住居跡	235
第175回	D-87号住居跡出土遺物	134	第235回	B-72号壑穴跡	191	第298回	D-213号住居跡	236
第176回	E <sub>2</sub> -129号住居跡出土遺物	135	第236回	B-73号壑穴跡	191	第299回	D-216号住居跡	237
第177回	A <sub>1</sub> -5a・b号住居跡	135	第237回	B-74号壑穴跡	192	第300回	D-217号住居跡	238
第178回	A <sub>1</sub> -1号円形周溝遺構	136	第238回	B-75号壑穴跡	193	第301回	D-219・222号住居跡	238
第179回	E <sub>2</sub> -2号円形周溝遺構・出土遺物	136	第239回	B-76号壑穴跡	194	第302回	E <sub>2</sub> -93号壑穴跡	239
		136	第240回	B-77号壑穴跡	194	第303回	E <sub>2</sub> -95号壑穴跡	240
第180回	D-195号土坑	137	第241回	B-78号壑穴跡	195	第304回	E <sub>2</sub> -100号住居跡	240
第181回	D-195号土坑出土遺物	138	第242回	B-79号壑穴跡	195	第305回	E <sub>2</sub> -104号住居跡	241
第182回	谷地出土土塚(1)	141	第243回	B-81号住居跡	196	第306回	E <sub>2</sub> -129号住居跡	242
第183回	谷地出土土塚(2)	142	第244回	B南-1号住居跡	196	第307回	E <sub>2</sub> -131号住居跡	243
第184回	谷地出土土塚(3)	143	第245回	C-50・59号住居跡	197	第308回	E <sub>2</sub> -132号住居跡	243
第185回	谷地出土土塚(4)	144	第246回	C-54号住居跡	198	第309回	E <sub>2</sub> -133号壑穴跡	244
第186回	谷地出土土塚(5)	145	第247回	C-55号住居跡	199	第310回	E <sub>2</sub> -167号壑穴跡	244
第187回	谷地出土土塚(6)	146	第248回	C-56号壑穴跡	200	第311回	E <sub>2</sub> -176・178号住居跡	245
第188回	谷地出土土塚(7)	147	第249回	D-01号壑穴跡	200	第312回	E <sub>2</sub> -184号住居跡	246
第189回	谷地出土土塚(8)	148	第250回	D <sub>1</sub> -1号住居跡	201	第313回	E <sub>2</sub> -185号住居跡	246
第190回	谷地出土土塚(9)	149	第251回	D <sub>1</sub> -2号住居跡	202	第314回	F-46・48号住居跡	247
第191回	谷地出土土塚(1)	152	第252回	D <sub>1</sub> -3・4・17号住居跡	203	第315回	F-49号住居跡	248
第192回	谷地出土土塚(2)	153	第253回	D <sub>1</sub> -5a・b号住居跡	205	第316回	F-51号壑穴跡	249
第193回	谷地出土土塚(3)	154	第254回	D <sub>1</sub> -6号住居跡	206	第317回	F-54号住居跡	249
第194回	谷地出土土塚(4)	155	第255回	D <sub>1</sub> -7号壑穴跡	207	第318回	F-56a・b号住居跡	250
第195回	谷地出土土塚(5)	156	第256回	D <sub>1</sub> -8号住居跡	207	第319回	F-56a・b号住居跡掘形	251
第196回	谷地出土土塚(6)	157	第257回	D <sub>1</sub> -10・14号住居跡・壑穴跡	208	第320回	F-57号壑穴跡	252
第197回	谷地出土土塚(7)	158	第258回	D <sub>1</sub> -11号壑穴跡	208	第321回	F-58号住居跡	253
第198回	谷地出土土塚(8)	159	第259回	D <sub>1</sub> -12号住居跡	209	第322回	F-59号壑穴跡	254
第199回	谷地出土土塚(9)	160	第260回	D <sub>1</sub> -13号壑穴跡	209	第323回	F-61号住居跡	255
第200回	谷地出土土塚(10)	161	第261回	D <sub>1</sub> -15号壑穴跡	210	第324回	F-64号住居跡	255
第201回	谷地出土土塚(11)	162	第262回	D <sub>1</sub> -18号住居跡	210	第325回	F-65号住居跡	256
第202回	谷地出土土塚(12)	163	第263回	D <sub>1</sub> -19号住居跡	211	第326回	F-68・69号住居跡・壑穴跡	257
第203回	谷地出土土塚(13)	164	第264回	D <sub>1</sub> -20号住居跡	212	第327回	F-71・72号住居跡	258
第204回	住居跡柱状(1)	165	第265回	D <sub>1</sub> -21号住居跡	213	第328回	F-73号住居跡	259
第205回	住居跡柱状(2)	166	第266回	D <sub>1</sub> -22号住居跡	213	第329回	F-74号住居跡	260
第206回	中井戸出土土器	167	第267回	D <sub>1</sub> -23a・b号住居跡	214	第330回	F-75号住居跡	261
第207回	古墳時代前期遺構分布図	168	第268回	D <sub>1</sub> -24a号住居跡・b号壑穴跡	215	第331回	F-76・77号住居跡	262
第208回	古墳時代前期住居跡面積分布	170	第269回	D <sub>1</sub> -27号住居跡	216	第332回	F-78号住居跡	263
		170	第270回	D <sub>1</sub> -28号住居跡	216	第333回	F-81号住居跡	263
第209回	古墳時代前期被火住居(壑穴)跡	171	第271回	D <sub>1</sub> -29号住居跡	217	第334回	F-82号住居跡	264
		171	第272回	D <sub>1</sub> -30号住居跡	218	第335回	F-87号住居跡	265
第210回	A <sub>1</sub> -1号住居跡	172	第273回	D <sub>1</sub> -31号壑穴跡	218	第336回	F-91号住居跡	265
第211回	A <sub>1</sub> -7号住居跡	174	第274回	D <sub>1</sub> -32号壑穴跡	219	第337回	F-92・93号住居跡	267
第212回	A <sub>1</sub> -10号住居跡	175	第275回	D <sub>1</sub> -33号住居跡	219	第338回	F-92・93号住居跡掘形	268
第213回	A <sub>1</sub> -15号住居跡	176	第276回	D <sub>1</sub> -36号住居跡	219	第339回	F-94・95号住居跡	269
第214回	A <sub>1</sub> -19号住居跡	177	第277回	D <sub>1</sub> -38号住居跡	220	第340回	F-96号住居跡	270
第215回	A <sub>1</sub> -21号住居跡	177	第278回	D <sub>1</sub> -39号住居跡	220	第341回	G-85号住居跡	271
第216回	A <sub>1</sub> -22号住居跡	178	第279回	D-83号住居跡	221	第342回	G-88・89号住居跡・壑穴跡	271
第217回	A <sub>1</sub> -24号壑穴跡	179	第280回	D-84号住居跡	223	第343回	G-88号壑穴跡	272
第218回	A <sub>1</sub> -26号壑穴跡	179	第281回	D-85号住居跡	223	第344回	工場-1号住居跡	272
第219回	A <sub>1</sub> -28号住居跡	180	第282回	D-86号住居跡	224	第345回	工場-3号壑穴跡	273
第220回	A <sub>1</sub> -29号壑穴跡	181	第283回	D-88号住居跡	224	第346回	工場-5号壑穴跡	273
第221回	A <sub>1</sub> -40号壑穴跡	181	第284回	D-89号住居跡	225	第347回	工場-7号壑穴跡	273
第222回	A <sub>1</sub> -42号住居跡	182	第285回	D-135号住居跡	226	第348回	工場-8号壑穴跡	274
第223回	A <sub>1</sub> -43号住居跡	183	第286回	D-136・147号住居跡	227	第349回	工場-9号住居跡	275
第224回	A <sub>1</sub> -44号住居跡	183	第287回	D-137号壑穴跡	228	第350回	工場-10・11号壑穴跡	275
第225回	A <sub>1</sub> -47号住居跡	184	第288回	D-139号住居跡	229	第351回	工場-12号住居跡	276
第226回	A <sub>1</sub> -48号壑穴跡	185	第289回	D-141号住居跡	230	第352回	土器分類(増)	276
第227回	A <sub>1</sub> -49号壑穴跡	185	第290回	D-142号住居跡	231	第353回	土器分類(甬台)	277
第228回	A <sub>2</sub> -65号住居跡	186	第291回	D-143号壑穴跡	231	第354回	土器分類(高坏・脚)	278
第229回	A <sub>2</sub> -157号住居跡	187	第292回	D-145号壑穴跡	232	第355回	土器分類(結合形土器)	278
第230回	A <sub>2</sub> -162号住居跡	188	第293回	D-146号住居跡	233	第356回	土器分類(鉢)	279

第357段	土器分類(藍)	279	第420段	D <sub>r</sub> 8号住居跡出土遺物	309	第481段	F-58号住居跡出土遺物	339
第358段	土器分類(藍)	280	第421段	D <sub>r</sub> 10-14号住居跡出土遺物(1)	310	第482段	F-59号整穴跡出土遺物	339
第359段	土器分類(藍1)	280	第422段	D <sub>r</sub> 10-14号住居跡出土遺物(2)	310	第483段	F-61号住居跡出土遺物	340
第360段	土器分類(藍2)	281				第484段	F-64号住居跡出土遺物	340
第361段	土器分類(藍3)	281				第485段	F-65号住居跡出土遺物(1)	341
第362段	土器分類(藍4)	282	第423段	D <sub>r</sub> 11号整穴跡出土遺物	310	第486段	F-65号住居跡出土遺物(2)	342
第363段	土器分類(藍5)	282	第424段	D <sub>r</sub> 12号住居跡出土遺物	311	第487段	F-68号住居跡出土遺物	343
第364段	土器分類(藍1)	282	第425段	D <sub>r</sub> 13号整穴跡出土遺物	311	第488段	F-69号整穴跡出土遺物	343
第365段	土器分類(藍2)	283	第426段	D <sub>r</sub> 15号整穴跡出土遺物	312	第489段	F-73号住居跡出土遺物	344
第366段	土器分類(藍3)	283	第427段	D <sub>r</sub> 18号住居跡出土遺物	313	第490段	F-74号住居跡出土遺物(1)	344
第367段	A <sub>r</sub> 1号住居跡出土遺物	284	第428段	D <sub>r</sub> 19号住居跡出土遺物	313	第491段	F-74号住居跡出土遺物(2)	345
第368段	A <sub>r</sub> 4号住居跡出土遺物	284	第429段	D <sub>r</sub> 20号住居跡出土遺物(1)	314	第492段	F-75号住居跡出土遺物(1)	345
第369段	A <sub>r</sub> 5号住居跡出土遺物(1)	285	第430段	D <sub>r</sub> 20号住居跡出土遺物(2)	315	第493段	F-75号住居跡出土遺物(2)	346
第370段	A <sub>r</sub> 5号住居跡出土遺物(2)	286	第431段	D <sub>r</sub> 21号住居跡出土遺物	315	第494段	F-77号住居跡出土遺物	346
第371段	A <sub>r</sub> 7号住居跡出土遺物(1)	286	第432段	D <sub>r</sub> 22号住居跡出土遺物	315	第495段	F-78号住居跡出土遺物	347
第372段	A <sub>r</sub> 7号住居跡出土遺物(2)	287	第433段	D <sub>r</sub> 23号住居跡出土遺物	315	第496段	F-82号住居跡出土遺物	348
第373段	A <sub>r</sub> 10号住居跡出土遺物	287	第434段	D <sub>r</sub> 24a-b号住居跡出土遺物	316	第497段	F-91号住居跡出土遺物	348
第374段	A <sub>r</sub> 15号住居跡出土遺物	287	第435段	D <sub>r</sub> 27号住居跡出土遺物	316	第498段	F-92号住居跡出土遺物	348
第375段	A <sub>r</sub> 19号住居跡出土遺物	288	第436段	D <sub>r</sub> 28号住居跡出土遺物	317	第499段	F-93号住居跡出土遺物	349
第376段	A <sub>r</sub> 21号住居跡出土遺物	288	第437段	D <sub>r</sub> 29号住居跡出土遺物(1)	317	第500段	F-94号住居跡出土遺物	350
第377段	A <sub>r</sub> 22号住居跡出土遺物(1)	288	第438段	D <sub>r</sub> 29号住居跡出土遺物(2)	318	第501段	F-95号住居跡出土遺物	350
第378段	A <sub>r</sub> 22号住居跡出土遺物(2)	289	第439段	D <sub>r</sub> 30号住居跡出土遺物	318	第502段	F-96号住居跡出土遺物	351
第379段	A <sub>r</sub> 24号整穴跡出土遺物	289	第440段	D <sub>r</sub> 31号整穴跡出土遺物	319	第503段	G-88号住居跡出土遺物	352
第380段	A <sub>r</sub> 26号整穴跡出土遺物	289	第441段	D <sub>r</sub> 33号住居跡出土遺物	319	第504段	G-98号整穴跡出土遺物	352
第381段	A <sub>r</sub> 28号住居跡出土遺物	290	第442段	D <sub>r</sub> 36号住居跡出土遺物	320	第505段	工場1号住居跡出土遺物	352
第382段	A <sub>r</sub> 29号整穴跡出土遺物	290	第443段	D <sub>r</sub> 38号住居跡出土遺物	320	第506段	工場2号整穴跡出土遺物	353
第383段	A <sub>r</sub> 40号整穴跡出土遺物	290	第444段	D <sub>r</sub> 39号住居跡出土遺物(1)	320	第507段	工場9号整穴跡出土遺物	353
第384段	A <sub>r</sub> 42号住居跡出土遺物	290	第445段	D <sub>r</sub> 39号住居跡出土遺物(2)	321	第508段	工場10-11号整穴跡出土遺物	354
第385段	A <sub>r</sub> 43号住居跡出土遺物(1)	291	第446段	D-83号住居跡出土遺物(1)	321	第509段	工場12号住居跡出土遺物	354
第386段	A <sub>r</sub> 43号住居跡出土遺物(2)	292	第447段	D-83号住居跡出土遺物(2)	322	第510段	A区土坑、出土遺物	355
第387段	A <sub>r</sub> 44号住居跡出土遺物	292	第448段	D-84号住居跡出土遺物(1)	322	第511段	舞台遺跡調査群位置図	357
第388段	A <sub>r</sub> 47号住居跡出土遺物	293	第449段	D-84号住居跡出土遺物(2)	323	第512段	1号周溝墓	359
第389段	A <sub>r</sub> 49号整穴跡出土遺物(1)	293	第450段	D-86号住居跡出土遺物	323	第513段	1号周溝墓遺物出土位置	360
第390段	A <sub>r</sub> 49号整穴跡出土遺物(2)	294	第451段	D-135号住居跡出土遺物	324	第514段	1号周溝墓出土遺物(1)	360
第391段	A <sub>r</sub> 65号住居跡出土遺物	295	第452段	D-136号住居跡出土遺物	324	第515段	1号周溝墓出土遺物(2)	361
第392段	A <sub>r</sub> 157号住居跡出土遺物	296	第453段	D-139号住居跡出土遺物	325	第516段	1号周溝墓出土遺物(3)	362
第393段	A <sub>r</sub> 162号住居跡出土遺物(1)	297	第454段	D-141号住居跡出土遺物	325	第517段	2号周溝墓	363
第394段	A <sub>r</sub> 162号住居跡出土遺物(2)	298	第455段	D-142号住居跡出土遺物	326	第518段	2号周溝墓遺物出土位置	364
第395段	A <sub>r</sub> 163号住居跡出土遺物(1)	298	第456段	D-143号住居跡出土遺物	327	第519段	2号周溝墓出土遺物(1)	364
第396段	A <sub>r</sub> 163号住居跡出土遺物(2)	299	第457段	D-146号住居跡出土遺物	327	第520段	2号周溝墓出土遺物(2)	365
第397段	B-71号整穴跡出土遺物	299	第458段	D-148号住居跡出土遺物	328	第521段	3号周溝墓、遺物出土位置	366
第398段	B-72号整穴跡出土遺物	300	第459段	D-160号住居跡出土遺物	328	第522段	3号周溝墓出土遺物	367
第399段	B-73号整穴跡出土遺物	300	第460段	D-186号住居跡出土遺物	329	第523段	4号周溝墓	368
第400段	B-74号整穴跡出土遺物(1)	300	第461段	D-213号住居跡出土遺物	330	第524段	4号周溝墓遺物出土位置	369
第401段	B-74号整穴跡出土遺物(2)	301	第462段	D-216号住居跡出土遺物	330	第525段	4号周溝墓出土遺物(1)	369
第402段	B-75号整穴跡出土遺物	302	第463段	D-217号住居跡出土遺物	330	第526段	4号周溝墓出土遺物(2)	370
第403段	B-76号整穴跡出土遺物	302	第464段	D-219号住居跡出土遺物	331	第527段	4号周溝墓出土遺物(3)	371
第404段	B-77号整穴跡出土遺物	303	第465段	D-222号住居跡出土遺物	331	第528段	5号周溝墓、遺物出土位置	371
第405段	B-78号整穴跡出土遺物	303	第466段	E <sub>r</sub> 93号住居跡出土遺物	331	第529段	5号周溝墓出土遺物	372
第406段	B-79号整穴跡出土遺物	304	第467段	E <sub>r</sub> 100号住居跡出土遺物	332	第530段	6号周溝墓	373
第407段	B南1号住居跡出土遺物	304	第468段	E <sub>r</sub> 104号住居跡出土遺物(1)	332	第531段	6号周溝墓遺物出土位置	374
第408段	C-50号住居跡出土遺物(1)	304	第469段	E <sub>r</sub> 104号住居跡出土遺物(2)	333	第532段	6号周溝墓出土遺物(1)	375
第409段	C-50号住居跡出土遺物(2)	305	第470段	E <sub>r</sub> 131号住居跡出土遺物(1)	333	第533段	6号周溝墓出土遺物(2)	376
第410段	C-54号住居跡出土遺物(1)	305	第471段	E <sub>r</sub> 131号住居跡出土遺物(2)	334	第534段	8号周溝墓、遺物出土位置	376
第411段	C-54号住居跡出土遺物(2)	306	第472段	E <sub>r</sub> 132号住居跡出土遺物	334	第535段	8号周溝墓出土遺物	377
第412段	C-56号住居跡出土遺物	306	第473段	E <sub>r</sub> 176号住居跡出土遺物	335	第536段	9号周溝墓	378
第413段	C-56号整穴跡出土遺物	306	第474段	E <sub>r</sub> 185号住居跡出土遺物	335	第537段	9号周溝墓遺物出土位置	379
第414段	D <sub>r</sub> 1号住居跡出土遺物	306	第475段	F-46号住居跡出土遺物(1)	335	第538段	9号周溝墓出土遺物(1)	381
第415段	D <sub>r</sub> 2号住居跡出土遺物	307	第476段	F-46号住居跡出土遺物(2)	336	第539段	9号周溝墓出土遺物(2)	382
第416段	D <sub>r</sub> 3号住居跡出土遺物	307	第477段	F-49号住居跡出土遺物	336	第540段	9号周溝墓出土遺物(3)	383
第417段	D <sub>r</sub> 5a-b号住居跡出土遺物	307	第478段	F-54号住居跡出土遺物	337	第541段	9号周溝墓出土遺物(4)	384
第418段	D <sub>r</sub> 6号住居跡出土遺物	308	第479段	F-56号住居跡出土遺物	338	第542段	10号周溝墓	386
第419段	D <sub>r</sub> 7号整穴跡出土遺物	309	第480段	F-57号整穴跡出土遺物	338	第543段	10号周溝墓遺物出土位置	387



第544回 10号周溝墓出土遺物(1) ……387  
 第545回 10号周溝墓出土遺物(2) ……388  
 第546回 10号周溝墓出土遺物(3) ……389

第547回 11号周溝墓 ……390  
 第548回 谷地出土遺物(1) ……392  
 第549回 谷地出土遺物(2) ……393

第560回 谷地出土遺物(3) ……394  
 第551回 谷地出土遺物(4) ……395  
 第552回 谷地出土遺物(5) ……396

## 写真図版目次

- |         |  |  |  |  |  |  |
|---------|--|--|--|--|--|--|
| P.L. 1  | B区金釧(上が北)<br>A区金釧(上が東)   | A <sub>r</sub> -30号住居跡<br>A <sub>r</sub> -41号住居跡                   | E <sub>r</sub> -170号住居跡<br>E <sub>r</sub> -171号住居跡                 |  |  |  |
| P.L. 2  | A区金釧(上が北)<br>F区金釧(上が北)   | A <sub>r</sub> -41号住居跡<br>A <sub>r</sub> -41号住居跡掘形                 | E <sub>r</sub> -171号住居跡遺物出土状況<br>E <sub>r</sub> -177号住居跡           |  |  |  |
| P.L. 3  | F区金釧(上が東)<br>F区金釧(上が南)   | A <sub>r</sub> -45号住居跡<br>A <sub>r</sub> -45号住居跡掘形                 | P.L. 21  | E <sub>r</sub> -182号住居跡<br>E <sub>r</sub> -182号住居跡掘形           |  |  |
| P.L. 4  | F区金釧(上が南)<br>F区金釧(上が北)   | A <sub>r</sub> -46号住居跡<br>A <sub>r</sub> -46号住居跡掘形                 | E <sub>r</sub> -197号住居跡<br>E <sub>r</sub> -203号住居跡                 |  |  |  |
| P.L. 5  | C区金釧(上が東)<br>C区金釧(上が北)   | C-53号住居跡<br>C-53号住居跡竪堀遺物出土状況                                       | E <sub>r</sub> -204号住居跡<br>E <sub>r</sub> -204号住居跡掘形               |  |  |  |
| P.L. 6  | D区・E区金釧(上が北)   | C-57号住居跡   | E <sub>r</sub> -209号住居跡<br>E <sub>r</sub> -209号住居跡掘形               |  |  |  |
| P.L. 7  | E <sub>2</sub> 区金釧・E <sub>3</sub> 区金釧(上が北)                       | C-57号住居跡掘形   | P.L. 22  | D-214号住居跡<br>D-214・224号住居跡掘形                                   |  |  |
| P.L. 8  | A <sub>r</sub> -2号住居跡<br>A <sub>r</sub> -2号住居跡掘形                 | P.L. 15  | F-66号住居跡<br>F-66号住居跡遺物出土状況   | D-215号住居跡<br>D-215号住居跡掘形                                       |  |  |
|         | A <sub>r</sub> -3号住居跡<br>A <sub>r</sub> -3号住居跡遺物出土状況             | F-66号住居跡掘形<br>F-66号住居跡遺物出土状況                                       | E <sub>r</sub> -90号住居跡<br>E <sub>r</sub> -90号住居跡掘形                 | D-220号住居跡遺物出土状況<br>D-220号住居跡遺物出土状況                             |  |  |
|         | A <sub>r</sub> -3号住居跡掘形<br>A <sub>r</sub> -6号住居跡                 | E <sub>r</sub> -90号住居跡<br>E <sub>r</sub> -94号住居跡                   | E <sub>r</sub> -94号住居跡掘形<br>E <sub>r</sub> -94号住居跡遺物出土状況           | E <sub>r</sub> -2号円形周溝跡  |  |  |
| P.L. 9  | A <sub>r</sub> -6号住居跡掘形<br>A <sub>r</sub> -8号住居跡                 | P.L. 16  | E <sub>r</sub> -96号住居跡<br>E <sub>r</sub> -98号住居跡                   | P.L. 23  | A <sub>r</sub> -2号住居跡出土遺物<br>A <sub>r</sub> -3号住居跡出土遺物(1)        |  |
|         | A <sub>r</sub> -8号住居跡掘形<br>A <sub>r</sub> -14号住居跡                | E <sub>r</sub> -99号住居跡<br>E <sub>r</sub> -101号住居跡                  | E <sub>r</sub> -101号住居跡掘形<br>E <sub>r</sub> -108号住居跡               | P.L. 24  | A <sub>r</sub> -3号住居跡出土遺物(2)<br>A <sub>r</sub> -6号住居跡出土遺物(1)     |  |
|         | A <sub>r</sub> -14号住居跡掘形<br>A <sub>r</sub> -17号住居跡               | E <sub>r</sub> -108号住居跡掘形<br>E <sub>r</sub> -109号住居跡               | E <sub>r</sub> -108号住居跡掘形<br>E <sub>r</sub> -109号住居跡掘形             | P.L. 25  | A <sub>r</sub> -6号住居跡出土遺物(2)<br>A <sub>r</sub> -8号住居跡出土遺物        |  |
| P.L. 10 | A <sub>r</sub> -18号住居跡掘形<br>A <sub>r</sub> -18号住居跡掘形             | P.L. 17  | E <sub>r</sub> -109号住居跡掘形<br>E <sub>r</sub> -110号住居跡               | A <sub>r</sub> -14号住居跡出土遺物<br>A <sub>r</sub> -17号住居跡出土遺物       | A <sub>r</sub> -17号住居跡出土遺物<br>A <sub>r</sub> -20号住居跡出土遺物         |  |
|         | A <sub>r</sub> -20号住居跡掘形<br>A <sub>r</sub> -20号住居跡掘形             | E <sub>r</sub> -112号住居跡<br>E <sub>r</sub> -114号住居跡                 | E <sub>r</sub> -112号住居跡掘形<br>E <sub>r</sub> -114号住居跡掘形             | A <sub>r</sub> -20号住居跡出土遺物<br>A <sub>r</sub> -23号住居跡出土遺物       | A <sub>r</sub> -23号住居跡出土遺物<br>A <sub>r</sub> -25号住居跡出土遺物         |  |
|         | A <sub>r</sub> -23号住居跡掘形<br>A <sub>r</sub> -25号住居跡               | E <sub>r</sub> -115号住居跡<br>E <sub>r</sub> -115号住居跡掘形               | E <sub>r</sub> -115号住居跡掘形<br>E <sub>r</sub> -116号住居跡               | A <sub>r</sub> -31号住居跡出土遺物(1)<br>A <sub>r</sub> -36号住居跡出土遺物(2) | A <sub>r</sub> -36号住居跡出土遺物(1)<br>A <sub>r</sub> -36号住居跡出土遺物(2)   |  |
| P.L. 11 | A <sub>r</sub> -25号住居跡掘形<br>A <sub>r</sub> -31号住居跡               | P.L. 18  | E <sub>r</sub> -122号住居跡<br>E <sub>r</sub> -122号住居跡掘形               | P.L. 26  | A <sub>r</sub> -25号住居跡出土遺物<br>A <sub>r</sub> -31号住居跡出土遺物         | A <sub>r</sub> -25号住居跡出土遺物<br>A <sub>r</sub> -31号住居跡出土遺物         |
|         | A <sub>r</sub> -31号住居跡掘形<br>A <sub>r</sub> -33号住居跡               | E <sub>r</sub> -123号住居跡<br>E <sub>r</sub> -123号住居跡掘形               | E <sub>r</sub> -123号住居跡掘形<br>E <sub>r</sub> -124号住居跡               | P.L. 27  | A <sub>r</sub> -33号住居跡出土遺物<br>A <sub>r</sub> -34号住居跡出土遺物         | A <sub>r</sub> -33号住居跡出土遺物<br>A <sub>r</sub> -34号住居跡出土遺物         |
|         | A <sub>r</sub> -33号住居跡掘形<br>A <sub>r</sub> -33号住居跡掘形             | E <sub>r</sub> -124号住居跡<br>E <sub>r</sub> -124号住居跡掘形               | E <sub>r</sub> -124号住居跡掘形<br>E <sub>r</sub> -126号住居跡               | A <sub>r</sub> -34号住居跡出土遺物(1)<br>A <sub>r</sub> -37号住居跡出土遺物    | A <sub>r</sub> -34号住居跡出土遺物(1)<br>A <sub>r</sub> -37号住居跡出土遺物      |  |
|         | A <sub>r</sub> -34号住居跡掘形<br>A <sub>r</sub> -34号住居跡遺物出土状況         | E <sub>r</sub> -126号住居跡<br>E <sub>r</sub> -134号住居跡                 | E <sub>r</sub> -126号住居跡掘形<br>E <sub>r</sub> -134号住居跡掘形             | A <sub>r</sub> -37号住居跡出土遺物(2)<br>A <sub>r</sub> -39号住居跡出土遺物    | A <sub>r</sub> -37号住居跡出土遺物(2)<br>A <sub>r</sub> -39号住居跡出土遺物      |  |
| P.L. 12 | A <sub>r</sub> -34号住居跡掘形<br>A <sub>r</sub> -34号住居跡掘形             | P.L. 19  | E <sub>r</sub> -138号住居跡<br>E <sub>r</sub> -138号住居跡掘形               | P.L. 28  | A <sub>r</sub> -45号住居跡出土遺物<br>A <sub>r</sub> -46号住居跡出土遺物         | A <sub>r</sub> -45号住居跡出土遺物<br>A <sub>r</sub> -46号住居跡出土遺物         |
|         | A <sub>r</sub> -36号住居跡<br>A <sub>r</sub> -36号住居跡遺物出土状況           | E <sub>r</sub> -140号住居跡<br>E <sub>r</sub> -140号住居跡掘形               | E <sub>r</sub> -140号住居跡掘形<br>E <sub>r</sub> -140号住居跡遺物出土状況         | A <sub>r</sub> -46号住居跡出土遺物(1)<br>C-53号住居跡出土遺物(1)               | A <sub>r</sub> -46号住居跡出土遺物(1)<br>C-53号住居跡出土遺物(1)                 |  |
|         | A <sub>r</sub> -36号住居跡掘形遺物出土状況<br>A <sub>r</sub> -36号住居跡掘形遺物出土状況 | E <sub>r</sub> -140号住居跡掘形遺物出土状況<br>E <sub>r</sub> -140号住居跡掘形遺物出土状況 | E <sub>r</sub> -140号住居跡掘形遺物出土状況<br>E <sub>r</sub> -140号住居跡掘形遺物出土状況 | F-66号住居跡出土遺物(1)<br>F-66号住居跡出土遺物(2)                             | F-66号住居跡出土遺物(1)<br>F-66号住居跡出土遺物(2)                               |  |
|         | A <sub>r</sub> -36号住居跡掘形<br>A <sub>r</sub> -36号住居跡掘形             | D-149号住居跡<br>D-149号住居跡掘形   | D-149号住居跡掘形<br>D-149号住居跡掘形   | P.L. 30  | E <sub>r</sub> -90号住居跡出土遺物<br>E <sub>r</sub> -90号住居跡出土遺物         | E <sub>r</sub> -90号住居跡出土遺物<br>E <sub>r</sub> -90号住居跡出土遺物         |
| P.L. 13 | A <sub>r</sub> -37号住居跡遺物出土状況<br>A <sub>r</sub> -37号住居跡           | P.L. 20  | E <sub>r</sub> -159号住居跡<br>E <sub>r</sub> -159号住居跡掘形               | P.L. 29  | A <sub>r</sub> -45号住居跡出土遺物<br>A <sub>r</sub> -46号住居跡出土遺物         | A <sub>r</sub> -45号住居跡出土遺物<br>A <sub>r</sub> -46号住居跡出土遺物         |
|         | A <sub>r</sub> -37号住居跡掘形<br>A <sub>r</sub> -39号住居跡掘形             | E <sub>r</sub> -169号住居跡<br>E <sub>r</sub> -169号住居跡掘形               | E <sub>r</sub> -169号住居跡掘形<br>E <sub>r</sub> -169号住居跡掘形             | C-53号住居跡出土遺物(2)<br>F-66号住居跡出土遺物(1)                             | C-53号住居跡出土遺物(2)<br>F-66号住居跡出土遺物(1)                               |  |
|         |  | E <sub>r</sub> -170号住居跡<br>E <sub>r</sub> -170号住居跡掘形               | E <sub>r</sub> -170号住居跡掘形<br>E <sub>r</sub> -170号住居跡掘形             | P.L. 31  | E <sub>r</sub> -94号住居跡出土遺物<br>E <sub>r</sub> -94号住居跡出土遺物         | E <sub>r</sub> -94号住居跡出土遺物<br>E <sub>r</sub> -94号住居跡出土遺物         |
|         |  |  |  | P.L. 32  | E <sub>r</sub> -96号住居跡出土遺物<br>E <sub>r</sub> -98号住居跡出土遺物         | E <sub>r</sub> -96号住居跡出土遺物<br>E <sub>r</sub> -98号住居跡出土遺物         |
|         |  |  |  | P.L. 33  | E <sub>r</sub> -99号住居跡出土遺物<br>E <sub>r</sub> -101号住居跡出土遺物        | E <sub>r</sub> -99号住居跡出土遺物<br>E <sub>r</sub> -101号住居跡出土遺物        |
|         |  |  |  | P.L. 34  | E <sub>r</sub> -105号住居跡出土遺物(1)<br>E <sub>r</sub> -105号住居跡出土遺物(2) | E <sub>r</sub> -105号住居跡出土遺物(1)<br>E <sub>r</sub> -105号住居跡出土遺物(2) |
|         |  |  |  | P.L. 35  | E <sub>r</sub> -108号住居跡出土遺物<br>E <sub>r</sub> -109号住居跡出土遺物       | E <sub>r</sub> -108号住居跡出土遺物<br>E <sub>r</sub> -109号住居跡出土遺物       |

P L. 36	E <sub>r</sub> 109号住居跡出土遺物(2)	A <sub>r</sub> 4号住居跡遺物出土狀況	D <sub>r</sub> 18号住居跡
P L. 37	E <sub>r</sub> 109号住居跡出土遺物(3)	A <sub>r</sub> 5号住居跡	D <sub>r</sub> 19号住居跡
	E <sub>r</sub> 110号住居跡出土遺物	A <sub>r</sub> 7号住居跡	D <sub>r</sub> 20号住居跡
	E <sub>r</sub> 112号住居跡出土遺物	A <sub>r</sub> 7号住居跡遺物出土狀況	D <sub>r</sub> 20号住居跡遺物出土狀況
P L. 38	E <sub>r</sub> 114号住居跡出土遺物	A <sub>r</sub> 10号住居跡	D <sub>r</sub> 20号住居跡貯藏穴
	E <sub>r</sub> 115号住居跡出土遺物(1)	A <sub>r</sub> 19号住居跡	D <sub>r</sub> 20号住居跡掘形
P L. 39	E <sub>r</sub> 115号住居跡出土遺物(2)	A <sub>r</sub> 21号住居跡	D <sub>r</sub> 21号住居跡
P L. 40	E <sub>r</sub> 115号住居跡出土遺物(3)	A <sub>r</sub> 22号住居跡	D <sub>r</sub> 22号住居跡
	E <sub>r</sub> 116号住居跡出土遺物	A <sub>r</sub> 22号住居跡遺物出土狀況	D <sub>r</sub> 23a、b号住居跡
	E <sub>r</sub> 122号住居跡出土遺物(1)	A <sub>r</sub> 22号住居跡掘形	D <sub>r</sub> 24a、b号住居跡
P L. 41	E <sub>r</sub> 122号住居跡出土遺物(2)	A <sub>r</sub> 26号竪穴跡	D <sub>r</sub> 27号住居跡
	E <sub>r</sub> 123号住居跡出土遺物	A <sub>r</sub> 28号住居跡	D <sub>r</sub> 28号住居跡
	E <sub>r</sub> 124号住居跡出土遺物(1)	A <sub>r</sub> 28号住居跡掘形	D <sub>r</sub> 29号住居跡
P L. 42	E <sub>r</sub> 124号住居跡出土遺物(2)	A <sub>r</sub> 42号住居跡	D <sub>r</sub> 29号住居跡遺物出土狀況
	E <sub>r</sub> 126号住居跡出土遺物	A <sub>r</sub> 43号住居跡	D <sub>r</sub> 29号住居跡貯藏穴
	E <sub>r</sub> 129号住居跡出土遺物	A <sub>r</sub> 44号住居跡	D <sub>r</sub> 30号住居跡
	E <sub>r</sub> 130号住居跡出土遺物	A <sub>r</sub> 44号住居跡貯藏穴	D <sub>r</sub> 31号竪穴跡
P L. 43	E <sub>r</sub> 134号住居跡出土遺物	A <sub>r</sub> 47号住居跡	D <sub>r</sub> 31号竪穴跡掘形
	E <sub>r</sub> 138号住居跡出土遺物	A <sub>r</sub> 47号住居跡伊	D <sub>r</sub> 32号竪穴跡
	E <sub>r</sub> 140号住居跡出土遺物(1)	A <sub>r</sub> 47号住居跡伊	D <sub>r</sub> 33号住居跡
P L. 44	E <sub>r</sub> 140号住居跡出土遺物(2)	A <sub>r</sub> 48号竪穴跡	D <sub>r</sub> 36号住居跡
P L. 45	E <sub>r</sub> 140号住居跡出土遺物(3)	A <sub>r</sub> 65号住居跡	D <sub>r</sub> 38号住居跡
	D-149号住居跡出土遺物	A <sub>r</sub> 65号住居跡伊	D <sub>r</sub> 39号住居跡
P L. 46	E <sub>r</sub> 149号住居跡出土遺物	A <sub>r</sub> 157号住居跡	P L. 80
	E <sub>r</sub> 169号住居跡出土遺物	A <sub>r</sub> 157号住居跡遺物出土狀況	D-84号住居跡
	E <sub>r</sub> 170号住居跡出土遺物(1)	A <sub>r</sub> 162号住居跡	D-85号住居跡
P L. 47	E <sub>r</sub> 170号住居跡出土遺物(2)	A <sub>r</sub> 162号住居跡遺物出土狀況	D-86号住居跡
	E <sub>r</sub> 171号住居跡出土遺物(1)	A <sub>r</sub> 163号住居跡	D-88号住居跡
P L. 48	E <sub>r</sub> 171号住居跡出土遺物(2)	A <sub>r</sub> 163号住居跡遺物出土狀況	D-89号住居跡
P L. 49	E <sub>r</sub> 171号住居跡出土遺物(3)	A <sub>r</sub> 163号住居跡遺物出土狀況	D-135号住居跡
	E <sub>r</sub> 177号住居跡出土遺物(1)	B-71号竪穴跡	D-135号住居跡伊
P L. 50	E <sub>r</sub> 177号住居跡出土遺物(2)	B-71号竪穴跡遺物出土狀況	P L. 81
	E <sub>r</sub> 182号住居跡出土遺物	B-72号竪穴跡	D-137号竪穴跡
	E <sub>r</sub> 204号住居跡出土遺物(1)	B-73号竪穴跡	D-139号住居跡
P L. 51	E <sub>r</sub> 204号住居跡出土遺物(2)	B-73号竪穴跡貯藏穴	D-139号住居跡伊
	E <sub>r</sub> 209号住居跡出土遺物	B-74号竪穴跡	D-139号住居跡伊
P L. 52	D-212号住居跡出土遺物	B-74号竪穴跡遺物出土狀況	D-139号住居跡遺物出土狀況
	D-214号住居跡出土遺物	B-74号竪穴跡柱穴	D-139号住居跡掘形
	D-215号住居跡出土遺物	B-75、80号竪穴跡	D-141号住居跡
	D-218号住居跡出土遺物(1)	B-75、80号竪穴跡柱穴	P L. 82
P L. 53	D-218号住居跡出土遺物(2)	B-75、80号竪穴跡柱穴	D-142号住居跡
	D-220号住居跡出土遺物(1)	B-75、80号竪穴跡柱穴	D-142号住居跡貯藏穴
P L. 54	D-220号住居跡出土遺物(2)	B-75、80号竪穴跡柱穴	D-143、148号住居跡
	D-87号住居跡出土遺物	B-75、80号竪穴跡柱穴	D-143号竪穴跡
	D-195号土坑出土遺物(1)	B-77号竪穴跡	D-292号土坑
P L. 55	D-195号土坑出土遺物(2)	B-78号竪穴跡	D-145号竪穴跡
	谷地出土土源(1)	P L. 75	D-146号住居跡
	谷地出土土源(2)	C-50号住居跡	P L. 83
	谷地出土土源(3)	C-55号住居跡	D-160号住居跡
P L. 57	谷地出土土源(4)	C-56号竪穴跡	D-213号住居跡
P L. 58	谷地出土土源(5)	D <sub>r</sub> 1号住居跡	D-216号住居跡
P L. 59	谷地出土土源(6)	D <sub>r</sub> 2号住居跡	D-222号住居跡
	谷地出土土源(1)	D <sub>r</sub> 3、4、17号住居跡	E <sub>r</sub> 93号住居跡
P L. 60	谷地出土土源(2)	D <sub>r</sub> 5号住居跡	E <sub>r</sub> 100号住居跡
P L. 61	谷地出土土源(3)	D <sub>r</sub> 6号住居跡	E <sub>r</sub> 129号住居跡
P L. 62	谷地出土土源(4)	D <sub>r</sub> 6号住居跡掘形	E <sub>r</sub> 132号住居跡
P L. 63	谷地出土土源(5)	D <sub>r</sub> 8号住居跡	P L. 84
P L. 64	谷地出土土源(6)	D <sub>r</sub> 8号住居跡掘形	D <sub>r</sub> 133号竪穴跡
P L. 65	谷地出土土源(7)	D <sub>r</sub> 10、14号住居跡	E <sub>r</sub> 167号竪穴跡
P L. 66	谷地出土土源(8)	D <sub>r</sub> 11号竪穴跡	E <sub>r</sub> 176号住居跡
P L. 67	谷地出土土源(9)	D <sub>r</sub> 11号竪穴跡遺物出土狀況	E <sub>r</sub> 178号住居跡
P L. 68	谷地出土土源(10)	D <sub>r</sub> 12号住居跡	F-46号住居跡
P L. 69	A <sub>r</sub> 1号住居跡	D <sub>r</sub> 12号住居跡貯藏穴	F-46号住居跡柱穴
	A <sub>r</sub> 4号住居跡	P L. 77	F-49号住居跡
		D <sub>r</sub> 13号竪穴跡	F-49号住居跡遺物出土狀況
			F-51号竪穴跡

	F-54号住居跡		A <sub>7</sub> -163号住居跡出土遺物		F-78号住居跡出土遺物(1)
	F-56号住居跡		B-71号竪穴跡出土遺物	P L. 111	F-78号住居跡出土遺物(2)
	F-57号竪穴跡	P L. 96	B-73号竪穴跡出土遺物		F-91号住居跡出土遺物
	F-58号住居跡		B-74号竪穴跡出土遺物		F-92号住居跡出土遺物
	F-58号住居跡貯藏穴		B-75号竪穴跡出土遺物		F-93号住居跡出土遺物
	F-58号住居跡貯藏穴	P L. 97	B-77号竪穴跡出土遺物	P L. 112	F-95号住居跡出土遺物
P L. 86	F-59号竪穴跡		B-78号竪穴跡出土遺物		F-96号住居跡出土遺物
	F-61号住居跡		B南-1号住居跡出土遺物		工場-1号住居跡出土遺物
	F-64号住居跡		C-50号住居跡出土遺物	P L. 113	工場-8号竪穴跡出土遺物
	F-64号住居跡貯	P L. 98	C-54号住居跡出土遺物		工場-10・11号竪穴跡出土遺物
	F-65号住居跡		D <sub>1</sub> -1号住居跡出土遺物		A <sub>1</sub> -9号土坑出土遺物
	F-65号住居跡貯		D <sub>1</sub> -2号住居跡出土遺物		A <sub>1</sub> -153号土坑出土遺物
	F-65号住居跡貯藏穴		D <sub>1</sub> -5a・b号住居跡出土遺物		D-292号土坑出土遺物
	F-65号住居跡柱穴		D <sub>1</sub> -6号住居跡出土遺物		A <sub>7</sub> -164号土坑出土遺物
P L. 87	F-65号住居跡柱穴		D <sub>1</sub> -7号住居跡出土遺物	P L. 114	舞台遺跡周溝墓群西より
	F-68・69号住居跡		D <sub>1</sub> -8号住居跡出土遺物		1号周溝墓(前方後方形)南から
	F-72号竪穴跡		D <sub>1</sub> -10・14号住居跡出土遺物	P L. 115	1号周溝墓から
	F-73号住居跡	P L. 99	D <sub>1</sub> -11号竪穴跡出土遺物		北周溝遺物出土状況
	F-74号住居跡		D <sub>1</sub> -12号住居跡出土遺物		前方南周溝東側遺物出土状況
	F-75号住居跡		D <sub>1</sub> -13号竪穴跡出土遺物		東周溝遺物出土状況
	F-75号住居跡遺物出土状況		D <sub>1</sub> -15号住居跡出土遺物(1)		東周溝土層状況
	F-75号住居跡貯藏穴	P L. 100	D <sub>1</sub> -15号住居跡出土遺物(2)	P L. 116	2号周溝墓(方形)南から
	F-75号住居跡面形		D <sub>1</sub> -18号住居跡出土遺物		東周溝遺物出土状況
P L. 88	F-76号住居跡		D <sub>1</sub> -20号住居跡出土遺物(1)		北周溝遺物出土状況
	F-77号住居跡	P L. 101	D <sub>1</sub> -20号住居跡出土遺物(2)		北周溝遺物出土状況
	F-78号住居跡		D <sub>1</sub> -24a・b号住居跡出土遺物	P L. 117	3号周溝墓西から
	F-78号住居跡遺物出土状況		D <sub>1</sub> -27号住居跡出土遺物		南周溝遺物出土状況
	F-78号住居跡遺物出土状況		D <sub>1</sub> -28号住居跡出土遺物		北周溝遺物出土状況
	F-81号住居跡		D <sub>1</sub> -29号住居跡出土遺物(1)		北周溝遺物出土状況
	F-82号住居跡	P L. 102	D <sub>1</sub> -29号住居跡出土遺物(2)		南周溝遺物出土状況
	F-87号住居跡		D <sub>1</sub> -31号竪穴跡出土遺物	P L. 118	4号周溝墓(方形)南から
P L. 89	F-91号住居跡		D <sub>1</sub> -39号住居跡出土遺物		南周溝土層堆積状況
	F-91号住居跡遺物出土状況		D-84号住居跡出土遺物		東周溝遺物出土状況
	F-91号住居跡遺物出土状況		D-86号住居跡出土遺物		東周溝遺物出土状況
	F-91号住居跡面形	P L. 103	D-135号住居跡出土遺物		西周溝遺物出土状況
	F-92号住居跡		D-139号住居跡出土遺物	P L. 119	5号周溝墓(方形)西から
	F-93号住居跡		D-141号住居跡出土遺物		5号周溝墓南から
	F-93号住居跡面形		D-142号住居跡出土遺物	P L. 120	6号周溝墓(方形)北から
P L. 90	F-94号住居跡		D-143号竪穴跡出土遺物		6号周溝墓(南周溝部分)
	F-95号住居跡		D-146号住居跡出土遺物		北西周溝内土坑遺物出土状況
	F-96号住居跡	P L. 104	D-148号住居跡出土遺物	P L. 121	8号周溝墓(方形)西から
	F-96号住居跡面形		D-156号住居跡出土遺物		西周溝遺物出土状況
	G-85号住居跡		D-160号住居跡出土遺物		西周溝遺物出土状況
	工場-3号竪穴跡		D-213号住居跡出土遺物		西周溝土層堆積状況
	工場-9号竪穴跡	P L. 105	D-222号住居跡出土遺物		北周溝土層堆積状況
	工場-10・11号竪穴跡		E <sub>7</sub> -63号住居跡出土遺物	P L. 122	9号周溝墓(前方後方形・後方部)
P L. 91	工場-12号住居跡		E <sub>7</sub> -100号住居跡出土遺物		南東から
	A <sub>7</sub> -4号住居跡出土遺物	P L. 106	E <sub>7</sub> -104号住居跡出土遺物		9号周溝墓(前方後方形・前方部)
	A <sub>7</sub> -5a号住居跡出土遺物		E <sub>7</sub> -131号住居跡出土遺物		東から
	A <sub>7</sub> -7号住居跡出土遺物		E <sub>7</sub> -132号住居跡出土遺物	P L. 123	9号東周溝遺物出土状況
P L. 92	A <sub>7</sub> -10号住居跡出土遺物	P L. 107	F-46・48号住居跡出土遺物		東周溝遺物出土状況
	A <sub>7</sub> -19号住居跡出土遺物		F-49号住居跡出土遺物		東周溝遺物出土状況
	A <sub>7</sub> -21号住居跡出土遺物		F-54号住居跡出土遺物		東周溝遺物出土状況
	A <sub>7</sub> -22号住居跡出土遺物		F-56号住居跡出土遺物		東周溝土層堆積状況
	A <sub>7</sub> -28号住居跡出土遺物		F-58号住居跡出土遺物	P L. 124	10号周溝墓(方形)南東から
	A <sub>7</sub> -29号住居跡出土遺物	P L. 108	F-64号住居跡出土遺物		160号住居跡重積状況(北隅)
P L. 93	A <sub>7</sub> -43号住居跡出土遺物		F-65号住居跡出土遺物		西周溝遺物出土状況
	A <sub>7</sub> -44号住居跡出土遺物		F-68号住居跡出土遺物		東周溝遺物出土状況
	A <sub>7</sub> -47号住居跡出土遺物	P L. 109	F-69号竪穴跡出土遺物		西周溝遺物出土状況
P L. 94	A <sub>7</sub> -65号住居跡出土遺物		F-73号住居跡出土遺物	P L. 125	10号北周溝遺物出土状況
	A <sub>7</sub> -157号住居跡出土遺物		F-74号住居跡出土遺物		10号北周溝遺物出土状況
	A <sub>7</sub> -162号住居跡出土遺物(1)		F-75号住居跡出土遺物(1)		10号北周溝遺物出土状況
P L. 95	A <sub>7</sub> -162号住居跡出土遺物(2)	P L. 110	F-75号住居跡出土遺物(2)		10号東周溝土層堆積状況

11号周溝墓(方形)西から  
 P L. 126 1号周溝墓出土土器群  
 1号周溝墓出土土器(1)  
 P L. 127 1号周溝墓出土土器(2)  
 2号周溝墓出土土器群  
 P L. 128 2号周溝墓出土土器  
 3号周溝墓出土土器  
 P L. 129 4号周溝墓出土土器群  
 4号周溝墓出土土器(1)

P L. 130 4号周溝墓出土土器(2)  
 5号周溝墓出土土器  
 6号周溝墓出土土器  
 P L. 131 8号周溝墓出土土器  
 9号周溝墓出土土器群  
 9号周溝墓出土土器(1)  
 P L. 132 9号周溝墓出土土器(2)  
 P L. 133 9号周溝墓出土土器(3)  
 P L. 134 9号周溝墓出土土器(4)

10号周溝墓出土土器群  
 P L. 135 10号周溝墓出土土器(1)  
 P L. 136 10号周溝墓出土土器(2)  
 谷地出土土器(1)  
 P L. 137 谷地出土土器(2)  
 P L. 138 谷地出土土器(3)  
 P L. 139 谷地出土土器(4)

## 報告書抄録

ふりがな	ふたいいせき
書名	舞台遺跡(2)(古墳時代編)
副書名	北関東自動車道(高崎—伊勢崎)地域埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第24集
シリーズ名	群馬県埋蔵文化財調査事業団
シリーズ番号	第331集
編集者名	綿貫邦男
編集機関	財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377-8555 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2 TEL 0279-52-2511
発行年月日	西暦2004年3月15日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
舞 台 遺 跡	伊勢崎 市 三和町	10204		36°21'05"	139°13'33"	19950401 / 20000331	60893	北関東自動車道 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
舞 台 遺 跡	集 落	古墳前・後期	竪穴住居	土師器・須恵器	竪穴住居220軒 重圍鏡 輪瀝土器
	墓 跡	古墳前期	周溝墓	土師器	10基(前方後方 形2・方形8基) 二段口縁壺
	谷 地	古墳前・後期		土器・木器	

# 第1章 発掘調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯

舞台遺跡は北関東自動車道建設に伴う事前の埋蔵文化財発掘調査として、高崎市上滝榎町北遺跡に次いで着手した2番目の遺跡である。本遺跡の周辺部は県企業局が実施していた三和工業団地建設予定地であり、「三和工業団地遺跡」として伊勢崎市教育委員会と当事業団が発掘調査を実施した。また、北関東自動車道と一般国道17号（上武道路）とを結ぶ地点については、建設者（現国土交通省）の委託により、当事業団が「下植木沓町田遺跡」として発掘調査を実施していた。さらに、高崎～伊勢崎間で比較的用地買収の進んでいた本遺跡の発掘調査に着手することになった。

本遺跡は北関東自動車道高崎起点 STA 142.85～148.05の間、伊勢崎 Interchange 建設予定地部分に該当している。東西方向の本線部分約520mと、南北方向は北側の環状部、及び南には進入部と料金所敷地約420mにおよぶ範囲が調査の対象になった。なお、本遺跡の周辺部に調査が及んでいたため、試掘調査は実施せず、本調査に着手することとなった。推定として表面積約60,000㎡が遺跡範囲と判断された。

日本道路公団、県土木部道路建設課高速道路対策室、県教育委員会文化財保護課と当事業団による「北関東自動車道文化財調査に関する調整会議」を、平成7年11月20日と平成8年1月30日に開催し、本遺跡の調査を実施することになった。また、同年2月22日には県教育委員会文化財保護課主催による「第1回北関東自動車道地域埋蔵文化財発掘調査に関する沿線市町村連絡調整会議」が開催された。

これらの調整会議を受け、同年2月に本線内に調査事務所を設置し、用地杭の確認、及び調査区周辺に安全フェンスを設置した。同月にA-1区の表土除去作業から着手した。3月には新規発掘作業員を募集し、3月11日から本調査を実施した。本年度の調査は、A-1区の遺構確認作業を行った。

第1図 北関東自動車道高崎遺跡位置図 【高崎】1/50,000国土地理院



No.	遺跡名称	No.	遺跡名称
1	上滝五反田遺跡	19	夜叉遺跡
2	上滝榎町北遺跡	20	新井大田遺跡
3	榎町三反田遺跡	21	波志江中野遺跡
4	榎町手遺跡	22	波志江西條遺跡
5	榎町中野遺跡	23	四郎遺跡
6	榎町高田遺跡	24	波志江中野東遺跡
7	村中遺跡	25	波志江中野東遺跡
8	西田遺跡	26	波志江中野東遺跡
9	福光高野原遺跡	27	伊勢山遺跡
10	藤丸高野原遺跡	28	波志江高野原遺跡
11	藤丸高野原遺跡	29	波志江高野原遺跡
12	西野高野原遺跡	30	五日市高野原遺跡
13	中内高野原遺跡	31	五日市高野原遺跡
14	高野原遺跡	32	高野原山遺跡
15	高野原山遺跡	33	五日市高野原遺跡
16	上野田高野原遺跡	34	天候野遺跡
17	下野田高野原遺跡	35	舞台遺跡
18	下野田高野原遺跡	36	大井戸遺跡

## 第2節 調査の方法と経過

調査にあたっての方眼設定には、国家座標第Ⅱ系を用い10mを基準とした。各方眼の名称は、南東隅の座標値で表し、 $X=389980 \cdot Y=-347740$ のように表記した。本遺跡の調査は、複数年次に渡ることが予想されたため、対象地区を便宜的にA～G区に分けて実施した。さらに、農道や用地買収状況等により調査区が分断される場合には、A-1区・A-2区等と適宜細分した（第3図）。遺構名称は基本的には、区名にあたるAlphabetを冠し、遺構の種類別に算用数字を用いて通番とした。A-1号住居跡・B-1号井戸跡等である。なお、遺物注記は、遺跡略号であるKT-320を使用した。

### 1. 平成7年度（平成8年3月11日～3月31日）

本線内に調査事務所の設置、及びA-1区の表土除去作業を実施した。

### 2. 平成8年度（平成8年4月1日～平成9年1月24日 以降、調査は一時中断する）

通年の調査計画で開始したが、前橋南部地区の工事計画との調整で、平成9年1月をもって調査を一時中断した。A-1区の調査では古墳時代から平安時代の住居跡の調査と、A-3区では古墳時代から平安時代の住居跡と須恵器窯跡の調査を実施した。さらに、B区とC区の古墳時代の調査を実施した。

一方、A-3区は8月中旬に調査を一時中断し、光仙房遺跡の排土置き場を確保するため、B区の調査を優先させた。また、11月に須恵器窯跡を中心として、新聞記者発表を行った。特に、西側の谷部分に延びる灰原より多量の須恵器が出土したため、12月に本部分の調査期間について関連機関と再調整の上、平成9年度へ継続して調査を実施することに変更した。

### 3. 平成9年度（平成9年4月1日～平成10年3月31日）

本年度の調査は、前年度に終了したA-1区・C区を除き、A-2・3区、B区・D-1・2区、E-1～3区、F-2区、G-2区を実施した。A区では須恵器窯跡関連の調査を終了させるとともに、7月には調査事務所の一部を移動し、A-2区の調査に着手した。本区では古墳時代から平安時代の住居跡の調査を実施した。D-1区では古墳時代の方形周溝墓群と、古墳時代から平安時代の住居跡の調査を実施した。D-2区では旧石器と縄文時代の住居跡、土坑、及び古墳時代の住居跡を調査した。また、5月にA区からG区北側の工業団地との境界に水路建設の計画が提示され、日本道路公団、県企業局、文化財保護課と当事業団により協議のうえ、F区とG区の一部を調査した。F-2区・G-2区ともに旧石器2面と、古墳時代の住居跡の調査を実施した。一方、同年6月から旧石器の確認調査などに関して「表土掘削と排土及び関連土木作業工事」請負業務として土木作業員を導入し、E-1～3区では旧石器と奈良・平安時代の住居跡の調査を実施した。さらに、10月の日本道路公団、県教育委員会文化財保護課との調整会議では、当面共用に必要な範囲（A・B・D-1・D-2・E区）を確認し、調査体制を補強した。特に、本年度の調査に関して、D-1区で検出された方形周溝墓群は注目をあびたので、9月13日に現地説明会を実施し遺跡の公開を行った。見学者数は408人であった。

### 4. 平成10年度（平成10年4月1日～同年8月31日と平成11年2月1日～同年3月31日）

本年度の調査は、昨年度の継続であるD-1区の調査と、新たに用地買収が終了したD-3区の調査に着手した。旧石器と縄文時代の土坑、古墳時代の住居跡と掘立柱建物跡、方形周溝墓、畠跡等の調査を実施した。また、同年8月に調査を終了していたA区全体と、B区・D区の一部を道路公団へ用地の引き渡しを行った。さらに、伊勢崎市波志江地区の工事計画が切迫してきたため、本遺跡の調査は一時中断した。

一方、本年度より整理作業に着手し、平成8年度に調査した須恵器窯跡の資料を整理した。

## 5. 平成11年度（平成11年4月1日～平成12年3月31日）

D-3区・F-1区・G-1区の調査をおこなった。D-3区は古墳時代の住居跡と方形周溝墓、畠跡、F-1区は旧石器と縄文時代の住居跡と土坑、古墳時代の住居跡と掘立柱建物跡、及び奈良・平安時代の住居跡等である。G-1区は古墳時代の住居跡と掘立柱建物跡と畠跡等の調査を実施した。

また、日本道路公団へ引き渡しを終了した地点の工事計画との兼ね合いにより、10月よりA-3区北側の隣接地を借地し排土置き場とするとともに、平成12年2月に書上遺跡の隣接地に調査事務所を移動した。同月に舞台・大井戸遺跡の調査終了に伴い、関連機関との最終協議をおこない同年3月末日をもって本遺跡の調査を終了した。

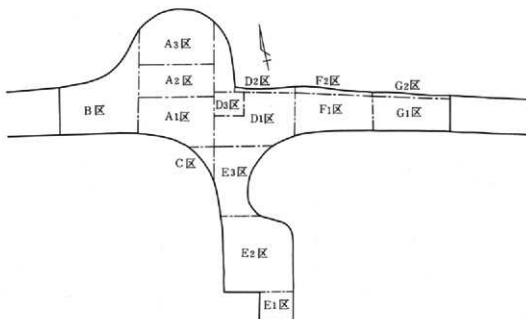
一方、整理2年次は昨年度から継続した平安時代須恵器窯跡関連の資料と、平成7～10年度に調査した古墳時代から中世にかけての住居跡、掘立柱建物跡、方形周溝墓、溝等の整理をおこなった。

## 6. 平成12年度（平成12年4月1日～平成13年3月31日）

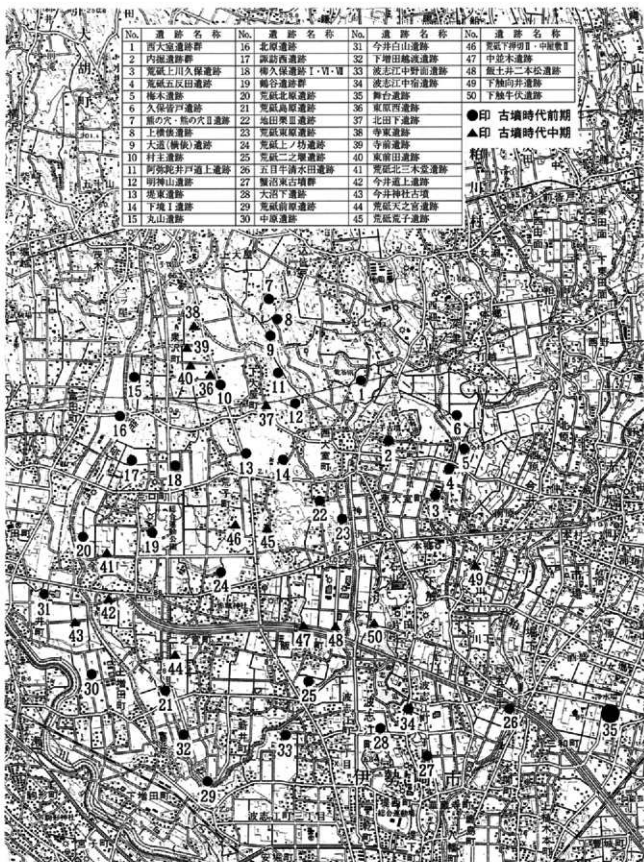
整理3年次は須恵器窯跡と、奈良・平安時代から中世の住居跡、館跡、掘立柱建物跡等に関する資料を、第1分冊として報告書を刊行した。

## 7. 平成13年度～平成15年度（平成13年4月1日～平成16年3月31日）

整理4年次から6年次にかけては古墳時代前期から後期にわたる住居跡、及び方形周溝墓を中心とした資料整理作業を行い、舞台遺跡の第2分冊として報告書を刊行した。



第2図 舞台遺跡調査区制図



第3図 周辺遺跡分布図 「前橋」1/50,000 国土地理院

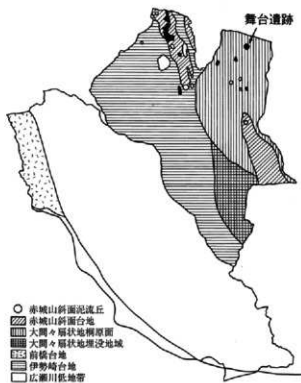


## 第2章 遺跡の立地と歴史環境

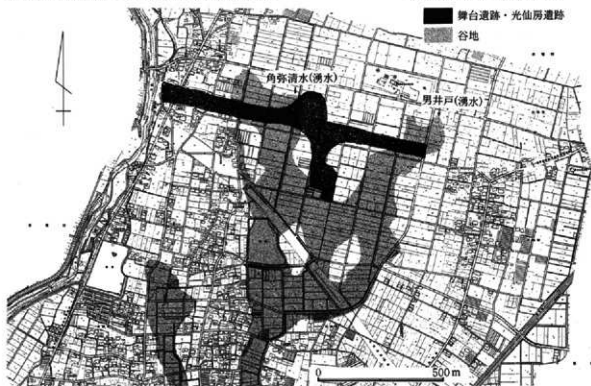
### 第1節 遺跡の立地

舞台遺跡は、群馬県伊勢崎市三和町に所在する。群馬県の南部に位置する伊勢崎市は、その南を埼玉県本庄市と利根川を介して県境とする。市域の大半は平坦地形を成し、北東部には赤城山山頂の小沼を水源とする粕川が南流する。中央部には広瀬川が南東流し、地質的にはこの広瀬川を境に左岸が洪積台地に、右岸は沖積台地に大別されている。(第4図)

舞台遺跡の位置する三和町は、伊勢崎市域の北東方最端部にあたり、西は粕川に区切れ、東は佐波郡東村に、北は赤堀町に接する。粕川を境にしてその西方は、赤城山南麓の開析された低台地が樹枝状に発達する。東方は、足尾山地に源を発する渡瀬川によって形成された古期大間々扇状地棚原面の広大な低台地が広がる。三和町は、この大間々扇状地形の西南端部にあたり、洪積台地上



第4図 伊勢崎市域地形区分図  
〔伊勢崎市史〕 通史編より〕



第5図 舞台遺跡立地環境 (伊勢崎市現況図 昭和161年)

には「あまが池」・「男井戸」・「角弥清水」・「谷地清水」など多くの湧水地が点在したとされ、湧水流による開析作用で扇状地端部から南方は広く低地帯となる。現在は水田耕作による埋め立てでその面影を知れるのは整備保存された湧水点「あまが池」のみである。舞台遺跡は、発掘調査によって姿を現した湧水地「男井戸」の谷地形縁辺に東で接し、西は「角弥清水」の谷地を取り込み、両者に挟まれた Loam 台地を中心とした地域に展開する。この Loam 台地は両湧水流路が合流することによって舌状地形を成し、比較的平坦な地勢となっている。標高87.50mから85.00mの北から南へ緩く傾斜する台地で、低地部との比高差はおよそ3mである。遺跡地は台地基部から中央にかけての範囲に位置している。(第5図)

舞台遺跡の成り立ち・構成は、旧石器時代より始まり中世に至る複合遺跡であるが、周辺では国道17号線(上武道路)の上植木光仙房遺跡や当遺跡に連なる光仙房遺跡そして、三和工業団地遺跡など広範囲に調査が実施されている。これらは舞台遺跡に連続する同一遺跡として認識できるものであり、本遺跡への歴史的理解・位置づけはそれらの成果を踏まえた上での検討が必要である。

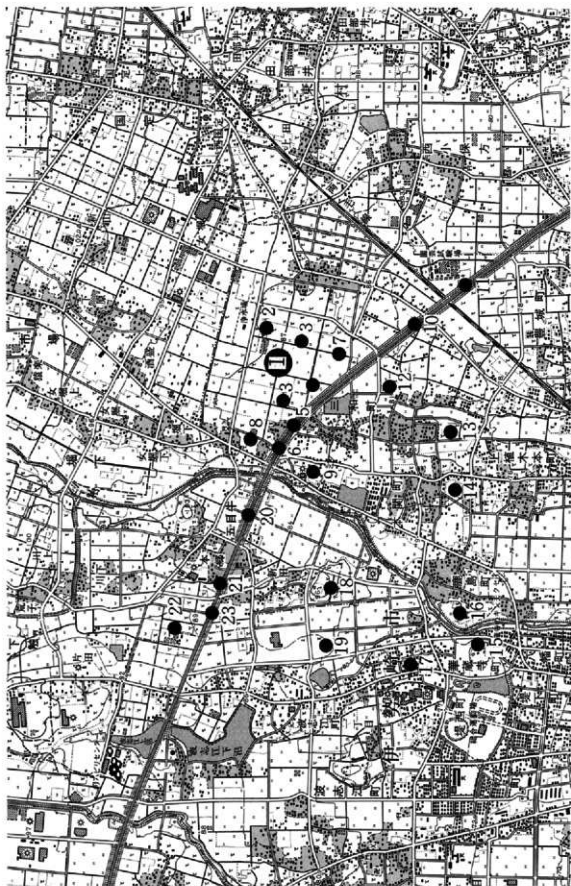
## 第2節 歴史環境

舞台遺跡は、旧石器時代から中世に至る複合遺跡である。したがって検出された遺構は住居跡・生産跡・墓跡など種々にわたり、これらに伴う遺物もまた豊富で様々である。周辺域の可視的な遺跡分布では、当遺跡の南・西域には大開々扇状地形の開析谷や低地の耕地化を背景に展開したと考えられる幾多の古墳群が知られている。近年、当遺跡以西では同事業の北関東自動車道建設地域やこれの北側を伴走する国道17号(上武道)建設に伴って発掘調査された諸遺跡の報告書刊行によって歴史的環境は充実の度を増している。ここでは、本書の扱う古墳時代を主題にして周辺域の歴史的環境を述べる。

群馬県内において稲作農耕が飛躍的な展開を見せるのは古墳時代になってからである。その前半期には中小の河川流域の沖積地の開発を背景に多くの集落遺跡が形成される。群馬県を中心とした北関東の初期古墳文化は東海地方、特に伊勢湾を中心とした外来系土器文化圏に強い影響を受けて発展したと考えられている。県内においてその代表的な土器がS字状口縁台付き甕である。この東海地方を発信源とする外来系土器文化の希求的な地点として群馬郡から高崎市にかけての地域が有力視されている。

伊勢崎市域での初期古墳文化の足跡は、東を粕川・西を広瀬川に画された伊勢崎台地、上喜多町遺跡に残される。この遺跡は両河川によって形成された沖積地平坦面にある。遺構は確認されていないが、粘土層中から検出された土器群の一部は宮廷(パレス)式壺・S字状口縁台付き甕・大型器台など東海系のもので弥生土器から土器への過渡的な様相を持つとされている。その後の展開は、伊勢崎市域のみならず群馬県内でも最古の古墳の一つとされる華蔵寺裏山古墳の築造がなされることによって、利根川東岸の広範な平坦地を背景として、身分階層的な社会が創出されたことを示している。5世紀半ば頃には、畿内中央勢力との関係を示唆する長持ち型石棺を蔵する全長125mの前方後円墳御富士山古墳の出現に至り赤城山南麓一帯の頂点に達した勢力が誕生している。

舞台遺跡での古墳時代前期は、150軒に達する住居跡群と前方後方型2基を10基の方形周溝墓が検出されている。隣接する三和工業団地遺跡を乗しての遺跡内容は、当該地域における古墳時代前期の社会構造やその変遷究明に欠くことのできない存在となろう。また、古墳時代中期という空白期間をもつが、後期に至っては再び大集落としての景観が創出され、粕川左岸に展開する本関町古墳群との有機的な関連が予想される。



第6図 周辺遺跡位置図【大湖】1/25,000 国土地理院

周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	遺跡の概要	備考
1	舞台遺跡	旧石器・縄文前期住居跡・陥穴、古墳前期周溝墓・住居、後期住居、奈良・平安住居、平安須恵器遺跡	本報告・「年報15」～「年報19」群埋文 1996～2000
2	三和工業団地Ⅰ遺跡	古墳前期～後期住居、平安時代住居他	「三和工業団地Ⅰ遺跡」(1)・(2)群埋文 1999
3	三和工業団地Ⅱ～Ⅳ	旧石器、縄文前期住居、古墳前期住居・周溝墓、古墳後期住居、奈良・平安住居・須恵器遺跡、中世馬房他	「年報15」・「年報16」・「年報17」群埋文 1996～1998
4	下榎木沓町田遺跡	旧石器、古墳前期・後期住居、奈良・平安住居、中世館跡・遺構群、平安水田	「下榎木沓町田遺跡」群埋文 1999
5	上榎木沓町田遺跡	縄文中期～平安住居、中世井戸他	「書上吉祥寺遺跡・書上上之原城遺跡・上榎木沓町田遺跡」群埋文 1988
6	上榎木光仙房遺跡	古墳・平安時代住居	「上榎木光仙房遺跡」群埋文 1989
7	熊沼東遺跡	古墳～平安住居他	「熊沼東遺跡・舞台遺跡」伊勢崎市教育委員会 1977
8	光仙房遺跡	旧石器、古墳前期・後期住居、古墳、古墳後期粘土採掘坑、平安住居・須恵器遺跡、水路他	「光仙房遺跡」群埋文 2003
9	本岡古墳群	柏川左岸に立地。6～7世紀代の古墳群、上榎木光仙房遺跡・光仙房遺跡でもその一部分が調査された。	「岡山古墳群」『伊勢崎市史 通史編』1967
10	書上本山遺跡	旧石器、古墳時代住居、平安住居・獨立柱建物跡他、瓦塔片出土。	「書上本山遺跡」群埋文 1985
11	書上上之原城遺跡	平安住居・獨立柱建物跡他	「書上上吉祥寺遺跡・書上上之原城遺跡・上榎木沓町田遺跡・下榎木沓町田遺跡」群埋文 1988
12	高山古墳群	7世紀代の古墳群。壘穴式・横穴式石室をもつ	「高山遺跡・天ヶ埴遺跡・天野沼遺跡・下書上遺跡」伊勢崎市教育委員会 1977
13	九塚山古墳	全長81mの帆立貝式前方後円墳。後円部に箱式格状の壘穴式石室を3基設ける。5世紀後半。	「九塚山古墳」『伊勢崎市史 通史編』伊勢崎市教育委員会 1997
14	上榎木庵寺	7世紀後半の創建で、県内初期寺院の一つ。寺城内で瓦窯跡が調査されている。	「上榎木庵寺発掘調査概報Ⅰ」『同Ⅱ』伊勢崎市 1984・1985 「上榎木庵寺」一昭和59年度発掘調査概報一伊勢崎市教育委員会
15	華藏寺裏山古墳	全長40m前後の前方後円墳と考えられ、5世紀初頭頃の構造と考えられている。二段口縁蓋が出土。	「華藏寺裏山古墳」『伊勢崎市史 通史編Ⅰ』伊勢崎市 1987
16	上西帆遺跡	古墳前期周溝墓、古墳、奈良住居	「上西帆遺跡」伊勢崎市教育委員会 1985
17	台所山古墳群	「総覧」では7基が確認。調査では箱式石棺の主体部をもつ1基がある。	「台所山古墳」『伊勢崎市史 通史編Ⅰ』伊勢崎市 1987、「上毛古墳総覧」群馬史跡名勝天然記念物報告第5号 群馬県 1938
18	地蔵山古墳群	5世紀～8世紀代の古墳55基からなる古墳群	松村一昭「奉福村地蔵山古墳Ⅰ」1978、「奉福村地蔵山古墳Ⅱ」1979 赤塚村教育委員会
19	熊沼東古墳群	6世紀末～7世紀の10基以上の古墳群。縄文時代住居、古墳前期住居・周溝墓出土。	「富良戸古墳群・熊沼東古墳群」伊勢崎市教育委員会 1983、「熊沼東古墳群・宮貝戸下遺跡」伊勢崎市教育委員会 1978、「熊沼東古墳群」伊勢崎市教育委員会 1988
20	五日牛清水田遺跡	縄文前期住居、古墳前期住居、前方後円墳、奈良住居、水田他	「五日牛清水田遺跡」群埋文 1993
21	五日牛南組遺跡	縄文前期住居、古墳、近世屋敷跡他	「五日牛南組遺跡」群埋文 1992
22	八幡林古墳群	縄文前期住居、6世紀～7世紀代の古墳4基	「八幡林古墳群及び縄文住居調査概報」赤塚村教育委員会 1982
23	福下八幡遺跡	旧石器、縄文前期住居、奈良～平安住居他	「福下八幡遺跡」群埋文 1990

## 第3章 検出された遺構と遺物

### 第1節 古墳時代における遺跡の概要

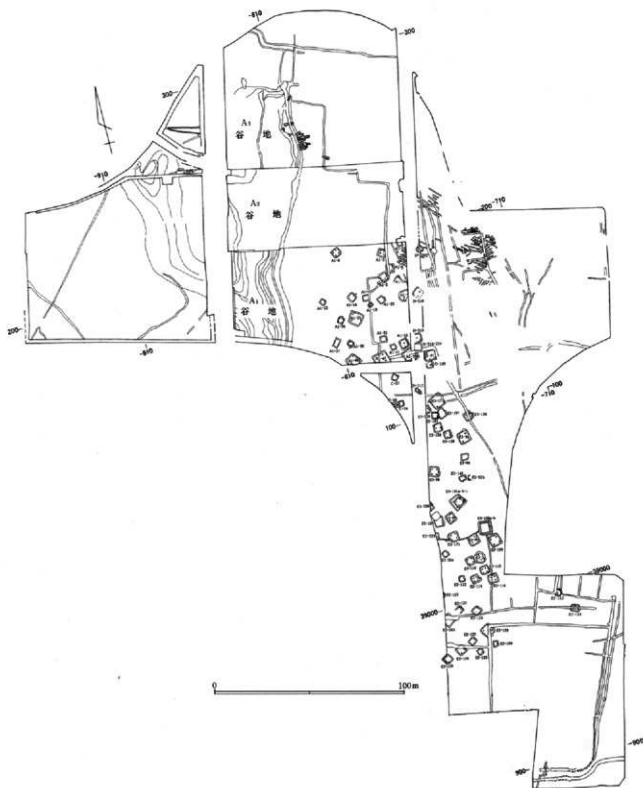
舞台遺跡は湧水地によって開析された谷地形の低湿地帯と Loam 低台地からなっている。遺構形成の主たる地点は台地上に展開している。旧石器時代から中・近世に及ぶ重層的な時間と遺構構成となっているが、台地上での遺構検出面は遺跡内のほとんどの地点で Loam 漸移層が黄褐色 Loam 層である。したがって、縄文時代前期から中・近世にわたる各種の遺構は表土層ないしは現畑耕作土下での同一確認面となり、面的調査としては Loam 層中の旧石器時代とあわせ2段階となる。

舞台遺跡の立地は低地と台地によって形成されているためその基本土層は大きく異なっている。台地上では大岡々扇状地礫層を基盤におよそ5mの Loam 層が堆積するが、層中には広域火山灰の AT をはじめ浅間山・赤城山・榛名山などを給源とする As-YP・As-OPI・As-BP・Ag-kLP・Ag-KP・Hr-HP 等の Thpra が確認されている。

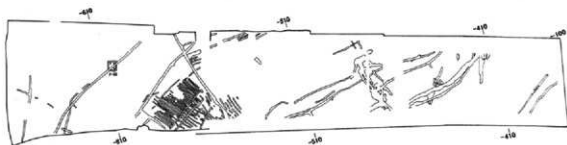
舞台遺跡における古墳時代の遺構は大別その前期と後期に分かたれる。この間の集落景観にはかなり長年月の断絶が考えられる。ちなみに古墳時代以降もまたこの現象が再現され、3度目に集落景観が出現するのは奈良時代末から平安時代初頭の頃である。集落の継起にかなりの間断があるにせよ、その徹底さから成立と廃絶を周期的な行動様式として捉えることはできないであろうか。例えば、地域占有的集団を想定し、彼らの循環的土地利用など。限られた調査域での限定的集落景観はその存亡を劇的に捉えやすく、より広範な地域を対象とした集落変遷動向の視点も必要に思われる。(第3図)

古墳時代後期はほぼ竪穴住居跡で構成され拡張して替えられた住居を含め71軒を数えるが、部分的な検出でそれと確証の得られないものを加えれば少し増えよう。分布域は前期住居群と一部重畳するものの、台地中央部から南部にかけての西側に偏在する。一辺7～8mの大型住居跡から、3m前後の小規模住居跡まである。特殊な遺構としてはいわゆる平地式建物跡と称される2基の円形周溝遺構がある。幅30cm前後の溝を円形に巡らせ、溝底には径20cm前後の小穴を穿つ。溝の内区には炉跡などの生活関連の施設は確認されていないが、柱穴を思わせる小穴の検出されるものもある。また、調査区北部に端を発する湧水形成の谷地内からは当該期の多量な遺物が検出され、土師器・木製品の他須恵器の大型甕などがあり、祭祀に関わる行為も想定される。

前期に属する遺構は竪穴住居跡(竪穴跡を含む。)と周溝墓が主で、両者は調査区の北側から中央部にかけての地帯に偏在している。一部は重複して検出され、集落と墓城の時間的・空間的形成過程が知れる。居住空間と墓城空間の成立・変遷に関する時間的前後関係は全体を通しての検討を要するが、調査時点での重複例では竪穴住居跡が先行する。竪穴住居跡は149軒にのぼり、小は一辺3m前後から9～10mの比較的大型の規模をもつ住居跡も多く、集落内部における階層差や、大・小住居跡の組み合わせを考慮すれば世帯共同体的な分析視点も提起されよう。遺構内施設や出土遺物には完形の重圓文鏡を出土した住居跡や柱穴に礎板をしつらえる住居跡がある。また、住居内の炉跡には精選されたような粘土を用いた円形盤状炉床を作るものが数例ある。これらは工務的な性格をもつ遺構とも考えられるが具体的な証を示す遺物などは今のところ確認できない。舞台遺跡の北側に続く区域の三和工業団地I遺跡では、当該期の竪穴住居跡が大半を占め、当遺跡と同一・一連の集落と考えられる。



第7図 古墳時代後期遺構分布図



周溝墓は10基が検出され、うち8基が方形で、2基は前方部を南西に向ける前方後方形周溝墓である。周溝墓の規模は前方後方形の1号・9号が大型で、中型の10号・8号、小型の2号・3号・4号・5号・11号に分けられる。ただし、方形型のうち6号周溝墓はその規模が前方後方形に匹敵する。周溝墓は三和工業団地遺跡（三和工業団地Ⅰ遺跡とは別地点だが同一・一連の遺跡として良い。）の舞台遺跡東に隣接する区域で少なくとも12基が、さらに東方の大井戸と称される湧水谷地を隔て5基が検出されている。それぞれは群単位としてのまとまりを見せており、舞台遺跡10基のうち離れて南端に位置する11号周溝墓は隣接三和工業団地遺跡の群に属する。また三和工業団地遺跡の1基もまた舞台遺跡のそれに属する。両遺跡の周溝墓を比較して、形状・規模などからは舞台遺跡1号・9号が前方後方形、6号が大型方形で周溝墓群中でも盟主的な存在にならう。

## 第2節 古墳時代後期の遺構

ここで扱う古墳時代後期の竪穴住居跡を主体とする遺構群には、やや時期的に遡るものも扱っている。これは前期との区分を鮮明にしようと、住居跡の最も主眼的施設の一つである竈か炉跡かの如何によったためである。しかし、竈施設のない遺構や消失した場合には、そこからの出土遺物が一般的に認識されている古墳時代後期土器の時期観を参考にしてこの節に含めた。竪穴住居跡71軒・円形周溝遺構（平地式建物跡）2基が検出されている。

### 1. 竪穴住居跡

舞台遺跡における古墳時代後期の竪穴住居群を中心とする集落景観といえる。東に男井戸、西に角弥清水の両湧水源によって開析谷地形に挟まれた南北方向に延びる東西幅200～300mの低台地に占地する。当該期の周辺景観では、台地を東・西に挟む谷地は台地上から3m以上の深さがあったと考えられる。竪穴住居跡群は台地中央部から東西方向に分布城があり、北方へ広がりを見せる。巨視的分布域は一部古墳時代前期住居跡群と重なり台地西方を弧内にすることく南北に緩い弧を描くように分布するが、言うまでもなく表層的なものである。集落構造の景観把握には、基本的な検討事項である同時期に存在した遺構の抽出が前提であり、遺構出土遺物による編年的分析は最も有効に機能する方法となっているのが現状であろう。それらを検討せずに安易な構造論的記述はすべきでないが、住居跡間には顕著な重複関係は少なく集落の長期にわたった段階的変遷はないように思われる。現在のところ県内の古墳時代土器編年は、集落内における同一期間での存続または変遷を把握できうる段階には至らないと思われる。むしろ、本報告においては土器編年作業にはほど遠い。ここでは大まかな傾向として、大・中・小の住居規模とそれらの位置関係を有機的に関連すると見て、集落全体を構成する竪穴住居跡群には大型の竪穴住居を中核とする複数棟家屋によって構成される単位集団の存在が窺え、それらの集合体としての景観を集落とする仮説的視点から述べる。なお、周辺域で調査されている三和工業団地遺跡は本遺跡とは分ち難く、同一の遺跡である。それを含めた総合的検討が必須条件でありここでは、



第8図 古墳時代後期住居跡単位想定図



本遺跡に限ったものであることをお断りしておく。

竪穴住居跡の規模については床面積を基準に $m^2$ 単位とした。計測可能な住居数は67軒であるが部分的な消失を被った住居については形状推定が可能な限り計測対象に加えてある。床面積には最小規模のA<sub>1</sub>-18号住居跡が3.9 $m^2$ 、最大がE<sub>3</sub>-108号住居跡の51.2 $m^2$ で1坪対15坪という大きな格差がある。67軒の床面積の分布を示したのが第9図である。分布傾向は20 $m^2$ を少し超える住居から10 $m^2$ を下回る小規模住居が全体の83%に達し、この面積を上回る住居は30 $m^2$ ・40 $m^2$ ・50 $m^2$ 代の規模のものが少数ながら一定の軒数分布を構成していることが知れる。この分布傾向から規模分類をどのように括るかはかなり恣意的にならざるを得ないが、中心数値の前後を含み大凡つぎの様にならうか。大・中規模住居・30 $m^2$ ～50 $m^2$ ・小規模住居20 $m^2$ ・極小規模住居10 $m^2$ である。これら各段階の住居が全体に占める割合は1:2:3になる。しかし、この割合は地点別に単位を抽出すれば必ずしも整合性のあるものとはなっていない。規模と位置関係から構成単位は大凡A～Eの型に分けて捉えられる。(第8図)

A型は大型住居跡のE<sub>2</sub>-124号と中・小・極小規模住居からなる単位。

B型は中規模の住居跡で構成されるもので、E<sub>2</sub>-123号やE<sub>3</sub>-115号を含む単位。

C型は大型と中型住居からなり、E<sub>3</sub>-108号を中心とする単位。

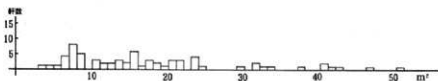
D型は大型住居のA<sub>1</sub>-25号と小型または極小住居から構成される。

E型は中・小・極小規模の住居が隣接遺構をもたず単独に近いもの。

これら概観的配置類型は上述のように同時存在の検討を経たものではない。検出された住居跡すべてを同列に扱っているため類型内に存在する軒数の問題は等閑してあるが、単位集団の内、単独で存在するような位置関係をなすE型以外は基本的には大型住居跡を中心とする構成体を基調としていることが窺われる。

舞台遺跡の6世紀後半という大括りの時代で、集落景観の知れる代表的調査例としては北群馬郡子持村の黒井峰遺跡・西組遺跡や渋川市中筋遺跡が著名である。これらの集落は竪穴住居と他の家屋群が一単位として存在し、竪穴住居跡と平地式住居、平地式建物など諸遺構を構成体とするものである。上記諸遺跡は火山軽石により旧地表面まで保存されており、遺構遺存状態には本遺跡とは雲泥の環境にある。しかし、それを差し引いても単位遺構群の基本的相違は、それらが生活行動における機能分け施設の集合体であるのに対し、舞台遺跡では遺構構造上全て竪穴を保有する竪穴住居形態であることであろう。この相違は地域の時代・社会背景の差によるものか、また厳密な意味で時期的経過の中に求めるべきか検討の要するところである。

集落構成単位の中にある竪穴住居跡の規模については、表層的な意味で、大規模な住居を中核とした個別集団として捉えられ、各単位集団の内部に何らかの階層性の存在を想起させるものである。ただ、出土遺物からは例えば小規模なE<sub>3</sub>-204号住居跡からは一対の銅地銀金装の耳環が検出され、また、同じく小規模住居跡のD-220号住居跡ではその規模に似つかわしからぬ豊富な遺物量が見られる。むろん意図的廃屋としての住居遺構で残った遺物と、残らない遺物の問題は大きく、直接に遺構の性格を規定するような安易さは換まなければ成らないが、遺物の種類・量から居住人の職能・構造物としての住居機能など探るべき努力は続けられるべきであろう。



第9図 古墳時代後期住居跡面積分布図

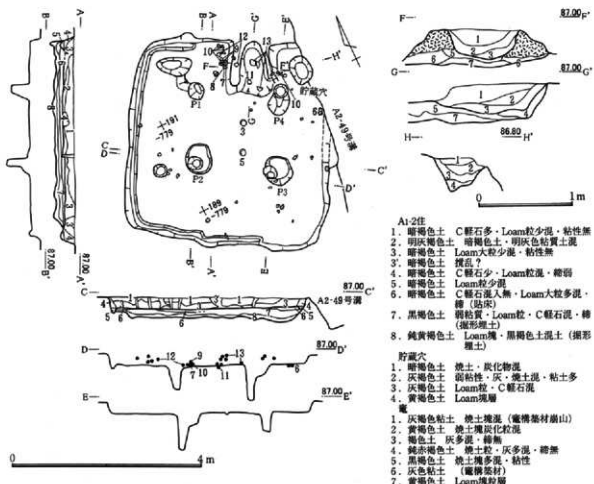
A1-2号住居跡 (第10図 P.L.8)

座標値  $X = 180 \sim 190$ 、 $Y = -770 \sim -790$  の範囲にある。平面形状は隅丸気味略方形を呈し、北東肩部は A2-49号溝との重複により消失している。規模は東西長4.3m、南北長4.25m、床面積約16.2 $m^2$ 、壁高20cmを残し傾斜角25度ほどで立ち上がる。主軸方位はN-29°-Eを示す。埋土はおよそ2層からなり上位層にはAs-Cが、下位層にLoam大粒が少量混入する。壁際は壁面崩れとLoam粒層の三角堆積が見られる。

竈は北壁やや東寄りに付設され、灰色粘土を芯材とする袖部は壁線から1.5mの長さでU字形に張り出す。煙道部は壁面への掘込みはほとんどなく壁外へは突出しない。埋土上位は構築崩材の焼土を混ざる灰褐色粘土層が厚く覆う。貯蔵穴は竈右脇北東の隅に設けられ、上縁径60×45cm、深さ40cmの楕円形を呈する。埋土上位には竈流出の粘土粒・灰・焼土混合層が乗る。

床面は平坦堅牢である。柱穴は4穴検出されたが、やや北側に寄った配置である。柱間寸法は東西・南北軸相対が1.6mと1.8mの間合いになる。柱穴は長径約60cmの楕円形を呈するが、P1は堀形が小さく長径40cm程度である。深さ40~50cmでとくにP3は75cmと深い堀形をもち、柱底径は10cm強になろう。

出土遺物は土師器杯、小型甕である。出土状況は完形度の高い坏類が中央床面に、また竈周辺には甕類が集中して検出され、住居跡廃棄時に近い遺物と思われる。



第10図 A1-2号住居跡

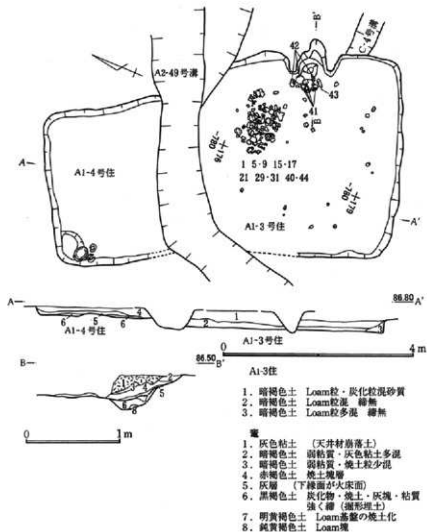
## A1-3号住居跡 (第11図 P.L.8)

座標値  $X=175-180$ ・ $Y=-779\sim-783$ の範囲にある。古墳時代前期のA1-1号、A1-4号住居跡と重複する。平面形状は略方形を呈すると見えるが、南縁をA2-49号溝との重複で消失している。規模は東西4.2m、南北も同程度となろう。床面積は $15.5\text{m}^2+\theta$ 、確認壁高は約25cmで直立気味に立ち上がる。主軸方位は $N-108^\circ-W$ を示す。埴土は暗褐色土を主成におよそ2層からなり自然堆積層と考えられる。上位層には浅間山C軽石粒が混入し、壁際にはLoam粒の混じる三角堆積がある。

竈は西壁ほぼ中央にあり、煙道は極短く壁線上縁に小さく突出する煙出し孔程度である。袖部の長さは20~30cmで、火床位置からはいまだ少しの長さがあったと考えられる。埴土には構築材に使用されたと思われる灰色粘土の混入が目立つ。

貯蔵穴・柱穴・壁下溝などの諸施設は検出されていない。床面は中央部が緩く盛り上がりを感じさせるが竈前を除き床面の硬度は不安定である。

出土遺物は土師器・鉢・小型甕が多く、他に長胴甕などがある。長胴甕の類は竈前床面上に崩圧状態で検出され、住居跡廃棄時のものと考えられる。鉢・鉢・小型甕の多くは住居南寄りに集中しており、床面からやや浮いた状況で出土している。遺構埋没途上の一括廃棄の可能性が高い。



第11図 A1-3・4号住居跡

## A1-6号住居跡 (第12図 P.L.8)

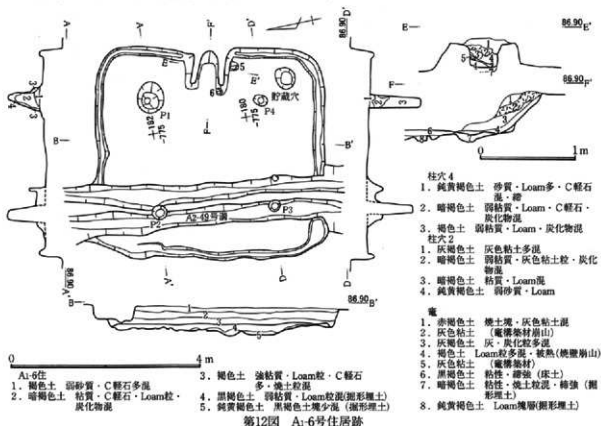
座標値  $X=178-183$ ・ $Y=-773\sim-777$ の範囲にある。西半部はA2-49号溝が当跡を南北走し、古墳前期のA1-1号住居跡と重複する。平面形状は隅丸気味で東西軸がやや長い方形を呈する。規模は長軸東西4.7m、南北4.4m、床面積 $19.4\text{m}^2$ 、確認壁高は約35cmで直立気味である。主軸方位は $N-195^\circ-E$ を示す。埴土は3層に大別され下位の2・3層には粒状のLoam・炭化物・焼土が混入する。3層下縁は粘性が強く、床土の浮刺したものと考えられる。

### 第3章 検出された遺構と遺物

竈は東壁はほぼ中央に付設され、煙道部の壁線を突出する掘り込みはない。焚口幅40cm、左袖部長60cmを残すが、右袖先端に土師器小型甕が倒置され芯材として用いられたものであれば袖長は90cmを有する。竈の芯部は基層Loamを掘り残してある。貯蔵穴と思われる坑は竈右手南東隅に位置し、径45cm深さ20cmの略円形を呈する。

床面はほぼ平坦をなし、Loam 小塊を混える黒褐色土をもって床土としている。壁下溝は幅10~15cm、深さ5~10cmでほぼ全周する。柱穴は4穴検出されたが、P2・P3はA<sub>2</sub>-49号溝の底面に位置し上縁は削平されている。P1は上縁径が60cmと大きく開く漏斗状を呈するが、P4は40×35cmの寸割に近い掘形である。柱痕径は15~20cmになろう。深さは西側の2穴(P2・P3)が70~80cm、東側の2穴(P1・P4)が100~110cmで差がある。柱間は東西軸南辺のP3・P4間が2.2mと短く、他は2.4mを測る。

出土遺物は土師器杯・小型甕などで、数量は少ない。甕は竈芯材と、支脚とも考えられる厚手・粗製のものがある。なお、埋土中より模造小型土器が出土している。



#### A1-8号住居跡 (第13図 P.L.9)

座標値X=193~199・Y=-798~-803の範囲にある。平面形状は長・短に差のない整った方形を呈するが、南東隅部の壁線は丸味を持つ。削平が著しく壁面の立ち上がりはほとんど残らず、形状は壁下溝の検出で明らかになったものである。規模は長短軸の差が無く、約4.3m、床面積約17.7㎡、主軸方位はN-65°-Eを示す。埋土の残存はほぼ見られず、床面上には床土の浮剥したと考えられるLoam塊混じりの褐色土が薄く覆っている。

竈は東壁のほぼ中央に付設されているが火床面がかるうじて残されているのみである。竈周辺には少量の灰白色粘土塊の分布が認められ、構築材に用いられたものと考えられる。煙道部の壁線外への掘り込みは僅かである。貯蔵穴は南東隅、竈の右手に位置する。楕円形状で、上縁径は50×30cm、深さ約50cmで埋

土は暗褐色土から褐色土である。

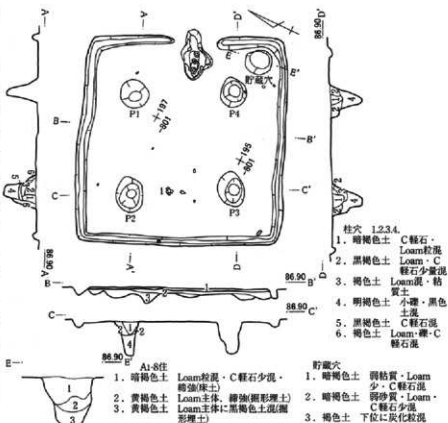
床面はほぼ平坦をなしLoamを主体とし、若干の黒褐色土を混えた床土で全体に堅く締まっている。柱穴は4穴検出され、柱間寸法は2.1mでP2・P3間のみが僅かに長く2.2mを測る。柱穴の掘形は上縁が大きく開く漏斗状である。上径60×70cmの円形ないしは楕円をなし、深さ60~70cm、柱直径は15cm前後である。壁下溝は全周しており、幅5~10cm、深さ5~12cmである。間仕切りはない。

出土遺物は少なく、図示できるものは住居跡西側の床面出土土師器坏1点である。

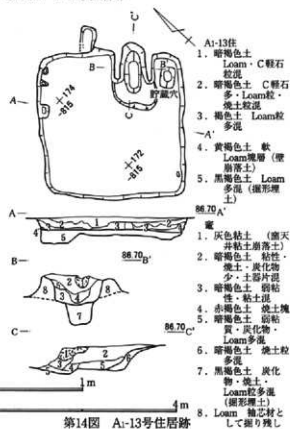
#### A<sub>1</sub>-13号住居跡 (第14図)

座標値X=170~174・Y=-812~-816の範囲にある。平面形状は略方形を呈し、規模は長・短の軸長差がなく一辺3.1mと小型住居跡である。床面積8.1㎡、確認壁高は20cmで直立気味である。主軸方位はN-51°-Eを示す。埋土は大別3層からなり、C軽石混じりの暗褐色土から褐色土で下位にはLoam大粒が多数混じる。壁際には壁面崩落のLoam粒層が三角堆積をなす。埋土は自然堆積であろう。

竈は北東壁の東に大きく偏って付設され、煙道は壁線を僅かに掘り込む。袖部は基層Loamを掘り残して芯部とする。竈埋土上位には灰色粘土塊層が存在することから構架材として用いられたと考えられる。袖部長さ約60cm、焚口幅約50cmを測る。貯蔵穴は北東隅、竈右手にあり45×30cmの長方形で深さ86cmと大きさの割には深い。



第13図 A<sub>1</sub>-8号住居跡



第14図 A<sub>1</sub>-13号住居跡

床面はほぼ平坦をなし、Loam塊を多く混じえる黒褐色土を突いて床土としている。掘形の凹凸差が大きく最大床土厚は20cm前後になる。柱穴、壁下溝などは検出されない。

出土遺物は極めて少なく、床面からの出土はない。埋土中より古墳前期の土器小片が若干あるにすぎない。

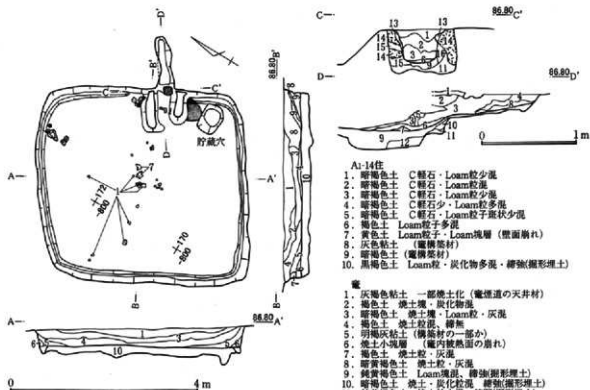
Ai-14号住居跡 (第15図 P L. 9)

座標値  $X = 168 \sim 173$ ・ $Y = -796 \sim -801$ の範囲にある。平面形状は緩い刷磨らみの方形を呈し、北西・南東方に長軸を成す。規模は長軸4.35m、短軸4.05m、床面積15.8㎡、確認壁高46cm・掘形壁高で50~54cm直立気味で北東・南西壁上縁部に崩れが生じている。主軸方位はN-61°-Eを示す。埋土はおおよそ5層に分別されるが土質は差異・変化が乏しく類似する。自然堆積と考えられる。整壁は壁面崩落によるLoam粒層の三角地積である。

竈は北東壁やや東に偏って付設され、長狭な煙道部が壁外に突出する。袖部は灰色粘土を用いるが、右袖には焼土・炭化物を混じえる暗褐色土を粘土と互層をなして築かれる。煙道長約1m、上縁幅25cm前後、袖長65cm、焚口幅30~40cmを測る。貯蔵穴は東隅、竈右手にあり上縁径で50×40cmの方形で深さ38cmである。

床面はほぼ平坦で総体的に堅牢である。床土はLoam塊・炭化粒を混じえる黒褐色土を用い20cm前後の層厚をもつ。柱穴・間仕切りは検出されていない。壁下溝は不明瞭であったが掘形面の調査においてその存在が知れ、全周する。幅10cm前後、深さ5~10cmと思われる。

出土遺物は少量で土師器・鉢・甕類であるが、埋土または掘形面よりの出土が多く、住居床面からの遺物には竈前の小型模造土器がある。



第15図 Ai-14号住居跡

## A-17号住居跡(第16図 P.L.9)

座標値  $X=167\sim 170$ ・ $Y=-790$   
 $\sim -793$ の範囲にある。古墳時代前期のA-15号住居跡と重複する。東縁は古代以降に属する南北走C-4号溝、南西隅は平安時代A-16号住居跡と重複し全容は不明だが、平面形状は東西に長軸を持つ略方形を呈すると考えられる。規模は長軸 $3.2+\varnothing$ m、短軸 $3.2$ m、床面積 $8.5+\varnothing$ m<sup>2</sup>、確認壁高は約30cmで壁面の立ち上がり角度は緩い。主軸方位は $N-8^{\circ}-E$ を示す。埋土は大別黒褐色から暗褐色土の2層からなり、その変化は漸次的で自然流入による堆積であろう。

竈は北壁大きく東に偏って付設される。東半はC-4号溝によって消失し、遺存部の状態も残存は不良で浅い凹状の燃焼部が検出されたにすぎない。貯蔵穴はC-4号溝によるため検出されていない。

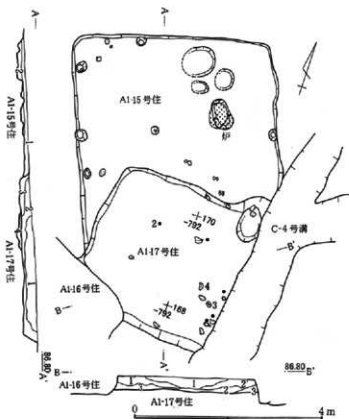
床面はほぼ平坦で、堅牢さはない。床土はLoam塊混じりの暗褐色土を掘めている。

出土遺物は土師器甕、須臾器小型甕等がある。

## A-18号住居跡(第17図 P.L.9)

座標値  $X=163\sim 165$ ・ $Y=-789\sim -792$ の範囲にある。平面形状は東西に長軸をもつ略方形の小規模住居跡である。中央部をC-4号溝が南北走して分断する。規模は長軸 $2.6$ m、短軸 $2.0$ m、床面積 $3.9$ m<sup>2</sup>、確認壁高 $25$ cmで下縁から床面への変換は緩い。主軸方位は $N-72^{\circ}-E$ を示す。埋土は大別暗褐色土2層からなり上位にはC軽石が、下位にはLoam粒が混じり自然堆積層であろう。

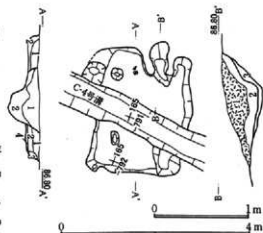
竈は東壁南寄りに付設され、煙道部の壁外への掘り込みは極小さい。袖部は灰褐色粘土を構築材として用い、燃焼部埋土上位には天井構築と思われる同質の粘土が崩落している。袖長 $50$ cm前後、焚口幅 $25\sim 30$ cmである。貯蔵穴の検出はない。



## A-17住

- |          |              |         |             |
|----------|--------------|---------|-------------|
| 1. 黒褐色土  | C軽石多・Loam粒少混 | 2. 暗褐色土 | C軽石少・Loam粒多 |
| 1'. 黒褐色土 | C軽石・Loam粒少混  | 3. 暗褐色土 | Loam粒少混     |
| 2. 暗褐色土  | C軽石少・Loam粒多混 | 4. 暗褐色土 | Loam混(掘り埋土) |

第16図 A-17号住居跡



## A-18住

- |          |                    |
|----------|--------------------|
| 1. 暗褐色土  | C軽石混・Loam粒混・弱粘性・粘弱 |
| 2. 褐色土   | Loam粒多混・粘質・弱粘      |
| 3. 褐色土   | C軽石混・Loam粒混・弱粘性・粘弱 |
| 4. 鈍黄褐色土 | Loam粒混・締(床土)       |

- |    |      |                    |
|----|------|--------------------|
| 1. | 灰褐色土 | 粘土層(天井粘土崩落)・土器片混・硬 |
| 2. | 暗褐色土 | 粘土・灰粒状混・軟          |
| 3. | 褐色土  | Loam粒混             |
| 4. | 4号溝  |                    |
| 1. | 褐色土  | C軽石混               |
| 2. | 褐色土  | C軽石少・Loam粒多混・粘性    |

第17図 A-18号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

床面は小さな起伏がありやや不安定だが、C-4号溝による欠落部分が広く詳細は不明である。床土は厚さ5cm前後のLoam塊混じりの鈍黄褐色土を用いる。柱穴や壁下溝・間仕切りなどは検出されていない。

出土遺物は極めて少なく、竈前床面より土師器杯1個体である。

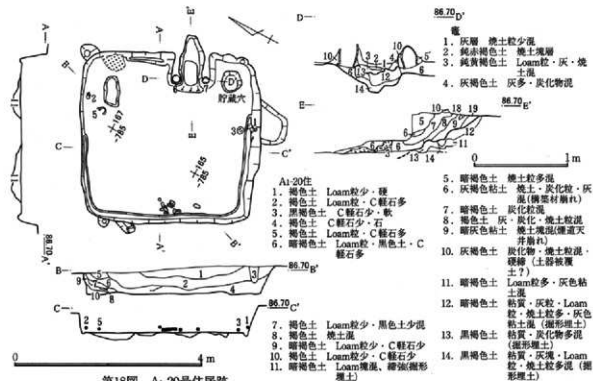
Ai-20号住居跡 (第18図 P.L.10)

座標値  $X=163\sim 167$ ・ $Y=-782\sim -786$ の範囲にある。平面形状は長・短軸ほぼ同じ3.6mで整った方形を呈する。床面積11.5㎡、確認壁高は55cmを測り、崩落によるためか南東壁上縁の法幅が大きい。主軸方位はN-67°-Eを示す。埋土は大別3層からなるが、北側からの流入土にはLoam塊を多量に混入する層が互層になり南側からの堆積土とは様相を異にしている。住居跡北側からの人為的埋土ないしは廃土が行われた可能性が考えられる。

竈は北東壁やや南に偏って付設され、煙道部は壁外へ40cm突出する。構築材には灰色粘土を主に用いていたようであるが、両袖先端部には土師器長胴の甕を倒置埋設して芯材にする。袖長約60cm、焚口35cmを測る。貯蔵穴は南東隅竈右手にあり、径45cmの略円形で深さ30cmである。

床面はほぼ平坦で、床土はLoam塊を混じえる黒褐色土である。壁下溝は南東壁半から南西壁・北西壁半にかけての範囲に検出されており幅10cm、深さ5cm前後である。柱穴・間仕切りは検出されない。

出土遺物には土師器杯・甕があり、竈袖芯材として甕が、また南西壁際に菰編み状長径礫12個が集中して検出されている。坏類はいずれも床面より約10cm浮いた状態の出土である。



Ai-23号住居跡 (第19図 P.L.10)

座標値  $X=190\sim 193$ ・ $Y=-771\sim -774$ の範囲にある。調査区之分断・隔次調査のためか全容は明らかになっていない。北半は不明だが、平面形状はほぼ方形を呈すると考えられる。竈は北壁に付設されているであろう。小規模な住居跡になると思われ、東西軸2.9m・南北は2.6+ $\varnothing$ m、床面積11+ $\varnothing$ ㎡、確認壁高は



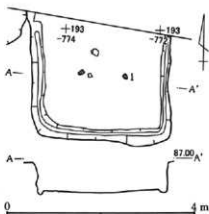
55~60cmになり上縁は崩れのためか法幅が大きい。主軸方位はおよそ座標北に沿う。

床面はほぼ平坦で、総体的に堅牢である。壁下溝は全周すると思われるが、幅10~15cm、深さ6~11cmで明瞭である。柱穴・間仕切り・貯蔵穴などは検出されていない。

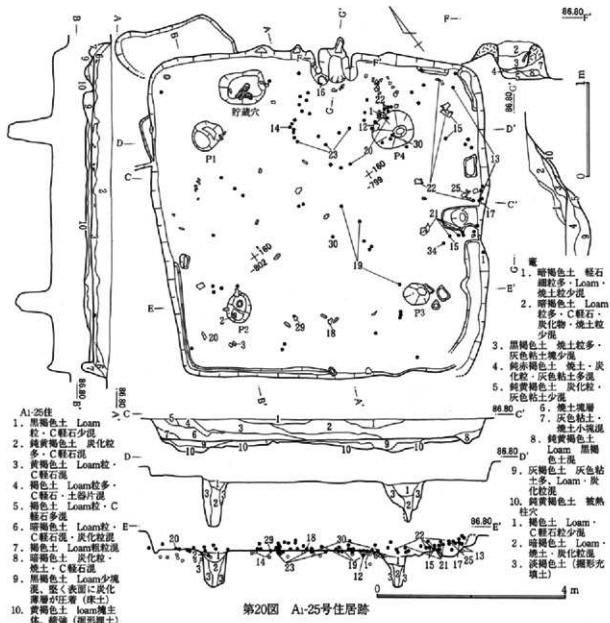
出土遺物は少量で土師器類である。

A1-25号住居跡 (第20図 P.L. 10)

座標値X=155~165・Y=-796~-805の範囲にある。平面形状は略方形を呈するが、南壁長は北壁より約1m短くやや形状が歪む。規模は長短軸の差は無く約7m、床面積約43.0m<sup>2</sup>、



第19図 A1-23号住居跡



- A1-25住
1. 黒褐色土・Loam粒・C軽石少混
  2. 鈍黄褐色土・炭化粒多・C軽石混
  3. 黄褐色土・Loam粒・C軽石混
  4. 褐色土・Loam粒多・C軽石・土砂片混
  5. 褐色土・Loam粒・C軽石多混
  6. 暗褐色土・Loam粒・C軽石混・炭化粒混
  7. 褐色土・Loam粒少混
  8. 暗褐色土・炭化粒・焼土・C軽石混
  9. 黒褐色土・Loam少混混、堅く表面に炭化層が圧着(床土)
  10. 黄褐色土・loam塊主体、締強(擬形塊土)

1. 暗褐色土・軽石混粒多・Loam・焼土粒少混
2. 暗褐色土・Loam粒多・C軽石・炭化物・焼土粒少混
3. 黒褐色土・焼土粒多・灰色粘土焼少混
4. 鈍赤褐色土・焼土・炭化粒・灰色粘土多混
5. 鈍黄褐色土・炭化粒・灰色粘土少混
6. 焼土塊層
7. 灰色粘土・焼土小塊混
8. 鈍黄褐色土・Loam・黒褐色土混
9. 灰褐色土・灰色粘土多・Loam・炭化粒混
10. 鈍黄褐色土・被熱柱穴
1. 褐色土・Loam・C軽石粒少混
2. 暗褐色土・Loam・焼土・炭化粒混
3. 灰褐色土(擬形充積土)

第20図 A1-25号住居跡

確認壁高は40cmで、立ち上がり角約20度で直線的である。主軸方位はN-39'-Eを示す。掘土は大別3層からなり、Loam塊・粒の混入が目立ち、人為的または短時間の流入土と考えられる。

竈は北壁中央僅か東寄りに付設し、煙道部は壁厚を30cmほど突出する。袖部は50cmの長さで住居内に張り出し火床は壁線内にある。袖構築材には灰白色粘土を用い、右袖の先端には胴部下半の欠損する輪切り状態の土師器壺を芯材として倒置させる。貯蔵穴は竈左手に位置し、平面形状楕円形で上縁径は1×0.7m、深さ60cmである。貯蔵穴の掘土上位より弧瀧み用と考えられる長径の石数個が出土している。

床面はほぼ平坦で、Loam粒を含む黒褐色土を固め床土としている。層厚は5～6cmである。柱穴は4穴検出されたが、配置は対角線上の柱間距離が異なりやや歪む。柱間寸法は、3.5～4.2mと一定してはいない。略円形の堀形で上縁が大きく漏斗状に開くP1・P2がある。上縁径50～70cm、深さ50～70cmで柱直径は15cm前後になろう。壁下溝は部分的に確認したが、掘形調査ではほぼ全周している。幅・深さとも均一ではないが10cm～5cmを測る。間仕切りは検出されない。

出土遺物は土師器杯・壺類を主にするが、小型提瓶・高坏・坏などの須恵器も見られる。また、特殊遺物には滑石製馬形模造品がある。それらの出土状況は小片化・散在の・完形度が低く、多くは住居跡廃絶後に投棄されたものと考えられる。

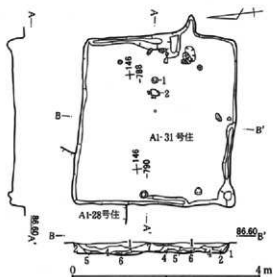
#### A1-31号住居跡 (第21図 P.L.11)

座標値X=143～147・Y=-786～-790の範囲にある。古墳時代前期のA1-28号住居跡と重複する。平面形状は東西に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸3.5m、短軸3.3m、床面積10.8㎡、確認壁高は約20cmである。主軸方位はN-96'-Eを示す。掘土は自然流入の堆積状況は窺えず、不規則な塊状の不連続な堆積を示す。灰色粘土塊の混入も多く、人為的な埋土であろう。

竈は東壁やや南寄りに付設されるが、住居跡廃棄時の破壊行為のためか右袖部は検出されていない。煙道部は略三角形で壁面を約40cm突出し急傾斜で立ち上がる。袖部長さは約50cm、基盤Loam土を芯材にして灰色粘土を用いている。

床面は南西部が若干高めになるが、段などの境界施設はない。床土は5～10cm程度の厚さでLoam塊を混じえる暗褐色土を充填している。壁下溝は東・西・南壁の一部分にそれぞれ検出されている。貯蔵穴や柱穴・間仕切りの諸施設は確認されない。

出土遺物は少なく、床面上では竈手前に土師器杯・壺片が見られる。また南西隅には小児頭大の灰色粘土塊が、その他長径楕円形礫が目立つ。



第21図 A1-31号住居跡

#### A1-31住

1. 鈍黄褐色土 弱砂質・Loam粒多・C軽石混・弱礫
2. 鈍黄褐色土 砂質・Loam粒多・C軽石混
3. 黒褐色土 弱粘質・Loam粒・焼土混
4. 暗褐色土 粘質・C軽石・焼土・Loam混

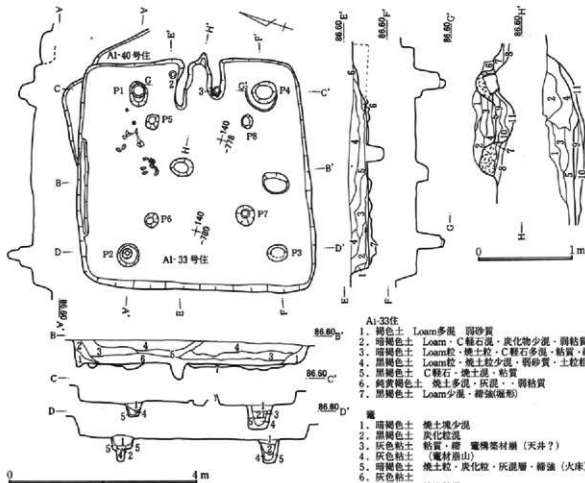
5. 暗褐色土 粘質・灰色粘土塊状・焼土粒多混・Loam混・弱礫
6. 黒褐色土 弱粘質・炭化物粒・焼土粒混・礫
7. 暗褐色土 弱粘質・焼土粒・炭化物粒・Loam粒多・C軽石混

## A1-33号住居跡 (第22図 P L. 11)

座標値  $X = 137 \sim 142$ ・ $Y = -774 \sim -781$ の範囲にある。古墳時代前期A1-40号・A1-42号住居跡と重複する。平面形状は長短軸に差のない一辺4.9mの方形を呈するが、南西部でやや歪む。床面積は21.2m<sup>2</sup>、確認壁高は約40cmで直立気味である。主軸方位はN-80°-Eを示す。埋土は大別5層からなるがLoam小塊混土が間層に入る。また炭化物・焼土粒の混入も目立ち人為的な埋土の可能性が高い。

竈は東壁ほぼ中央にあり、煙道部は小さく壁線を穿つ程度である。袖部はLoam土を低い基盤に残し、灰色粘土を用いて構築する。なお、右袖中央には土師器甕を倒置させ芯材としている。袖部長さ約90cm、焚口幅40cmを測る。

床面は平坦堅牢で、Loam小塊を混じえる黒褐色土で厚さ5cm前後を充填する。柱穴は8穴検出されているが配置・柱間寸法の差異から4穴対応で2組が抽出され建て替えによるものと考えられる。P1~P4は最終床面で、柱間寸法は北列(P1・P2)と南列(P3・P4)が等間3.4m、東列(P1・P4)が2.6m、西列(P2・P3)が3.2mである。P5~P8は掘形面検出の柱穴で北列(P5・P6)と南列(P7・P8)ともに2.1m、東列(P5・P8)西列(P6・P7)は2.0mの等間である。P1~P4は径40~50cm、深さ30~50cmでP5~P8は径30~40cm、深さ26~57cmを測る。壁下溝は北壁下の一部に確



第22図 A1-33号住居跡

## 柱穴

1. 暗褐色土・Loam・C軽石・炭化粒混
2. 褐色土・焼土少混
3. 暗褐色土・砂質
4. 褐色土・弱粘質・Loam・炭化粒多混
5. 鈍黄褐色土・Loam埋土

## A1-33住

1. 褐色土・Loam多混・弱砂質
2. 暗褐色土・Loam・C軽石混・炭化物少混・弱粘質
3. 暗褐色土・Loam粒・焼土粒・C軽石多混・粘質・砂
4. 暗褐色土・Loam粒・焼土粒少混・弱砂質・土粒粗
5. 黒褐色土・C軽石・焼土混・粘質
6. 鈍黄褐色土・焼土多混・灰混・弱粘質
7. 暗褐色土・Loam少混・締強(縮形)

## 竈

1. 暗褐色土・焼土塊少混
2. 暗褐色土・炭化粒混
3. 灰色粘土・粘質・締・竈構築材崩(天井?)
4. 灰色粘土(甕材崩山)
5. 暗褐色土・焼土粒・炭化粒・灰混層・締強(大床)
6. 灰色粘土
7. 暗褐色土・焼土粒混
8. 褐色土・Loam塊混
9. 鈍黄褐色土・Loam粒・灰・炭化粒混層
10. 暗褐色土・Loam塊・灰・炭化粒混・塊状硬軟(掘方埋土)
11. 褐色土・炭化粒混・粘弱(掘方埋土)

第3章 検出された遺構と遺物

認されたに止まる。貯蔵穴・間仕切りは検出されていない。

出土遺物は少なく、土師器環・甕数点である。埋土中には重複古墳前期A<sub>1</sub>-40号・A<sub>1</sub>-42号住居跡の物とおもわれる遺物が混入する。特殊遺物には滑石製白玉がある。北側中央に菰編み石様の長径九石11個あまりが出土するが床面より10~15cm上位にあり、一括の廃棄と考えられる。

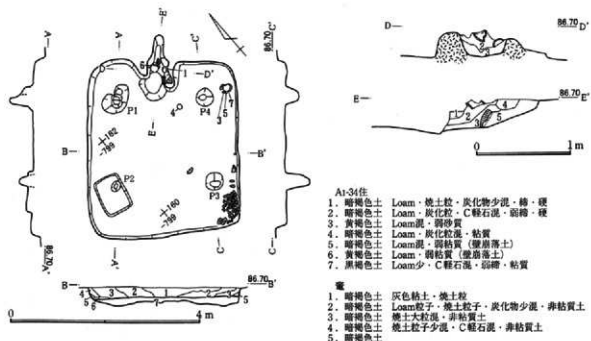
A<sub>1</sub>-34号住居跡 (第23図 P L. 11)

座標値X=158~163・Y=-796~-801の範囲にある。平面形状は北東・南西方向に長軸を持つ隅丸の方形を呈する。規模は長軸3.5~3.8m、短軸3.15m、床面積は10.6㎡、確認壁高は25cm、主軸方位はN-42°-Eを示す。埋土は大別3層からなるが、多量のLoam小塊混入土の堆積が目立ち、人為的な埋土の可能性が高い。

竈は北東壁のやや西に偏って付設され、煙道は長く壁線より約60cm突出する。袖部は明灰色粘土で構築され、長さは約55cmを有するが左袖は破損残欠である。焚口幅は30cm程度になろう。

床面は平坦・堅牢で床土にはLoam塊を混する黒褐色土および鈍黄褐色土を用いる。柱穴は4穴が検出され、柱間寸法は東列(P3・P4)西列(P1・P2)・北列(P1・P4)は等間に近く1.75m~1.85m、南列(P2・P3)が2.1mを測る。掘形形状は略円形に近く上縁径35~40cmである。深さは不均一で、25~50cmの間にある。柱穴(P1)には材の抜き取りまたは設置替えと考えられる痕跡が見られる。壁下溝・貯蔵穴・間仕切りなどの検出はない。

出土遺物は土師器環・甕・瓶などがある。竈内より壺下半が検出されているが、設置状態を残すものではない。北東隅床面には小型壺と瓶が重なり状態で出土している。また南東隅には菰編み様の長径円礫40余個が集積されたごとくに残されている。



第23図 A<sub>1</sub>-34号住居跡

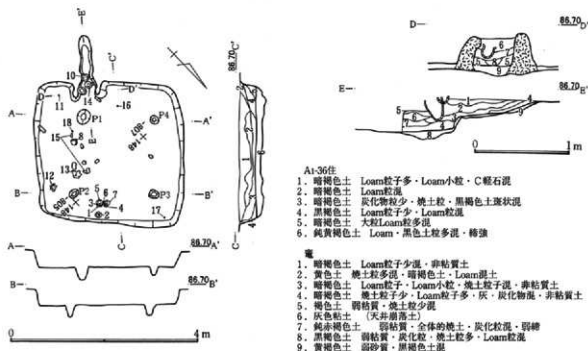
## A1-36号住居跡 (第24図 P L. 12)

座標値  $X=145-149$ ・ $Y=-804-808$ の範囲にある。平面形状は長短軸長に差がない略方形を呈するが、規模は北東・南西軸が3.1m、北西南東軸が3.0mで小規模な住居跡である。床面積7.9㎡、確認壁高は35cmである。主軸方位は $N-43^{\circ}-E$ を示す。埋土は大別暗褐色土の3層からなるが、Loam 小塊の混入が多く人為的な埋土や混土流入の可能性もある。

竈は南西壁にあり大きく東に偏って付設されている。燃焼部の1/2は壁外に掘り込まれ、長い煙道部が突出する。構築は暗褐色土を混じえるLoam土を袖材にして、天井構築には灰色粘土も用いていたようである。竈燃焼部内には土師器長胴甕の他、鉢形土器2個体が据えられるごとくに検出されている。煙道部長80cm、袖長40cm、焚口30cmを測る。

床面は平坦・堅牢で、床土にはLoam土・黒色土を混じえる層厚10cm前後の鈍黄褐色土を充填する。柱穴は4穴が検出され、南東列(P1・P2)1.6m・北西列(P3・P4)1.55m・南西列(P1・P4)1.5m・北東列(P2・P3)1.65mの柱間寸法である。掘形径は30~35cm、深さ25~30cmを測る。貯蔵穴・盤下溝・間仕切りなどは確認されていない。

出土遺物は土師器杯・甕などで、前記竈内の遺物の他、北東壁寄りの床面より略穹形で2組の3枚重ね土師器杯がある。特殊遺物には3個の径3cm大から2cm大の土製玉類がある。



第24図 A1-36号住居跡

## A1-37号住居跡 (第25図 P L. 13)

座標値  $X=147-152$ ・ $Y=-810-815$ の範囲にある。平面形状は北東・南西方向に長軸をもち、長短軸長差の著しい長方形を呈する。規模は長軸5.1m、短軸3.3m、面積14.8㎡、確認壁高は25cmで直立する。長軸を主軸にとる方位は $N-40^{\circ}-E$ を示す。埋土は大別黒褐色土と暗褐色土の2層からなり、C軽石と思われる白色軽石が多いほかは混入物は少なく自然堆積と考えられる。

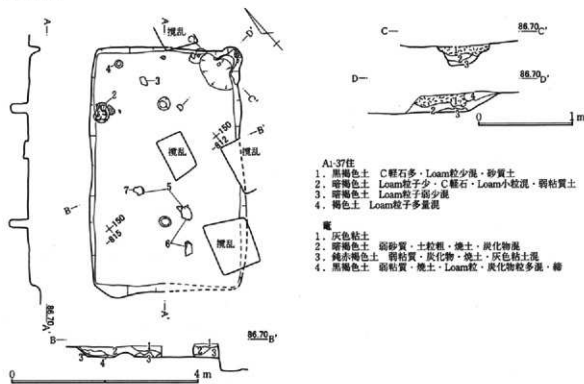
竈は北東・南東壁の変換隅部に付設される。長狭な煙道部を有さず、弧状に小さく壁線に掘り込む形型

### 第3章 検出された遺構と遺物

である。袖部の遺存度は悪く、左袖の一部と思われる灰色粘土塊が残る。壁線を掘り込み竈縁額には構築材の灰色粘土が巡る。

床面は平坦をなし、床土には焼土粒・炭化粒の混じるLoam土主体の鈍黄褐色土が充填される。柱穴と考えられる小穴はほぼ中央長軸線の2穴である。柱間寸法は2.45mで径約25cm、深さ40cmを測る。貯蔵穴・壁下溝・間仕切りなどは検出されていない。

出土遺物は瓦類が多く床面直上のものが多い。また、北西壁には傾倒するような状況で出土した略完形の甕がある。

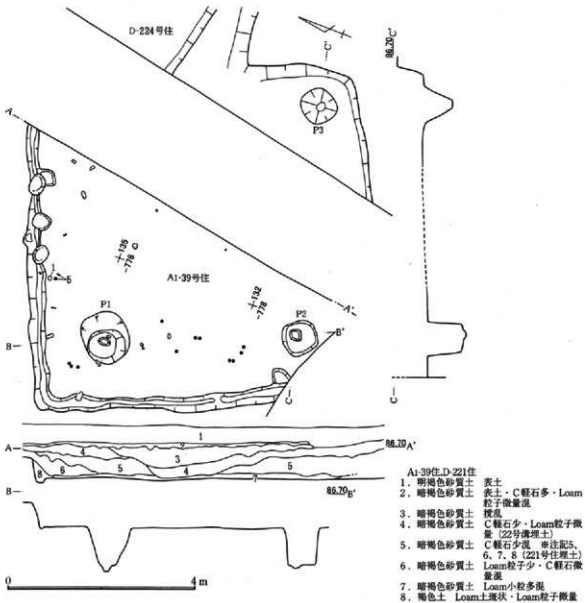


#### A1-39号住居跡 (第26図 P L. 13)

座標値  $X = 129 \sim 138$ 、 $Y = -772 \sim -781$  の範囲にある。平面形状は北東・南西方向に長軸を持つ方形を呈するが調査当時の現有道路下にかかり部分的に未検出箇所も多い。本跡より新しいE3-22号溝が東西に縦断する。東縁で帰属時期の近いD-224号住居と重複するが新旧関係の確定はできていない。規模は長軸7.5m・短軸6.35mで遺跡内当該期の堅穴住居跡では大型に属する。床面積24.0㎡、確認壁高は50cmで直立する。主軸方位はN-65°-Eを示す。埋土は暗褐色土で大別3層になるが、白色軽石(C軽石か)以外の混入物は少なく自然堆積と思われる。壁際はLoam小塊を多量に混する三角堆積を成す。

竈は北東壁の付設であるがE3-22号溝の開削によって消滅し、その痕跡を知るのみである。

床面は平坦をなし、床土はLoam塊を混じえる黒褐色土で充填される。柱穴は4穴と考えられるが北隅に想定される柱位置は調査時現有道路下にあたり、検出は3穴である。上縁径80~90cm、深さ70~80cm、柱径径15~20cmである。柱間寸法は南西列(P1・P2)が4m、南東列(P2・P3)は4.8mを測る。壁下溝は南東方壁が未検出なもの、幅20cm前後、深さ10cmで比較的確な掘形をもつ。北西壁縁中央部には壁面を削り込んで3小穴を穿つ。径30cm、深さ25~35cmで中心間の間隔は75cmである。出入り口施設とも考えられる。貯蔵穴・間仕切りなどは検出されない。



第26図 A1-39号住居跡

遺物は埋土中からの出土が大半で、土師器杯・甕類などがある。

A1-41号住居跡 (第27図 P L. 13)

座標値 X = 138~141・Y = -783~-786の範囲にある。古墳時代前期A1-42号住居跡と重複する。平面形状は南北方向に若干の軸長をもつ略方形を呈すが北東隅の壁線は丸味がある。規模は長軸3.2m・短軸3.0m、床面積8.0㎡の小規模な住居跡である。確認壁高30cmで直立する。主軸方位はN-88°-Eを示す。埋土は大別3層からなる。Loam 小塊を多量に混じえる褐色及び黒褐色土の自然整合的流入堆積の状況は窺えず人為的埋土と考えられる。

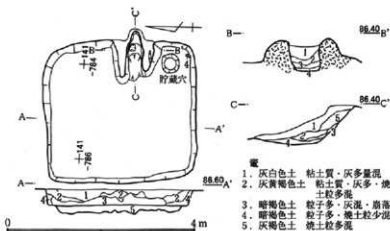
竈は東壁僅かに南へ寄って付設され、煙道部は壁線から約40cmの長さで突出し急傾斜で立ち上がる。袖部は大きく張り出し、長さ70cmで灰色粘土を主材に構築される。笑口幅35cmを測る。竈内埋土は上位に構築材粘土が崩落する。貯蔵穴は南東部隅、竈右手にあり略円形を呈する。径40cm、深さ25cmで埋土上位か

第3章 検出された遺構と遺物

ら中位にかけて竈材灰色粘土塊や灰の流入が見られる。

床面は平坦をなし、柱穴・壁下溝・間仕切りは備えていない。床土は約20cm、暗褐色土とLoam塊の2層を充填する。掘形は中央部が若干高く壁際から15~20cmの間隔をおいて幅50~60cmで四周を窪ませる。

遺物は極めて少量で、床面からの出土はない。埋土中より重複A1-42号住居跡に属する遺物が混入する。



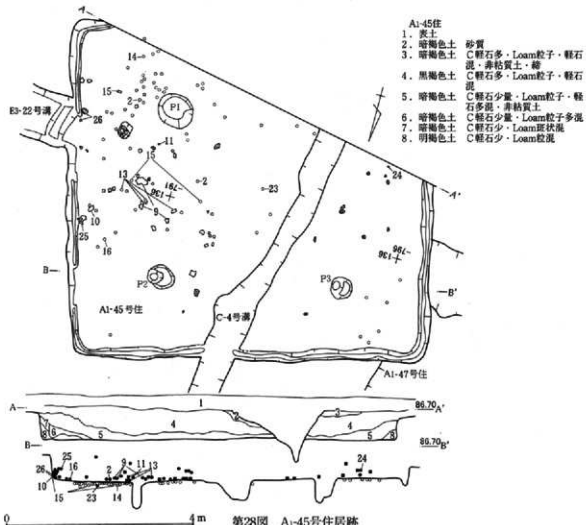
A1-41住

1. 黒褐色土 面砂質・C軽石・焼土粒混
2. 褐色土 粘質・Loam粒・C軽石多混
3. 暗褐色土 面粘質・Loam粒・C軽石・灰色粘土少混
4. 褐色土 砂質・Loam粒主(壁崩落土)
5. 褐色土 砂質・Loam粒少混
6. 暗褐色土 微粘質・Loam粒微量・織(堀形)

第27図 A1-41号住居跡

A1-45号住居跡 (第28図 P.L.14)

座標値 X=131~139・Y=-788~-796の範囲にある。南側は現有(調査時)道路にかかり全容は不明



A1-45住

1. 灰土
2. 暗褐色土 砂質
3. 暗褐色土 C軽石多・Loam粒子・軽石混・非粘質土・織
4. 黒褐色土 C軽石多・Loam粒子・軽石混
5. 暗褐色土 C軽石少量・Loam粒子・軽石多混・非粘質土
6. 暗褐色土 C軽石少量・Loam粒子多混
7. 暗褐色土 C軽石少・Loam粒状混
8. 明褐色土 C軽石少・Loam粒混

第28図 A1-45号住居跡



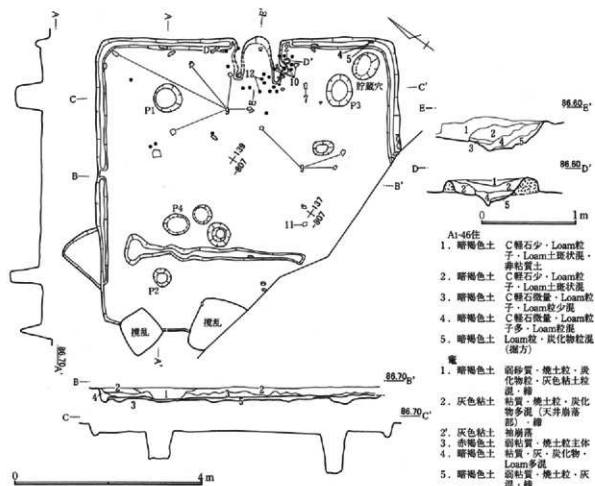
ながら平面形状略方形を呈すると思われる。古墳前期A1-47号住居跡と重複する。また、C-4号溝(南北走)・E-22号溝(東西走)がそれぞれ当跡を縦横断する。規模は東西軸が僅かに長く、長軸7.6m・短軸7.0m、床面積41.2m<sup>2</sup>の大型住居跡である。確認壁高は55cmで直立する。竈は未検出で道路下に付設されると考えられ、竈位置想定南壁線を基軸にする主軸方位はN-15°-Wを示す。埋土は大別4層からなり、白色軽石粒(C軽石)の他は混入物の少ない暗褐色土・黒褐色土で自然堆積になろう。壁際はLoam塊混じりの三角堆積である。

床面はほぼ平坦をなす。床土は上位層に10cm程度の暗褐色土と下位にLoam塊を主体にする薄い黄褐色土を充填する。掘形は東・北壁に沿い帯状に浅く窪む。柱穴は4穴になると考えられるが、検出は3穴である。柱間は東列(P1・P2)が3.8m、北列(P2・P3)が3.5mである。P1は径65×75cm・深さ58cm、P2は径30×35cm・深さ58cm、P3は径45×50cm・深さ50cmである。壁下溝は幅10~20cm、深さ5~10cmで全周すると考えられる。貯蔵穴・間仕切りなどは検出されない。

土師器・瓦類が多く、破損片散在的な出土状況である。特殊遺物には、土製鎌・玉・石製模造品などがある。

## A1-46号住居跡(第29図 P.L.14)

南部隅は現有(調査時)道路にかかり未検であるが、座標値X=134~142・Y=-803~-811の範囲になろう。平面形状は整った方形を呈すると考えられる。規模は北西~南東軸長6.3m・北東~南西軸長6.05m、



第29図 A1-46号住居跡

床面積32.1㎡、確認壁高は25cmで大型住居に属する。主軸方位はN-55°-Eを示す。埋土は大別2層の暗褐色土からなり、土質変化は漸移的で自然堆積と考えられる。

竈は北東壁ほぼ中央に付設され、狭長な煙道部はなく先端は壁線に合わせ弧状をなす。袖部は長さ80cmで灰色粘土をもって構築される。竈内には構築材粘土が崩落し埋める。笑口幅は広く60cmを測る。貯蔵穴は東方隅竈右手にあり、径50×60cm、深さ60cmあまりで楕円形を呈する。

床面は平坦で、床土にはLoam粒を混じえる暗褐色土とLoam土塊主体の鈍黄褐色土を充填する。掘形は中央に僅かな高みを持たせるように壁際または壁から50~70cmの間隔をおき、幅50~60cm、深さ10cm前後の凹帯を方形に巡らす。柱穴は4穴になると考えられるが道路下南東部の1穴は未検である。柱間寸法は北東列(P1・P3)、北西列(P1・P2)とも3.7mである。柱穴掘形形状は円または楕円形をなし、P1は径60cm・深さ70cm、P2は径35cm・深さ60cm、P3は径55×65cm・深さ87cmを測る。壁下溝は南西壁を除いて巡っており、幅15cm、深さ5~10cmである。間仕切りの検出はない。

遺物は土師器杯・甕など床面に近く出土するが散在的で遺存度の高いものは少ない。特殊遺物には石製白玉が竈左手壁際埋土より出土している。

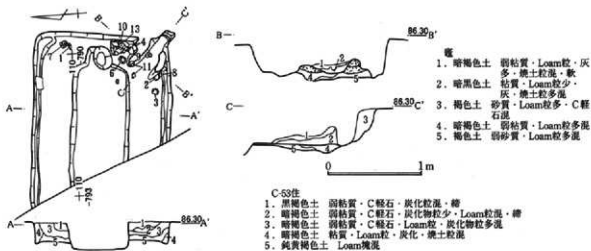
#### C-53号住居跡 (第30図 P.L.14)

西縁は調査区域外にかりり全容は不明である。座標値はX=107~110・Y=-789~793の範囲に及ぶと思われる。平面形状は東西方向に長軸をもち、方形を呈しよう。東側には接することくC-59号住居跡(古墳時代後期)が位置する。住居跡中央には幅1.2m・長さ2.5m以上の方形土坑が穿たれる。後世のものである。住居規模は長軸3.7m+ $\varnothing$ ・短軸2.9m、床面積7.7㎡の小型住居である。確認壁高40cmで直立する。長軸を基準とする主軸方位はN-96°-Eを示す。埋土は黒褐色~褐色土の大別3層からなり、土質変化は漸移的で自然堆積であろう。柱穴や貯蔵穴・壁下溝・間仕切りは備えていない。

竈は東壁と南壁の変換隅部に付設され、端部矩形の掘形で長さ30cmほどの煙道部は急角度で立ち上がる。袖部は長さ50cm、褐色粘土を構築材とする。笑口幅40cmを測る。

床面は平坦をなすと思われるが後世土坑により詳細は不明である。床土は3層からなり、Loam粒を多量に混じえる黒褐色土とLoam塊層の間に締まりのない暗褐色土を挟む。

出土遺物は竈周辺に集中して検出され、土師器杯・高坏・鉢・壺・甎など器種・量とも豊富である。



第30図 C-53号住居跡

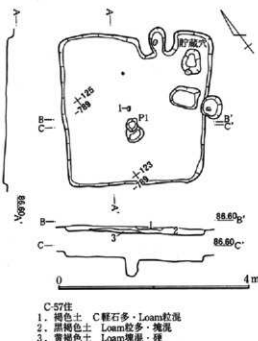
## C-57号住居跡 (第31図 P L. 14)

座標値  $X = 122 \sim 126$ ・ $Y = -786 \sim -790$ の範囲にある。平面形状は長・短軸長の差が無く略方形を呈する。規模は軸長3.1m、床面積8.6㎡の小型住居である。確認壁高は10cm前後の浅い掘形である。主軸方位はN-38°-Eを示す。埋土はLoam塊層が不整合に埋め、人為的か。

竈は北東壁やや東側に付設され、煙道部は壁線外へ約45cm突出する。燃焼部とは小さな段をもち、平坦に延びる。袖部は低平で残存状態は悪い。長さ45cm程度を確認されるが構築材には灰色粘土を用いていたと思われる。貯蔵穴は東隅電右手にある。径40×50cmの楕円形で深さ30cm前後である。埋土にはLoam塊・粒の混入が多い。

床面は平坦をなすが堅牢さはない。床土はLoam塊・粒を混じえる褐色土や黄褐色土を充填する。掘形は中央部に高まりを残すが凹部の形状は不定形である。柱穴状の穴は中央部僅か南西寄りに1穴のみ検出している。径25cm深さ35cmを測る。壁下溝・間仕切りなどは検出されない。

遺物は少なく、埋土からの出土である。



- C-57住  
1. 褐色土 C 軽石多・Loam粒混  
2. 黄褐色土 Loam粒多・塊混  
3. 黄褐色土 Loam塊混・塊

第31図 C-57号住居跡

## C-59号住居跡 (第245図)

古墳時代前期C-50号住居跡と重複し、竈位置から大凡の範囲は知れるものの東壁線の検出が不明瞭である。座標値では  $X = 108 \sim 111$ ・ $Y = -786 \sim -789$ の範囲になろう。平面形状は隅部が丸味の強い略方形になる。規模は東西軸3.15m・南北軸は3.0m、床面積7.4㎡たらずの小型住居跡である。確認壁高は僅か18cmと浅い。主軸方位はN-103°-Eを示す。埋土は大別2層になり、Loam塊・粒を混じえる褐色土と黒褐色土で人為的な埋土であろうか。貯蔵穴・柱穴・壁下溝などの諸施設は検出されていない。

竈は東壁僅かに南に寄って付設されるが遺存状態が悪く詳細は不明である。灰色粘土を構築材に使用していると考えられる。

床面は平坦をなすが不安定である。顕著な掘形を持たない。柱穴・貯蔵穴・壁下溝・間仕切りなどの諸施設は検出されない。

出土遺物は少なく、埋土からほとんどである。土器器坏等である。

## F-66号住居跡 (第32図 P L. 15)

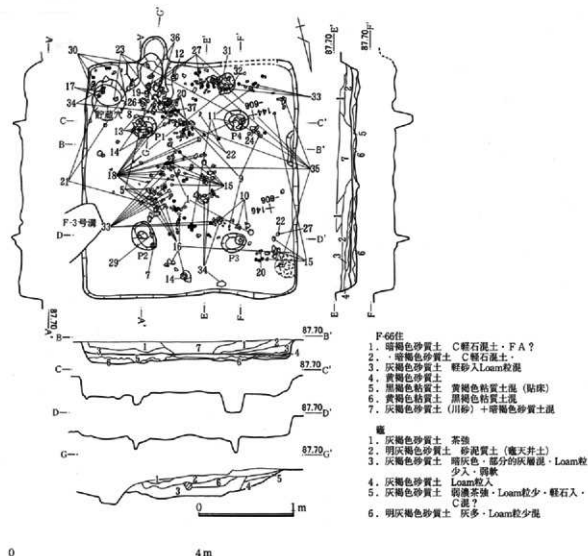
座標値  $X = 142 \sim 147$ ・ $Y = -602 \sim -606$ の範囲にあり、北東・南西走るF-13号溝と重複する。平面形状は南北方向に長軸をもつ整った方形を呈する。規模は南北長軸4.9m・東西短軸4.5mを測る。床面積20.9㎡、確認壁高30cmで直線・直立気味である。主軸方位はN-11°-Eを示す。埋土は大別3層になり、混入物の少ない砂質暗灰褐色土で自然堆積と思われる。

竈は南壁東に大きく偏って付設され、煙道部位は半楕円形状に壁線を穿ち約50cm突出する。袖部はかなり崩壊が進むが灰色粘土を用い、形状はややハの字状に開く。軸長60cm・焚口幅は40cmである。貯蔵穴は

南東隅左手にあり、径100×70cm・深さ80cmで略方形を呈する。

床面はほぼ平坦で、床土はLoam土を混じえた黒褐色土を充填する。柱穴は4穴で径40×60cmの楕円楕形もち深さは40~50cmを測るが、P2がやや浅く35cmである。柱間寸法は北列(P2・P3)・南列(P1・P4)が2.1m、東列(P1・P2)2.3m・西列(P3・P4)が2.5mを測る。間仕切溝・壁下溝は検出されない。

出土遺物は竈前から中央部にかけて数カ所に集中している。住居廃絶後まもなくの投棄と考えられる。土師器小型鉢形・杯・高杯・甌・甕類など数・類とも多い。



第32図 F-66号住居跡

E→90号住居跡 (第33図 P L. 15)

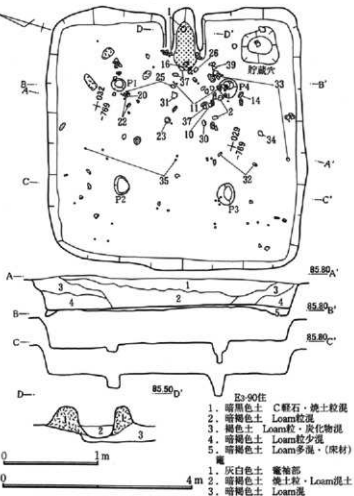
座標値 X = 027~033・Y = -766~-772の範囲にある。平面形状は略正方形に近く隅丸気味である。東西・南北軸とも約5.3mを測る。床面積24.4㎡、確認壁高65cmで部分的に上端の広がるものの立ち上がりは直線・直立的である。主軸方位はN-71°-Eを示す。埋土は大別3層になり、壁際縁辺にはかなり層厚に大量のLoam塊を混入する人為的投入の窺われる埋土が堆積する。中央部の最終埋土は白色軽石粒の混じる暗褐色土であり自然流入的である。竈手前に集中する埋土中の遺物はこの層の下部から多く検出される。

竈は東壁ほぼ中央に付設され、煙道部は壁縁を僅かに穿つのみで長狭な形状はとらない。袖部は長さ約

80cmで灰色粘土とLoam土の混土を構築材にする。焚口幅は40cmを測る。貯蔵穴は南東隅で竈右手にある。上縁略方形で65×75cm、落差5cm程度、幅10cmの段をなす。下縁は楕円形をなし、深さ45cmを測る。

床面は平坦で堅牢である。掘形は壁沿に約50cm幅で窪みを巡らす。床土はLoam塊を混じえる暗褐色土を用いる。柱穴は4穴で径30~40cmの円形または楕円形をなし深さは50cm前後を測る。P1のみ浅く、窪み程度の15cmである。柱間は北列(P1・P2)が2.1m、南列(P3・P4)が2.3m、東列(P1・P4)、西列(P2・P3)とも2.2mである。壁下溝、間仕切り施設などは検出されない。

出土遺物はその大半が埋土からのものである。南東部、竈右前方に集中し住居跡埋没過程での投棄によるものと考えられる。土師器坏類が多く、模造土器の他、須恵器高坏などもある。いずれも埋土からの出土である。



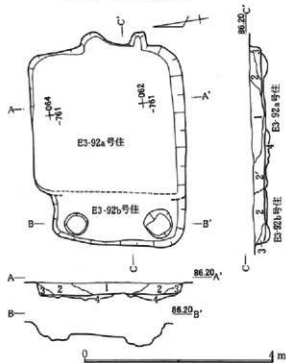
第33図 E3-90号住居跡

## E3-92b号住居跡 (第34図)

座標値X=061-065・Y=-759~-764の範囲にある。本跡は既刊『舞台遺跡(1)』(奈良・平安時代他編)2001において平安時代の住居跡として報告したものである。E3-92a号住居跡と重複しており、両者の資料を検討した結果古墳時代後期に帰属することが判明したため、改めてここに再録する。

平面形状は、東西に長軸をもつ方形を呈すると考えられる。住居跡の西端はa号住居跡より1.1m突出するが、北壁線は50cm程度内に入る。東壁は残存する竈の痕跡からみて若干縮小するようである。規模は、長軸4.0m・短軸2.8m程度で壁高は25cmを測る。主軸方位はN-103°-Eを示す。

- E3-92a・b ※92a(平安)・92b(後期)
1. 褐色土 Loam大粒多量混 (a)
  2. 暗褐色土 Loam粒多量混 (a)
  3. 黒褐色土 砂無 (a)
  - 2'. 暗褐色土 Loam粒少量混 (b)
  - 3'. 黒褐色土 砂無 (b)
  4. 暗褐色土 Loam塊混土(床土) 掘形
1. 暗褐色土 Loam混



第34図 E3-92b号住居跡

竈の存在は焼土の痕跡で確認されたものである。a住居跡の構築に伴って取り払われたと考えられ、東壁の南寄りの位置に壁線から30cmほどの突出部が残されていた。

床面はa住居跡と同一高で、残存部が壁際のためか踏み締まりは弱い。北西及び南西の隅にそれぞれ径50cmの円形落ち込みが検出されている。深さは10~20cmで性格を知るような遺物の出土も土層情報もない。出土遺物には埋土から土師器杯・小型壺・模造土器など破片少量である。

E3-94号住居跡 (第35図 P.L.15)

座標値X=072~075・Y=-760~-764の範囲にある。平面形状は東西方向に長軸をもつ方形を呈する。住居跡建築材と考えられる炭化材が中央から放射状に検出され、焼失家屋であろう。古墳時代前期E3-93号住居跡と竈部分で重複する。規模は長軸3.95m・短軸3.45m、床面積12.5㎡、確認壁高は35cmで直線直立する。主軸方位はN-102°-Eを示す。埋土は大別2層からなり床面直上には焼土・炭化材(建築材)が残る。埋土はLoam粒・白色軽石(C軽石)を混じえる褐色・暗褐色土で家屋焼失後の自然堆積と考えられる。

竈は南・東壁の変換する隅部に付設される。煙道部は壁線より約40cm突出し、矩形の掘形を有する。袖部は短く30cm程度で、灰白色粘土を構築材にする。左右袖芯材には土師器甕を埋設する。美口部には土師器甕2個体が縦列状態で横たわり、美口部天井架構されたものが落下したごとの状況である。

貯蔵穴は南東隅竈の右脇にあり、形状は略円形、径50cm・深さ35cmである。

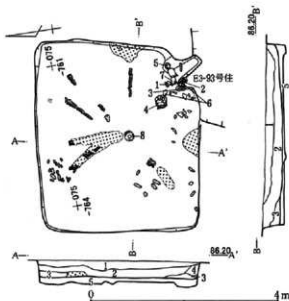
床面は平坦・堅牢である。掘形は南壁から西・北壁沿いにかけて幅50cmで僅かな窪みを巡らす。床土はLoam塊層を用いる。柱穴・壁下溝・間仕切りなどの施設は検出されていない。

出土遺物は坏類などの小型品は少ない。竈構築材として使用された土師器甕頸が多く、床面からは土師器甕がある。北壁沿いには竈編み状石が20個あまり床面に集中し、南西部には同類の石が投棄された状態で出土している。

E3-96号住居跡 (第36図 P.L.16)

座標値X=080~087・Y=-757~-763の範囲にある。平面形状は長・短軸長のほぼ同じ略方形を呈するが、南西・北西隅部壁線の丸味が強い。北東隅で6号井戸跡と重複する。当住居跡は既刊『舞台遺跡(1)』の6号井戸跡記述中古墳時代前期としたが、ここでは古墳時代後期に訂正する。規模は6.4m×6.25m、床面積36.9㎡、確認壁高は20cm足らずで浅い掘形である。主軸方位はN-79°-Eを示す。埋土は畑深耕溝により著しい攪乱を被っている。大別1層でLoam粒の混じる褐色土の堆積である。

竈は東壁や南に偏って付設されるが、検出時には遺存状態の悪さのためか焼土分布と認識されていたよ



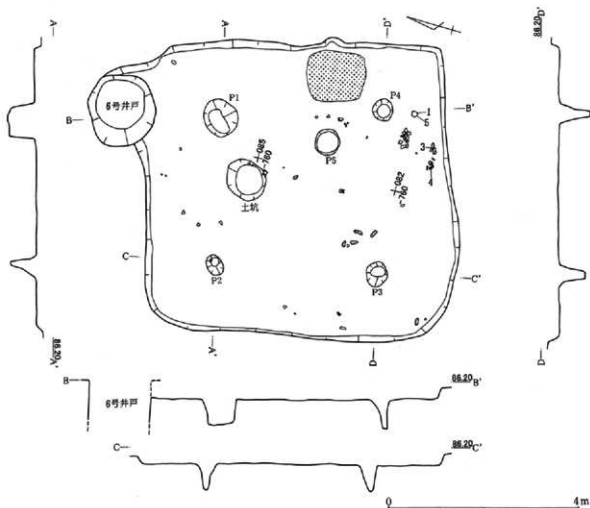
- E3-94住
1. 暗褐色土 Loam粒・C軽石多混
  2. 褐色土 Loam粒多・C軽石少量混
  3. 黄褐色土 弱粘土質・褐灰白粘土・Loam粒混土層
  4. 黒褐色土 弱粘土質・黒色土主・Loam粒少混
  5. 黒褐色土 弱粘土質・褐灰白粘土・Loam粒・黒土混土層

第35図 E3-94号住居跡

うである。詳細は不明であるが、煙道部は壁線を僅かに穿つのみである。

床面は平坦で竈前面から中央部にかけては堅牢である。柱穴は4穴で、P1は径70×80cmの大きな掘形をなすが他は径45cm前後で円形または楕円形、深さは40～50cmである。貯蔵穴・間仕切り・壁下溝等は検出されない。

出土遺物は少量・散在的である。土師器坏の他、須恵器甕小片が埋土より出土する。



第36図 E-96号住居跡跡

#### E-98号住居跡 (第37図 P L. 16)

座標値X=067-073・Y=-777~-782の範囲にある。平面形状は南北軸がやや長い略方形を呈するが、東西・南北方向に若干歪み北東部壁線の丸味が強い。規模は長軸5.4m・短軸5.2m、床面積23.8㎡、確認壁高45cmで大凡直線的であるが東壁上部部は崩落によるためか傾斜は緩い。主軸方位はN-106°-Eを示す。埋土は大別3層からなり、下位層はLoam小塊を多量に混じえる暗褐色・褐色土で人為的埋土とも考えられる。中央上位層はすり鉢状に堆積する黒褐色である。遺物出土はこの層位から目だっている。

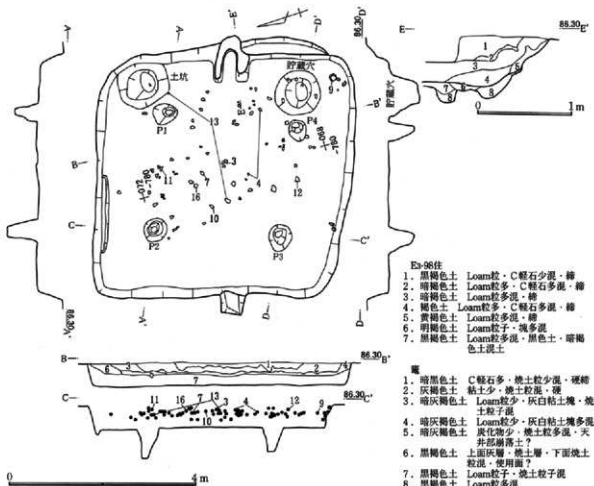
竈は東壁ほぼ中央に付設され、煙道部は小さく壁線を穿っている。袖部長さ約45cmで灰白色粘土を構築材にしている。焚口幅約30cmを測る。貯蔵穴は、南東部竈右脇にあり、径1.0×0.9mの略円形を呈し深さは60cmである。

床面は平坦で柱穴内側の範囲は堅牢である。柱穴は4穴で上端径は40～55cmの円形、深さは50～65cmで

### 第3章 検出された遺構と遺物

柱痕は10cm前後になろう。柱間寸法は北列が2.5m (P1・P2)・南列2.3m (P3・P4)・東列2.7m (P1・P4)・西列2.6m (P2・P3)である。壁下溝は北壁沿い一部で詳細は不明である。また、間仕切りは検出されていない。北東隅に検出された径1.0×0.9m・深さ40cm略円形の土坑状落ち込みは床面精査で確認され当跡に伴うものか、後出かは不明である。

床面からの出土遺物は南東部貯蔵穴脇の土師器坏類の1・2点で少ない。大半は中央部埋土中の出土で小片・散在的である。土師器坏の他、須恵器有蓋壺片がある。



第37図 E-98号住居跡

### E-99号住居跡 (第38図 P.L.16)

座標値X=041~047・Y=-774~-780の範囲にある。平面形状は南北方向が若干長い略方形を呈する。規模は長軸5.0m・短軸4.85m、床面積22.1㎡、確認壁高は25cmと浅い。主軸方位はN-22°-Wを示す。埋土は大別3層からなる。上下層はLoam塊を混ざる褐色土が厚めに堆積し、中位に黒褐色土の薄層が入る。

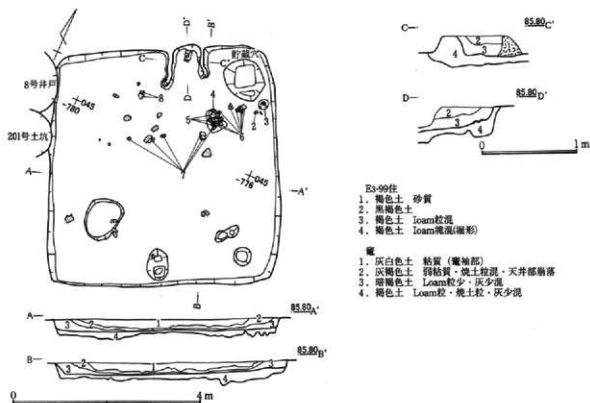
竈は北壁やや東側に偏って付設され、煙道部位の先端は弧状で僅かに壁線に割る。袖部は長さ55cm、灰白色粘土を主材として構築される。焚口幅約50cmである。貯蔵穴は北東隅竈の右手にある。上縁径90×80cm、の楕円形で底縁は方形を呈する。深さ30cmで南縁は小さく段状に落ちる。

床面は平坦で竈前から中央部にかけては比較的堅牢である。床土はLoam塊を混ざる暗褐色土を用い、堀形は中央約1m四方の高まりを成す。南壁近くに不定小穴が見られるが、柱穴は検出されていない。

遺物は南東部貯蔵穴周辺に集中するが、投棄によるものが多いと考えられる。土師器坏・壺・壺の他、



須恵器無蓋高坏片がある。



第38図 E-99号住居跡

#### E-101 a・b・c号住居跡 (第39・40図 P L.16)

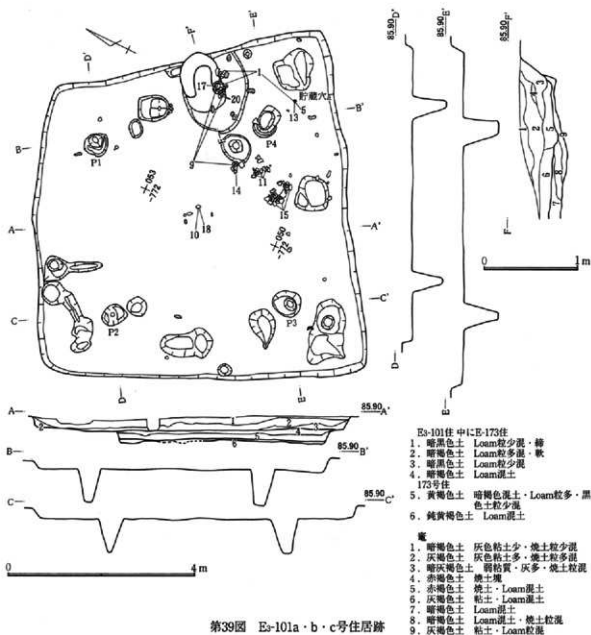
当住居跡の掘形からは2度の、柱穴の組み合わせからはさらにもう一度計3回の建て替えが成されている。新しい順にE-101 a・b・c号とする。なお建て替えは住居跡拡張への手順を示している。

a号住居跡 新段階の住居跡である。座標値 $X=047-055$ ・ $Y=-767-776$ の範囲にある。平面形状は南北方向に長軸をもつ略方形を呈するが、壁に約1m近くの長・短差があり西南部へ歪みが生じている。規模は南壁線が最も長く7m、最短北壁線が6mである。床面積42.2 $m^2$ 、確認壁高は20cmで浅い。主軸方位は $N-55^{\circ}-E$ を示すが柱穴配列よりb・c号もほぼ同一である。埋土は大別2層からなり、Loam粒を混ざる暗褐色土で均一的に締まりが弱く自然堆積であろう。

竈は東壁ほぼ中央に付設され、煙道部位先端は弧状で僅かに壁線を削る。右袖先端には土師器甕が倒置埋設され芯材とし、構築材は灰褐色粘土を用いる。袖長70cm、焚口幅40cmを測る。貯蔵穴は南東隅甕右手にあり、径90×60cmの楕円形で深さは約30cmである。

床面は中央が窪むような感触を受けるがほぼ平坦である。b号・c号からの建て替えのためか硬化部分と軟弱部が安定していない。床土はLoam土を混ざる暗褐色土である。柱穴は4穴(P1~P4)で上縁径50cm前後の円形または楕円形の掘形をもち深さ60~70cm、柱痕径約15cmになろう。なお、柱穴P4はb号と共有すると思われる。柱間は北列(P1・P2)と西列(P2・P3)が3.7m、南列(P3・P4)が3.8m、東列(P1・P4)が3.6mになる。

出土遺物には土師器坏・甕・瓶などがあり、竈周辺及び右前方部床面からの出土である。



第39図 E3-101a・b・c号住居跡

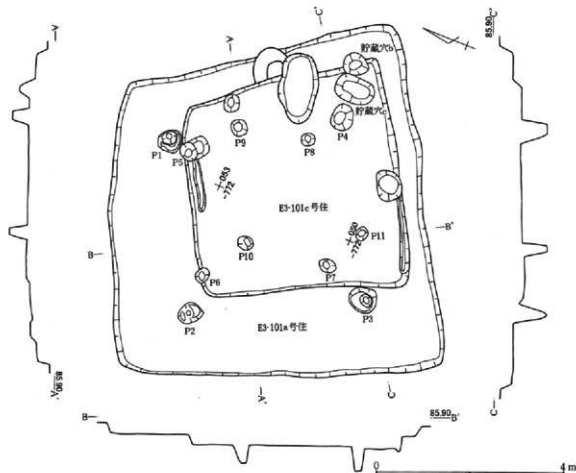
b号住居跡 中段階の住居跡である。P5～P8の4穴が柱穴になろう。南壁線はa号住居跡から約50cm内側に入り、c号住居跡と共有する位置と考えられる。また東・西・北壁線は不明だが、柱穴の北列(P5・P6)からa号住居跡北壁までの間がc号住居跡との共有南壁と等距離であるため北壁についてはa号と同一壁線の可能性がある。竈の痕跡は検出されていないが貯蔵穴と考えられる落ち込みがa号貯蔵穴と重なるようにあり、径60×50cm、深さ30cmの楕円形を呈する。掘形が浅くa号住居跡構築時に削平されたためか形状は窺い知れないが、これら諸状況を勘案すれば東西方向に長軸をもつ平面形態が想定される。柱穴は上縁径約30cmの円形掘形をもち深さは検出面より30cm前後である。柱間は均等で2.6mを測る。

c号住居跡 古段階の住居跡である。掘形が深く壁線が検出され、平面形状は略方形を呈する。規模は東西・南北軸長とも約4.4mで、床面積18.3㎡、確認壁高10cm前後で推定で30cm以上となろう。主軸方位はa

号住居跡とはほぼ同じく粗土はLoam塊・黒色土・暗褐色土の混土が硬く充填され、b号住居跡への建て替えの際に床土とされたものであろう。当跡掘形埋土(床土)はLoam土の多い鈍黄褐色土である。

竈は東壁やや南に寄って付設される。しかし、被熱面を残すのみの浅い窪みで形状・構造などを知ることができない。貯蔵穴は南東隅竈右手にある。a・b号住居跡のものの一部重なるが、径85×60cm、深さ45cmの楕円形を呈する。

床面は平坦をなし比較的堅牢である。柱穴は4穴でP9～P11と南東部の1穴でa号住居跡のP4と同位置と考えられる。柱穴掘形は径30～40cmの略円形、深さ40cm前後とP11のみ53cmで深い。柱間は北列(P9・P10)・西列(P10・P11)とも2.4m、東列(P9・P4)が2.2m、南列(P11・P4)は2.6mを測る。



第40図 E3-101a・b・c号住居跡

#### E3-105号住居跡 (第41図)

座標値X=041～046・Y=-781～-786の範囲にある。平安時代E3-106号住居跡および古墳時代前期E3-187号住居跡と重複する。平面形状は南北方向に若干長い軸線をもつ方形を呈する。規模は長軸5.0m・短軸4.8m、床面積23.7㎡、確認壁高は約50cmで直線・直立的である。主軸方位は大凡N-90°-Eを示す。埋土は大別2層からなり、砂質暗褐色土で混入物は少なく自然堆積であらう。

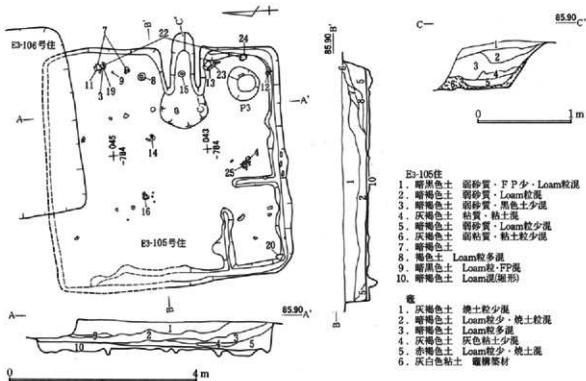
竈は東壁やや南に偏って付設される。煙道部位は弧状に壁線を穿つ。袖部は灰白色粘土を構築材に用い、長さ90cm、契口幅35cmである。支脚に使用したと考えられるcup型土製品は右袖部から検出されている。

第3章 検出された遺構と遺物

貯蔵穴は南東隅電石手にある。径70cm、深さ55cmで略円形を呈する。

床面はほぼ平坦をなす。間仕切り溝は北壁際で2条、南・西壁では各1条が掘形調査で検出されている。壁下よりの長さ1~1.5m、幅15~10cm前後である。柱穴と考えられるものには3穴がある。いずれも掘形での確認で形状など不詳事項が多く、南西部の柱穴は未検出である。径15~20cmで深さはP1が19cm・P2が28cm・P3は最も深く46cmに達する。なお、P1・P2の柱穴には間仕切り溝が連結する。壁下の溝はこれも掘形での検出で北壁下が不明である。幅10cm、深さ5~10cmである。

出土遺物は竈周辺に多く、土師器坏・甕のほか須恵器坏身・提瓶がある。



第41図 E3-105号住居跡

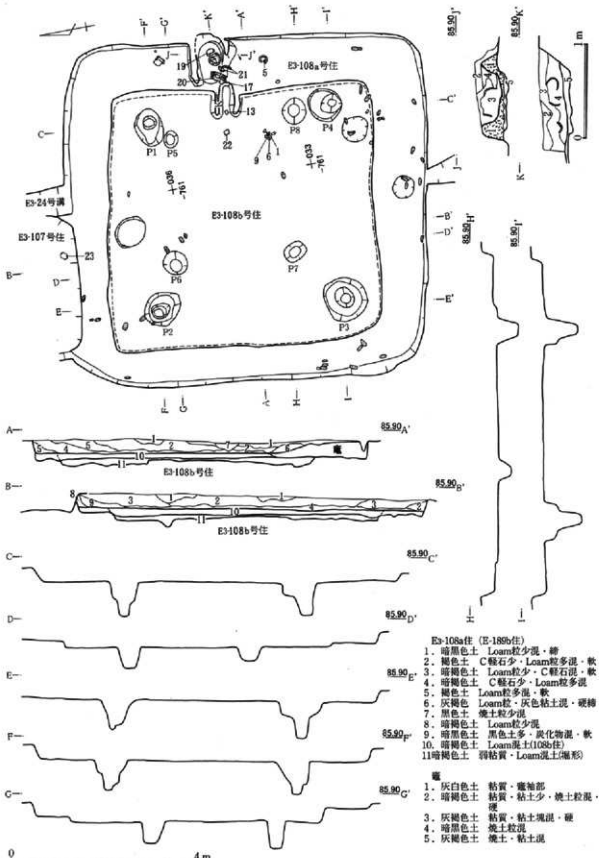
E3-108 a・b号住居跡 (第42図 P L. 16)

座標値X=030~038・Y=-757~-765の範囲にある。平安時代E3-107号住居跡と重複する。拡張建て替え住居跡で、新段階をa号住居跡・古段階をb号住居跡とする。

a号住居跡 平面形状は南北に僅かに長い軸線をもつ略方形を呈するが、隅部の壁線に丸味が強い。規模は長軸7.6m・短軸7.15m、床面積51.2m<sup>2</sup>と大型な住居跡である。確認壁高は約30cmで壁面は直線的である。主軸方位はN-95°-Eを示す。埋土は大別2層になり、Loam塊を多く混ざる褐色土または暗褐色土の水平気味の堆積から人為的埋土の可能性がある。

竈は東壁で北側に偏って付設される。煙道部位は壁線を僅かに削り弧状をなす。袖部は灰白色粘土で構築され、長さ80cm、焚口幅40cmを測る。竈内には大・小の球胴甕が残る。貯蔵穴は検出されていない。

床面は平坦で、竈前から柱穴結線内は比較的堅牢だが壁沿いはやや不安定である。床土はLoam土と暗褐色土の混土で層厚10cm前後でb住居跡の範囲と拡張域とも均一な充填である。柱穴は4穴(P1~P4)でいずれも2段掘形をなし明瞭である。上縁径は70~90cmの略円形で、深さ60~70cmと規格的である。柱底径は15~20cmになろう。柱間は北列(P1・P2)・南列(P3・P4)とも4.0m、西列(P2・P3)



第42図 E-108a・b号住居跡

- E-108a住 (E-108b住)
1. 暗黒色土 Loam粒少混・締
  2. 褐色土 C軽石少・Loam粒多混・軟
  3. 暗褐色土 Loam粒少・C軽石混・軟
  4. 暗褐色土 C軽石少・Loam粒多混
  5. 褐色土 Loam粒多混・軟
  6. 灰褐色土 Loam粒・灰色粘土混・硬締
  7. 黒色土 焼土粒少混
  8. 暗褐色土 Loam粒少混
  9. 暗黒色土 黒色土多・炭化物混・軟
  10. 暗褐色土 Loam混土(108b住)
  11. 暗褐色土 薄粘質・Loam乳土(漏形)
- 壁
1. 灰白色土 粘質・竈輪部
  2. 暗褐色土 粘質・粘土少・焼土粒混・硬
  3. 灰褐色土 粘質・粘土混混・硬
  4. 暗褐色土 焼土粒混
  5. 灰褐色土 焼土・粘土混

3.9m・東列(P1・P4) 3.8mである。壁下溝・間仕切り溝は検出されない。

出土遺物は竈内やその周辺に集中し、土師器・甕・瓶などがある。また、南壁際の南東部から南西部床面に珪藻み状石材が集中的に検出されている。

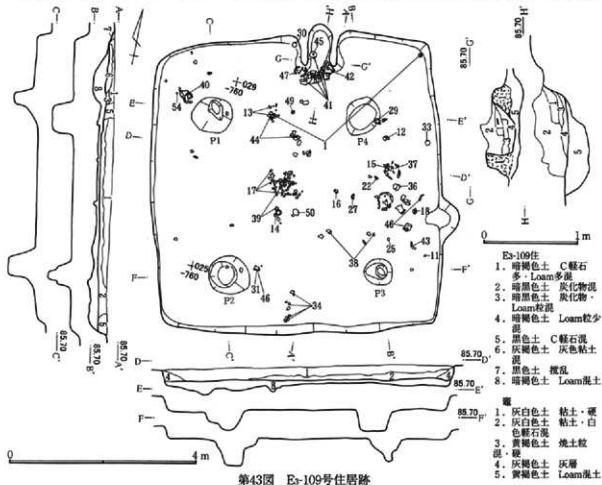
b号住居跡 a号住居跡のほぼ中央に位置し、当住居跡がa号へほぼ相似的に拡張されたことが知れる。壁線はa号住居跡の掘形によって検出・確認された。平面形態状・規模は長・短軸長の差がなく、軸長5.5mの略方形を呈する。床面積は30.2㎡、主軸方位はN-95°-Eを示す。埋土は2層からなり上位はa号住居跡の床土で、下位層は当跡の掘形埋土と考えられるLoam塊を混する暗褐色土である。

竈は東壁僅かに北へ偏って付設される。a号住居跡への拡張に伴う削平で痕跡程度の遺存状況である。構築材に用いた灰白色粘土の分布から袖部の長さは約50cmほどになろう。

床掘形は中央部が約3×3mの不正形範囲が10cm程度に高まっている。柱穴は4穴(P5~P8)が検出され、径35~50cmの円形ないしは楕円形の掘形をもつ。深さはP5・P6・P8が40~50cm、P7は浅く30cmである。柱間は南列(P7・P8)・東列(P5・P8)が3.0m、北列(P5・P6) 2.6m、西列(P6・P7) 2.5mである。

E3-109号住居跡(第43図 P.L.16)

座標値X=023~031・Y=-754~-761の範囲にある。拡張建て替え住居跡であるが新段階の掘形が深



いためか、新・古段階の変移を示す痕跡は東壁線に見られる古段階の竈煙道部位のみである。平面形状は東西・南北軸長にほとんど差が無く略方形を呈するが、各壁線中央がやや膨らみをもつ。規模は長軸（南北）6.2m・短軸（東西）6.12m、床面積34.2㎡、確認壁高30cmで直線直立気味だが南壁は重複または攪乱で不鮮明である。主軸方位はN-17°-Wを示す。埋土は大別2層からなり上位層はCP（C軽石）・Loam粒の混じる暗褐色土、床面直上には炭化粒の混じる暗褐色土からなる。また壁際には多量に大粒Loamの混じる三角堆積で自然埋没と考えられる。

竈は新・古段階2箇所が検出されている。古段階は東壁やや南寄りに付設されるが、拡張により煙道部位のみで掘形にいたるまで跡形無く削平がおよんでいる。煙道部位は東壁線を30cmほど穿つ。新段階の竈は北壁東に偏って付設される。袖および天井部の構築には灰色粘土を用い、両袖端部には長胴甕を芯材として倒位埋設する。焚口部には長胴甕2個体が縦連結の状態横たわり、両袖に差し渡して焚口天井としたものと考えられる。また、竈中央部（火床）には径20cm大の扁平円礫が据えられ、上には小型長胴甕を倒置し支脚としている。袖部長さ約80cm、焚口幅35cm、煙道部位は壁線を約20cm突出する。

床面はほぼ平坦をなし、竈前から中央部にかけては堅牢である。床土はLoam土混じりの暗褐色土を充填するが、床面掘形は四周壁沿いを約10cm窪める。柱穴は4穴で掘形上縁径は60~90cm、深さはいずれも50cm前後である。柱間寸法はおおよそ西列（P1・P2）3.5m・南列（P2・P3）3.3m・東列（P3・P4）3.3m・北列（P1・P4）3.1mを測る。貯蔵穴・壁下溝・間仕切り溝などは検出されていない。

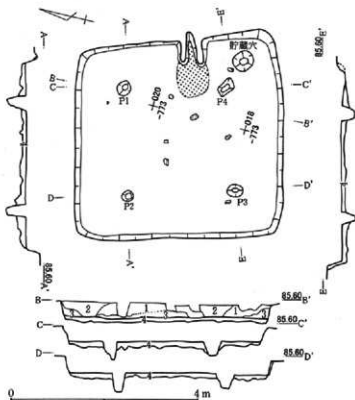
出土遺物は住居中央部および新段階竈前付近に集中するが、竈内や袖芯材としての遺物の他は、総じて床面より高く埋没途上の投棄によると思われる物が多い。土師器杯・甕・瓶などがある。特殊遺物には、須恵器長頸壺・ガラス小玉・土製錘・石製白玉がある。

## E-110号住居跡（第44図 P.L.17）

座標値X=016~021・Y=-771~775の範囲にある。平面形状は軸長に差のない略方形を呈する。東壁線に接するごとくに2号円形周溝遺構がある。規模は長軸4.25m・短軸4.1m、床面積16.4㎡、確認壁高は30cmで直線・直立気味である。主軸方位はN-73°-Eを示す。埋土は大別3層からなり、Loam粒・塊を多量に混ざる褐色土や暗褐色土で人為的な埋土や混土流入の可能性が有る。

竈は東壁僅かに南へ寄って付設される。袖部は灰白色粘土を用い、長さ

- E-110住
1. 褐色土 Loam粒多混
  2. 暗褐色土 Loam粒多混
  3. 暗褐色土 Loam粒多混
  4. 暗褐色土 Loam混土



第44図 E-110号住居跡

### 第3章 検出された遺構と遺物

50cm、焚口幅約20cmで小作りな竈である。煙道部位は壁線を矩形に約10cmほど穿つ。貯蔵穴は南東隅竈右手にあり、径40cm・深さ45cmの略円形を呈する。

床面はほぼ平坦をなし、掘形では北壁沿いと南西隅部を10cm程度に不定形の窪みを作る。床土はLoam土を混ざる暗褐色土で充填する。柱穴は4穴で上縁径25~30cmの略円形を呈するが、P4のみ20×40cmの方形である。深さはP1は40cm・P2は41cm・P3は30cm・P4は32cmを測る。柱間寸法は北列(P1・P2)2.3m・西列(P2・P3)2.25m・南列(P3・P4)と東列(P1・P4)2.15mである。壁下溝・間仕切り溝は検出されない。

遺物量は少なく、土師器坏・甕などいずれも埋土からの出土である。

#### Ez-112号住居跡 (第45図 P L.17)

座標値X=009~012・Y=-778~-781の範囲にある。住居内南東隅に36号井戸(中世以降)が、西壁縁にEz-113号住居跡の竈先端部が重複する。平面形状は軸長にほぼ差がない隅丸方形を呈する。規模は南北軸3.1m・東西軸3.0m、床面積7.1㎡の小規模住居である。確認壁高35cmで直線直立気味である。主軸方位はN-97°-Eを示す。埋土は大別2層で混入物の少ない暗褐色土と黒褐色土からなり自然堆積になろう。

竈は東壁やや南に寄って付設され、灰白色粘土を用いた幅広い袖部が残る。袖部長さ50cm、焚口幅25cmである。煙道部位は直立気味に立ち上がり壁線外へ40cmほど突出する。

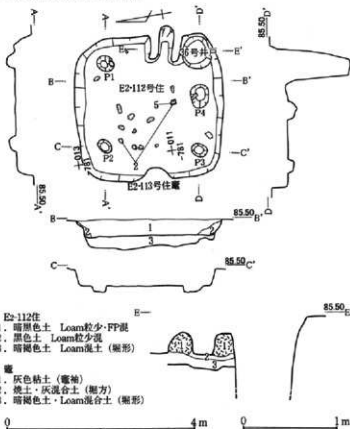
床面は平坦をなし、床土は層厚15cm

前後のLoam土を混じえた暗褐色土を充填する。柱穴相当はP1~P4の4穴であるが、P4に関してはP1との柱線から大きくはずれ柱穴としては疑問である。南東部の柱穴は36号井戸によって消失の可能性も考えられる。柱穴は径25~30cmの略円形の掘形でいずれも浅く15cm前後である。柱間寸法は北列(P1・P2)1.7m・西列(P2・P3)2.0m・南列(P3・P4)1.2m・東列(P1・P4)2.1mである。貯蔵穴・壁下溝・間仕切り溝などは検出されていない。

出土遺物は少なく、住居中央付近より投棄と考えられる数点の土師器坏などのほかに菰籠み状の細長な甕がある。

#### Ez-114号住居跡 (第46図 P L.17)

座標値X=007~011・Y=-770~-775の範囲にある。平面形状は南北方向に長軸をもつ隅丸の方形を呈するが、南東部東壁縁が大きく張り出す形状をとる。土坑などの重複が考えられるものの調査時の所見



第45図 Ez-112号住居跡

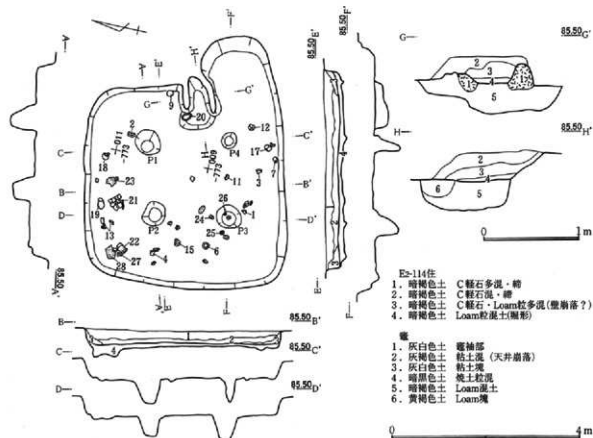


からは不明である。規模は長軸4.2m・短軸4.05m、床面積16.2 $\text{m}^2$ （含む南東張り出し部）、確認壁高は25cmあまりで直線直立気味である。主軸方位はN-76°-Eを示す。埋土は大別2層からなり、混入物の少ない暗褐色土で自然堆積になろう。

竈は東壁ほぼ中央に付設され、煙道部位は壁線を約30cmほど穿つ。袖部は灰白色粘土を用いて長さ約60cmである。左袖先端部からは上縁露呈状態で土師器甕が輪切り様に検出されているが、本来は芯材として倒置埋設されていたものと考えられる。焚口幅は30cmを測る。

床面はほぼ平坦をなすが、南東の東壁張り出し部は他所の床面と比較すれば不安定で若干の窪みをなすようである。床土は5~10cmの層厚でLoam小塊を混ざる暗褐色土が充填される。柱穴は4穴があり、径30~50cm、深さ約50cmで略円形の掘形をもつ。柱間寸法は北列（P1・P2）が1.5m・東列（P1・P4）1.7m・西列（P2・P3）と南列（P3・P4）はともに1.6mである。壁下溝は掘形の調査で検出されたが、西壁の一部に止まる。幅25cm、深さ5~8cmである。貯蔵穴・間仕切り溝などは検出されない。

出土遺物は比較的多いが、北壁、南壁沿いへの投棄と考えられる出土状態である。土師器杯・甕などの他高坏もある。



第46図 E2-114号住居跡

## E2-115号住居跡（第47図 P L. 17）

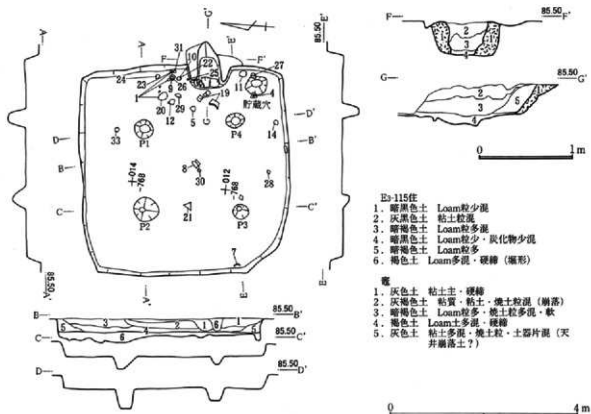
座標値X=010~015・Y=-765~-769の範囲にある。平面形状は軸長に長短がない略方形を呈するが、南西隅部の壁線は丸味が強い。規模は東西・南北軸とも4.4m、床面積は17.2 $\text{m}^2$ 、確認壁高は30cmあまりで直線的な壁面をなす。主軸方位はN-86°-Eを示す。埋土は暗褐色土で大別2層からなり、下位層には若干多めにLoam粒の混入が見られるものの自然埋没と思われる。

### 第3章 検出された遺構と遺物

竈は東壁やや南に寄って付設される。袖部は灰白色粘土が用いられるが、左右袖先端部には土師器長胴甕が例置埋設され芯材になっている。焚口部には2個体の土師器長胴甕が縦列組み合わせで出土している。位置的には袖芯材の左右甕に架かり焚口部の天井部を形成していたものである。貯蔵穴は南東隅竈右手にあり、40×40cmの不整形で深さ70cmを測る。

床面はほぼ平坦をなす。床土はLoam塊を混ざる褐色土である。柱穴は4穴で径30~50cmの略円形の掘形をもち、深さ40~50cmでP3のみ浅く20cmである。柱間寸法は北列(P1・P2)1.7m・西列(P2・P3)2.0m・南列(P3・P4)1.8m・東列(P1・P4)1.9mである。壁下溝・間仕切り溝は検出されない。

出土遺物は多く、竈周辺床面からの出土が大半である。土師器杯・甕などの他、土師器模造土器が多い。



第47図 E-115号住居跡

### E-116号住居跡(第48図 P L. 17)

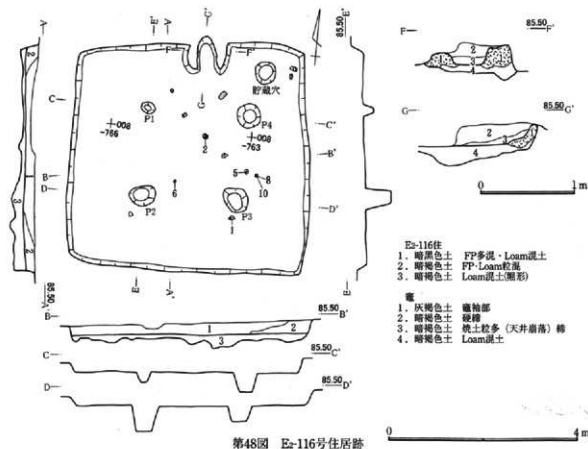
座標値X=005~009・Y=-761~-766の範囲にある。重複関係では上縁をE-24号溝が南北に縦断する。平面形状はやや東西方向に長く略方形を呈するが、南東部の壁線が若干広がって歪む。規模は、長軸5.0m・短軸4.7m、床面積16.2m<sup>2</sup>、確認壁高は25cmで法面は直線的である。主軸方位はほぼ真北を示す。埋土は暗褐色土1層からなる。南東部城壁際では大粒なLoamが混じるが自然埋没であろう。

竈は北壁やや東に付設される。煙道部位は壁線を幅30cmで20cmほど穿つ。袖部は粘土質の灰褐色土を用いて構築する。袖長60cm、焚口幅は30cmである。貯蔵穴は北東隅竈の右手にあり、径50cm・深さ70cmあまりの略円形である。

床面はほぼ平坦をなす。掘形は南東半が深く、Loam塊を混ざる暗褐色土を床土として20cm前後の層厚で充填する。柱穴は4穴で、P1が径30cmの小さな掘形の他は50cm大の径をもち略円形を呈する。深さは、

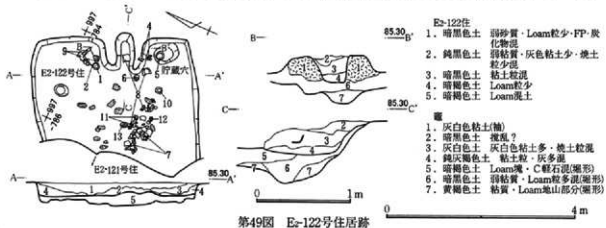
P1が21cm・P2は53cm・P3は35cm・P4が38cmである。柱間寸法は西列(P1・P2)と東列(P3・P4)が1.8m、南列(P2・P3)2.0m、北列(P1・P4)2.15mである。壁下溝・間仕切り溝は検出されない。

出土遺物は床面・埋土からの出土とも少ない。土師器環・横造土器がある。



E2-122号住居跡 (第49図 P L. 18)

座標値X=994~998・Y=-783~-787の範囲にある。E2-121号住居跡(平安時代)と重複し西半は消失しているが平面形状は略方形を呈しよう。北壁線はやや弧を描く。規模は東西方向にやや長くなると思われ、3.6m+ $\theta$ ・南北は3.5mを測る。確認壁高は25cmで直線の直立気味である。主軸方位はN-69°-Eを



示す。埋土は大別3層からなり、中位層には竈起源と考えられる灰色粘土の混入が見られる。

竈は東壁やや南に寄って付設され、煙道部位は急傾斜で立ち上がり壁線を僅か略三角形に穿つ。袖部は灰白色粘土を用い、長さ約60cm、焚口幅は30cmを測る。貯蔵穴は南東隅で竈右手にある。径50×35cm、深さ30cmの楕円形を呈する。

床面はほぼ平坦で、床土はLoam土を混ずる暗褐色土を充填する。柱穴・壁下溝・間仕切り溝などは検出されない。

出土遺物は竈周辺に集中し、住居廃棄当時と考えられる状態で検出されている。土師器坏・鉢・壺・瓶などがある。また住居中央部には埋土中の遺物が多く、その集中度合いから投棄によるものと考えられる。須恵器横瓶などが見られる。

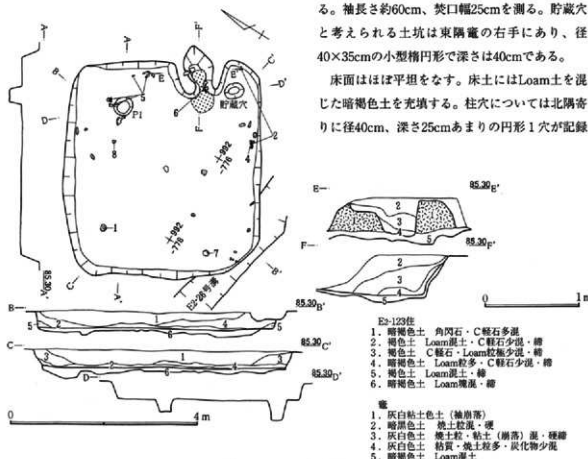
Ez-123号住居跡 (第50図 P L. 18)

座標値 X=990~995・Y=-774~-779の範囲にある。南東隅部縁辺をEz-26号溝(平安時代以降)が東西走する。平面形状は北東・南西方向に長軸を持つ略方形を呈するが、隅部は丸味をもつ。規模は、長軸4.4m・短軸4.15m、床面積は15.7m<sup>2</sup>、確認壁高は35cmで直線・直立気味である。主軸方位はN-58°-Eを示す。埋土は大別2層の暗褐色土で、下位層にはLoam粒が比較的多く混じるが自然堆積にならう。

竈は東壁大きく南に偏って付設される。崩れのためか幅広い袖部をもち、灰白色粘土を主体にした構築材である。右袖端部には土師器長胴壺が倒置埋設され芯材にされる。袖部は緩く弧を描き焚口に向かいすま

る。袖長さ約60cm、焚口幅25cmを測る。貯蔵穴と考えられる土坑は東隅竈の右手にあり、径40×35cmの小型楕円形で深さは40cmである。

床面はほぼ平坦をなす。床土にはLoam土を混じた暗褐色土を充填する。柱穴については北隅寄りに径40cm、深さ25cmあまりの円形1穴が記録



第50図 Ez-123号住居跡

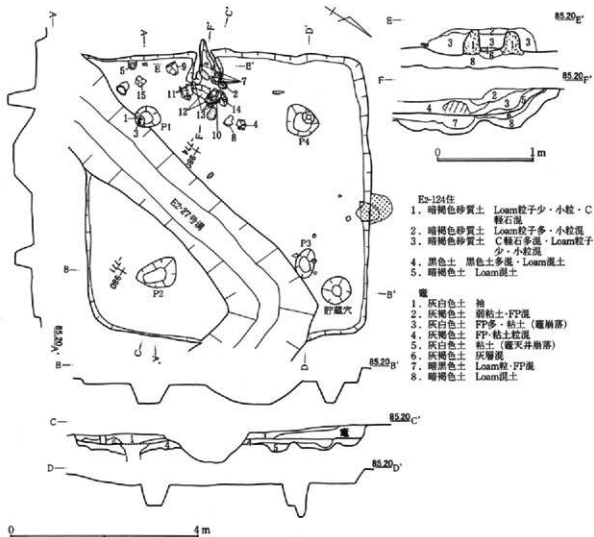
されるのみである。掘形写真では柱穴を構成する小穴の存在が読みとれるが図化・所見は成されていない。また、壁下溝・間仕切り溝は検出されない。

遺物は少なく、床面からは散在して土器器坏類が数点ある。

### E<sub>2</sub>-124号住居跡 (第51図 P.L. 18)

座標値X=977~984・Y=-770~-777の範囲にある。東半部でE<sub>2</sub>-27号溝(平安時代以降)が東西から南北方向に折れる部位に重なる。平面形状は軸長短に差のない略方形を呈する。新旧2箇所の竈の存在から建て替えが行われたと考えられる。規模は5.9×5.85m、床面積33.2m<sup>2</sup>、確認壁高は北・西壁線で30cmで壁面は直線的である。主軸方位はN-59°-E(旧竈ではN-31°-W)を示す。埋土は大略1層暗褐色で自然堆積であろう。

竈は当初、北壁ほぼ中央に付設されていたが壁線に煙道部位の痕跡が残されるのみである。拡張建て替えによる削平によると考えられる。建て替え後の新竈は西壁やや南に付設され、煙道部位は小さく壁線を穿つ。袖部は灰白色粘土を用い、袖長約50cm、焚口幅35cmを測る。竈内には支脚使用と考えられる長径石材が横



第51図 E<sub>2</sub>-124号住居跡

### 第3章 検出された遺構と遺物

転する。竈前面には左右立ち姿、中央横転の土師器長胴甕が検出され、その形状から焚口部の天井材の可能性が高い。貯蔵穴は北東隅にあり、上縁径60cm、深さ60cmの円形を呈する。旧竈に付随すると考えられる。なお、新設の竈脇には検出されていない。

床面はほぼ平坦である。床土は黒色土・Loam土を混じえる暗褐色土を充填する。柱穴は4穴で、建て替えによる柱位置の移動は窺えない。P 1 径55×45cm・深さ70cm、P 2 径85×65cm・深さ43cm、P 3 径60×40cm・深さ43cm、P 4 径60cm・深さ70cmでいずれも楕円形を呈する。P 1・P 4は2段掘りされ柱痕の掘形が見られる。柱間寸法は南列(P 1・P 2) 3.3m、東列(P 2・P 3) 3.2m、北列(P 3・P 4) 3.1m、西列(P 1・P 4) 3.6mである。壁下溝・間仕切り溝は検出されない。

出土遺物は竈周辺部に集中して出土する。出土状況より住居廃絶時のものであろう。土師器甕が多く、他に坏・甌がある。

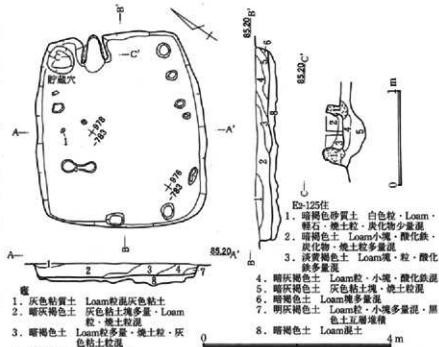
#### E<sub>2</sub>-125号住居跡 (第52図)

座標値X=975~979・Y=-780~-784の範囲にある。平面形状は北東-南西方向に長軸をもつ略方形を呈するが、壁線は緩やかに影らむ。規模は、長軸4.1m・短軸3.6m、床面積11.9m<sup>2</sup>、確認壁高30cmで直線・直立気味である。主軸方位はN-53°-Eを示す。埋土は大別3層でLoam粒・塊が多く混じる暗褐色土からなり、住居跡東方からの一方向的な流入状況が窺われ人為的な埋土になろうか。

竈は北東壁にあり、大きく北側に偏って付設される。袖長50cm、焚口幅45cmで袖材は灰色粘土を用いる。竈左手北隅に径50cmの楕円形の落ち込みが検出されているが、深さが僅か15cm程度の窪みであり貯蔵穴か否かは不明である。

床面は西方で約1/4範囲が方形で15cmの段差で凹むが、特殊な施設や床面の硬軟に他所との差異はない。床土はLoam混土の暗褐色土を充填してある。規則的な柱穴となるべき小穴は見られず、南東壁から南西壁際に不等間隔の浅い穴が連なるが深さ10~20cmで掘形は不揃いである。

出土遺物は少なく、埋土中から土師器坏など僅かである。



第52図 E<sub>2</sub>-125号住居跡

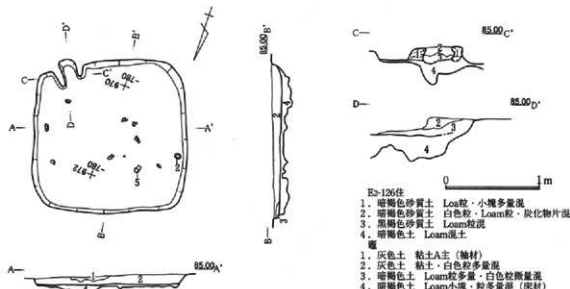
#### E<sub>2</sub>-126号住居跡 (第53図 P. L. 18)

座標値X=969~972・Y=-778~-781の範囲にある。平面形状は軸長差のない略方形を呈するが、隅丸の傾向が強い。軸長南北は3.2m・東西は3.15m、床面積8.5m<sup>2</sup>、確認壁高は20cmで壁面は直線的に立ち上がるが東壁面はやや湾曲する。主軸方位はN-26°-Wを示す。埋土は大別1層で自然流入の砂質暗褐色土である。

竈は南壁にあり、東に大きく偏って付設される。袖長約35cm、焚口幅は30cmの小振りで袖材は灰色粘土を用いる。

床面は平坦をなすが、掘形は極めて凹凸が多い。床土はLoam土を混ざる暗褐色土を充填する。貯蔵穴・柱穴・壁下溝等の諸施設は検出されない。

出土遺物は少なく、床面からは土師器環で1・2点にすぎない。



第53図 E-126号住居跡

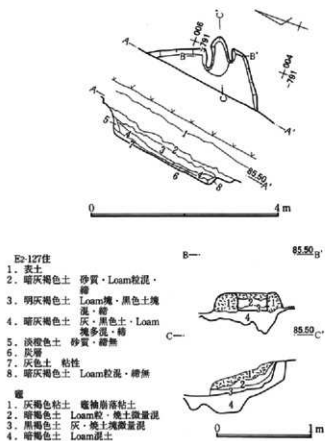
## E-127号住居跡(第54図)

住居跡の大半西側は現道(調査時)にかり、検出できた範囲は極めて少ない。座標値X=004~006・Y=-790~-792の範囲にある。平面形状は小型方形を呈すると考えられ、東壁縦2.2m・南壁縦1.5mの検出である。確認壁高は40cmで壁面上縁にしたがって傾斜が緩くなる。主軸方位はN-67°-Eを示す。埋土は大別3層からなり、下位に厚くLoam塊を混ざる褐色土が堆積する。中央域で層厚があり人為的混泥土流入の可能性が高い。床面直上には電構築材の流出と思われる灰色粘土が見られる。

竈は東壁にあり、大きく南に偏って付設される。袖部には灰色粘土が構築材に用いられる。袖長30cm、焚口幅35cmである。

床面は平坦堅牢である。貯蔵穴・柱穴・壁下溝などは検出されない。

出土遺物はほとんど見られない。



第54図 E-127号住居跡

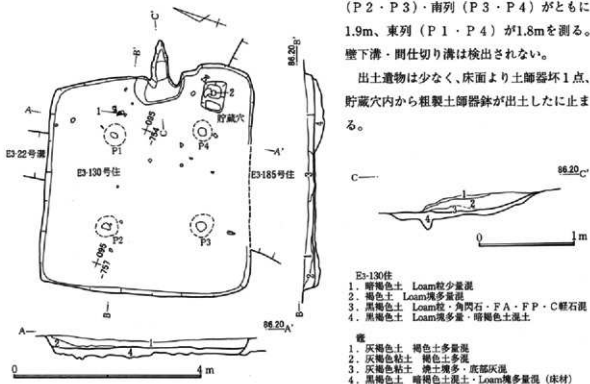
E<sub>3</sub>-130号住居跡 (第55図)

座標値 X=092~096・Y=-752~-757の範囲にある。中央部をE<sub>3</sub>-22号溝(中世以降)が南北走し、南側で古墳時代前期E<sub>3</sub>-185号住居跡と重複する。平面形状は東西方向にやや長軸をもつ略方形を呈する。規模は長軸4.5m・短軸4.3m、床面積18.2m<sup>2</sup>、確認壁高15cmと低い。主軸方位はN-73°-Eを示す。埋土は大別1層の混入物が少ない暗褐色土で自然堆積であろう。

竈は東壁ほぼ中央に付設され、煙道部位は細長三角形に壁縁を穿ち約80cmの長さになる。袖部は芯材として基盤Loam土を約30cm掘り残しているが、構築材などの流失によって露呈したものと考えられる。貯蔵穴は南東隅竈右手にある。60×50cm、深さ26cmの方形である。

床面は平坦をなすが、現代畑作条痕が走り残存は不良である。床土はLoam塊を多く混じえる黒褐色土を充填する。柱穴は4穴で掘形での検出のため上縁の規模は不明である。柱痕(基底)径は15~20cm、深さはP1が20cm・P2が23cm・P3が30cm・P4が37cmである。柱間寸法は北列(P1・P2)・西列(P2・P3)・南列(P3・P4)がともに1.9m、東列(P1・P4)が1.8mを測る。壁下溝・間仕切り溝は検出されない。

出土遺物は少なく、床面より土師器坏1点、貯蔵穴内から粗製土師器鉢が出土したに止まる。



第55図 E<sub>3</sub>-130号住居跡

E<sub>3</sub>-134号住居跡 (第56図 P L. 18)

北半部でE<sub>3</sub>-97号住居跡(平安時代)と重複する。座標値 X=090~094・Y=-770~-774の範囲にある。平面形状は東西方向に長軸をもつ隅丸の方形を呈する。規模は長軸4.5m・短軸4.2m、床面積18.9m<sup>2</sup>、確認壁高は25cmで直線的な壁面をなす。主軸方位はN-82°-Eを示す。埋土は耕作による攪乱が著しく不分明である。Loam小塊を混ざる暗褐色土の1層であろう。

竈は東壁にあり、大きく南へ偏って付設される。耕作痕によって破壊部分多く詳細は不明。袖部は灰色粘土を用い、長さ60cm程度になろう。煙道部位は壁縁を僅かに穿つ程度である。貯蔵穴は南東隅竈右手にあり、径70×60cm・深さ67cmで楕円形を呈する。

床面は平坦をなすと思われるが耕作条痕が深く及び遺存状態は不良である。床土は薄く、Loam土を主体



に暗褐色土を混ずる。柱穴は無く、壁下溝は南壁沿いに一部分が検出されている。

遺物は竈周辺に土師器壺類が多く、貯蔵穴内には飯が転倒状態で出土している。また、東壁沿いには苜蓿み状径の石材が集中する。

#### E3-138号住居跡 (第57図 P L. 19)

座標値  $X=085\sim089$ ・ $Y=-766\sim-770$ の範囲にある。平面形状は軸長に差がなく略方形を呈する。規模は東西・南北軸とも4.0m、床面積14.6㎡、確認壁高は35cmで壁面直線的・直立気味である。主軸方位は $N-85^{\circ}-E$ を示す。埋土は耕作条痕が著しく不分明であるが、大別3層からなりLoam塊が多く混入することから人為的混土流入の可能性が高い。

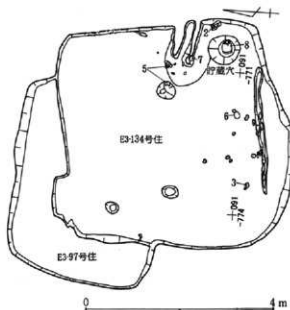
竈は東壁にあり、大きく南に偏って付設される。耕作攪乱のため形状など不明部分が多い。袖部など構築には灰白色粘土が用いられていたと考えられる。煙道部位は壁線を極僅か穿つのみである。貯蔵穴は南東隅竈右手にあり、径55×40cm、深さ60cmの楕円形を呈する。

床面は平坦で掘形は浅い。床土は薄く、Loam土主体で暗褐色土を混ずる。柱穴は4穴で、上縁径20~25cmと掘形は小さく、深さは35~42cmである。柱間寸法は北列(P1・P2)・西列(P2・P3)が1.8m、南列(P3・P4)2.0m・東列(P1・P4)1.6mを測る。壁下溝は全周し、幅15cm程度、深さは5~10cmである。間仕切り溝は検出されない。

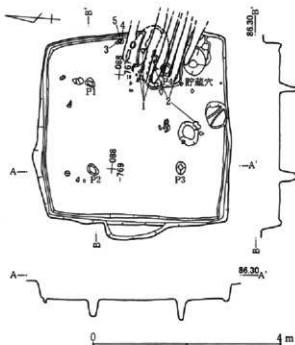
出土遺物には土師器模造土器、土師器壺などがある。

#### E3-140号住居跡 (第58図 P L. 19)

座標値  $X=061\sim064$ ・ $Y=-764\sim-768$ の範囲にある。南壁縁に31号井戸跡(平安時代以降)が重複する。平面形状は東西方向に長軸をもつ略方形を呈する。規模は長軸3.5m・短軸2.7m、床面積7.7㎡と極めて小型である。確認壁高は60cmで直線的に直立し、当遺跡当該期の住居跡の中でも深い掘形を有する。主軸方位は東西長軸を基線に $N-85^{\circ}-E$ を示す。埋土は大別3層からなり、住居跡中央部で床面に達する中位層暗褐色土にはLoam塊が多く混ずるが堆積状況は滑らかで自然埋没と考えられる。



第56図 E3-134号住居跡



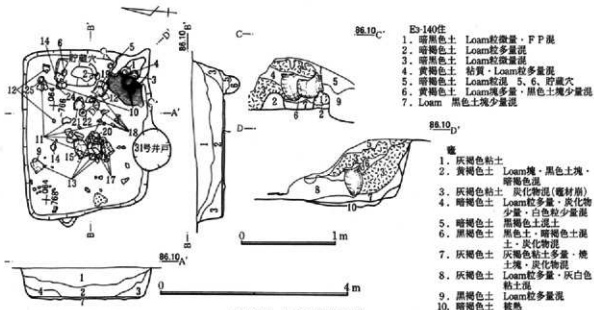
第57図 E3-138号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

竈は東・南壁が変換する角に設置される。煙道部位は壁面を直立に近く切り込むが、壁線からの突出は僅かである。袖部は長さ約50cmで灰褐色粘土をもって構築する。焚口部幅30cmを測る。竈内には土師器長胴壺を横断裁して支脚に据える。使用状況を示す物としては土師器の球罎・長胴壺2個体が併設したごとくに置かれている。貯蔵穴は竈左手東壁沿い中央にあり、90×55cm・深さ40cmの略方形を呈する。

床面は平坦で、極めて堅牢である。掘形はほとんど無く、日常的に形成されたと思われるLoam土黒色土塊を混じえる床土である。柱穴・壁下溝などは検出されていない。

出土遺物は多量である。竈前から住居中央部にかけて集中し、土師器飯類が多い。調理など特殊厨房的な機能を有する施設であろうか。いずれも床面からの出土である。なお、北東隅部には投棄と考えられる土師器坏4～5点が埋土中より出土している。

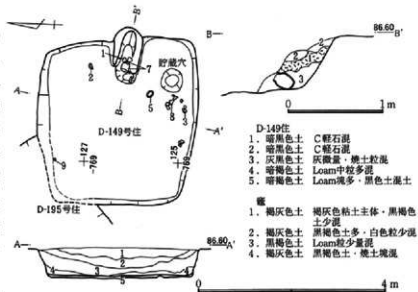


第58図 E3-140号住居跡

D-149号住居跡

(第59図 P L. 19)

座標値X=124~127・Y=-766~-769の範囲にあり、D-213号住居跡(古墳前期)と重複する。平面形状は軸長に差のない略方形を呈するが、壁線にはやや膨らみがある。規模は長軸3.5m・短軸3.4m、床面積は9.5㎡、確認壁高は50cmで直線・直立する。主軸方位はN-90°-Eを示す。埋土は大別4層からなり、最下層にLoam塊を多く混じえるが暗褐色土を主



第59図 D-149号住居跡

体とする自然埋没と考えられる。

竈は東壁ほぼ中央に付設される。煙道部位は壁線を鋭く三角形に穿つが突出は小さく立ち上がりは急傾斜である。袖部は長さ約70cmで基底はLoamを掘り残し、灰褐色粘土を上塗りすることくに構築する。焚口幅は30cmである。貯蔵穴は南東部竈右手にあり、径50×45cm、深さ30cmの楕円形を呈する。

床面は平坦・堅牢で床下の掘形は浅く、Loam・黒褐色・褐色土の混土を薄く填ずる。柱穴は検出されていない。また、壁下溝は掘形写真には存在が窺えるが図化や所見記録はない。

出土遺物は少なく、竈内より土師器甕のほか南壁貯蔵穴付近の埋土より数点の土師器環がある。

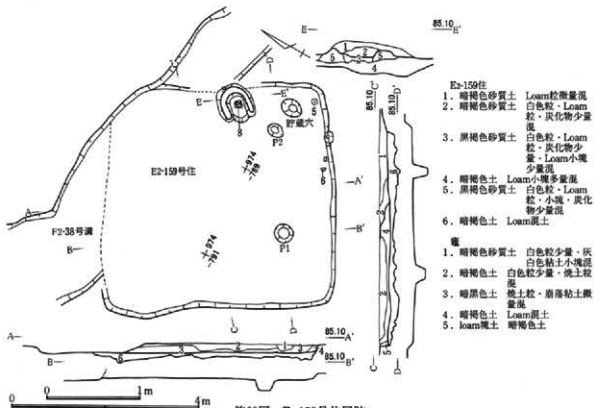
#### E<sub>2</sub>-159号住居跡 (第60図 P L. 20)

座標値X=971~976・Y=-786~-792の範囲にある。北壁線の一部はE<sub>2</sub>-38号溝(中世以降)との重複で消失する。平面形状は南北方向軸が僅かに長い略方形を呈するが、西壁線は緩く蛇行する。規模は長軸5.0m・短軸4.7m、床面積20.8㎡、確認壁高は約20cmである。主軸方位はN-62°-Eを示す。埋土は大別2層で砂質の暗褐色土と黒褐色土からなり、自然流入による堆積と考えられる。

竈は東壁やや南に偏って付設される。煙道部位は壁線に小さく抵触する程度である。袖部は灰白色粘土を用い、長さ60cm、焚口幅30cmである。貯蔵穴は南東隅竈右手にあり、径50×35cm・深さ40cmの楕円形を呈する。

床面はほぼ平坦である。床下掘形は中央から南東部にかけての部分が高く、南・西・北壁に沿い幅1m前後、深さ15~20cmで面的には不均一な状態で凹める。床土はLoam土を混じえる暗褐色土を充填する。柱穴と考えられる小穴は南列に2穴のみの検出であるが他は精査不足の可能性が高い。P1は深さ25cm・P2は32cmで、両者の間は2.1mである。

出土遺物には土師器環・甕があり、床面からの出土は少ない。



第3章 検出された遺構と遺物

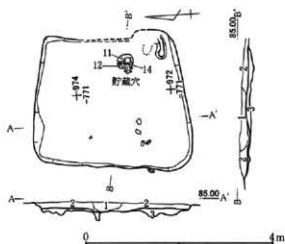
E<sub>2</sub>-169号住居跡 (第61図 P L. 20)

座標値 X = 971~974 · Y = -769~-772の範囲にある。平面形状は南北方向に長軸をもち、東壁線の短い不整形を呈する。規模は長軸3.3m · 短軸2.8m、床面積7.6m<sup>2</sup>、確認壁高は浅く10~15cmである。主軸方位はN-85°-Wを示す。埋土薄く、大別1層で暗褐色土である。

竈は東壁で南に大きく偏って付設される。残存は削平による消失著しく痕跡程度である。灰褐色粘土の散点から袖部などの構築に用いられたと考えられる。袖部長さは約40cmになるうか。焚口幅は約25cmで、煙道部位の壁線の突出は小さい。貯蔵穴は東壁沿いの竈左手にあり、径65×60cm · 深さ70cmの略円形を呈する。

床面はほぼ平坦をなし、床土はLoam土を混じえる暗褐色土を充填する。柱穴 · 壁下溝などの諸施設は検出されていない。

遺物は貯蔵穴より土師器壺類が多く検出されている。



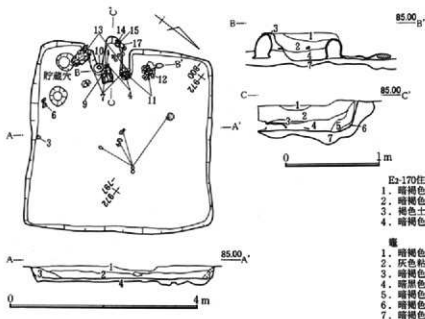
- E<sub>2</sub>-169住  
 1. 暗褐色土 Loam粒 · 白色粒少量混 · 締  
 2. 暗褐色土 Loam粒 · 白色粒多量混 · 締  
 3. 暗褐色土 Loam混土

第61図 E<sub>2</sub>-169号住居跡

E<sub>2</sub>-170号住居跡 (第62図 P L. 20)

座標値 X = 969~973 · Y = -795~-800の範囲にある。平面形状は長短軸のない略方形を呈する。規模は長軸3.9m · 短軸3.85m、床面積13.5m<sup>2</sup>、確認壁高は約25cmで直線 · 直立気味である。主軸方位はN-57°-Eを示す。埋土は大別2層でLoam粒 · 塊を多量に含む暗褐色土からなり、人為的埋土あるいは混土流入の可能性が有る。

竈は南西壁の南側に大きく偏って付設される。煙道部位は壁線を半円状に穿つ。左右袖部先端には土師器



- E<sub>2</sub>-170住  
 1. 暗褐色土 F P · Loam粒高混  
 2. 暗褐色土 Loam小粒混  
 3. 暗褐色土 Loam粒多混  
 4. 暗褐色土 Loam混土

- 竈  
 1. 暗褐色砂質土 白色粒多 · 灰色粘土塊混  
 2. 灰色粘土 天井部崩落粘土層  
 3. 暗褐色土 白色粒少量 · 焼土粒混  
 4. 暗褐色土 焼土粒混 · 粘土混土  
 5. 暗褐色土 焼土小塊多混  
 6. 暗褐色土 灰 · 焼土粒混  
 7. 暗褐色土 Loam混土

第62図 E<sub>2</sub>-170号住居跡

甕を倒置し芯材となして、乳白色粘土をもって構築材にする。袖部長さ55cm、焚口幅40cmである。貯蔵穴は南隅部竈左手にあり、径40cm・深さ46cmの円形を呈する。

床面は平坦堅牢である。床下掘形は南西壁・北西壁側を幅50cm・深さ10cm前後でL字状に凹める。床土はLoam土を混じえる暗褐色土を充填する。柱穴・壁下溝などは検出されていない。

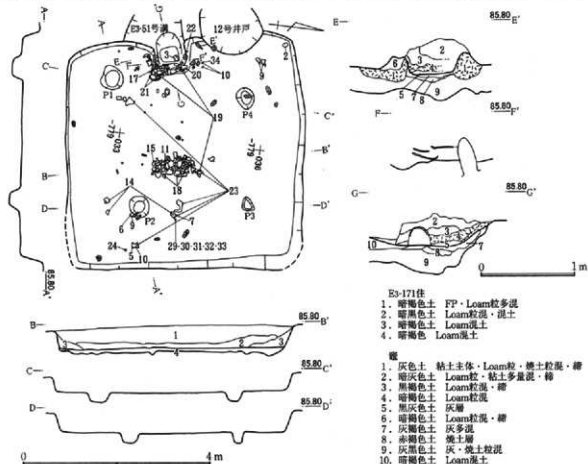
出土遺物は竈周辺部に集中し、甕類が目立っている。

#### E<sub>3</sub>-171号住居跡 (第63図 P.L.20)

座標値  $X=031-036$ ・ $Y=-776-781$ の範囲にある。西壁縁で12号井戸跡(平安時代以降)と重複する。平面形状は南北方向に僅かな長軸をなす略方形を呈する。規模は長軸5.0m・短軸4.85m、床面積21.7㎡、確認壁高は35cmで直線・直立気味である。主軸方位は $N-82^{\circ}-E$ を示す。埋土は大別2層でLoam粒・塊の多く混入する暗褐色土で人為的埋土あるいは混土流入の可能性ある。

竈は西壁やや南に寄って付設される。煙道部位は壁縁を僅か小さく穿つのみである。左右袖先端部には土師器甕を倒置して芯材となし、灰白色粘土を用いて構築材とする。焚口部には天井材と考えられる土師器甕が2個体縦列で検出される。

床面は平坦堅牢である。掘形は中央 $2 \times 3$ mほどの範囲を台状に残して、周囲を10cm前後凹める。床土はLoam土を混ざる暗褐色土を充填する。柱穴は4穴(P1~P4)で平面・深さとも規模が小さい。径50~35cm、深さ20cm足らずである。P3掘形の径は $30 \times 15$ cmでとくに小さい。柱間寸法は南列(P1・P2)・



第63図 E<sub>3</sub>-171号住居跡

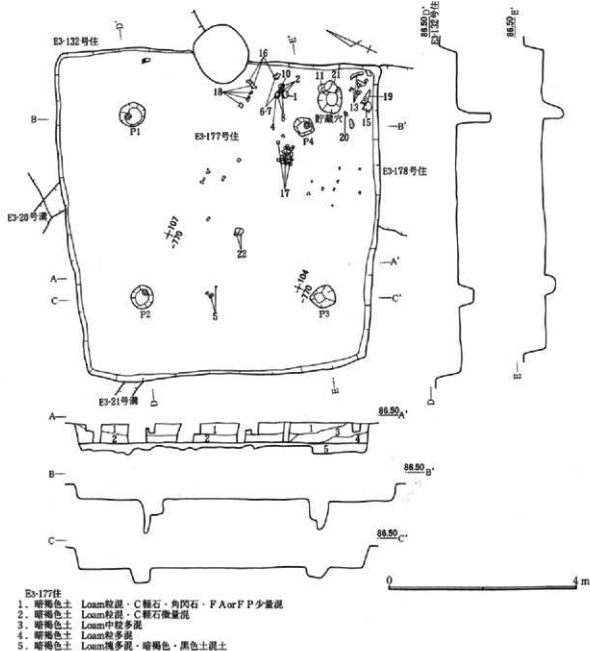
第3章 検出された遺構と遺物

西列 (P1・P4) が2.8m、東列 (P2・P3)・北列 (P3・P4) が2.2mである。貯蔵穴・壁下溝・間仕切り溝は検出されない。

出土遺物は竈周辺と中央部床面に集中してある。土師器環・甕が多く、その他須恵器甕・石製白玉・管玉・剣型製品などがある。

E3-177号住居跡 (第64図 P.L.20)

座標値  $X=102\sim 110$ ・ $Y=-765\sim -773$ の範囲にあり、古墳時代前期E3-132号・178号住居跡と重複する。平面形状は東西方向が若干差で長軸となる略方形を呈する。規模は長軸6.9m・短軸6.5m、床面積41.2㎡、確認壁高は約40cmで直線・直立気味である。主軸方位はN-67°-Eを示す。埋土は大別4層からなり中央部



第64図 E3-177号住居跡

に自然堆積土と考えられる上位の暗褐色土が厚く堆積するが、壁際下位層にはLoam塊が大量に混在する。人為的混土の埋土または流入の可能性もある。

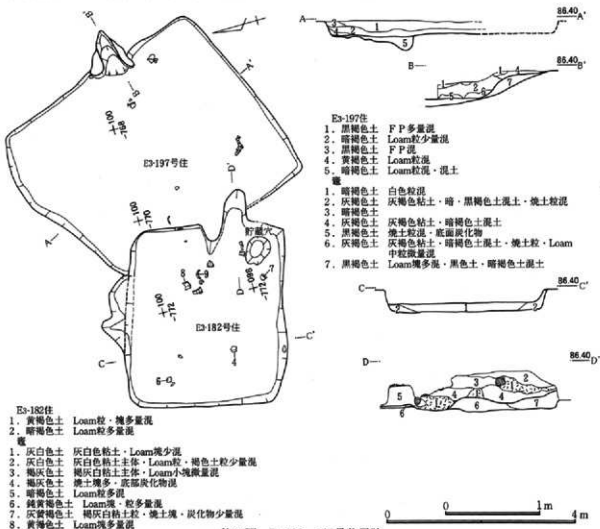
竈は東壁僅かに北寄りに付設されたと考えられるが攪乱によってほぼ全体が消失している。貯蔵穴は南東隅部竈右手にある。径55×50cm、深さ40cmの略方形を呈する。

床面はほぼ平坦をなすが深い現代耕作条痕が入る。掘形は壁沿いに1m前後の幅で約5cm凹帯を巡らす。床土はLoam土・暗褐色土・黒色土の混土を充填する。柱穴は4穴で掘形径約50cmの略円形をなす。深さは全面性に欠け、P1が64cmでP2とP4がそれぞれ41cmと48cm、P3がもっとも浅く23cmである。柱間寸法は北列(P1・P2)・西列(P2・P3)が3.65m、南列(P3・P4)は3.6m、東列(P1・P4)は3.75mを測る。

出土遺物は竈・貯蔵穴の周辺に集中し、土師器杯・甕などが出土している。

### E3-182号住居跡 (第65図 P.L.21)

座標値X=097~100・Y=-770~-774の範囲にある。E3-174号住居跡(平安時代)とはほぼ同一範囲で重複する。平面形状は東西方向に長軸をもつ略方形を呈する。規模は長軸3.75m・短軸3.4m、床面積10.9㎡、確認壁高は45cmで直線・直立する。主軸方位はN-72°-Wを示す。埋土はE3-174号住居跡の構築で埋め戻



しが施された可能性があり、Loam塊の多く混じる黄褐色土の1層である。

竈は東壁やや南寄りに付設され、耕作条痕によって形状など詳細は不明である。煙道部位は壁60cmほど穿ち、火床部位が壁線外に位置する形態になろうか。貯蔵穴は南東隅部竈の右手にある。径65×45cm、深さ43cmの楕円形を呈する。

床面は平坦をなすが、深い耕作条痕が入る。床下の掘形は浅く、Loam塊を混じえる暗褐色土を充填する。柱穴・壁下溝などは検出されない。

出土遺物は土師器杯・壺のほか、埋土中より石製の白玉がある。

#### E<sub>3</sub>-197号住居跡 (第65図 P.L.21)

座標値X=095~101・Y=-766~-770の範囲にある。E<sub>3</sub>-182号住居跡・E<sub>3</sub>-131号・E<sub>3</sub>-178号住居跡(古墳時代前期)と重複する。平面形状は南北方向に長軸をもつ略方形を呈するが北壁線の東半が大きく脹れる。規模は長軸4.8m・短軸4.2m、床面積19.1㎡、確認壁高30cmで北壁の立ち上がりはやや傾斜が緩い。主軸方位はN-62°-Eを示す。埋土は大別2層の混入物の少ない黒~暗褐色土で自然堆積であろう。

竈は東壁やや南に寄って付設されるが、壁線に対しては焚口が北へ振れている。煙道部位は略三角形に壁線を穿つ。袖部の遺存は悪く、右袖部が約30cmの長さで残るが構築材には灰褐色粘土を用いる。

床面は平坦をなすが耕作条痕が著しい。床土はLoam塊を混じえる暗褐色土を充填する。貯蔵穴・柱穴などの諸施設は検出されていない。

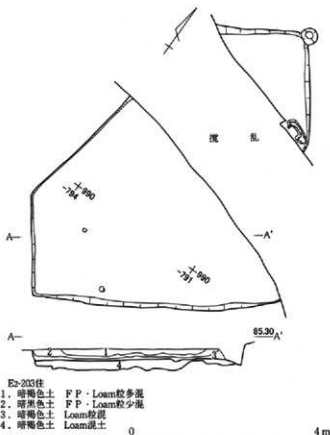
出土遺物は少なく、土師器甕片・石製紡錘輪がある。

#### E<sub>2</sub>-203号住居跡 (第66図 P.L.21)

座標値X=987~995・Y=-789~-796の範囲にある。E<sub>2</sub>-121号住居跡(平安時代)と重複する。西隅部は現道下(調査時)にかり、中央北寄りには攪乱土坑で全容は明らかではない。平面形状は北西・南東方向軸が僅かに長く比較的整った方形を呈する。規模は長軸5.9m・短軸5.5m、床面積は31.7㎡程度、確認壁高は22cmで直線・直立気味である。主軸方位はN-55°-Eを示す。埋土は大別3層で、混入物少なく自然堆積と考えられる。竈は北東壁北寄りに痕跡はあるも、攪乱土坑によって貯蔵穴共々消失したものと考えられる。

床面は平坦をなし床下の掘形は比較的深く、床土はLoam土を混じえる暗褐色土を厚さ20cmほどに充填する。柱穴・壁下溝などの諸施設は検出されない。

出土遺物は極少である。



第66図 E<sub>2</sub>-203号住居跡



## E3-204号住居跡 (第67図 P.L.21)

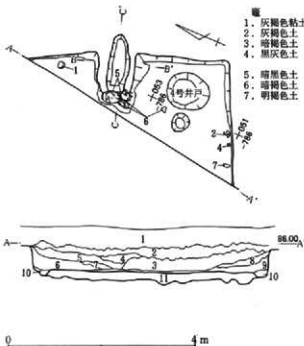
座標値  $X = 024 \sim 028$ ・ $Y = -783 \sim -787$  の範囲にある。平面形状は、長短軸長差のない略方形を呈するが隅丸気味である。軸長は3.1m、床面積7.1m<sup>2</sup>の小型住居跡である。確認壁高は55cmで深い掘り込みをもち、下位の壁面は直立するが中位以上は傾斜が緩く壁縁の崩落であろう。主軸方位はN-68°-Eを示す。埋土は大別3層で混入物が少ない褐色系埋土で、自然堆積であろう。壁面の崩落を示すように壁際にはLoam粒・塊層の三角堆積の形成が顕著である。

竈は北東壁やや南寄りに付設され、煙道部位は壁縁を弧状に30cmほど穿つ。袖部は長さ約30cmで灰褐色粘土を用いる。焚口幅40cm。貯藏穴は東隅竈右手にあり、径35×25cm、深さ50cmの楕円形を呈する。貯藏穴縁辺には土師器坏が集中する。

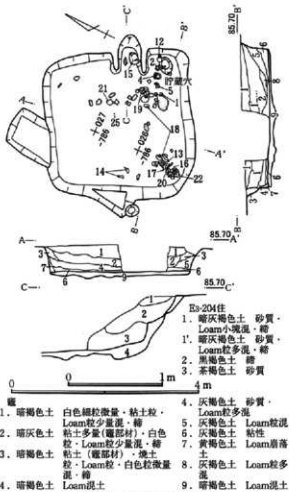
床面は平坦・堅牢である。床土はLoam土を混じえる暗褐色土を敷く。柱穴・壁下溝は検出されていない。

出土遺物は多く、土師器坏・甕・壺・甌の他、Cup型須恵器・銅地塗金(銀)製1対の耳飾りがある。

## E3-209号住居跡 (第68図 P.L.21)



第68図 E3-209号住居跡



第67図 E3-204号住居跡



### 第3章 検出された遺構と遺物

座標値  $X=049\sim055$ ・ $Y=-784\sim-786$ の範囲にある。南東部床面には4号井戸(中世以降)が重複する。西部の大半は現道(調査時)下にかかり全容は不明である。北東壁と南東壁一部の検出で平面形状は略方形になろう。規模は検出部分の北東壁長さ4.1m・南東壁長さ2.6mである。確認壁高45cmで壁面は直線・直立気味である。主軸方位は $N-70^{\circ}-E$ を示す。埋土は大別2層からなるがLoam粒・塊の混入や不連続なLoam混土層の堆積が著しく、人為的な埋土ないしはその流入が考えられる。

竈は北東壁のはほぼ中央に付設する。煙道部位は壁線を通り20cm程度穿つ。袖部は長く約70cm、灰色粘土で構築する。焚口幅30cmで、縦列2個の土師器長胴甕が組合わさった状態で横たわる。焚口天井の部材の落下と考えられる。貯蔵穴は4号井戸で消失したものであろう。

床面は平坦・堅牢である。床土はLoam塊・暗褐色土の混土を厚さ15cm前後で充填する。柱穴と考えられるものは1穴で、径 $40\times 35$ cm、深さ56cmである。壁下溝は図示されていないものの土層見からは本来通っていたものと考えられる。

出土遺物には竈構築材の土師器甕の他は少なく、土師器坏・模造土器など少量がある。

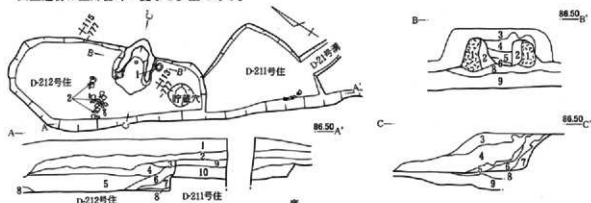
#### D-212号住居跡(第69図)

座標値  $X=112\sim115$ ・ $Y=-776\sim-778$ の範囲にある。西半部は現道(調査時)下にあり全容は不明である。東・西・北壁の一部が検出されている。平面形状は隅丸の略方形になろうか。D-211号住居跡(古墳時代前期)と重複する。規模は東壁長さが4.1mで北・西壁線は約1mの検出である。確認壁高は深く65cm以下は直線・直立するが上半壁面の角度が緩く縁部の崩れと思われる。主軸方位は $N-67^{\circ}-E$ を示す。埋土は大別2層からなり、混入物の少ない明褐色土で自然堆積になろう。

竈は東壁やや南に偏って付設される。煙道部位は壁線を通り20cmほど小さく略三角に穿つ。袖部は長さ約60cmで明褐色灰色粘土を用いる。左袖先端には土師器甕が芯材として倒置されるが、前面は露呈状態であったと思われる。焚口幅40cmを測る。貯蔵穴は南東隅竈の右手にあり、径 $55\times 50$ cm、深さ50cmの略円形を呈する。

床面は平坦・堅牢である。柱穴・壁下溝などは検出されない。

出土遺物は土師器坏・甕など少量である。



#### D-212住

1. 暗褐色砂質土 灰土・Loam塊多量混
2. 暗褐色砂質土 白色粒混・砂質
3. 暗褐色砂質土 Loam粒少量・白色粒混
4. 明褐色土 Loam粒少量混
5. 明褐色土 Loam粒・小塊多混・灰白色粘土塊(竈材)
6. 明褐色土 Loam粒多・大粒少量
7. 暗褐色土 Loam粒微量混
8. 暗褐色土 Loam粒多量混
9. 黒褐色土 白色粒微量・Loam粒混
- ※注記 9・10.(211号住居跡)
10. 明暗褐色土 Loam粒少量混

#### 竈

1. 明褐色土 明褐色粘土(竈袖)
2. 明褐色土 明褐色粘土主体・淡褐色焼土・炭化物少混
3. 暗褐色土 Loam小粒少・粒・明褐色粘土・炭化物少混
4. 明褐色土 明褐色土主体・Loam小粒少・炭化物・暗褐色土塊混
5. 暗褐色土 炭化物・塊土・明褐色粘土少混
6. 淡褐色土 淡褐色焼土主体・炭化物多混
7. 黒褐色土 黒褐色土主体・暗褐色土少混
8. 淡褐色土 淡褐色焼土主体・炭化物多混
9. 黒褐色土 Loam大粒多混・黒褐色土・Loam混土

第69図 D-212・211号住居跡 0 1m 4m

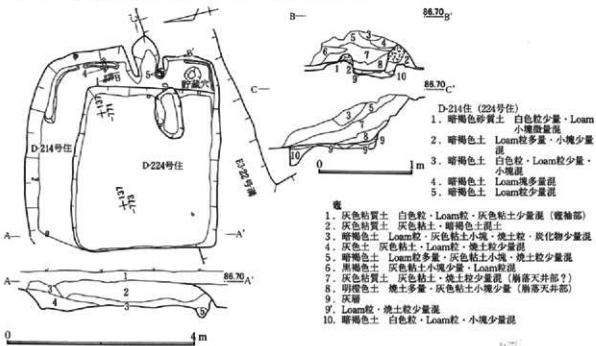
## D-214・224号住居跡 (第70図 P.L.22)

座標値  $X = 134 \sim 138$ ・ $Y = -769 \sim -774$ の範囲にあるが西端は僅かに現道(調査時)下にかかる。拡張・建て替えがおこなわれ、拡張前がD-224号、後がD-214号住居跡であり壁線は一致する。E<sub>3</sub>-22号溝(中世以降)・A<sub>1</sub>-39号住居跡(古墳時代後期)・5号周溝墓(古墳時代前期)と重複する。平面形状は両者は東西方向に長軸を持つ略方形を呈するが、D-214号住居跡は隅丸になる。

D-214号住居跡 規模は長軸 $4.3 + \varnothing$ m・短軸 $4.1$ m、床面積は $14.2 + \varnothing$ m<sup>2</sup>、確認壁高は $65$ cmと深く、検出良好な北・東壁面は下位が直立、上位の傾斜が緩い。主軸方位はN-76°-Wを示す。埋土は大別4層で、Loam粒・塊の混入が多く人為的な埋土の可能性がある。竈は東壁やや南に付設される。煙道部位は壁線を僅かに穿つ。袖部は灰色粘土を用い、長さ $40$ cm、焚口幅 $30$ cmを測る。貯蔵穴は南東隅竈右手にあり、径 $35$ cm、深さ $55$ cmの略円形である。床面は平坦をなして堅牢である。D-224号住居跡の削平面をLoam土を多量に混じえた暗褐色土で充填する。壁下溝は南東隅北壁から東壁の一部にかけて検出されている。幅約 $10$ cm、深さ $5$ cm前後である。柱穴は検出されていない。

D-224号住居跡 規模は長軸 $3.5$ m・短軸 $3.1$ m、床面積は $8.8$ m<sup>2</sup>、壁高は $10$ cm程度の残存である。主軸方位はD-214号と同一方向になる。竈は東壁やや南に位置する。削平面による消失部分が大きく、径 $100 \times 60$ cmの楕円形の窪みで被熱の痕跡として残されるにすぎない。

出土遺物には土師器坏・鉢のほか土製勾玉・石製紡錘輪がある。



第70図 D-214・224号住居跡

## D-215号住居跡 (第71図 P.L.22)

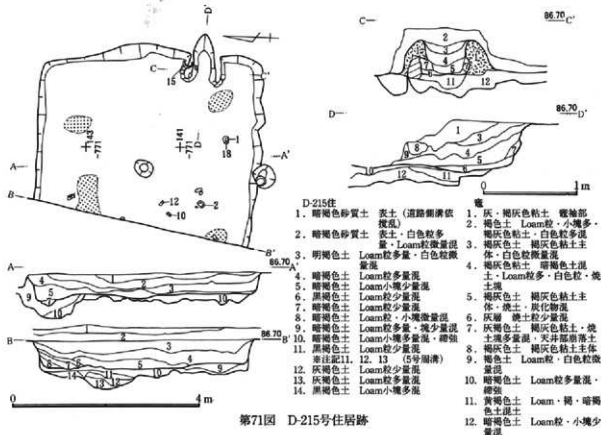
座標値  $X = 139 \sim 143$ ・ $Y = -768 \sim -773$ の範囲にある。5号周溝墓・D-216号住居跡(古墳時代前期)と重複する。西側は現道(調査時)下にかかり、全容は不明であるが平面形状は略方形を呈しよう。規模は南北軸 $4.7$ m・東西軸 $4.0 + \varnothing$ m、床面積は $15.1 + \varnothing$ m<sup>2</sup>、確認壁高約 $50$ cmで下位は直立気味、上位は傾斜が緩む。主軸方位はN-87°-Wを示す。埋土は大別3層でLoam粒・塊の混入の多い暗褐色土で人為的な埋土とも考えられる。

第3章 検出された遺構と遺物

竈は東壁にあり、大きく南に偏って付設される。煙道部位の立ち上がりは急傾斜で、壁線を三角形に約20cmほど穿つ。袖部は長さ50cm、灰褐色粘土を用い左袖基部に近く土師器甕を正位埋置して芯材とする。焚口幅約30cmである。

床面は平坦で、床土はLoam土を混じえる暗褐色土を充填する。柱穴の確定はないが居中央部に1穴が検出されている。径40×35cm、深さ45cmである。

出土遺物には土師器坏類が多い。



第71図 D-215号住居跡

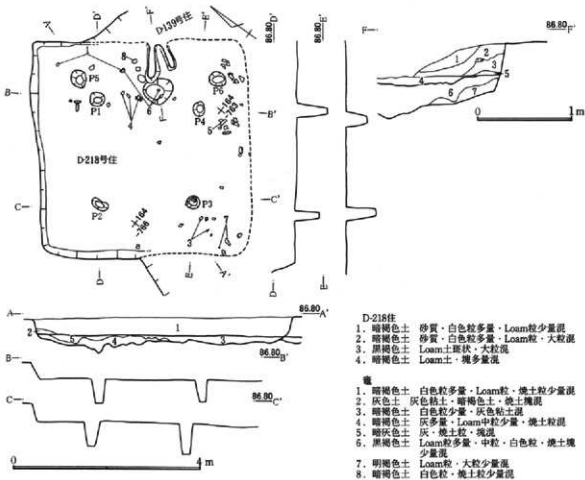
D-218号住居跡 (第72図)

座標値X=162~167・Y=-761~-767の範囲にある。D-139号住居跡(古墳前期)と重複し、南東面及び北東面・南西面にかけての壁線が不明瞭である。平面形状は長短軸長差の無い方形を呈しよう。規模は約4.5×4.5m、床面積19.3+ $\varnothing$ m<sup>2</sup>、確認壁高45cmで直線的・やや法面が緩い。主軸方位はN-53°-Eを示す。埋土は大別1層で白色軽石粒の他混入物は少なく、自然堆積になろう。

竈は北東面壁やや東に寄って付設される。重複で検出状態は不良であるが袖部構築材には灰色粘土を用いる。袖長は左右不均一であるが約70cmほどであったと考えられる。

床面は平坦をなし、床下掘形は20cm前後で深く、床土はLoam土を混じえる黒褐色土を充填する。柱穴は4穴で、径30cm前後、深さ50~65cmである。柱間寸法は北列(P1・P4)・西列(P1・P2)が2.2m、南列(P2・P3)・東列(P3・P4)が2.0mを測る。その他柱穴の様相をもつP5・P6はそれぞれP1とP3、P2とP4との対角延長線上に配され、拡張柱穴とも考えられるがP2とP3との配置に疑問が残る。また掘形は20cmと浅く、補助柱的機能であろうか。貯蔵穴・壁下溝は検出されない。

出土遺物は少なく、破片化・散在的な出土状況である。土師器甕・坏・鉢などがある。

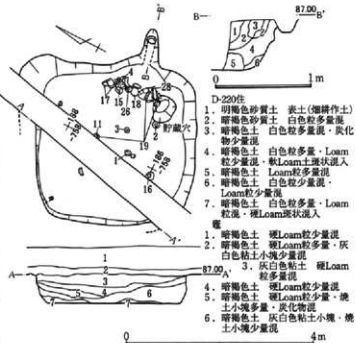


第72図 D-218号住居跡

D-220号住居跡 (第73図 P.L. 22)

座標値  $X = 185 \sim 189$ ・ $Y = -755 \sim -759$ の範囲にある。平面形状は長短軸差のない隅丸の方形を呈する。規模は軸長3.2m、床面積6.5㎡の極めて小規模な住居である。確認壁高は深く約60cmで直線・直立気味な壁面である。南壁・東壁の2段状況は縁辺部の崩落によるとするには崩落堆積土が希薄で、棚等の施設的な機能を有するものと考えたい。主軸方位はN-75°-Eを示す。埋土は大別3層で、下位層はLoam塊混土の暗褐色土が埋め、人為的混土の流入とも考えられる。上位層は混入物が少なく自然堆積になろう。

竈は東壁にあり、大きく南に偏って付設される。袖部は検出されず具備していない



第73図 D-220号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

形態とも考えられ、その痕跡も希薄である。煙道部は細長く90cmを測り、平に壁面を穿ったのち直立に近く立ち上がる。焚口前面には土師器壺・壺・坏・鉢類が横並び状態で出土し、意図的に置かれているようである。貯蔵穴は南東隅、甕右手にあり、径60×50cm、深さ30cmの楕円形を呈する。

床面は平坦堅牢である。床下掘形は四壁沿いを幅1m前後、深さ10cmほどの窪みを巡らし、中央に高まりを作る。床土にはLoam土と褐色・黒褐色の混土を充填する。柱穴・壁下溝は検出されない。

出土遺物は完形品が多く前述竈前での出土の他、中央部にも完形品に近い土師器坏数個体が散在して検出されている。

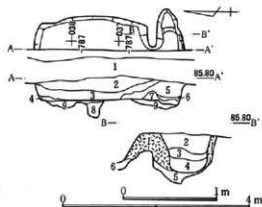
E3-223号住居跡 (第74図)

座標値  $X = 035 \sim 038 \cdot Y = -786 \sim -787$  の範囲にある。検出は東壁線のわずかな部分で、大半は現道 (調査時) 下にかかる。検出東壁長は3.15mである。確認壁高は45cmで直線・直立気味に立ち上がる。東壁線の方位はほぼ真北を示す。埋土は大別2層で混入物の少ない暗灰褐色土を主にする自然堆積であろう。

竈は東壁南端に偏っている可能性がある。煙道部は壁線を約30cm略三角に穿つ。左袖がかろうじて明らかになり長さ約50cm、焚口幅は40cm前後になるよう。

床面は堅牢でLoam土を混じえる褐色土を充填する。

出土遺物は検出されない。



E3-223住

1. 表土
2. 暗褐色土 白色粒・Loam粒混
3. 灰褐色土 白色粒・Loam粒・粘土粒微量混
4. 暗褐色土 Loam粒多混 (壁崩落?)
5. 暗灰色土 白色粒・Loam粒・焼土粒少量混・粘土・暗褐色土混
6. 暗褐色土 粘土小塊・焼土粒少量・白色粒微量混
7. 黒褐色土 灰層・焼土粒少量混
8. 黒褐色土 焼・白色粒・Loam粒少量混
9. 褐色土 Loam混土・粘

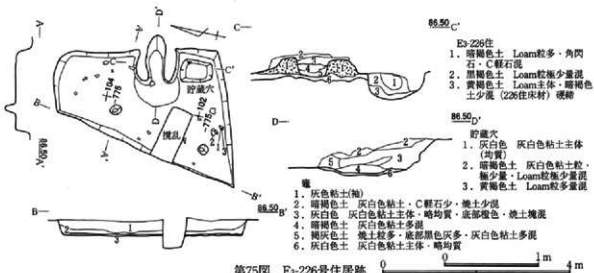
竈

1. 灰褐色土(袖) 粘土主体・暗褐色土混・白色粒・Loam粒・焼土粒少量混・暗粘土小塊・焼土粒少量・白色粒微量混
2. 暗褐色土 灰層・焼土粒少量混
3. 暗褐色土 粘土主体・Loam粒・焼土粒微量混・粘
4. 黒褐色土 Loam混土・粘
5. 暗灰色土 粘土主体・Loam粒・焼土粒微量混
6. 暗褐色土 Loam混土・粘

第74図 E3-223号住居跡

E3-226号住居跡 (第75図)

座標値  $X = 101 \sim 105 \cdot Y = -773 \sim -776$  の範囲にある。西半は現道 (調査時) 下にあり全容は不明であるが平面形状は略方形を呈しよう。南北軸長3.6m、東西は2.7mの範囲まで検出した。確認壁高は30cmで直



E3-226住

1. 暗褐色土 Loam粒多・角閃石・C軽石混
2. 黒褐色土 Loam粒少量混
3. 黄褐色土 Loam主体・暗褐色土少混 (226住床材) 硬砂

貯蔵穴

1. 灰白色 灰白色粘土主体
2. 暗褐色土 灰白色粘土粒・極少量・Loam粒少量混
3. 黄褐色土 Loam多量混

竈

1. 灰褐色土(袖) 灰白色粘土・C軽石少・焼土少混
2. 暗褐色土 灰白色粘土主体・略均質・底部褐色・焼土混
3. 灰白色 灰白色粘土多混
4. 暗褐色土 灰白色粘土多混
5. 暗灰色土 焼土粒多・底部黒色灰多・灰白色粘土多混
6. 灰白色土 灰白色粘土主体・略均質

第75図 E3-226号住居跡

線・直立気味である。主軸方位はN-81°-Eを示す。埋土は大別2層で混入物が少なく、自然堆積になろう。

竈は東壁わずかに南に寄って付設される。煙道部位は壁線を約20cm穿つ。袖部は灰白色粘土をもって構築され長さ50cmで、笑口部幅は30cmである。貯蔵穴は南東隅竈右手にあり、70×45cm・深さ30cmの方形を呈する。

床面は平坦・堅牢で、床下の掘形は浅く、暗・黒褐色土とLoamの混土を薄く充填する。小穴2穴を検出するが、規模及び配置の不整合から柱穴かは不明である。壁下溝は検出されない。

出土遺物は少量で土師器杯・模造土器などいずれも埋土からの出土である。

#### D-87号住居跡 (第76図)

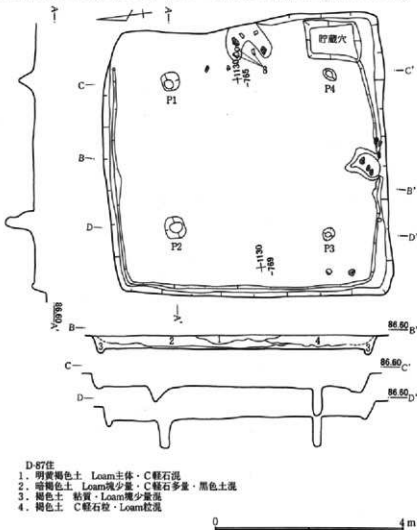
座標値X=127~133・Y=-763~-769の範囲にある。東縁はE<sub>3</sub>-22号溝(中世以降)と重複し壁線の一部は不明である。平面形状は長・短軸長差の小さい方形を呈する。規模は東西軸6.0m・南北軸5.9m、床面積31.1㎡、確認壁高は約30cmで壁面は直線的・直立して立ち上がる。東西軸方位はN-83°-Wを示す。埋土は大別3層である。最上土層はLoam塊が多量に混じる褐色土で埋没の進行した段階での人為的埋土と考えられる。

火所と考えられる痕跡は東壁際中央にある。竈両袖部にあたる位置に長径の転石が縦位立てで埋設されている。ただ、調査時における石材の被覆状況などの所見がなく竈形状ははじめ不明部分が多い。

床面は平坦をなす。床下掘形は壁際1m余の凹帯を巡らせ、中央3~3.5mほどの方形範囲が高まりをなす。

床土にはLoam土が混じる暗褐色土を充填する。柱穴は4穴(P1~P4)で径20~40cm・深さ60cmの深い掘形をもつが、P1のみ浅く35cmである。柱間寸法は北列(P1・P2)3.0m、南列(P3・P4)・西列(P2・P3)が3.2m、東列(P1・P4)3.4mを測る。壁下溝は東壁を除く各壁下に検出され、幅20cm・深さ10~15cm程度である。貯蔵穴は南東隅部にあり、整った長方形で110×90cm・深さ20cmである。

出土遺物には古墳前期に属する高坏・鉢・壺などがあり、当住居跡の時代帰属に混乱をきたした。また、不明な竈の存在もこれの一因となった。検討の結果、遺物の多くは埋土中の出土であり、唯一竈底面の長胴甕の存在から古墳後期の住居跡とした。



第76図 D-87号住居跡

## 第3節 古墳時代後期の遺物

舞台遺跡における古墳時代後期とした遺物は、その大半が堅穴住居跡からの出土で土器類を中心としている。それ以外の遺構では若干の土坑と谷地内からの遺物でやはり土器類が主で、少量ながら木器類がある。また、後期とした時期認識については、遺物そのものから得られた時代観ではない。大半の遺物が属する堅穴住居跡の形態によるものである。舞台遺跡における古墳時代堅穴住居跡の時期別認定は、現状では竈か炉跡に大きく依存しており、竈の存在をもって古墳時代後期に大別したのである。従って竈の存在は共通であっても明らかに年代に差のある群も含まれている事をお断りしておく。

遺物は多数にのぼり、図示に際しては全体形状またはそれを窺うに知りうる個体を選定せざるを得なかった。ただし異形・特殊形態の遺物はできうる限り図示するように努めた。

舞台遺跡古墳時代後期の出土土器種には、坏形土器（以下形土器を省略）・高坏・鉢・壺・甕・瓶・模造土器などがある。分類を試みるにあたって器種名称は一般的な用法に従うが、例えば坏と鉢・壺と甕などの種では判別に迷惑する土器群がある。前者については口径の大・小および体部の深・浅から、後者では頸部の有無を器種分類の指標とする。土器説明については、土師器に限り器種ごとの分類を作成し形態説明や施される成・調整技法・加飾などの基本造形的諸属性は図化表現で示し、分類規範に記述した。個々体そのものの説明は必要に応じて本文中で記すこととし、計測値は表を用いた。また土器以外の遺物は本文中で説明し、計測値は土器と同様に表を用いた。模造土器については基本的に分類せず、範のわかるものについては本文中で述べる。

## 1. 土器の器種分類

各器種分類の指標は大別な形態の差異をもって行い、胎土・塗彩などは分類基準に含めないこととする。これらの分類項目は時間的・空間的・承襲的等多面的諸関係に大きく関わる問題を内在するものと考えられ、これらの属性による分類の目指す方向はより具体的で高次元研究課題に進むと思われる。したがって、当分類は事実記載の域を出ない器種分類であり、それ以上の類には耐えられないのが実情である。各器種に見られる大きな形態差はA・B・Cなどのalphabetを、さらに口径・体部などの細別にはA<sub>1</sub>・A<sub>2</sub>などの算用数字を用いた。

坏はA～Eの5分類が可能である。外面体・底部は手持ち寛削り、口縁部は二段の寛撫で調整が多い。内面は撫でまたは寛撫を主とし、寛磨きを施すものもある。

A類 いわゆる須恵器坏蓋の模倣形態である。口縁部の形状で細分が可能である。

A<sub>1</sub> 口縁部が外反する。体部のまるいものが多い。

A<sub>2</sub> 口縁部に段または凹線をもち外反気味に外傾する。体部扁平と丸味の両者がある。

B類 いわゆる須恵器坏身の模倣形態である。口縁部が短く、内傾する。蓋受け部の作りに強弱があり、総じて須恵器坏身より受け部の造りは不明瞭である。調整はA類に同じだが口縁部は1段の撫で調



第77図 土器分類(坏)

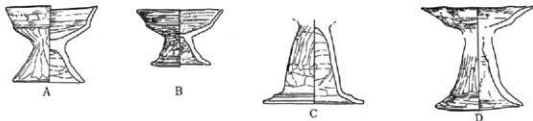


整である。

- C類 扁平な形状で口縁部が皿状に強く開き、体部は極めて浅い。  
 D類 明瞭な口縁部を持たず直立し、口唇部が肥厚するものが多い。  
 E類 体部と口縁部を画する屈曲がなく底部が細まり身深な形状である。

高坏は坏部と脚部の形状からA～Dの4分類ができる。坏部下半・脚部寛削りを施す。

- A類 坏部上半が外反し、坏A<sub>1</sub>に類似する。脚は短脚でハの字状に開く  
 B類 坏部上半が外傾して開き、坏A<sub>2</sub>に類似する。短脚でハの字状に開く。  
 C類 坏部下半が浅く上半が外反して大きく開き、坏Cに類似する。長脚で端部は短くハの字状に開く  
 D類 坏部は不明だが脚部はエンタシス状の膨らみをもち裾部有段で屈曲して開く。



第78図 土器分類(高坏)

鉢はA～Fの6分類ができ、丸底・平底・台付きなど類型が豊富である。調整は大方外面縦位寛削り、内面強い横位寛削で、口縁部寛削でが施され、内外面寛磨きをするものがある。

A類 坏A類の大型形状のものである。口縁部が外反する坏A<sub>1</sub>類の大型形状。口径が15cm以上、または小型で深みのあるもの。

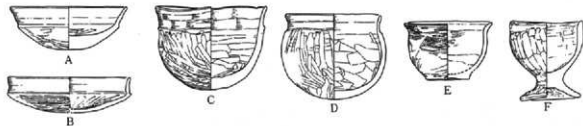
B類 口縁部が外反気味に直立する坏B類の大型形状。口径が15cm以上のもの。

C類 半球形の深い体部。口縁部は外反または内傾する。丸底で大・小がある。

D類 球形の深い体部。丸底 口縁部の形態に若干の差がある。

E類 口縁部が小さく外傾し、深い胴部で平底。

F類 台付で素口縁の形態と小さく外反するものがある。台部は低くハの字状に開く。寛磨きを施すものもある



第79図 土器分類(鉢)

第3章 検出された遺構と遺物

壺は口・頸区別の有A類・無B・C類がある。体部は球形で肩の張りが強い。平底・丸底があり大・中型品は平底、小型品には丸底が多い。胴部外面は寛削りを主とするが、磨磨きを重ねるものもある。

A類 頸部が直立または内傾気味に立ち、口縁部は外反する。

A<sub>1</sub> 胴部球形最大径30cm前後から以上の大型

A<sub>2</sub> 胴部最大径20cm前後の中型

A<sub>3</sub> 胴部最大径10cm前後の小型

B類 口縁部が丈高で大きく外反して開く。器高20cm前後

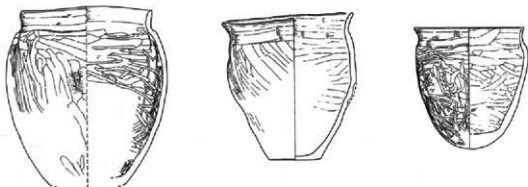
C類 口頸部が大きく直線的にのび、体部は球形で丸底。小型である。



第80図 土器分類(壺)

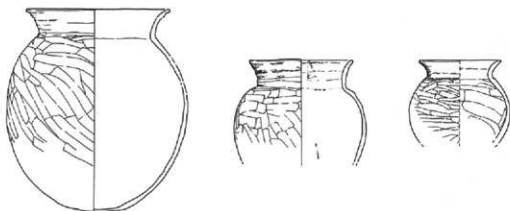
甕は胴部の形態で大別A・B・C・Dの4類になる。胴部外面縦位寛削り、内面強い横位寛撫で、口縁部は横撫で調整が主である。

A類 小さな肩をもつが胴部の張りは小さい。口縁部は短く直立か僅かに外反する。胴部外寛削り内面撫で調整後磨磨きを施す。A<sub>1</sub>類(大)・A<sub>2</sub>類(中)・A<sub>3</sub>類(小)で平底・丸底がある。



第81図 土器分類(甕1)

B類 などで肩の球形で、口縁部は強く外反して開く。胴部外面上半は横位・下半は斜位寛削り、内面寛撫で調整され外面に磨磨きするものもある。B<sub>1</sub>類(大)・B<sub>2</sub>類(中)・B<sub>3</sub>類(小)があり、丸底である。



第82図 土器分類(堯2)

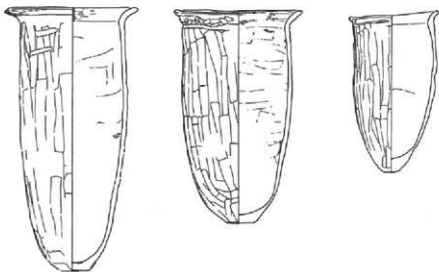
C類 胴部中位に張りがある球形で、口縁下部が小さく立つもの・直立・外傾するものがある。胴部外面は縦位寛削り・内面は横位寛撫で調整。



第83図 土器分類(堯3)

D類 長胴形である。胴部外面は削り単位が長い縦位の寛削り、内面は横位寛撫で調整を主とする。

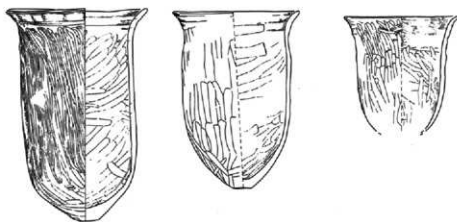
D<sub>1</sub> 寸胴長胴型である。口縁部は短く肥厚し外反して開く。胴部外面は縦位寛削り、内面弱い寛撫で施すものが多い。大・中・小があり小さな平底。



第84図 土器分類(堯4)

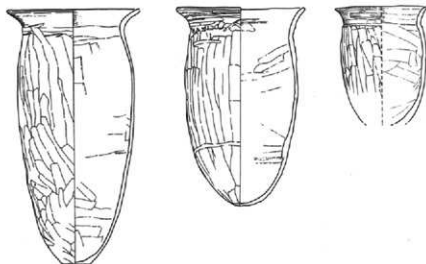
第3章 検出された遺構と遺物

D<sub>2</sub>: 下腹れ長胴型である。口縁部は外反して開く。胴部外面は縦位篋削り、内面は篋撫で。外面に篋削り後篋磨きを施すものがある。大・中・小があり、小さな平底。



第85図 土器分類(壺5)

D<sub>3</sub>: 胴上位が張る長胴型である。口縁部は外反して開く。胴部外面は縦位篋削り、内面は篋撫で。大・中・小があり、小さな平底。



第86図 土器分類(壺6)

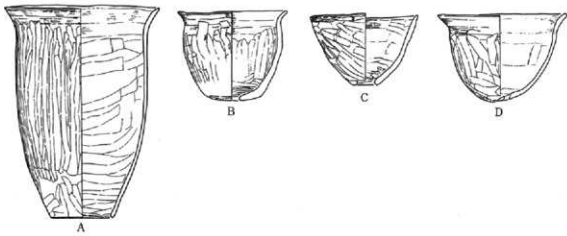
瓶はA類直線長胴型とB類鉢形の2類がある。胴部外面は縦～斜の篋削り、内面は丁寧な篋撫で。

A類 直線的に立ち上がる深い胴から口縁部は小さく外反して開く。大・小あり単孔である。

B類 鉢形の瓶である。

B<sub>1</sub> 半球形の鉢Bに単孔を穿つ。

B<sub>2</sub> 半球形鉢に多孔を穿つ。



第87図 土器分類(甌)

2. 住居跡出土遺物

A<sub>1</sub>-2号住居跡 (第88図 P.L.23)

土師器・鉢・鉢・壺・中小型の長胴甕がある。色調は全て灰白系である。

鉢 A<sub>1</sub>類 (1~2) 口縁部が肥厚・矮小し、A<sub>2</sub>類の伸びやかさに欠けA<sub>2</sub>類に属する可能性もある。

A<sub>2</sub>類 (3~7) 体部扁平な (3・4) と丸く深い (5~7) がある。(3・5~7) は内面放射状施磨き。

鉢 D類 (8) 内面塗り黒色処理。

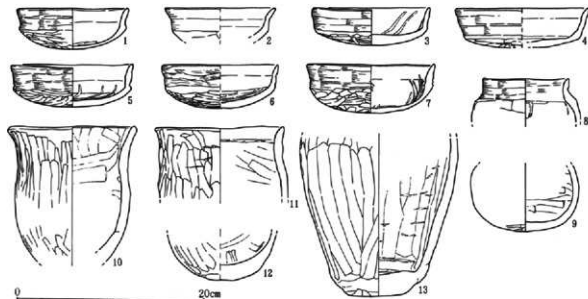
壺 C類 (9)

甕 D<sub>2</sub>類 (10~13) 肥厚した器内で底部は極厚。(12・13) は下半部の被熱が顕著。(10) は胎土が粗い。

A<sub>1</sub>-2号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置
1	土師器鉢	11.8		4.3		灰白	甕土
2	土師器鉢	11.6		現高3.5		灰白	甕土
3	土師器鉢	12.4		3.9		灰白	甕面
4	土師器鉢	14		4.1		灰白	甕土
5	土師器鉢	13		4.4		灰白	甕面
6	土師器鉢	12.2		4.6		灰白	甕面
7	土師器鉢	13.6		5.1		灰白	甕内

番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置
8	土師器鉢		9	現高4.0		灰白	甕左側
9	土師器壺			現高7.3		灰白	甕左側
10	土師器甕		13.7			灰白	甕左側
11	土師器甕		13.7	現高8.0		灰白	甕内
12	土師器甕					灰白	甕土
13	土師器甕					灰白	甕右側



第88図 A<sub>1</sub>-2号住居跡出土遺物

A<sub>1</sub>-3号住居跡 (第89~91図 P.L.23・24)

土師器・鉢・鉢・壺・甕・甎がある。

鉢 A<sub>1</sub>類 (1~12) (6) は内面に8条の放射状施磨きがあり、(7・8・12) は内面塗り黒色処理。色調は灰白系。A<sub>2</sub>類 (13~18) (16) は内面塗り黒色処理。色調は灰白系で (18) が赤褐色系。

鉢 A類 (20~22) (20) に内面黒彩処理がある。C類は (22~28) で (28) は高台状のベタ底である。D類は (29~33) で (33) はやや胎土が粗い。色調は灰白系。

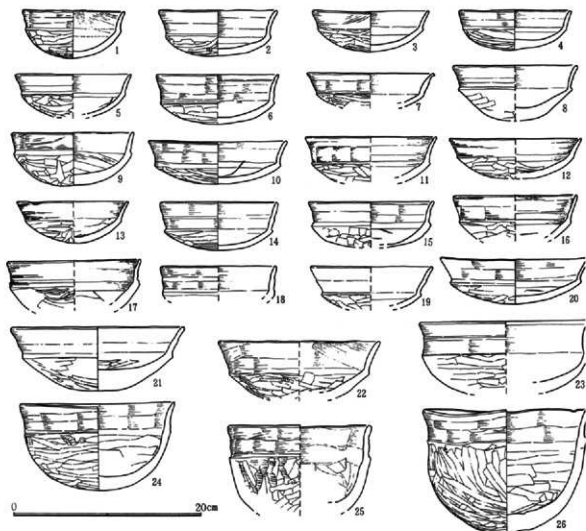
甕 A類 (34~36・38~40) 外面は施磨り後施磨きを、(36) は内面にも施す。色調は灰白系。B類は (37) にならうか。外面には施磨きを施す。色調は灰白系。長胴甕D類はD<sub>2</sub>類 (37~39) (39) の底部に木葉痕。赤褐色系。

甎 A類 (44) 色調赤褐色系。

(45) は土製小玉。

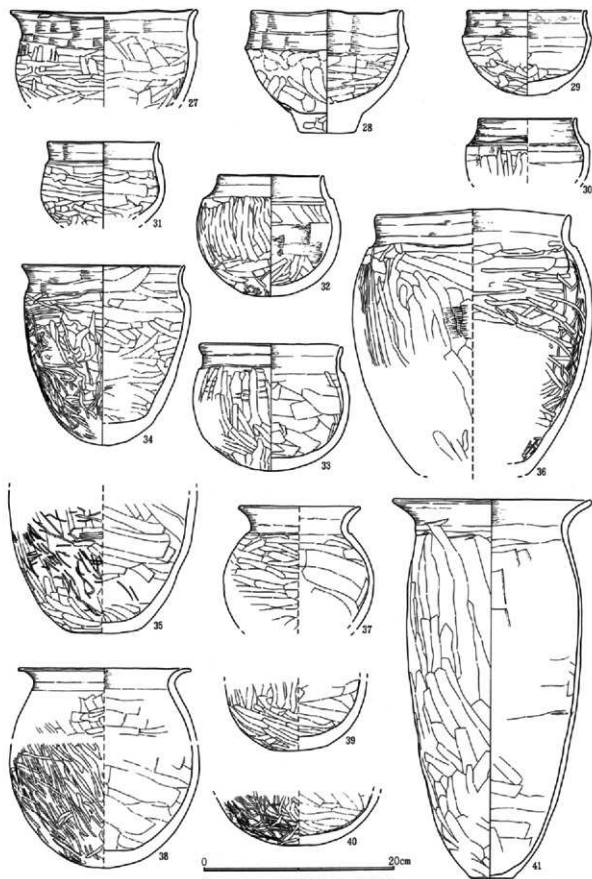
## A1-3号住

番号	器 種	口径	底径	器高	副注他	色属	出土位置	番号	器 種	口径	底径	器高	副注他	色属	出土位置
1	土師器杯	10.8		5		灰白	中央埋土	24	土師器鉢	16.3		9.2		灰白	中央埋土
2	土師器杯	12.6		4.9		灰白	中央埋土	25	土師器鉢	15		規高9		灰白	中央埋土
3	土師器杯	12.3		4.4		灰白	中央埋土	26	土師器鉢	17.3		13		灰白	中央埋土
4	土師器杯	11.9		4.2		灰白	中央埋土	27	土師器鉢	19.8		規高10.3		灰白	中央埋土
5	土師器杯	12.2		規高4.5		灰白	中央埋土	28	土師器鉢	16	6	13		灰白	中央埋土
6	土師器杯	13		5.2		灰白	中央埋土	29	土師器鉢	12.4		8.9		灰白	中央埋土
7	土師器杯	13.6		規高5.5		灰白	中央埋土	30	土師器鉢	10.2		規高6.5		灰白	中央埋土
8	土師器杯	13		5.8		灰白	中央埋土	31	土師器鉢	11.9		規高8.5		灰白	中央埋土
9	土師器杯	13		5.6		灰白	中央埋土	32	土師器鉢	11.2		12.7		灰白	中央埋土
10	土師器杯	14.7		4.6		灰白	中央埋土	33	土師器鉢	15		13.4		灰白	中央埋土
11	土師器杯	14		規高4.7		灰白	中央埋土	34	土師器鉢or壺	17.2		18.9		灰白	中央埋土
12	土師器杯	14		4.2		灰白	中央埋土	35	土師器壺		6.8	規高13.6		灰白	中央埋土
13	土師器杯	11.8		4.3		灰白	中央埋土	36	土師器壺	20.5	12	28	25.5	灰白	中央埋土
14	土師器杯	12.4		5		灰白	中央埋土	37	土師器壺	12.8		規高12.8	15.8	灰白	中央埋土
15	土師器杯	12.4		規高4.8		灰白	中央埋土	38	土師器壺or甕	18.5		20.9	20	灰白	中央埋土
16	土師器杯	13		規高4.5		灰白	中央埋土	39	土師器鉢			規高7.5	15	灰白	中央埋土
17	土師器杯	14		規高5.1		灰白	中央埋土	40	土師器鉢or甕			規高5.8		灰白	中央埋土
18	土師器杯	12		規高5.5		灰白	中央埋土	41	土師器壺	21	40	4.2		赤褐	甕前
19	土師器杯	13		規高4.4		赤褐	中央埋土	42	土師器壺	19.4		規高30.5		赤褐	甕前
20	土師器杯or鉢	15.8		5		灰白	中央埋土	43	土師器壺		4.8	規高11.6		赤褐	甕前
21	土師器洗鉢	18.4		6.8		灰白	中央埋土	44	土師器甕	26	9.3	29.7		赤褐	中央埋土
22	土師器洗鉢	17		規高6		灰白	中央埋土	45	土製小玉	径0.9		0.6		埋土	
23	土師器洗鉢	18		規高7.5		灰白	中央埋土								



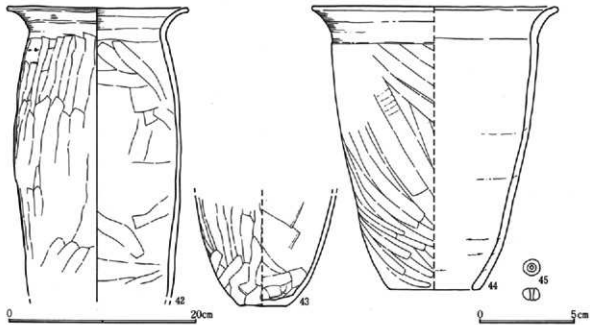
第89図 A1-3号住居跡出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第90図 A1-3号住居跡出土遺物(2)





第91図 A1-3号住居跡出土遺物(3)

## A1-5b号住居跡 (第92図)

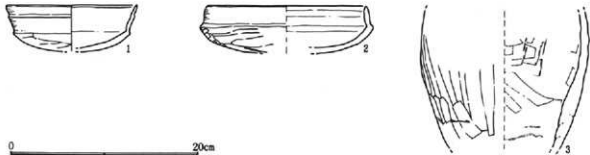
土師器坏・甕がある。

坏 A<sub>2</sub>類 (1) 内外面に黒褐色系の塗彩が考えられる。色調は赤褐色系。

甕 B類 (2) 内外面に黒色処理を施す。色調灰白色。

## A1-5b号住

番号	器種	口径	直径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	直径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器坏	14		5		赤褐	灰土	3	土師器甕			腹高16		灰白	灰土
2	土師器甕	17		3		灰白	灰土								



第92図 A1-5b号住居跡出土遺物

## A1-6号住居跡 (第93図 P L. 24・25)

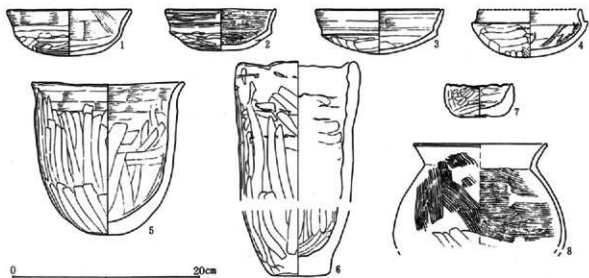
土師器坏・甕・模造土器がある。甕 (6) は器内が厚く作りが粗雑、類型外、色調灰白色。(8) は内外刷毛目調整で古墳前期に属しよう。

坏 A<sub>1</sub>類 (1・2) (2) は内外面に寛磨きと黒色処理を施す。色調灰白色。(1) は口縁部と体部の稜が鋭い。 A<sub>2</sub>類 (3) 内面黒色処理、色調赤褐色系。 B類 (4) 内面に寛磨き、内外面黒色処理、色調赤褐色系。甕 D<sub>2</sub>類 (5) 小型で色調灰白色。

第3章 検出された遺構と遺物

A<sub>1</sub>-6号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器杯	13.2		4.8		灰白	腰土	5	土師器壺	16.2	4.6	16		灰白	腰右側
2	土師器杯	11.7		4.3		灰白	腰土	6	土師器壺	13.5	6.3	22.6		灰白	腰右側
3	土師器杯	13.6		4.7		赤褐色	腰土	7	横造土器	6.9	4	3.5		灰白	腰土
4	土師器杯	10.8		5		赤褐色	腰土	8	土師器壺	14		現高11.8		灰白	腰土



第93図 A<sub>1</sub>-6号住居跡出土遺物

A<sub>1</sub>-8号住居跡 (第94図)

杯 A<sub>2</sub>類 (1) 体部扁平で、色調灰白系。

A<sub>1</sub>-14号住居跡 (第94・95図 P.L.25)

土師器杯・鉢・壺・甕・横造土器がある。

杯 A<sub>1</sub>類 (1~3) (1)は内面黒色処理。(3)は体部が扁平、色調灰白系。

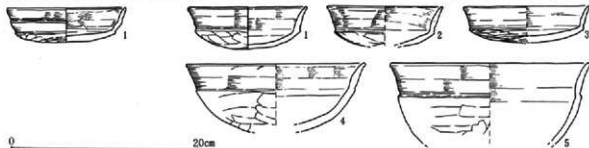
鉢 A類 (4・5) 壺 (6)はB類になろうか。甕D<sub>1</sub>類 (7)。鉢・壺・甕とも色調灰白系。

A<sub>1</sub>-8号住

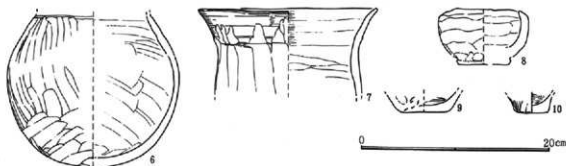
番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器杯	12.6	10.6	3.7		灰白	床面

A<sub>1</sub>-14号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器杯	12.6		4.4		灰白	腰左側	6	土師器壺			現高16.1	18.2	灰白	腰土
2	土師器杯	12		現高4.2		灰白	腰土	7	土師器壺			現高9.5		灰白	腰土
3	土師器杯	13.4		3.9		灰白	腰土	8	土師器小型横造	7.6	5	5.9		灰白	腰土
4	土師器鉢	19		現高7.1		灰白	腰土	9	横造土器			現高2.3		灰白	腰土
5	土師器鉢	21.2		現高8.5		灰白	腰土	10	横造土器			3.5	現高2	灰白	腰土



第94図 A<sub>1</sub>-8・14号住居跡出土遺物



第95図 A1-14号住居跡出土遺物

A1-17号住居跡 (第96図)

土師器 壺・甬・台付臺台部・須恵器小型甕下半部がある。

壺 A<sub>1</sub>類 (1) 色調灰白系。

甬 B類 (2) 胎土は緻密細土で色調橙系。

A1-18号住居跡 (第96図)

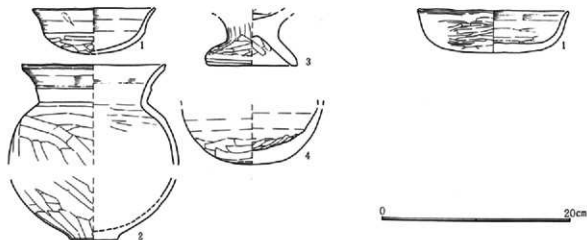
土師器 壺 D類 (1) 器内厚く口縁部緩く外反、色調灰白系。

A1-17号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	胎土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	胎土位置
1	土師器壺	13		4.8		灰白	埋土	3	土師器台付甕	9.7		6.5		赤褐色	埋土
2	土師器甬	15.2	5	18.5	19	橙	埋土	4	須恵器小型甕			6.5	6.5	灰	埋土

A1-18号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	胎土位置
1	土師器壺	13.8		4.5		灰白	埋土



第96図 A1-17・18号住居跡出土遺物

A1-20号住居跡 (第97図 P.L.25)

土師器 壺・甬・甕がある。

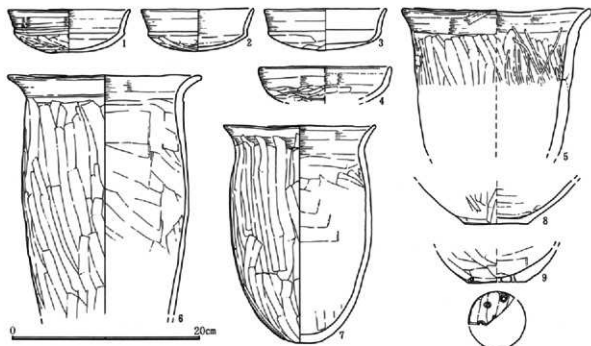
壺 A<sub>1</sub>類 (1~3) (1・2) は色調灰白系、(2) は内外面黒色処理、(3) は胎土緻密細土で色調橙系。 D類 (4) は色調灰白系。

甬 D<sub>2</sub>類 (5) は色調灰白系で、内面に荒磨きを施す。 D<sub>2</sub>類 (6・7) は色調が (6) は赤褐色系で胎土が粗く、(7) が灰白系。 (9) は甕B<sub>2</sub>類にならうか。

第3章 検出された遺構と遺物

A<sub>1</sub>-20号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器杯	13		4.6		灰白	溝壁	6	土師器甕	10.2		現高25.3		灰白	中略 甕口縁
2	土師器杯	12		4.4		灰白	溝壁	7	土師器甕	16		23		灰白	甕口縁
3	土師器杯	12.8		4.3		橙	溝壁	8	土師器甕		6.6	現高2		灰白	甕口縁
4	土師器杯	14		現高3.7		灰白	甕土	9	土師器鉢			現高4		灰白	甕土
5	土師器鉢?	19.4		現高15.3		灰白	甕土								



第97図 A<sub>1</sub>-20号住居跡出土遺物

A<sub>1</sub>-23号住居跡 (第98図 P L. 25)

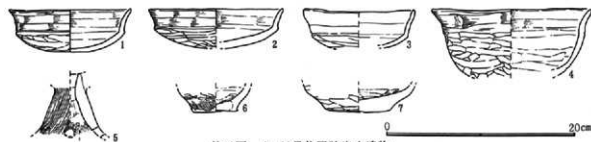
土師器杯・鉢がある。器台脚部は刷毛目調整で4円孔を穿つ。模造土器は刷毛目痕が見られ、器台とも古墳前期に属しよう。

杯 A<sub>1</sub>類 (1~3) (1・2) は色調灰白系で (2) は内外面に黒褐色塗彩痕が残る。(3) は口縁部に若干の瘡があり、胎土は緻密細土で色調は橙系。

鉢 C類 (4) 色調灰白系。

A<sub>1</sub>-23号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器杯	12.9		4.3		灰白	甕土	5	土師器器台			現高0.5		灰白	甕土
2	土師器杯	14.3		現高4.1		灰白	甕土	6	土師器小型甕		4.8	現高2.5		灰白	甕土
3	土師器杯	11.8		現高3		橙	甕土	7	土師器小型甕		6.7	現高3		灰白	甕土
4	土師器鉢	16.8		現高7		灰白	甕土								



第98図 A<sub>1</sub>-23号住居跡出土遺物

A<sub>1</sub>-25号住居跡(第99~101図 P.L.26)

土師器坏・鉢・甕・模造土器、須恵器坏身・高坏・提瓶などのほか滑石製馬形模造品(32)がある。

坏 A<sub>1</sub>類(1~5) (1~4)は胎土緻密細土で色調褐色。(5)は内面黒色処理され色調灰白系。

A<sub>2</sub>類(6~7)の(6)は内面磨削の痕跡、色調灰白系。(7)は内外面黒色処理され色調赤褐色系。

B類(8~9)は色調赤褐色系で(9)は受け部の稜線が弱い。

鉢 B類(10) 内外面に磨削を施す。色調赤褐色系。(11)は台付のF類になろう。色調灰白系で胎土は粗い。

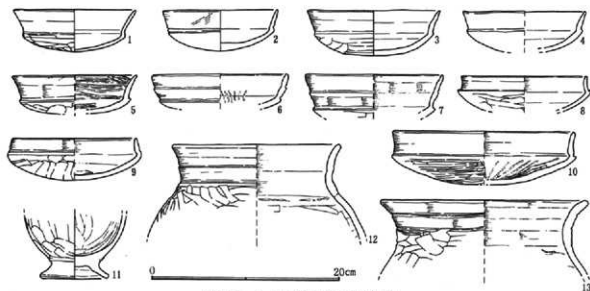
甕 C類(12~14) 大・中・小がある。口縁部に“だれ”が見られるが胴部の形状より当類に属しよう。色調は(12・13)が灰白系、(14・15)が赤褐色系で胎土が粗い。D<sub>1</sub>類(16~18) 色調赤褐色系で(17・18)は胎土が粗い。D<sub>2</sub>類(19~23) (21)は色調灰白系、他は赤褐色系で胎土は両者とも粗い。(22・23)など胴部中位に張りがある。

瓶 A類(25・26) 大・小形で、(25)は底部外縁を幅広く残しやや小径孔である。

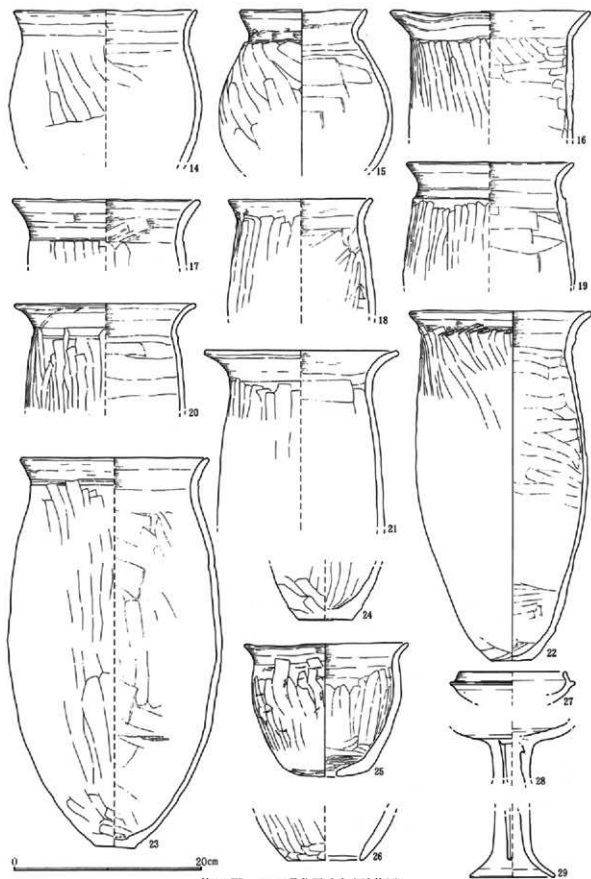
須恵器坏身(27)は受け部・口縁端部とも丸まって鋭さが無い。(28・29)は高坏胴部で長脚1段透かしになろう。(30)は提瓶で小型品である。扁平面は回転施削り調整、両肩には突起に近い把手が付く。

A<sub>1</sub>-25号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置
1	土師器坏	12.8		4.4		褐色	腰形	18	土師器甕	15.2		現高12.2		赤褐色	腰部床面
2	土師器坏	12.2		4.3		褐色	腰形	19	土師器甕	17.6		現高13		赤褐色	中央床面
3	土師器坏	14		4.6		褐色	腰形	20	土師器甕	19.1		現高11		赤褐色	散在床面
4	土師器坏	13		4.2		褐色	腰形	21	土師器甕	20.6		現高16.5		灰白	東部埋土
5	土師器坏	13		4		灰白	腰形	22	土師器甕	19.5	4.1	39.8		赤褐色	東部埋土
6	土師器坏	14		3.6		灰白	腰形	23	土師器甕	19.7	4.2	41		赤褐色	腰部床面
7	土師器坏	14.8		現高4.5		赤褐色	腰形	24	土師器甕	5.6		現高5.7		赤褐色	腰形
8	土師器坏	13		3.7		赤褐色	腰形	25	土師器瓶	17.3	9.2	14	孔径2.6	灰白	東部埋土
9	土師器坏	13		4.4		赤褐色	腰形	26	土師器瓶		7.8	現高5		灰白	腰形
10	土師器坏or鉢	19		5.6		赤褐色	腰形	27	須恵器坏	10.4		現高3.2		灰	腰形
11	土師器台付甕		7.2	現高7.5		灰白	腰形	28	須恵器高坏			現高5.5		灰	腰形
12	土師器甕	18		現高10		灰白	柱1脚床面	29	須恵器高坏		9	現高7		灰	床面
13	土師器甕	21.9		現高8		灰白	東部埋土	30	須恵器提瓶	胴径14	胴厚10	現高15		灰	床面
14	土師器甕	19.6		現高16		赤褐色	腰形	31	模造土器	6.9	4	4.3		灰白	腰形
15	土師器甕	13.4		現高17	18.5	赤褐色	北東床面	32	馬形台製模造品	長8.3	幅5.1	厚1		褐色	腰形
16	土師器甕	21.2		現高13.5		赤褐色	東部埋土	33	模造土器	13	7	6.8		赤褐色	腰形
17	土師器甕	20		現高7		赤褐色	北東床面	34	SF口縁台付甕	16		現高4.5		赤褐色	腰形

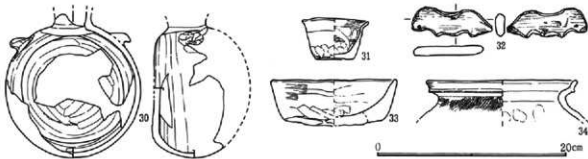
第99図 A<sub>1</sub>-25号住居跡出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第100図 A1-25号住居跡出土遺物(2)

第3節 古墳時代後期の遺物



第101図 A1-25号住居跡出土遺物(3)

A1-31号住居跡 (第102図 P L. 26)

土師器坏・甕がある。

坏 A1類 (1) 口唇部が外脣する。色調橙系で、胎土は緻密細土である。

甕 D2類 (2) 色調赤褐色系で胎土は粗い。

A1-33号住居跡 (第102図 P L. 27)

土師器坏・甕・滑石製品、混入物には古墳前期に属する高坏・壺・甕等の小片がある。

坏 A2類 (1) 体部扁平で、色調灰白系。D類 (2) 器内厚く、色調灰白系。

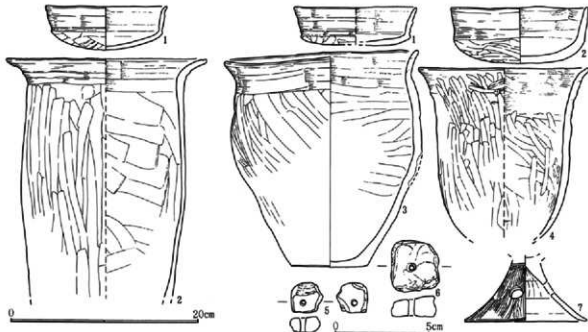
甕 A類 (3) 中型で下半部被熱赤化が著しい。色調灰白系で胎土は粗い。D2類 (4) 小型で色調灰白系。

A1-31号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	胎土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	胎土位置
1	土師器坏	12.8		4.5		橙	甕前床面	2	土師器甕	21.3		現高25		赤褐	甕前床面

A1-33号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	胎土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	胎土位置
1	土師器坏	13		4		灰白	甕土	4	土師器壺	18		現高18			甕土
2	土師器坏	14.5		6		灰白	甕土	5	石製白玉	1.6×1.7		厚さ0.95	0.3		甕土
3	土師器甕	20.7	8.1	22.6	20	灰白	甕右軸芯部	6	石製白玉	径2.5		厚さ1	孔0.3		甕土



第102図 A1-31・33号住居跡出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

A<sub>1</sub>-34号住居跡 (第103図 P L. 27)

土師器坏・鉢・甕・甔がある。

坏 A<sub>1</sub>類 (1~3) 胎土緻密細土で色調橙系。

鉢 C類 (4) 小型で内面に磨磨きを施す。色調灰白系。

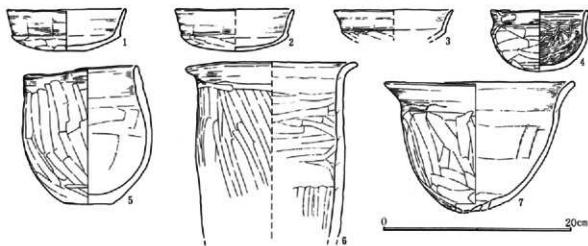
甕 D<sub>1</sub>類 (5・6) (6)は器内厚く、胎土が均一の割に作りは粗雑。色調灰白系。(5)は形態上甕か鉢かで逡巡する土器である。色調赤褐色系で胎土は粗い。

甔 B<sub>2</sub>類 (7) 色調赤褐色系。

A<sub>1</sub>-34号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	胎土位置
4	土師器鉢	10.4		6.4	灰白	甕内底面	
1	土師器坏	12.6		4.3	橙	甕内	
2	土師器坏	12.6		4.3	橙	甕土	
3	土師器坏	11.6		現高3.2	橙	甕土	

番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	胎土位置
5	土師器小型甕	12.2	5	14.5		赤褐	甕土&甕底面
6	土師器甕	18.7		現高37		灰白	甕内
7	土師器甔	20	2.7~3.5	13.8	孔径3	赤褐	甕土&甕底面



第103図 A<sub>1</sub>-34号住居跡出土遺物

A<sub>1</sub>-36号住居跡 (第104図 P L. 27・28)

土師器坏・鉢・甕・甔・土製球製品などで、混入物には古墳前期に属する異形高坏・台付鉢がある。

坏 A<sub>1</sub>類 (1~8) 色調は全て灰白系である。(8)はやや大振りで、(6・7)の口唇部は小さく外屈する。(7)の内面は黒色処理。

鉢 A類 (9) 大型で色調灰白系、胎土は緻密である。C類 (10) 色調灰白系。

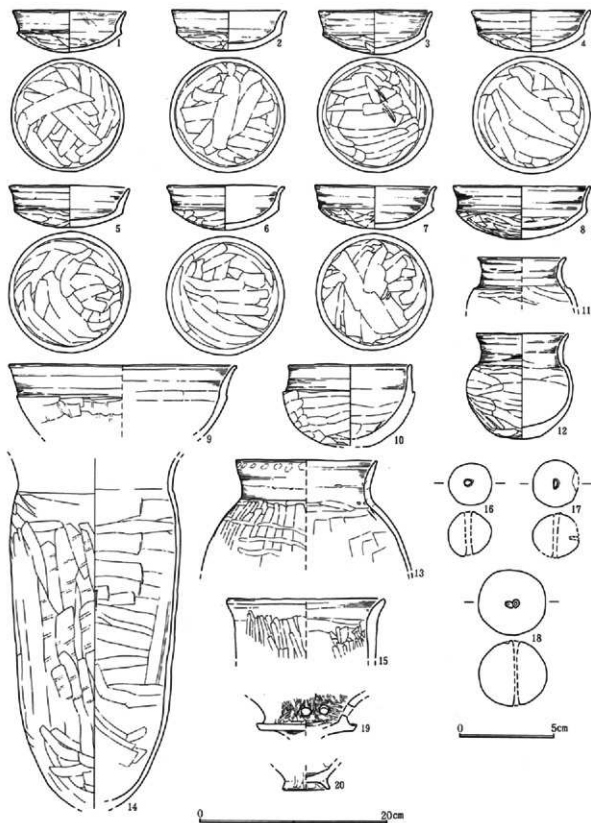
甕 A<sub>3</sub>類 (11・12) 色調灰白系。(19)は古墳前期結合土器でA<sub>2</sub>類。

A<sub>1</sub>-36号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	胎土位置
1	土師器坏	12		4.3	灰白	鉢縁1枚	
2	土師器坏	12.2		4.2	灰白	交差底面	
3	土師器坏	12.1		4.1	灰白	鉢縁1枚	
4	土師器坏	12.4		4.3	灰白	鉢縁1枚	
5	土師器坏	12.8		4.4	灰白	鉢縁1枚	
6	土師器坏	12.4		4.7	灰白	鉢縁1枚	
7	土師器坏	13		4.6	灰白	鉢縁1枚	
8	土師器坏	14.6		7.6	灰白	甕土	
9	土師器鉢	24		現高7.3	灰白	甕土	
10	土師器鉢	13.1		8.6	灰白	甕内底面	

番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	胎土位置
11	土師器甕	9.5		現高3.3		灰白	甕内
12	土師器甕	9.6		11.1		灰白	甕内面
13	土師器甕	15		現高11.5		赤褐	甕底
14	土師器甕	36+8		現高37		赤褐	甕内設置
15	土師器甕	17		現高6.5		灰白	甕内
16	土製玉	2.2×2.25	孔径0.5				甕底
17	土製玉	2.45×2.4	孔径0.3				甕底
18	土製玉	3.45×3.6	孔径0.4				甕底
20	土師器台付甕		5	現高2.3		灰白	甕土





第104図 A1-36号住居跡出土遺物

A<sub>1</sub>-37号住居跡 (第105図 P.L.28)

土師器 坏・壺・甕・甗がある。

坏 A<sub>1</sub>類 (1) 色調橙系で胎土は緻密細土である。

壺 A<sub>2</sub>類 (2) 甕B類と似て途違するが 形態は中間的なものであろうか。B類 (3) もまた甕類との峻別が困難である。口縁部の作り、寛磨き手法など壺に類するとした。

甕 D<sub>1</sub>類 (4) 内外面に紐作り痕が残り作りは粗雑。色調赤褐色系で胎土は粗雑。(5) はD<sub>2</sub>類 (中型)。(6) はD<sub>2</sub>類 (大型)。外面は丁寧な寛磨きを施す。色調はともに灰白系。(5) は胎土が粗い。

A<sub>1</sub>-37号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	胎土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器坏	11.1		現高4.5		橙	埋土	5	土師器壺	20	2.8	28.2	17	灰白	床面
2	土師器壺	18.6	7.8	31	27.5	赤褐	北西縁部	6	土師器壺	22.4	4.6	33.2	18	灰白	床面
3	土師器壺	12.9	6.7	21.2		灰白	床面	7	土師器甗			現高7.5		灰白	甗底上
4	土師器甗	18.2		15	16	赤褐	甗底芯材	8	土師器小笠形土	6				灰白	埋土



第105図 A<sub>1</sub>-37号住居跡出土遺物

A<sub>1</sub>-39号住居跡(第106図 P.L.28)

土師器・高坏・鉢・壺・甕類の他、古墳時代前期に属する高坏・壺が混入する。

坏 A<sub>1</sub>類(1・2) 色調は灰白系で、(2)は内面燻し焼成。A<sub>2</sub>類(3~7) 体部の深い(3・4)と扁平な(5~7)がある。色調灰白系。(4)は赤褐色系で口縁部が若干直立または内傾気味。D類(8)口縁部低く内屈し器肉は厚目、色調灰白系。

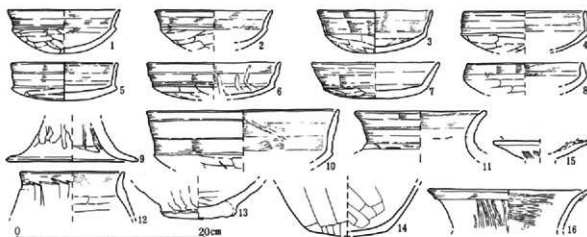
鉢 A類(10) 口縁部に2条の凹線をもつ。色調灰白系で内面燻し処理。

壺 B類(11) 色調灰白系で内面黒色処理。

(15)は異形高坏にならうか。(16)は折り返し口縁壺で内外面寛磨きを施す。両者古墳前期に属する。

A<sub>1</sub>-39号住(D-221)

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器坏	11.8		4.6		灰白	表面	9	土師器高坏		14	現高4.2		赤褐色	埋土
2	土師器坏	12.4		現高4.2		灰白	未型	10	土師器钵	20.3		現高6		灰白	埋土
3	土師器坏	12.2		4.5		灰白	埋土	11	土師器壺	14		現高4.8		灰白	埋土
4	土師器坏	12.3		現高4.3		赤褐色	埋土	12	土師器壺	11.1		現高4.8		灰白	埋土
5	土師器坏	11.3		4		灰白	表面	13	土師器壺		8	現高3.6		灰白	埋土
6	土師器坏	14.1		現高3.8		灰白	埋土	14	土師器甕		8.2	現高6		電	
7	土師器坏	15.6		3.8		灰白	埋土	15	土師器钵台	10				赤褐色	埋土
8	土師器坏	12.2		現高3.2		灰白	埋土	16	土師器甕	16.9		現高4.2		灰白	埋土

第106図 A<sub>1</sub>-39号住居跡出土遺物A<sub>1</sub>-41号住居跡(第107図)

土師器坏の他古墳前期に属する高坏・壺・甕がある。

坏 A<sub>1</sub>類(1) 色調橙系で胎土は緻密細土である。

(2)は高坏坏部で内外面に寛磨きを施す。色調灰白系。(3)は壺口縁部内外面寛磨き、色調赤褐色系で古墳前期に属する。

A<sub>1</sub>-41号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器坏	12.4		4.2		橙	埋土	3	土師器壺	16		現高5.2		赤褐色	A1-41号住居跡
2	土師器高坏	20		現高5.5		灰白	A1-41号住居跡	4	土師器甕	7.1		現高2.5		赤褐色	A1-41号住居跡

第107図 A<sub>1</sub>-41号住居跡出土遺物

A<sub>1</sub>-45号住居跡 (第108・109図 P.L.29)

土師器坏・鉢・甕・須恵器磁片・土製鍾・球・滑石製品の他古墳前期に属する高坏・壺などがある。

坏 A<sub>1</sub>類 (1~4) 色調は赤褐色系で (3) は内面に磨磨きを施す。B類 (5) 色調赤褐色系で内外面を黒色処理する。D類 (6~8) 色調灰白系。

甕 B類 (9) 色調灰白系。C<sub>1</sub>類 (10) 色調赤褐色系。D<sub>2</sub>類 (11・12) 色調灰白系。D<sub>3</sub>類 (13・14) 色調灰白系。

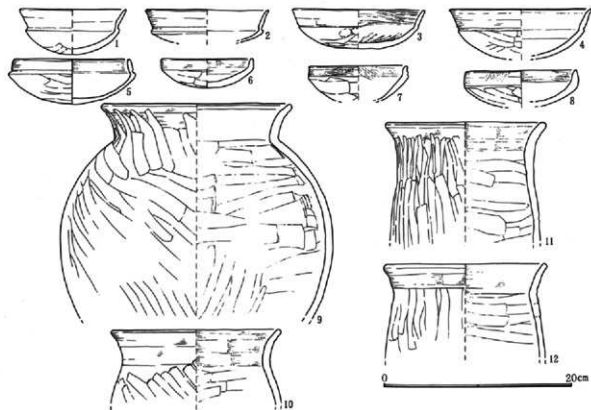
高坏 (23・24) は刷毛目後磨磨きを施す。(23) は異形高坏、(24) は脚部に4円孔を穿つ。

台付鉢 (25・26) は鉢F類に分類されようが内外面磨磨きを施し古墳前期的な様相がある。色調灰白系。

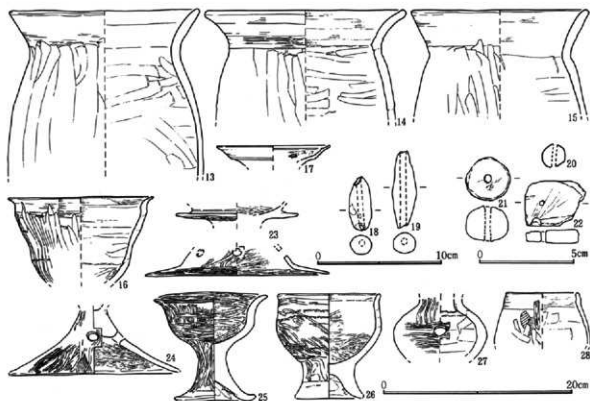
壺 (27) は胴部に円孔が穿たれ、須恵器磁の模倣かと思われるが磨磨きなど古式の技法がある。(16) は鉢・飯の判断ができない。口唇部の外反形態など古墳前期的な様相がある。色調は灰白系。(28) も前期に属する鉢にならう。

A<sub>1</sub>-45号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	土土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	土土位置
1	土師器坏	11.3		4.7		赤褐色	灰土	15	土師器甕	18.8		現高12		灰白	灰土
2	土師器坏	13		現高3.3		赤褐色	?	16	土師器鉢	15.4		現高9		灰白	灰土
3	土師器坏	15		3.7		赤褐色	灰土	17	須恵器磁片	12		現高2		灰	灰土
4	土師器坏	15		5.3		赤褐色	灰土	18	土製鍾	径4.1	径1.7			黒	灰土
5	土師器坏	12		4.7		赤褐色	灰土	19	土製鍾	径6	径1.8			黒	灰土
6	土師器坏	9.8		3		灰白	灰土	20	土製玉						
7	土師器坏	10.4		現高3.8		灰白	灰土	21	土製玉	2.3	1.8				灰土
8	土師器坏	11.8		現高3.8		灰白	灰土	22	石製磁造品	3.2	2	厚0.7			灰土
9	土師器甕	20.2		現高22.5	28.8	灰白	灰土	23	土師器結合土器			20			赤褐色
10	土師器甕	18		現高8		赤褐色	灰土	24	土師器高坏		18.2	現高7		灰白	?
11	土師器甕	17		現高13		灰白	灰土	25	土師器台付鉢	12.1	8.6	11.5		灰白	灰土
12	土師器甕	17.4		現高10		灰白	灰土	26	土師器台付鉢	11	7.5	11		灰白	灰土
13	土師器甕	20.2		現高17	20.7	灰白	灰土	27	土師器壺			現高6.5		灰白	灰土
14	土師器甕	21.4		現高11.5		灰白	灰土	28	土師器鉢	7.6		現高5.5		灰白	灰土



第108図 A<sub>1</sub>-45号住居跡出土遺物(1)



第109図 A1-45号住居跡出土遺物(2)

## A1-46号住居跡 (第110・111図 P.L.29)

土師器杯・鉢・壺・滑石製玉がある。

杯 A<sub>2</sub>類 (1) 色調赤褐色系。 B類 (2) 内外面黒褐色塗彩の痕跡がある。色調赤褐色系。 D類 (3)。(4)はE類にならうか。内面荒磨きは異質。

鉢 C類 (5) 色調灰白色。

壺 D<sub>2</sub>類 (7~12) 内面に紐作り痕が残り全体に器肉が厚く作りが粗雑。(9)の色調赤褐色系で他は灰白色。D<sub>3</sub>類 (13)は薄手。(14)は作りが粗雑で低い台状脚付き特異。色調灰白色。

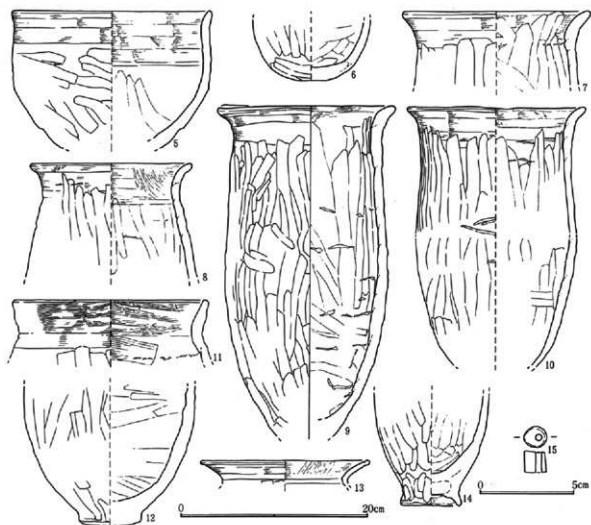
## A1-46号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	土師器杯	15		4.1		赤褐	壺土
2	土師器杯	12.5		4.3		赤褐	壺内
3	土師器杯	11		3.4		灰白	壺土
4	土師器杯	15		現高3		橙	壺内
5	土師器鉢	21		現高14.5		灰白	壺内
6	土師器壺			現高5.3		灰白	壺土
7	土師器壺	20		現高7.7		灰白	壺内
8	土師器壺	17		現高12		灰白	壺内

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
9	土師器壺	19		現高35		赤褐	壺内・壺底
10	土師器壺	19		現高27.3		灰白	壺内・壺底
11	土師器壺	21		現高6.6		赤褐	壺内
12	土師器壺		6.5	現高14.8		灰白	壺内
13	土師器壺	18		現高2.7		赤褐	壺内
14	土師器台付壺		6.5	現高11.8		灰白	壺内
15	石製滑石玉	長1.1	径1.1	孔径0.3			壺内



第110図 A1-46号住居跡出土遺物(1)



第111図 A1-46号住居跡出土遺物(2)

C-53号住居跡 (第112図 P.L.29・30)

土器器杯・高坏・鉢・壺・瓶・模造土器がある。

坏 A類 (1~5) (1)は色調橙系で他は赤褐色系。

高坏 A類 (6) 坏部は坏A類に類似、色調赤褐色系。C類 (7) 長脚で裾部に有段。色調赤褐色系。

鉢 C類 (8・9) (8)はやや小振りで色調灰白系、胎土は粗い。(9)は色調赤褐色系。

壺 A2類 (12) 色調灰白系で胎土は粗い。(10・11)はC類にならうか。(10)は色調橙系で胎土は緻密細土。(11)は内面黒色処理で色調灰白系。

瓶 A1類 (13) 色調灰白系で外面の施削りと内面撫では丁寧。

C-53号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土器器杯	14		4.7		橙	甕脇
2	土器器杯	14.8		5.1		赤褐	甕脇
3	土器器杯	14.8		4.3		赤褐	甕脇
4	土器器杯	16		4.5		赤褐	甕脇
5	土器器杯	14.6		4.5		赤褐	甕内
6	土器器高坏	14.4	11.3	12		赤褐	甕脇
7	土器器高坏		16	現高13		赤褐	北東隅味室
8	土器器鉢	12.1		8.5		灰白	甕脇

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
9	土器器鉢	14.6	5.6	11.3		赤褐	甕脇
10	土器器壺		3	現高10.8		橙	甕脇
11	土器器鉢			現高6.2	12.7	灰白	甕内
12	土器器壺	12.6		現高11		灰白	甕内
13	土器器瓶	34.5	9.4	33.3		灰白	甕脇
14	土器器模造土器		3.5	現高3.5		灰土	甕脇
15	模造土器	8.2	4.2	5.9		灰白	甕土



第112図 C-53号住居跡出土遺物

C-57号住居跡 (第113図)

土師器坏・鉢・甕がある。

坏 B類 (1) 色調赤褐色系。鉢 A類 (2) 色調灰白系。(3)は甕底部で色調赤褐色系。胎土は粗い。

C-57号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径値	色調	出土位置
1	土師器坏	12		4		赤褐/壤土	
2	土師器鉢	16		5.2		灰白/壤土	
3	土師器甕			6.8	6.7		赤褐/壤土



第113図 C-57号住居跡出土遺物

C-59号住居跡 (第114図)

土師器坏・鉢のほか古墳前期に属する甕がある。

坏 D類 (1・2) 色調灰白系で、(2)は器内が厚く作りがやや粗雑。

鉢 (3)はC類になろうか。(4~6)は古墳前期に属しよう。(4)は折り返し口縁。(6)は模造土器風である。

C-59号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径値	色調	出土位置
1	土師器坏	13		3.6		灰白/壤土	
2	土師器坏	14.2		規高1.4		灰白/壤土	
3	土師器鉢	20		規高1		赤褐/壤土	
4	土師器甕	19.2		規高3			赤褐/壤土
5	土師器甕			7.6	規高2		灰白/壤土
6	土師器模造土器			3.2	規高3.5		赤褐/壤土

第3章 検出された遺構と遺物



第114図 C-59号住居跡出土遺物

F-66号住居跡 (第115~117図 P L.30・31)

土器器坏・鉢・壺・甕・瓶など各種とも量が多い。

坏類は内外面に施磨きを施すものが多い。色調は灰白系で、7を除き内面は黒色処理がなされる。(1~4・7)は体部と口縁部の変換部に稜をつくり、A<sub>1</sub>類に似るがやや深みがあり若干異質な感じがする。7は鉢A類になろうか。(5・6)は体・口縁の区別が不鮮明で口縁部が外屈して曲がり、A<sub>1</sub>類の初原的な形態であろうか。

鉢 E類(8~11) 色調灰白系で、(8)は外面、(11)は内外面に施磨きを施す。(12)はF類になろう。内外面に施磨きを施しA<sub>1</sub>-45号住居跡台付鉢と同類であろう。内面黒色処理、色調灰白系。

壺 A<sub>1</sub>類(14・17)・A<sub>2</sub>類(15・16) いずれも色調灰白系で(14~16)は外面施磨きを施す。(29~32)は壺底部になろう。

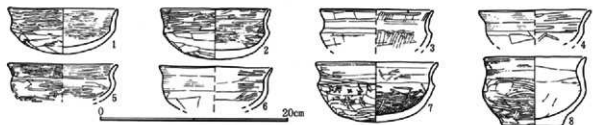
甕 C<sub>1</sub>類(18~21)・C<sub>2</sub>類(22~25) 色調灰白系、C<sub>3</sub>類(26)は色調赤褐色系で被熱剥離が著しい。D<sub>1</sub>類(27・28) 色調灰白系で胴部の張りやや大きい。

瓶 A類(33~36) 内外面施磨きを施し色調灰白系。 B<sub>1</sub>類(37) 色調灰白系。

(38)は土製品、扁平な楕円形で用途不明。

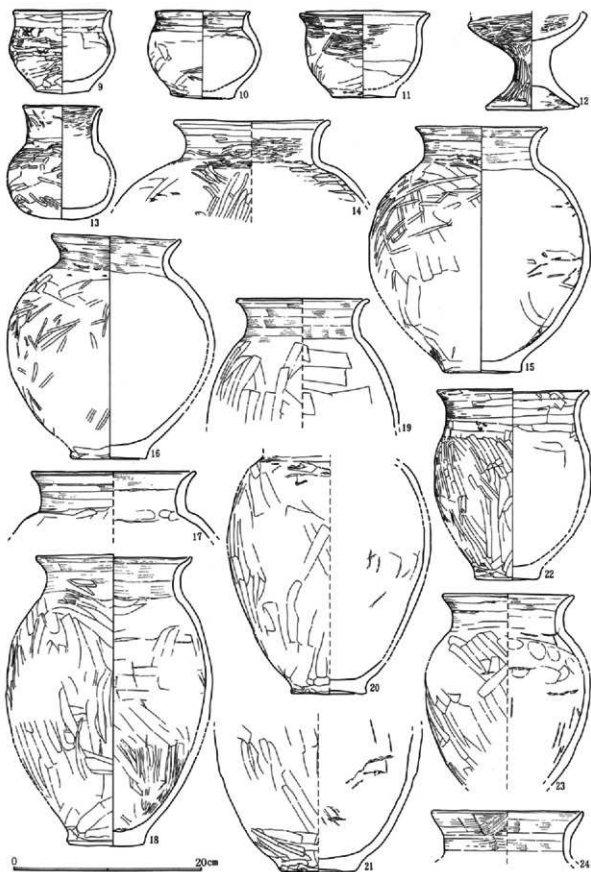
F-66号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置	
1	土器器坏	10.7		4.9	灰白	甕形器坏		
2	土器器坏	10.7		5.4	灰白	野藏穴		
3	土器器坏	12		現高4	灰白	埴土		
4	土器器坏	11.9		現高3.5	灰白	埴土		
5	土器器鉢	11.7		現高4	灰白	甕形体面		
6	土器器坏	12		現高4.2	灰白	埴土		
7	土器器鉢	13		6.4	灰白	埴土		
8	土器器鉢	10.5	6.5	7.3	灰白	野藏穴		
9	土器器鉢	10.5	5.5	8.8	灰白	甕形輪面		
10	土器器鉢	10	6.9	9.3	灰白	埴土		
11	土器器鉢	13.8	6.8	9.2	灰白	埴土		
12	土器器高坏		9.9	現高10.5	灰白	甕形輪面		
13	土器器坏	8.4		12	11.5	灰白	甕形輪面	
14	土器器甕	16.7		現高11	灰白	支那製器坏		
15	土器器甕	14	8.3	25.9	23.3	灰白	中央部	
16	土器器甕	13.8	7.8	23.4	22.1	灰白	中央部	
17	土器器甕	17.4		現高14	灰白	野藏穴		
18	土器器甕	16.6	8.3	30.9	31.8	灰白	中央部	
19	土器器甕	14.2		現高15.5	灰白	甕形体面		
20	土器器甕		8.1	現高25	21.5	灰白	甕形体面	
21	土器器甕			現高16.8		22.1	灰白	甕形体面
22	土器器甕	16.1	6.9	20.1			灰白	甕形体面
23	土器器甕	14		現高20.5		17.5	灰白	甕形体面
24	土器器甕	16		現高20.5			灰白	甕形体面
25	土器器甕	14		現高20.5			灰白	野藏穴
26	土器器甕	12	5.4	15.5			赤褐色	甕形体面
27	土器器甕	21.8		現高15.5			灰白	甕形体面
28	土器器甕	22		現高7.5			灰白	野藏穴
29	土器器甕	8		現高8.4			灰白	柱穴P4層
30	土器器甕	8.2		現高10			灰白	野藏穴
31	土器器甕	7.1		現高6.5			灰白	甕形体面
32	土器器甕or甕	8.5		現高4.5			灰白	甕形体面
33	土器器瓶	20.4	7.3	30		孔径7.3	灰白	甕形体面
34	土器器瓶	21.7	8.6	22.2		孔径7.5	灰白	甕形体面
35	土器器瓶	7.5		現高17.3		孔径7.0	灰白	甕形体面
36	土器器瓶	8.4		現高14.7		孔径8.0	灰白	中央部
37	土器器瓶	13.9	2.5	9.2		孔径2.5	灰白	甕形体面
38	土製品	長2	幅1.65	厚0.7			埴土	
39	土器器甕	7.2		現高4.5			灰白	埴土

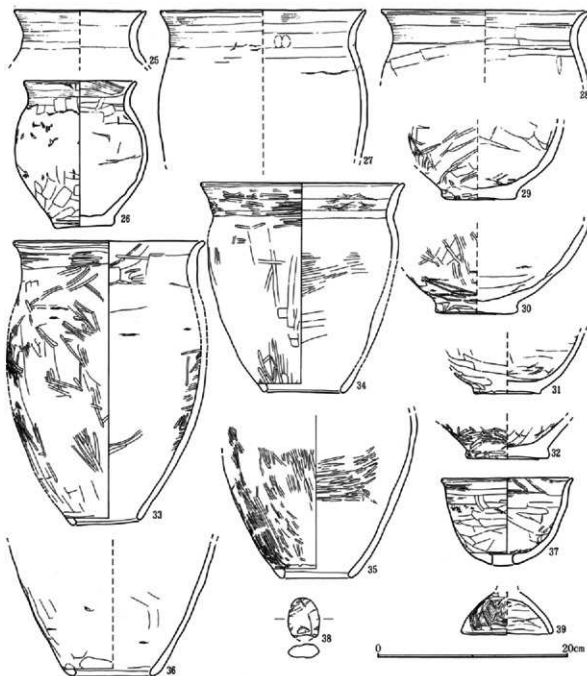


第115図 F-66号住居跡出土遺物(1)





第116図 F-66号住居跡出土遺物(2)



第117図 F-66号住居跡出土遺物(3)

E-90号住居跡 (第118・119図 P L.32)

土師器・鉢・甕・須恵器高坏・壺等のほか模造土器・砥石がある。

坏 A<sub>1</sub>類 (1~12) (1~10) は色調橙系で胎土は緻密細土である。(10) は内面黒色処理を施す。(11・12) は色調灰白系で、(11) は内面黒色処理、(12) は内外面に黒褐色塗彩の痕跡がある。A<sub>2</sub>類 (13~18) (13) 内外面に黒褐色塗彩の痕跡がある。B類 (19~27) (19) は胎土が緻密細土でB類には希である。(23) は内外面焼し焼成。(27) は内外面黒褐色塗彩。(28) は口縁部が直立し、須恵器坏蓋模倣のA類とすべきであろうか。

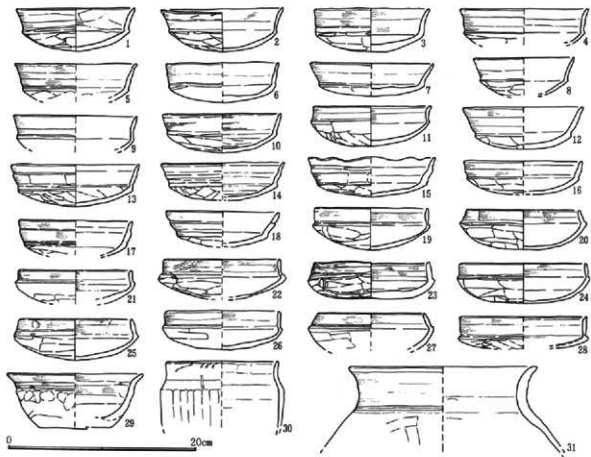
鉢 (29) はE類、(30) はB類になろう。

甕 B類 (31~33) (32) は胎土が粗い。D<sub>1</sub>類 (34・35)・D<sub>2</sub>類 (36) ともに胎土は粗い。

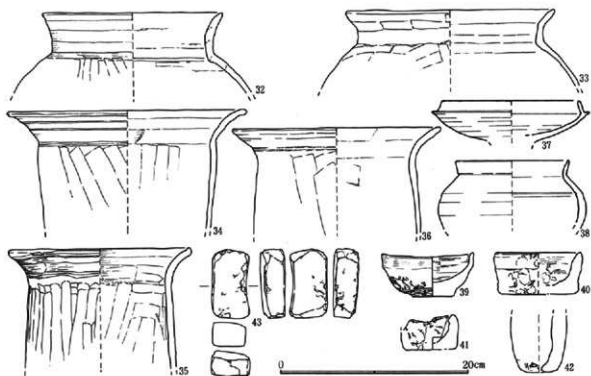
須恵器は (37) が長脚有蓋高坏, (38) が短頸壺である。(39~41) は模造土器でいずれも粗雑な作りである。(42) は筒状土製品で用途不明。(43) は流紋岩製砥石。

E<sub>3</sub>-90号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器坏	12.6		4.5		橙	甕内	23	土師器坏	12.3		4.8		灰白	甕内
2	土師器坏	13		4.5		橙	埋土	24	土師器坏	13.4		4.2		赤褐色	埋土
3	土師器坏	12.2		4.5		橙	埋土	25	土師器坏	12		4.3		赤褐色	埋土
4	土師器坏	13.5		3.6		橙	埋土	26	土師器坏	12.2		4.1		赤褐色	埋土
5	土師器坏	13		3.6		橙	埋土	27	土師器坏	11.4		4		赤褐色	埋土
6	土師器坏	12		4.3		橙	埋土	28	土師器坏	13.4		3.5		赤褐色	埋土
7	土師器坏	13		3.5		橙	埋土	29	土師器钵	14.5	7.5	5.7		灰白	埋土
8	土師器坏	10.6		4		橙	埋土	30	土師器钵	11.8		現高7		赤褐色	埋土
9	土師器坏	12		3.7		橙	埋土	31	土師器壺	19.8		現高9		灰白	埋土
10	土師器坏	12.6		4.1		橙	埋土	32	土師器壺	19		現高8.5		赤褐色	埋土
11	土師器坏	12.5		4.2		灰白	埋土	33	土師器壺	21.2		現高8.2		灰白	埋土
12	土師器坏	12.6		4.5		灰白	埋土	34	土師器壺	25.4		現高12.5		赤褐色	甕内
13	土師器坏	13.6		4.5		灰白	埋土	35	土師器壺	19.4		現高12.7		赤褐色	埋土
14	土師器坏	13		3.9		灰白	埋土	36	土師器壺	22		現高11.3		灰白	埋土
15	土師器坏	13.4		4.2		灰白	埋土	37	須恵器高坏	14.6		現高4.5		赤褐色	埋土
16	土師器坏	12.4		3.5		赤褐色	埋土	38	須恵器短頸壺	12		現高7	15.5	灰白	埋土
17	土師器坏	12		3.7		赤褐色	埋土	39	土師器模造土器	9.8	4.4	4.6		灰白	埋土
18	土師器坏	12		3.6		赤褐色	埋土	40	土師器模造土器	9	8	4.5		灰白	埋土
19	土師器坏	12		4.5		橙	埋土	41	土師器模造土器	5.2	5.5	3.6		灰白	埋土
20	土師器坏	12		4.2		灰白	埋土	42	筒状土製品			高さ4		灰白	埋土
21	土師器坏	12		3.6		灰白	埋土	43	砥石	長さ7.5	幅4.1	厚2.7		黒影	
22	土師器坏	12.4		4.3		灰白	埋土								

第118図 E<sub>3</sub>-90号住居踏出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



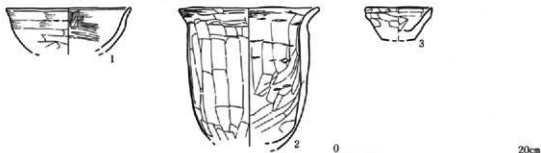
第119図 E3-90号住居跡出土遺物(2)

E3-92b号住居跡 (第120図 P.L.32)

坏(1)は内外面黒色処理、内面荒磨きが施され時代は平安期になろう。甕(2)はD2類(小型)で内面黒色処理される。

E3-92b号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器坏	13.2		4.5		灰白	甕土	3	土師器横土器	7	3.5	3.5		灰白	甕土
2	土師器甕	15.5	6	15.2		灰白	甕土								



第120図 E3-92b号住居跡出土遺物

E3-94号住居跡 (第121図 P.L.32・33)

土師器坏・甕・甌がある。後期よりやや時代が遡るであろう。

坏 D類(1) 全体の器内が薄く、体部が深めで異質。頸外の可能性もある。

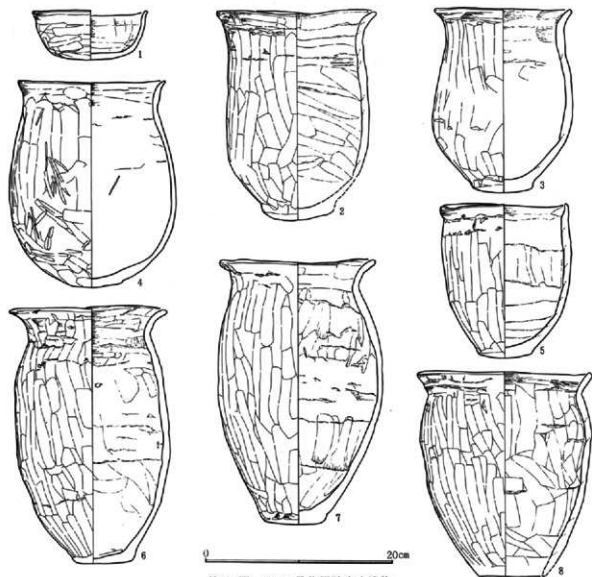
甕 D2類(中型)(2~4) (4)は胎土が粗く下半部の影らみ大きい。D1類(小型)(5) 口縁部は直立し内面が削げる。

D3類(中型)(6・7) 外面の荒削り痕が強く顕著で、内面の紐作り痕が残る。

甌 A類(8) 内外面の荒削り、荒撫でが強い。

E<sub>3</sub>-94号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器杯	12		5.2		灰白	甕石軸上	5	土師器甕	13.5	5.7	16.4		灰白	甕石軸上部
2	土師器甕	16.8	7	22		灰白	甕石軸上	6	土師器甕	16.3	6.4	25.3		灰白	甕石軸上部
3	土師器甕	14.4	6.3	19.4		灰白	甕石軸上部	7	土師器甕	16	6.5	21.7		灰白	甕石軸上部
4	土師器甕	15.6	5.5	21.5		灰白	甕石軸上部	8	土師器甕	18.3	7.5	21.5		灰白	中央床面

第121図 E<sub>3</sub>-94号住居跡出土遺物E<sub>3</sub>-96号住居跡 (第122図 P.L.33)

土師器杯・甕(瓶)・須恵器甕がある。

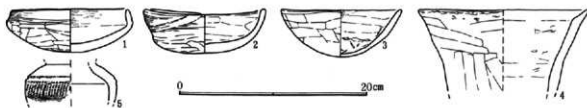
杯 B類(1) 内面燻し焼成。D類(2)。E類(3)。

(4)は甕・瓶いづれかは判別できない。(5)は須恵器甕片である。肩部に凹線を巡らせ胴部に櫛描き列点紋を施す。

E<sub>3</sub>-96号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器杯	12.6		4.5		灰白	床面	4	土師器甕	18		現高8.5		灰白	黒土
2	土師器杯	13		4.7		灰白	黒土	5	須恵器甕	胴径9.7		現高3.0		灰白	黒土
3	土師器杯	12.8		5		灰白	床面								

第3章 検出された遺構と遺物



第122図 E3-96号住居跡出土遺物

E3-98号住居跡 (第123図 P L. 33)

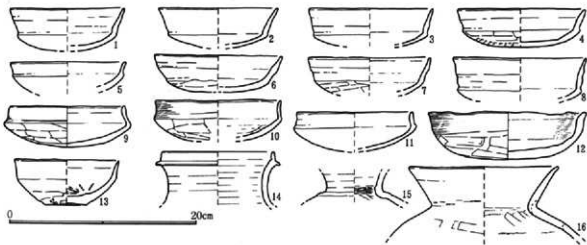
土師器・須恵器類がある。

坏 A<sub>1</sub>類 (1~5) (1~3) は胎土緻密細土。(4) は内外面に黒褐色塗彩を施す。(5) は口縁部の寸が短い。A<sub>2</sub>類 (6~8) (6) は内面黒色処理、(8) は口縁部丈で内外面に黒褐色塗彩が見られる。B類 (9~11) (10) の内外面に黒褐色塗彩。

須恵器 (14) は有蓋壺。(15) は長頸壺で頸基部には弱い凸帯が巡る。(16) は古墳前期土師器壺になろう。

E3-98号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器坏	12.2		器高4.5		靑 雑土	
2	土師器坏	12.6		器高4.2		靑 雑土	
3	土師器坏	13.1		器高4		靑 雑土	
4	土師器坏	13.5		4.1		灰白 雑土	
5	土師器坏	12.3		器高3		赤陶 雑土	
6	土師器坏	13.5		3.9		灰白 雑土	
7	土師器坏	13		器高3.8		灰白 雑土	
8	土師器坏	14		器高4.5		灰白 雑土	
9	土師器坏	12		4.7		赤陶 灰面	
10	土師器坏	13.4		器高4.2		赤陶 雑土	
11	土師器坏	12.3		器高12.3		赤陶 雑土	
12	土師器钵	16.8		5		灰白 雑土	
13	土師器坏	11	4.3	4.7		灰白 雑土	
14	須恵器有蓋壺	12		器高5.5		灰 雑土	
15	須恵器瓶			器高		灰 雑土	
16	土師器壺	15.8		器高7.5		灰白 雑土	



第123図 E3-98号住居跡出土遺物

E3-99号住居跡 (第124図 P L. 33)

土師器・壺・甕・須恵器高坏がある。

坏 A<sub>1</sub>類 (1) 胎土緻密細土。A<sub>2</sub>類 (2) 内外面に黒褐色塗彩痕がある。

壺 A<sub>2</sub>類 (3)

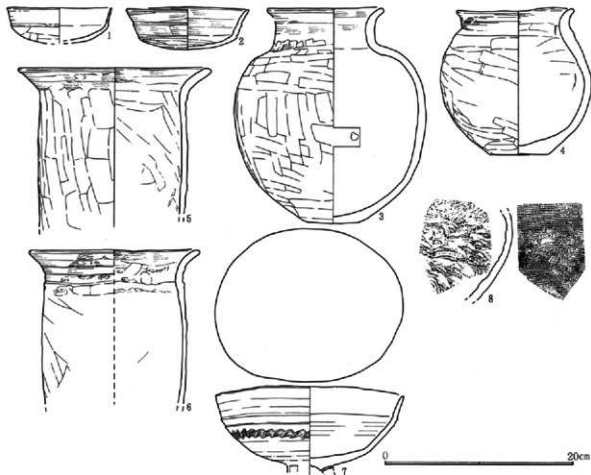
甕 B<sub>2</sub>類 (4) 器内厚く、口縁部短く外反する。胎土粗い。D<sub>1</sub>類 (5・6) 胎土粗い。

(7) は須恵器無蓋高坏、1条の凸線を巡らせ口縁部を区切る。下位により細凸線が巡り波状紋を施す。脚部には三方透かしの痕跡がある。(8) は横瓶であろうか、外面回転欄目、内面青海波当て目。

E<sub>3</sub>-99号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径倍	色調	出土位置
1	土師器坏	11.1		3.7		黒	室内
2	土師器坏	13		4.5		赤褐色	床面
3	土師器甕	17.5	5.4	22.5	20.2	灰白	埋土
4	土師器甕	12.4	6	15.3	15.9	灰白	灰層

番号	器種	口径	底径	器高	胴径倍	色調	出土位置
5	土師器甕	20.5		深高16.5		赤褐色	床面
6	土師器甕	18.1		深高16.3		赤褐色	埋土
7	須恵器高坏	16.1~20		深高8.8		青灰	埋土

第124図 E<sub>3</sub>-99号住居跡出土遺物E<sub>3</sub>-101b号住居跡 (第125図 P L. 34)

土師器坏・甕・瓶・模造土器・須恵器高坏がある。

坏 A<sub>1</sub>類 (1・2) (1)は胎土緻密細土。A<sub>2</sub>類 (3・4) (3)は内面黒色処理。(4)は内外面焼し焼成。B類 (5~7) (6)は内外面に黒褐色塗彩痕がある。

甕 B<sub>1</sub>類 (小型) (9) 下半部の被熱著しい。D<sub>2</sub>類 (小型) (10~14) (10)は内面黒色処理。(14)は胴部の被熱著しい。D<sub>3</sub>類 (16)。

瓶A類 (17) 口唇部丸く肥厚。

(19)は須恵器高坏脚部で短脚1段透かし。端部は器内薄く内湾して立つ。(21)は古墳前期器台坏部である。内外面斲磨き。

E<sub>3</sub>-101号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	土師器杯	11.4		4.3		褐色	埋土	12	土師器壺	16.6		現高8		灰白	埋土
2	土師器杯	12.8		4.3		赤褐色	埋土	13	土師器壺	16		現高8.5		灰白	床面
3	土師器杯	12.2		4.3		灰白	埋土	14	土師器壺	16.7		現高14		灰白	床面
4	土師器杯	14		4.5		灰白	埋土	15	土師器壺	20.4	4	33.5		灰白	床面
5	土師器杯	13.6		4		赤褐色	埋土	16	土師器壺	19.6		現高12.2		灰白	埋土
6	土師器杯	13		3.5		赤褐色	埋土	17	土師器瓶	23.3	9	23.7		灰白	甍石地蔵持
7	土師器杯	13.6		現高3.5		灰白	埋土	18	土師器瓶	12		現高7.5		灰白	埋土
8	土師器壺	20		現高5.3		灰白	埋土	19	須恵器高坏		9	現高6.3		灰	埋土
9	土師器壺	14.8	5	17.5	17	赤褐色	甍石編	20	土師器模造土器	10.5	5.5	4.5		灰白	甍前
10	土師器瓶	18		現高9.5		灰白	埋土	21	土師器部台	9.6		現高3.5		灰白	埋土
11	土師器壺	15		21		灰白	床面								



第125図 E<sub>3</sub>-101b号住居跡出土遺物



E<sub>3</sub>-105号住居跡(第126・127図 P.L.34・35)

土師器杯・鉢・甕・甌・須恵器杯・提瓶・滑石製品その他古墳前期の異形器台がある。

杯 A<sub>1</sub>類(1~3) 胎土緻密細土。(3)は大振りで体部が深い。A<sub>2</sub>類(4~9) (6)は扁平、(8・9)は深めの体部。(6・7)は内外面に黒褐色塗彩。B類(10・11) (10)は内面黒色処理。(11)は内外面に黒褐色塗彩。C類(12)。

鉢 E類(13・14) (14)は胎土が粗い。

甕 (15・16)は小型で口縁部が直立して小さな肩部をもち、A類に属しようか。(15)は胴部の被熱が著しい。D<sub>2</sub>類(小型)(17・18)。C類(19)。

甌 A類(20) 外面黒色処理。内外面とも寛磨き。

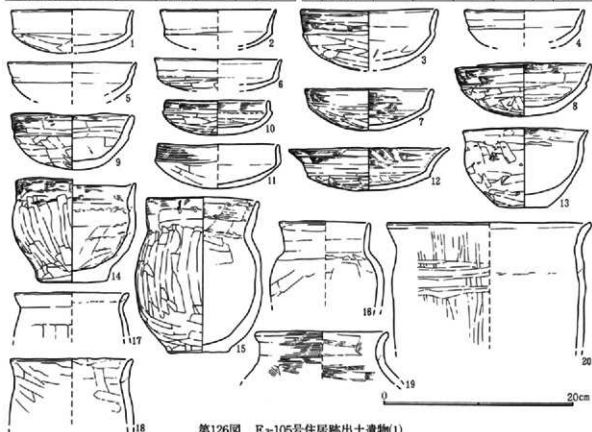
(21)は須恵器杯身で受け部の張り出しが弱い。(22)は提瓶で肩部に把手の痕跡がある。(23)は土師質の支脚と考えられる。(25)は土師器器台で、杯・脚部の境に板状の受けをもつ古墳前期異形器台である。

E<sub>3</sub>-105号住

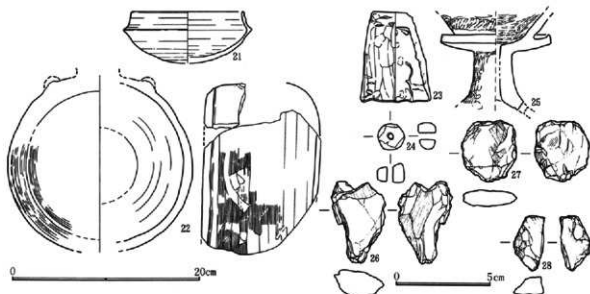
番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器杯	12.8		4.5		黒土		13	土師器鉢	13.2	5	8.3		赤輪	甕内
2	土師器杯	12.7		規高4.2		黒土		14	土師器鉢	12.7	7.3	10.8		灰白	甕内
3	土師器杯	14.6		6.5		焼 赤面		15	土師器甕	12	6.5	16.3		灰白	甕内
4	土師器杯	12.6		3.8		灰白 黒土		16	土師器甕	9.6		規高9		赤輪	甕内
5	土師器杯	12.6		規高4.1		灰白 黒土		17	土師器甕	12		規高4.5		灰白	甕内
6	土師器杯	12.5		規高3.4		赤輪 黒土		20	土師器甌	21.5		規高13		灰白	甕土
7	土師器杯	12.1		4.4		赤輪 灰面		21	須恵器杯	12		5.4		灰	甕内
8	土師器杯	14.3		5.5		灰白 黒土輪縁部		22	須恵器提瓶	胴径19.5	胴厚12.3	胴高18		灰	灰埋土
9	土師器杯	13		6		灰白		23	土師器支脚	上径3.7	下径7.4	9.5		赤輪	甕右輪縁部
10	土師器杯	11		3.6		灰白 黒土		24	滑石製白玉	径1.3	厚1	孔径0.3		埋土	
11	土師器杯	12.8		4.6		赤輪 甕手前内面		25	土師器器台	杯口径11.5		規高10.4		赤輪	灰面
12	土師器杯の鉢	17		4.5		赤輪 灰面									

E<sub>3</sub>-187号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
15	土師器甕	14.2		規高5.5		埋土		18	土師器甕	13		規高7		埋土	

第126図 E<sub>3</sub>-105号住居跡出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



第127図 E3-105号住居跡出土遺物(2)

E3-108号住居跡 (第128・129図 P.L.35)

土師器 器・高坏・甕・瓶がある。

器 A<sub>1</sub>類 (1~4) (4)は内外面に黒褐色塗彩。A<sub>2</sub>類 (5~10) (5)の内面には9本の放射状の條痕がある。(11)は口縁部の直立する形態で遺跡内での類例は希少で本紙分類項目にはない。B類 (12~14) (13)内外面、(14)内面には黒褐色塗彩の痕跡がある。D類 (15・16) (15)の内外面は黒褐色塗彩。

高坏 C類 (17) 裾部の段はやや弱い。

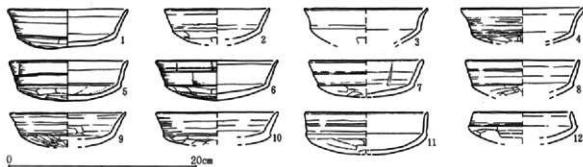
甕 B<sub>1</sub>類 (中型) (18) 胎土粗く、内外面に成形紐作り痕残る。胴下半部が被熱し赤化剥落が著しい。

D<sub>2</sub>類 (大型) (21)

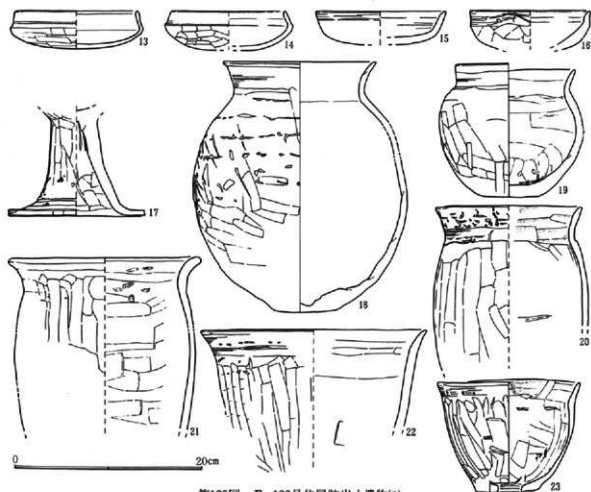
瓶 A類 (23)。

E3-108号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器 器	12.7		4.2		灰白	床面	12	土師器 器	12.0		現高4		灰白	甕内
2	土師器 器	11.2		現高3.7		灰白	埴土	14	土師器 器	12		4.2		赤褐色	埴土
3	土師器 器	13		3.7		灰白	埴土	15	土師器 器	13.0		3.5		灰白	埴土
4	土師器 器	13		現高3.6		灰白	埴土	16	土師器 器	12.0		現高1.1		灰白	埴土
5	土師器 器	12.5		4.2		灰白	床面	17	土師器 高坏		14.6	11.6		灰白	甕内
6	土師器 器	13		4.3		灰白	床面	18	土師器 甕	16.3	6.5	26.5	22.6	灰白	甕内
7	土師器 器	12.2		3.8		灰白	埴土	19	土師器 甕	12.7	6.2	14.2		灰白	甕内
8	土師器 器	12		現高3.8		灰白	甕形	20	土師器 甕	15.4		現高17.3	16.4	灰白	甕内
9	土師器 器	12.2		3.5		灰白	床面	21	土師器 甕	20.4		現高18.2		灰白	甕内 甕口外縁部
10	土師器 器	13		現高3.3		灰白	埴土	22	土師器 瓶	24		現高15		灰白	甕内 甕口外縁部
11	土師器 器	13		4.5		赤褐色	埴土	23	土師器 瓶	15.1	6.9	11.9	孔径2.5	灰白	土器内 甕内
12	土師器 器	10.4		現高3.5		灰白	埴土								



第128図 E3-108号住居跡出土遺物(1)



第129図 E3-108号住居跡出土遺物(2)

## E3-109号住居跡(第130~132図 P.L.35~37)

土師器坏・鉢・甕・須恵器坏蓋・高坏・長頸壺・土製鈴・鎌・玉・滑石製品などがある。

坏 A<sub>1</sub>類(1~15) (1~13)は胎土緻密細土。(12・13)は内面黒色処理。A<sub>2</sub>類(16~27)(19・23・26)は胎土緻密細土。(20・21・25・27)には内外面に黒褐色塗彩がある。(28)は口縁部が直立し口唇内側に段をもつ。B類(29~31) (29)は内外面焼し焼成。

鉢 D類(34) 胎土緻密細土。口縁部は内傾して高く立つ。F類(35)。

甕 B<sub>1</sub>類(大型)(37~39) (37)の胎土粗い。B<sub>2</sub>類(中型)(40)、D<sub>1</sub>類(41・42・44・45)、D<sub>2</sub>類(小型)(43)ともに胎土粗い。D<sub>3</sub>類(46・47)。

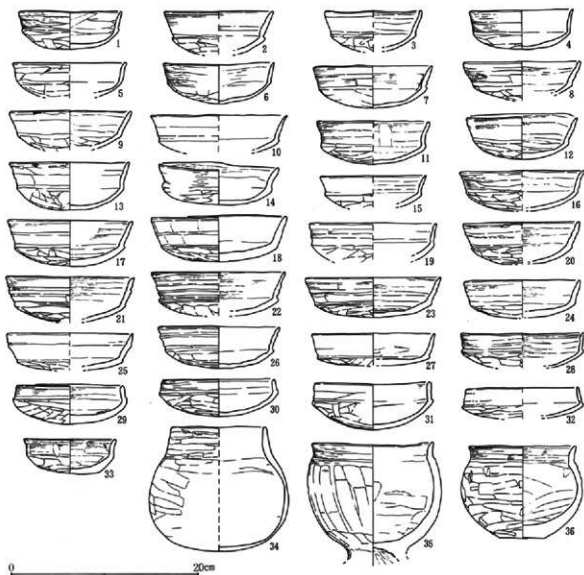
(51)は土鈴で摘み部に1孔を穿つ。

## E3-109号住

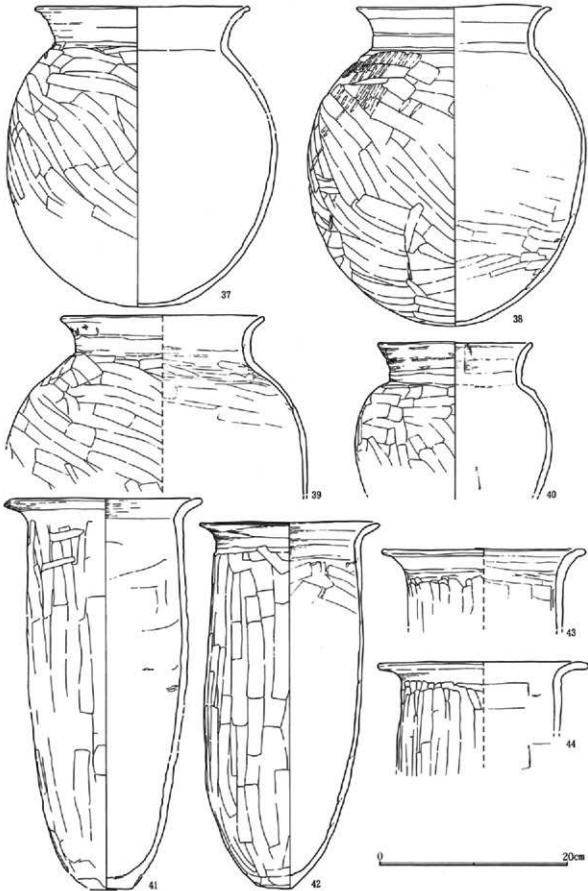
番号	器種	口径	直径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	直径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器坏	11.9		4		橙	土師器坏	11	土師器坏	12		4.5		橙	床面
2	土師器坏	11.6		4.6		橙	粗土	12	土師器坏	10.7		4.8		橙	粗土
3	土師器坏	10.3		4.3		橙	粗土	13	土師器坏	12.8		5		橙	床面
4	土師器坏	11		4.1		橙	粗土	14	土師器坏	12.8		4.5		橙	床面
5	土師器坏	12		3.5		橙	粗土	15	土師器坏	11.2		3.2		灰白	甕影
6	土師器坏	11.6		4.4		橙	粗土	16	土師器坏	13.2		4.2		灰白	粗土
7	土師器坏	12.6		4.7		橙	粗土	17	土師器坏	13.3		4.8		灰白	中央粗土
8	土師器坏	12.4		4.2		橙	粗土	18	土師器坏	14.4		4.9		灰白	古甕粗土
9	土師器坏	13		4.5		橙	粗土	19	土師器坏	13.4		3.8		灰白	甕影
10	土師器坏	14.4		現高3.8		橙	粗土	20	土師器坏	12.4		4.4		橙	粗土

第3章 検出された遺構と遺物

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
21	土師器杯	13.6		4.8		灰白	埋土	29	土師器壺	21.6		現高19.7	30.5	赤褐	埋土
22	土師器杯	14.2		4.7		赤褐	埋土	40	土師器壺	16.2		現高16	20.8	灰白	床面
23	土師器杯	14.4		4.2		赤褐	埋土	41	土師器壺	21.1	4.5	41.4		赤褐	赤褐色口瓦葺
24	土師器杯	12.3		4		橙	埋土	42	土師器壺	19.2	3.8	38.5		赤褐	赤褐色口瓦葺
25	土師器杯	13.4		4		赤褐	埋土	43	土師器壺	21.5		現高9		赤褐	床面
26	土師器杯	12.9		4.4		赤褐	埋土	44	土師器壺	22.3		現高12		灰白	中央埋土
27	土師器杯	13		3.4		橙	埋土	45	土師器壺	14.1	2.4	25		赤褐	電柱脚
28	土師器杯	13		3.7		赤褐	埋土	46	土師器壺	19.9	4	36.3		灰白	電柱口瓦葺
29	土師器杯	10.3		4.2		灰白	埋土	47	土師器壺	22.7		現高31.5		赤褐	電柱口瓦葺
30	土師器杯	11.9		3.9		灰白	電柱埋基部	48	須恵器壺	11.2		3.1		灰	彫形
31	土師器杯	12.3		5		赤褐	床面	49	須恵器高杯			11.6	現高15.3	灰	埋土
32	土師器杯	11.8		3.3		赤褐	埋土	50	須恵器長頸壺			現高15.5	胴口部H	灰	床面
33	土師器杯	9.7		3.6		灰白	須恵器埋土	51	土製鈴	2.5x1.0x0.5kw					埋土
34	土師器鉢	10		13.1	14.6	橙	埋土	52	土製鈴	胴3.5x1.8kw	径1.8cm	全径3.1-3.5w			埋土
35	土師器付片罌	12.9		9.6	14	赤褐	埋土	53	須恵土製品	胴3.3cm	径3.3cm				埋土
36	土師器付片罌	11.3	4.8	9.6		赤褐	古瓦葺埋土	54	土製小次	径0.2x0.25cm		厚0.45cm			埋土?
37	土師器壺	22.8		31.5	28.5	赤褐	古瓦葺埋土	55	石製白瓦	1.8x1.8x0.8kw			孔径0.3		埋土
38	土師器壺	20.6		34	29.3	赤褐	古瓦葺埋土								

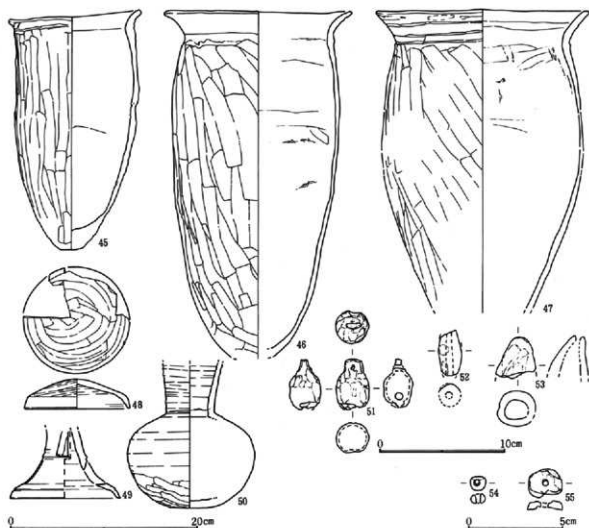


第130图 E-109号住居跡出土遺物(1)



第131図 E-109号住居跡出土遺物(2)

第3章 検出された遺構と遺物



第132図 E<sub>3</sub>-109号住居跡出土遺物(3)

E<sub>3</sub>-110号住居跡 (第133図 P L. 37)

土師器坏・甕がある。

坏 A<sub>2</sub>類 (1) 胎土緻密細土。B類 (2)。

甕 D類 (3)。

E<sub>2</sub>-112号住居跡 (第133図 P L. 37)

土師器坏・鉢・甕・模造土器がある。

坏 A<sub>2</sub>類 (1) 体部極めて扁平。B類 (2) 内面黑色処理。

鉢 D類 (3) 口縁部高く直立気味。

甕 D類 (4) 胎土粗い。

E<sub>3</sub>-110号住

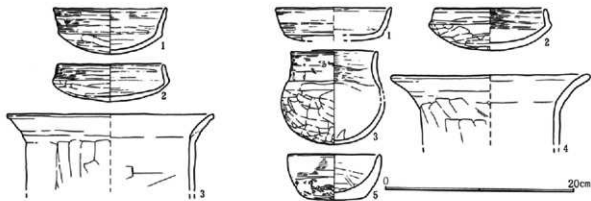
番号	器 種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器坏	12		4.8		赤陶	甕内
2	土師器坏	11.5		4		赤陶	甕土

番号	器 種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
3	土師器甕	22		甕高8		灰白	甕土

E<sub>2</sub>-112号住

番号	器 種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器坏	12.4		3.4		赤陶	甕内
2	土師器坏	11.6		4.5		灰白	甕土
3	土師器鉢	9.3		10	11	灰白	甕土

番号	器 種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
4	土師器甕	21		甕高7.3		赤陶	甕内
5	土師器坏	10	6.2	4.6		灰白	甕土

第133図 E<sub>2</sub>-110・112号住居跡出土遺物E<sub>2</sub>-114号住居跡 (第134・135図 P.L.38)

土師器杯・高坏・鉢・壺・甕・須恵器甕片・模造土器・砥石・滑石製白玉・滑石原石などがある。

杯 A<sub>2</sub>類 (1~5) (1・2)は内外面、(3)は内面に黒褐色塗彩。(4・5)は体部扁平。B類 (6~11) (7)は内外面、(8)は内面に黒褐色塗彩。(11)は体部が深い。E類 (12) やや作りが粗い。

高坏 D類 (13) 作りがやや粗雑。

鉢 A類 (14) は坏D類系の分類にならうか。C類 (16)。F類 (17)。

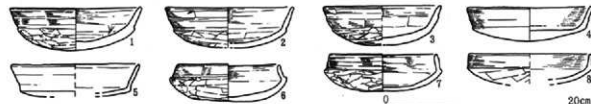
壺 C類 (18) 腰部に施磨ぎ痕残るが器面の荒れ著しい。

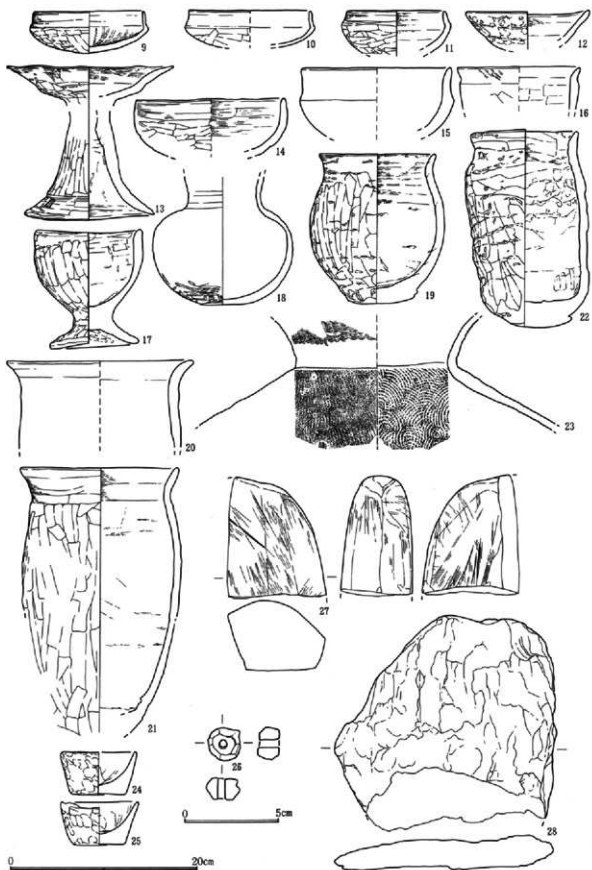
甕 C 1類 (19) 底部壁厚し口縁部が短い。D<sub>1</sub>類 (20) 胎土粗く、被熱による赤化著しい。D<sub>2</sub>類 (21) 底部極めて肉厚で胎土粗い。(22)は底部に木炭痕があり肉厚で作りは粗雑。

須恵器甕 (23)は口縁部衝指き波状紋、胴部平行叩き、内面同心円当て目。(27)は転石流紋岩製砥石で半欠刃痕が残る。(28)は流紋岩の原石。

E<sub>2</sub>-114号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器杯	13.9		4.5		灰白	灰面	15	土師器鉢	15.8		現高7.2		灰白	灰面
2	土師器杯	13.3		5.2		灰白	灰面	16	土師器鉢	12.9		現高4.5		赤褐	埋土
3	土師器杯	12.4		4		灰白	灰面	17	土師器合竹鉢	11.5	9	12.5		灰白	赤褐色埋土
4	土師器杯	12.9		3.5		灰白	灰面	18	土師器甕		4	現高13.7	14.7	灰白	土層埋土
5	土師器杯	13.6		3.4		赤褐	埋土	19	土師器甕	12.3	7	15.8		灰白	土層埋土
6	土師器杯	10.8		3.9		灰白	灰面	20	土師器甕	20		現高9.3		赤褐	甕古地之材
7	土師器杯	11.4		4		灰白	赤褐色埋土	21	土師器甕	17	6	27.9		灰白	土層埋土
8	土師器杯	12.8		3.2		灰白	埋土	22	土師器甕	11.5	6.5	20.8		灰白	土層埋土
9	土師器杯	11.5		4.4		灰白	甕左縁部	23	須恵器甕	胴径17.1		現高13		灰白	北溝埋土
10	土師器杯	12.8		3.8		灰白	埋土	24	土師器模造土器	8.1	5.7	4.6		灰白	内3上面
11	土師器杯	10.4		4.5		灰白	埋土	25	土師器模造土器	8.2	5.6	4.6		灰白	灰面
12	土師器杯	12.1		現高4		灰白	灰面	26	石製白玉	1.8×1.7	厚1.1				埋土
13	土師器高坏	17.9	13.7	16.2		灰白	北溝埋土	27	砥石	13	10.3	7		男儀	埋土
14	土師器鉢	16		6		灰白	埋土	28	滑石原石	23	22	3			灰面

第134図 E<sub>2</sub>-114号住居跡出土遺物(1)



第135図 E<sub>r</sub>-114号住居跡出土遺物(2)



E<sub>3</sub>-115号住居跡 (第136・137図 P L.38~40)

土師器坏・鉢・甕・瓶・模造土器がある。

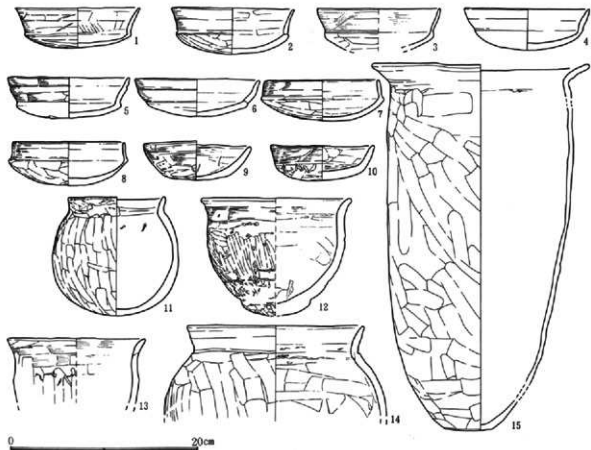
坏 A<sub>1</sub>類 (1~3) 胎土緻密細土。A<sub>2</sub>類 (4~6) (6)は内外面に黒褐色塗彩。B (7・8) (7)は内面燕し焼成、(8)は内外面に黒褐色塗彩。D類 (9・10) 作りがやや粗雑で模造土器よりは若干上手。(9)は内外面に黒褐色塗彩。

鉢 D類 (11)。E類 (12・13) (12)は内面黒色処理で底部厚く作りやや粗雑。

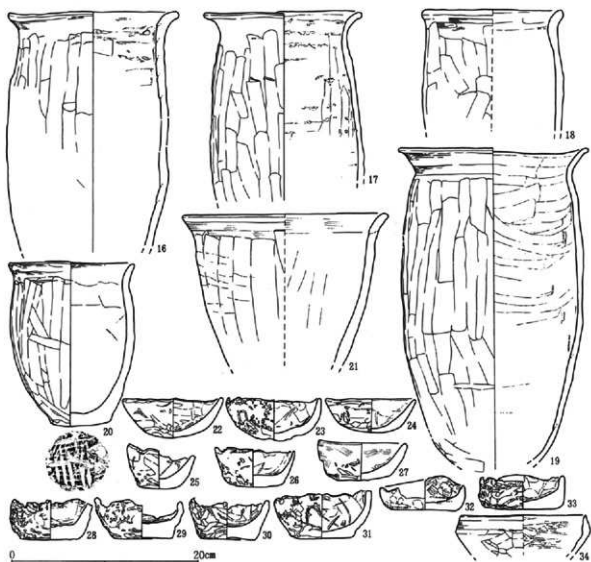
甕 B 1類 (14)。D<sub>1</sub>類 (15~18) 大・中・小がある。ともに胎土は粗い。D<sub>2</sub>類 (19・20) 大・小である。(20)の底部には編み目状圧痕がある。(19)は胎土が粗い。

E<sub>3</sub>-115号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器坏	13.2		4.3		橙	甕左脇部	18	土師器甕	15.1		現高11.9		灰白	甕右脇部
2	土師器坏	13		4.6		橙	甕土	19	土師器甕	20.2	5	33.8		赤褐	甕口内并材
3	土師器坏	13		現高4.2		橙	甕土	20	土師器甕	13.4	6.5	17.4		赤褐	甕左前部
4	土師器坏	13.2		4.4		灰白	甕底内面	21	土師器瓶	21.8		現高15.7		灰白	中央部
5	土師器坏	13		4.3		赤褐	甕前部	22	土師器模造土器	10.7		4		灰白	甕左脇部
6	土師器坏	13.2		4		赤褐	甕土	23	土師器模造土器	10		4.5		灰白	甕左脇部
7	土師器坏	12.2		4.3		灰白	中央部	24	土師器模造土器	9.6	3.5	3.5		灰白	甕左脇部
8	土師器坏	12		4.6		灰白	中央部	25	土師器模造土器	7.2	4.4	4.7		灰白	甕左脇部
9	土師器坏	11.4		4.2		灰白	甕左脇部	26	土師器模造土器	8.5	6	4.3		灰白	甕左脇部
10	土師器坏	11.1		3.8		灰白	中央部	27	土師器模造土器	9.4	6.9	3.9		灰白	甕底内面
11	土師器鉢	10.3		12.5		灰白	甕左脇部	28	土師器模造土器	8.4	6.2	4.2		灰白	甕底内面
12	土師器鉢	16	7.2	13.4		灰白	甕左脇部	29	土師器模造土器	9.2	6	4.3		灰白	甕左脇部
13	土師器鉢	14.6		現高6.8		灰白	甕土	30	土師器模造土器	8.3	6	4.3		灰白	中央部
14	土師器甕	18.1		17.0	23.5	灰白	甕前部	31	土師器模造土器	10.2	6.8	5.2		灰白	甕左脇部
15	土師器甕	23	4.8	38.6		赤褐	甕口内并材	32	土師器模造土器	8.9	6.8	3.7		灰白	甕土
16	土師器甕	18.2		現高26		灰白	甕左脇部	33	土師器模造土器	9	8	3.6		灰白	甕底内面
17	土師器甕	16.9		現高19.6		赤褐	甕内	34	土師器坏	13.4		現高4		灰白	甕土

第136図 E<sub>3</sub>-115号住居跡出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



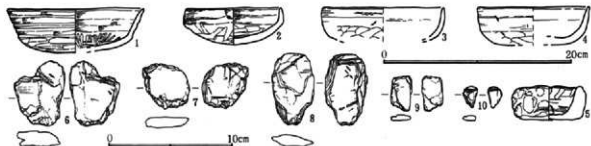
第137図 E-115号住居跡出土遺物(2)

E-116号住居跡 (第138図 P.L.40)

土師器環 A<sub>2</sub>類 (1) 見込み部に放射状施磨き痕がある。D類 (2~4)。

E<sub>2</sub>-116号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器環	14.5		4.7		灰白	P2脚床面	4	土師器環	11.8		4		灰白	墓土
2	土師器環	10.1		3.8		灰白	中央床面	5	土師器模造土器	7	6	3.5		灰白	東半床面
3	土師器環	12.9		3.5		灰白	墓土								



第138図 E-116号住居跡出土遺物

E<sub>2</sub>-122号住居跡 (第139・140図 P.L.40・41)

土師杯・鉢・壺・甕・瓶・模造土器・須恵器横瓶がある。

杯 A<sub>2</sub>類 (1~4) (4)の内面は黒色処理の痕跡が残る。

鉢 C類 (5) ややA類に似る。D類 (6) は口縁部直立し丈高。

壺 D<sub>2</sub>類 (8)。瓶 A類 (9) 内面に艶磨きを施すが胎土は粗い。B<sub>2</sub>類 (10)。

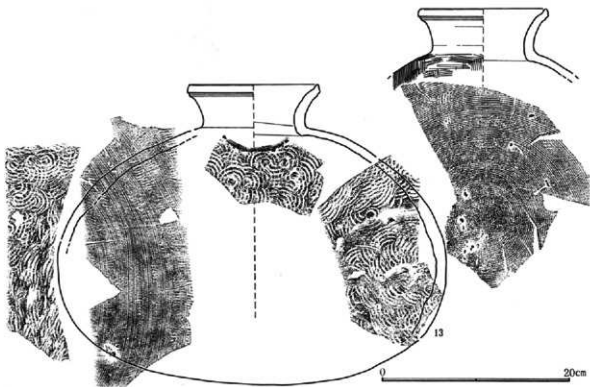
(7)は壺と考えられるが下腹れの胴部など前代的な様相が強い。(13)は須恵器横瓶で外面平行叩き後柳掻きを施し、片端面に「×」柳掻き紋がある。内面同心円紋当て目。

E<sub>2</sub>-122号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器杯	12.4		4.5		灰白	甕内・古柳掻
2	土師器杯	12.4		4.5		灰白	甕内・古柳掻
3	土師器杯	13.6		4.6		灰白	埋土
4	土師器杯	12.6		4.2		灰白	甕内・古柳掻
5	土師器鉢	18.9		8.8		灰白	甕内・古柳掻
6	土師器鉢	19.2		10.3		灰白	甕内・古柳掻
7	土師器壺	18		現高21	33.7	赤褐色	中央埋土

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
8	土師器壺	16.2		現高15.2		灰白	甕内・古柳掻
9	土師器瓶	25.6	10	31		赤褐色	甕内・古柳掻
10	土師器瓶	14.9		8.1		灰白	甕内・古柳掻
11	土師器模造土器	11.2	4.8	5.6		灰白	中央埋土
12	土師器模造土器		4.8	現高3.4		灰白	中央埋土
13	須恵器横瓶	13.5		現高31.3		灰	中央埋土

第139図 E<sub>2</sub>-122号住居跡出土遺物(1)



第140図 E2-122号住居跡出土遺物(2)

E2-123号住居跡 (第141図 P.L.41)

土師器・高坏・甕・模造土器がある。

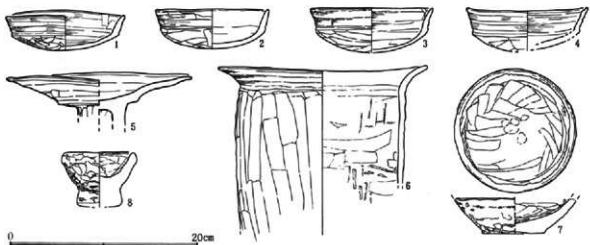
坏 A・B類 (1~4) (4)は胎土緻密細土で赤化土塗布による発色の可能性がある。

高坏 D類 (5)。

甕 D1類 (6) 胎土は粗い。(7)は甕底部で紐作り接合部の摩滅顯著、破損後の置き台の転用が考えられる。

E2-123号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径地	色調	出土位置
1	土師器坏	12.6		4.2	灰白	西面麻面		5	土師器高坏	19.6		現高6		赤褐	東面麻面
2	土師器坏	12		4.1	灰白	黒石混焼土		6	土師器甕	20.1		現高18.4		赤褐	東面麻面
3	土師器坏	13		4.7	灰白	粗土		7	土師器甕			現高3.7		灰白	西面麻面
4	土師器坏	12.8		4.5	橙	磨製麻面		8	土師器模造土器	7.6	4.8	5.8		灰白	麻面



第141図 E2-123号住居跡出土遺物

E<sub>2</sub>-124号住居跡 (第142・143図 P.L.41・42)

土師器坏・甕・瓶・模造土器がある。

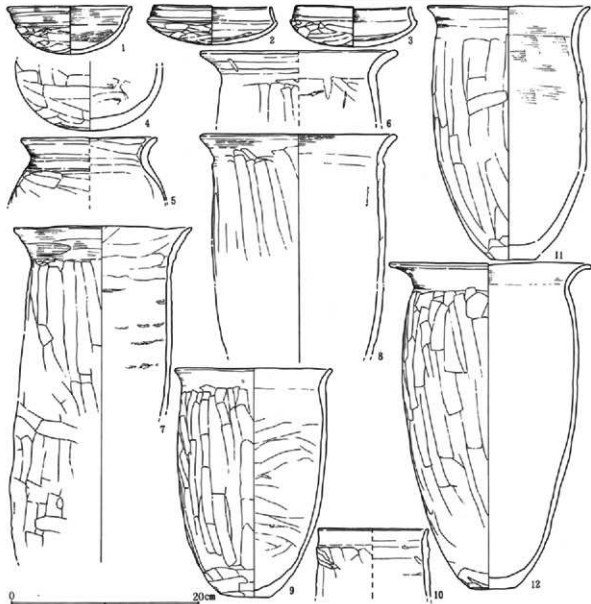
坏 A<sub>2</sub>類 (1) 体部丸味強く深め。内面黒色処理。B類 (2・3) (3) は内外面黒褐色塗彩。

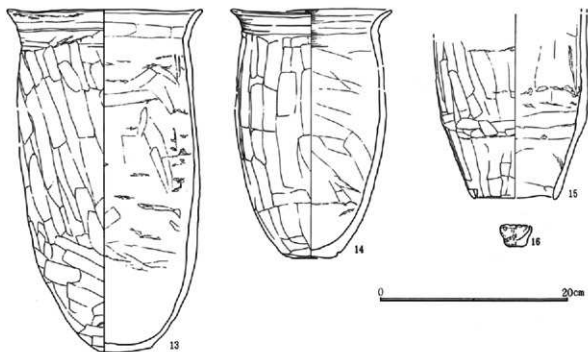
甕 B類 (5)。D<sub>1</sub>類 (6~9) 大・中型で、胎土が粗い。D<sub>2</sub>類 (11) 中型で胎土は粗い。D<sub>3</sub>類 (12~14) 胎土は粗い。(11) はD<sub>1</sub>類の可能性もあるが口縁部は直立。(4) は壺類になろう。

瓶 A類 (15) 胎土粗い。

E<sub>2</sub>-124号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器坏	13.2		5.1		灰白	P1上面	9	土師器甕	16.4	5.4	34		灰白	墓左脇床面
2	土師器坏	12.5		4.1		灰白	甕右脇端	10	土師器甕	11.7		現高7		赤褐色	墓内
3	土師器坏	12.3		4.2		灰白	P1上面	11	土師器甕	17.1	4.7	26.5		灰白	甕左脇面
4	土師器甕			現高7.4	15.5	灰白	甕床面	12	土師器甕	21	4.8	34.5		赤褐色	甕口内8号
5	土師器甕	14.5		現高7.1		赤褐色	甕床面?	13	土師器甕	20.8	5.6	36		赤褐色	甕口内8号
6	土師器甕	21		現高7.5		灰白	甕土	14	土師器甕	16.7	4.5	26		赤褐色	甕蓋口内
7	土師器甕	19		現高15.4		灰白	甕土?	15	土師器甕		8.7	現高19.5		赤褐色	甕蓋左脇床面
8	土師器甕	21		現高13.3		赤褐色	甕土?	16	土師器模造土器	3.4	2	2.2		灰白	甕土

第142図 E<sub>2</sub>-124号住居跡出土遺物(1)



第143図 E<sub>2</sub>-124号住居跡出土遺物(2)

E<sub>2</sub>-125号住居跡 (第144図)

土師器 甕 A<sub>2</sub>類 (1) 体部扁平で内外面黒褐色塗彩。

E<sub>2</sub>-126号住居跡 (第144図 P.L.42)

土師器 鉢・鉢・甕がある。

鉢 A<sub>1</sub>類 (1) 体部扁平で口縁部直立気味に外反。胎土緻密細土。B類 (2) 内外面黒褐色塗彩。D類 (3)

鉢 C類 (4) 胎土粗い。D類 (5)。

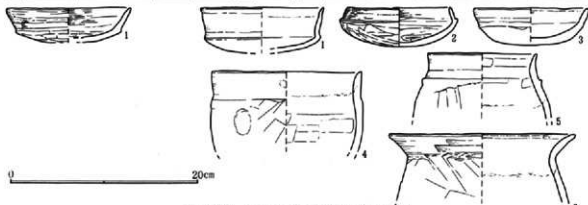
甕 D<sub>3</sub>類 (6)。

E<sub>2</sub>-125号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	土師器 甕	15.3		3.7		灰白 黒土	

E<sub>2</sub>-126号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	土師器 鉢	13		4.8		焼 黒土		4	土師器 鉢	15.8		現高9.4		灰白 黒土	
2	土師器 鉢	11		4		灰白 赤面		5	土師器 鉢	11.6		現高6.6		14.7 灰白 黒土	
3	土師器 鉢	12.2		3.9		灰白 黒土		6	土師器 甕	19.8		現高7.3		灰白 黒土	



第144図 E<sub>2</sub>-125・126号住居跡出土遺物

## E-130号住居跡 (第145図 P L. 42)

土師器杯 B類 (1) 内外面に黒褐色塗彩の痕跡が残る。

(2) は鉢形で作りが粗雑で形状が著しく歪む。(3) は土製玉である。

## E3-130号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器杯	11.7		4.3		赤褐	床面
2	土師器鉢	16.6	13	11		灰白	貯蔵穴内

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
3	土製白玉	径1.4	厚1.06	孔径0.3			埋土



第145図 E-130号住居跡出土遺物

## E-134号住居跡 (第146・147図 P L. 43)

土師器杯・壺・甕がある。

杯 B類 (1) 内面黒色処理と放射状施磨き。D類 (2) 体部に丸味が有り口縁部小さく外反。胎土粗い。

壺 A類 (3) 大型である。

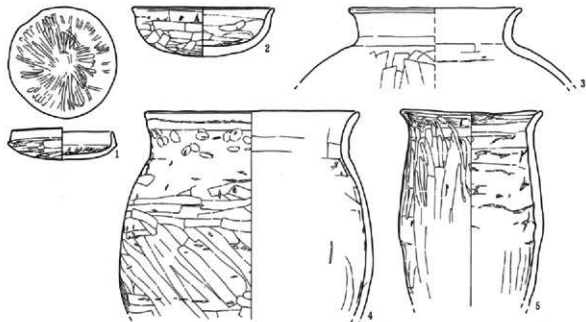
甕 C類 (4) 口縁部直立気味に外反。D類 (5)。(6・7) は作りが粗雑。

瓶 A類 (8)。

## E3-134号住

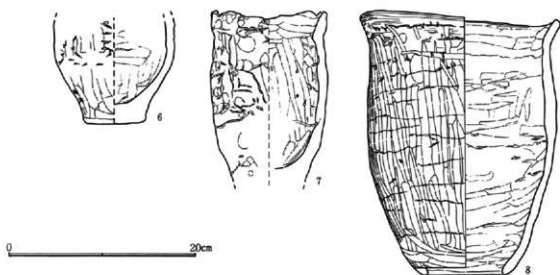
番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器杯	10.9		3.4		灰白	埋土
2	土師器鉢	15.2		5.2		灰白	甕内底面下
3	土師器壺	18.2		現高8	27	赤褐	貯蔵
4	土師器甕	22.8		現高10	27	灰白	埋土

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
5	土師器壺	15.1		現高20.5		灰白	甕先端部
6	土師器甕		6.6	現高11.2		灰白	床面
7	土師器甕		12	現高18		灰白	甕内底面下
8	土師器瓶	21.3	8.5	27.8		単孔	灰白



第146図 E-134号住居跡出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



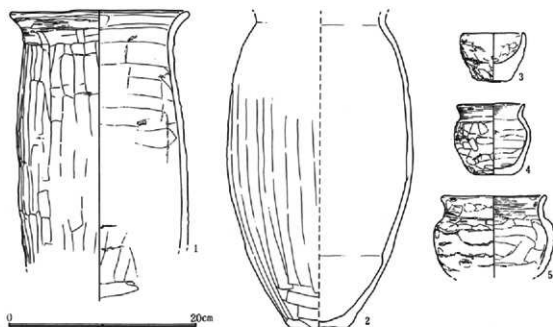
第147図 E<sub>3</sub>-134号住居跡出土遺物(2)

E<sub>3</sub>-138号住居跡 (第148図 P.L.43)

土師器甕 D<sub>2</sub>類 (1)。D<sub>3</sub>類 (2)。(3~5) は模造土器、(4・5) の作りは粗雑。

E<sub>3</sub>-138号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径倍	色調	出土位置
1	土師器甕	19.1		原高30.3		灰白	甕内
2	土師器甕	6	3.6	原高32.2	19.6	灰白	甕内
3	土師器模造土器	7	3.6	5.1		灰白	甕胴部縁
4	土師器小器甕	11.2		原高5.7		灰白	甕内
5	土師器小器甕	7.2	3.8	7.6		赤褐色	甕胴部縁



第148図 E<sub>3</sub>-138号住居跡出土遺物

E<sub>3</sub>-140号住居跡 (第149~151図 P.L.43~45)

土師器坏・鉢・壺・甕・甗・模造土器・須恵器坏蓋・高坏脚部がある。

坏 A<sub>1</sub>類 (1)。B類 (2~4) 内外面に施磨き、(2・3) は内外面に黒褐色塗彩。(4) は内面黒色処理。E類 (5・6) 口縁部緩く外反する。



鉢 C類(7) 胎土が粗い。(8)はF類になろう。(9)は分類外で古墳前期の可能性ある。口縁部は直線的に外傾し丸く張る胴部で平底。内外面に弱い寛削り・撫で後施磨きを施す。

壺 A類(10) 大型で外面胴部弱い寛削り後施磨きを施す。

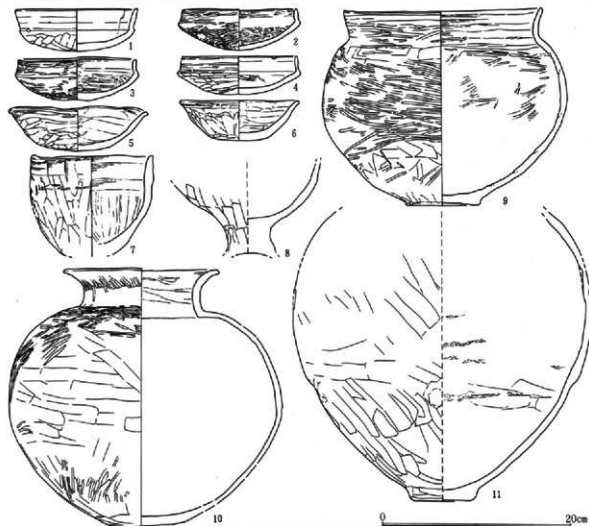
甕 C類(11)。D<sub>1</sub>類(12)。D<sub>2</sub>類(13)。D<sub>3</sub>類(14~17)。

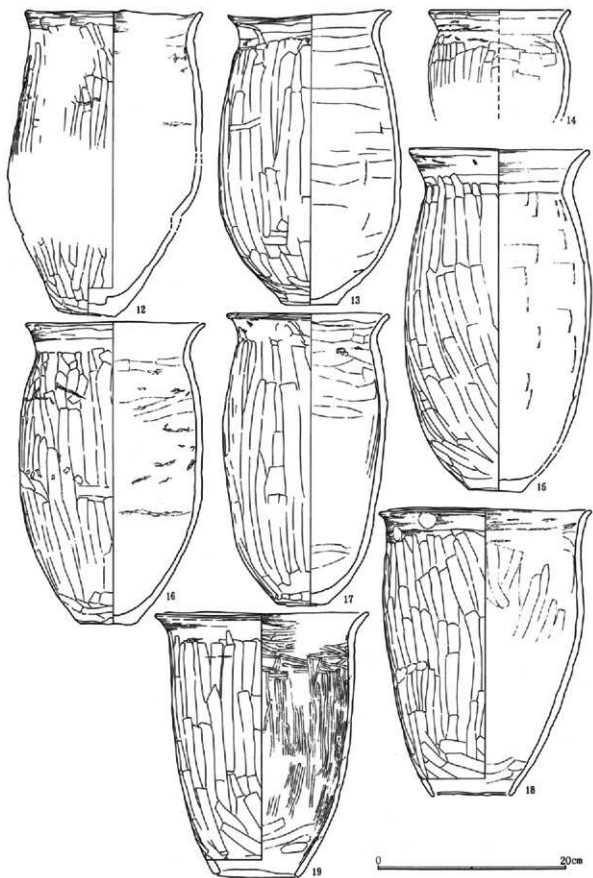
瓶 A類(18~21) (19)は内面、(20)は外面に施磨きを施す。B<sub>1</sub>類(22)。

(23)須恵器坏蓋は丸味のある天井部で弱い段をなして、口縁部は外傾する。(24)は長脚1段透かし高坏脚部。

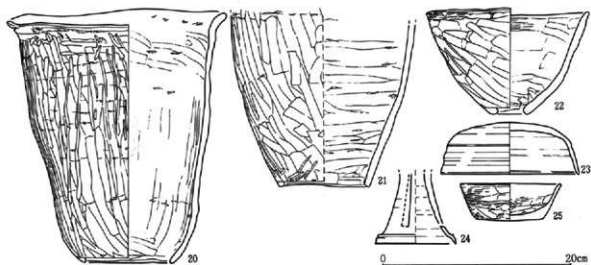
E<sub>3</sub>-140号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置	
1	土師器鉢	13		4.4		灰白	壺内	14	土師器壺	15		履高11.5		灰白	中央床面	
2	土師器鉢	12.3		4.3		灰白	壺土	15	土師器壺	19.2	5.8	36.2		灰白	中央床面	
3	土師器鉢	12.5		4.5		灰白	壺内	16	土師器壺	19.1	6.5	31.8		赤褐	壺内設置	
4	土師器鉢	12.2		4		灰白	壺内	17	土師器壺	17.3	5.9	30.8		灰白	中央床面	
5	土師器鉢	14.7		4.8		灰白	壺前床面	18	土師器瓶	22.5	8.5	30.4		単孔	中央床面	
6	土師器鉢	12.7		4.3		灰白	壺土	19	土師器瓶	22.6	9	27.7		単孔	灰白	壺前床面
7	土師器鉢	12.9		履高10.8		灰白	壺内(穴跡?)	20	土師器瓶	23.4	9.4	26.9		単孔	灰白	北西床面
8	土師器台付鉢	台径4.7	履高10	15.5		灰白	壺土	21	土師器瓶		9.8	履高19.2		単孔	灰白	中央床面
9	土師器壺	21	7.9	20.8	26	灰白	中央床面	22	土師器瓶	17.2	4	11.2		単孔	灰白	中央床面
10	土師器壺	36	8	27.1	28.7	灰白	壺内設置?	23	須恵器蓋	14.6		5.4		灰	壺前(穴跡)	
11	土師器甕	4	履高30.8	31.2		赤褐	中央床面	24	須恵器高坏		8.4	履高7.5		灰	壺前(穴跡)	
12	土師器甕	19	5.1	32.4		灰白	北西床面	25	土師器瓶	10.4	7	3.9		灰白	壺土	
13	土師器甕	17.3	5.5	31		灰白	中央床面									

第149図 E<sub>3</sub>-140号住居跡出土遺物(1)



第150図 E-140号住居跡出土遺物(2)



第151図 E3-140号住居跡出土遺物(3)

## D-149号住居跡 (第152図 P L. 45)

土師器杯・壺・甕・模造土器がある。

杯 A<sub>1</sub>類 (1~3) (2)は内面焼し焼成。(3)は口縁部低く扁平。A<sub>2</sub>類 (4) 体部扁平で口唇部内屈。B類 (5) 内外面磨き、内面黒色処理。

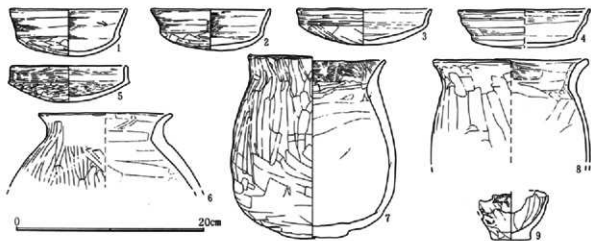
甕 B<sub>2</sub>類 (7) 下腹れの胴部。D<sub>2</sub>類 (8)。

(6)は壺に分類されよう。E2-122号住居跡 (7)と同類型。

## D-149号住

番号	形 種	口径	底径	高さ	胴径他	色調	出土位置
1	土師器杯	12.4				黄	壺内
2	土師器杯	12.7		4.3		灰白	内面
3	土師器杯	14.2		3.8		赤褐	埋土
4	土師器杯	14		4		灰白	埋土
5	土師器杯	12.4		3.8		灰白	埋土

番号	形 種	口径	底径	高さ	胴径他	色調	出土位置
6	土師器甕	14.2		19.4		灰白	壺内
7	土師器甕	14.6	6.8	19.4		灰白	壺内
8	土師器甕	16.6		壺高11		赤褐	埋土
9	土師器模造土器		4	5.2		灰白	埋土



第152図 D-149号住居跡出土遺物

## E2-159号住居跡 (第153図 P L. 46)

土師器杯・甕に古墳前期の遺物が混じる。

杯 A<sub>1</sub>類 (1) 内外面黒褐色塗彩。A<sub>2</sub>類 (2~4) 体部は扁平。(4)は内外面黒褐色塗彩。D類

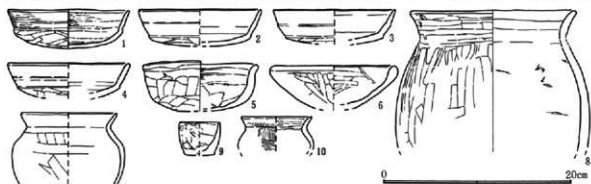
第3章 検出された遺構と遺物

(5) 器内厚く口唇部は外屈し丸まる。E類 (6) 口唇部丸く肥厚する。

堯 B類 (7) C類 (8) (10) は刷毛目調整で古墳前期小型堯。

E<sub>2</sub>-159号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	
1	土師器杯	13		4.1		灰白	甕土	6	土師器杯	13.6		4.6		灰白	甕土	
2	土師器杯	13		3.9		赤陶	甕土	7	土師器小型堯	12.2		現高8		12	赤陶	甕土
3	土師器杯	13		3.6		灰白	甕土	8	土師器堯	17.6		現高14.8	20.5	灰白	甕内	
4	土師器杯	13		3.7		灰白	甕土	9	土師器埴土器	4.3	3.1	3.5		灰白	甕土	
5	土師器杯	12.3		5.3		灰白	甕土	10	土師器小型堯	7.4		現高3.7		8	赤陶	甕土



第153図 E<sub>2</sub>-159号住居跡出土遺物

E<sub>2</sub>-169号住居跡 (第154・155図 P L. 46)

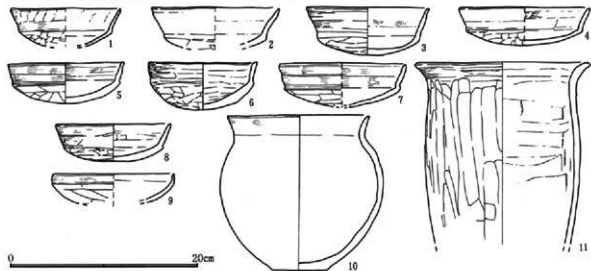
土師器杯・堯がある。

杯 A<sub>1</sub>類 (1~6) (1~3) は胎土緻密細土。A<sub>2</sub>類 (7・8) D類 (9) 内外面黒褐色塗彩。

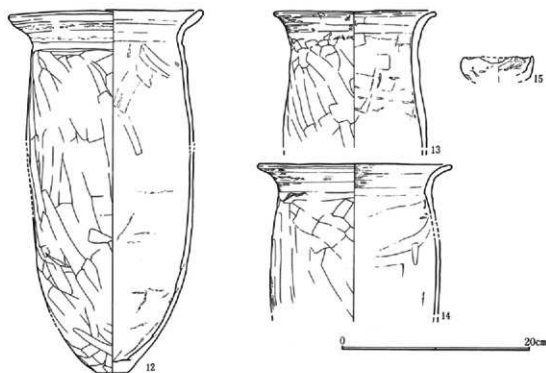
堯 B類 (10) 胎土粗く、器表の荒れ著しい。D<sub>1</sub>類 (11・12)。D<sub>2</sub>類 (13) D<sub>3</sub>類 (14) ともに胎土粗い。

E<sub>2</sub>-169号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	
1	土師器杯	11.7		4.2		赤	甕土	9	土師器杯	12.8		3.2		灰白	甕土	
2	土師器杯	13.6		4.5		赤	甕土	10	土師器堯	15	5.7	16.2		17	赤陶	甕土
3	土師器杯	13		5		赤	甕土	11	土師器堯	18.5		現高10.2			赤陶	貯蔵穴
4	土師器杯	13.8		4.1		灰白	甕土	12	土師器堯	20.6	3.3	38.5			赤陶	貯蔵穴
5	土師器杯	12.2		4.3		赤陶	甕土	13	土師器堯	17.3		現高14.9			赤陶	甕土
6	土師器杯	11.5		5		赤陶	甕土	14	土師器堯	20.7		現高15.9			灰白	貯蔵穴
7	土師器杯	13.2		4.2		灰白	甕土	15	土師器埴土器	7.3		現高2.7			灰白	甕土
8	土師器杯	12.3		4		灰白	甕土									



第154図 E<sub>2</sub>-169号住居跡出土遺物(1)

第155図 E<sub>2</sub>-169号住居跡出土遺物(2)E<sub>2</sub>-170号住居跡 (第156・157図 P L. 46・47)

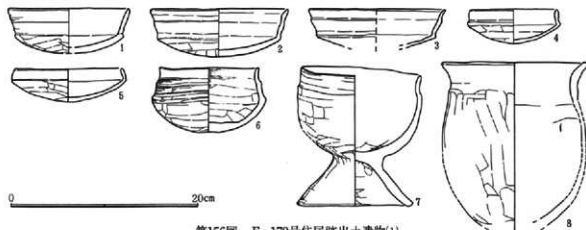
土師器坏・鉢・甕がある。

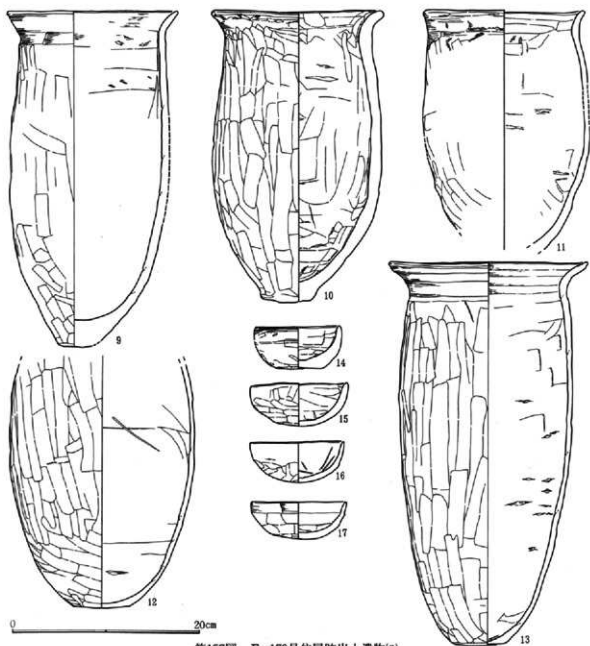
坏 A<sub>1</sub>類 (1) 内面焼き焼成。A<sub>2</sub>類 (2・3) (3)は内外面黒褐色塗彩。B類 (4・5)。

鉢 C類 (6)。F類 (7) 胎土粗い。

甕 C類 (8) 胎土粗い。D<sub>1</sub>類 (9) 底部極厚で胎土粗い。D<sub>2</sub>類 (11・12) (11)は胎土粗い。D<sub>3</sub>類 (13)。E<sub>2</sub>-170号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径幅	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径幅	色調	出土位置
1	土師器坏	12.9		4.8		灰白	甕内	10	土師器甕	18.3	5.7	30.3		灰白	甕左端芯材
2	土師器坏	14.5		5		赤褐色	埋土	11	土師器甕	17.2		24.8		灰白	甕右端芯材
3	土師器坏	14.5		現高4		灰白	甕裏面埋土	12	土師器甕		6	25.6		赤褐色	甕右脇
4	土師器坏	9.2		3.6		赤褐色	甕内	13	土師器甕	21.1	5.6	40.8		灰白	甕左脇
5	土師器坏	11.3		3.5		赤褐色	埋土	14	土師器坏	9.1	4.7	4.5		灰白	甕内
6	土師器鉢	10.5		6.8		灰白	甕右脇	15	土師器坏	30.4		4.5		灰白	甕内
7	土師器合付鉢	12.9	12.3	14.8		灰白	甕右端芯材	16	土師器坏	10		4.2		灰白	甕内
8	土師器甕	15.4		17.7		赤褐色	中央甕面	17	土師器坏	10.2		4		灰白	甕内
9	土師器甕	18.1	3.5	35.5		灰白	甕底口								

第156図 E<sub>2</sub>-170号住居跡出土遺物(1)



第157図 E=170号住居跡出土遺物(2)

E=171号住居跡 (第158~160図 P.L.47~49)

土器器坪・高坪・鉢・甕・須恵器甕がある。

坪 A<sub>1</sub>類 (1~3) (1・2)は胎土緻密細土。(3)は内面焼し焼成。A<sub>2</sub>類 (4) 内外面黒褐色塗彩。B類 (6・7) 内外面黒褐色塗彩。C類 (8) 内面黒色処理。

高坪 B類 (9)。

鉢 A類 (10)。C類 (11)。

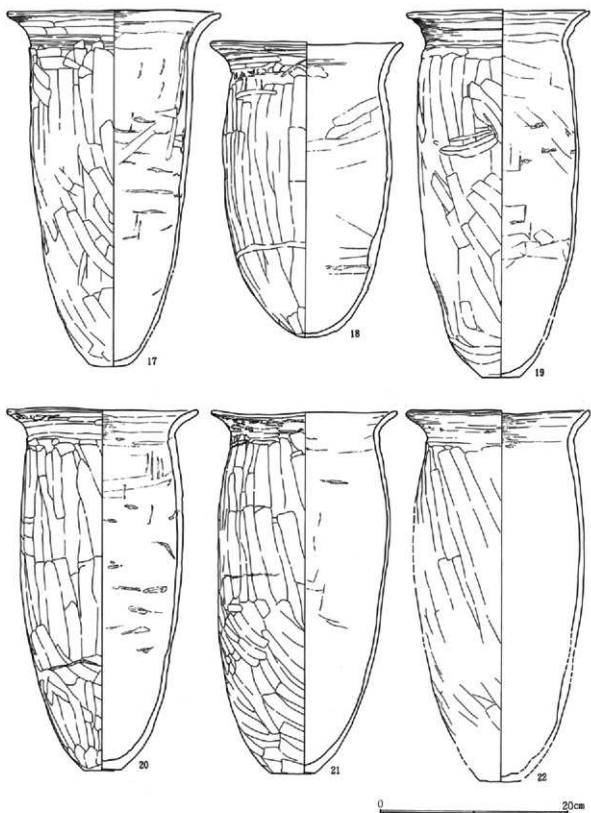
甕 B類 (13・14) 大型で胎土粗い。 B<sub>2</sub>類 (15) 胎土粗い。D<sub>1</sub>類 (16・17)。D<sub>2</sub>類 (18~22) (18)は底部木葉痕があり、胎土粗い。

(23) 須恵器甕は口縁部に低い凸線を巡らせ、上・下位に櫛掻き波状紋を施す。胴部外面平行叩き、内面同心円当て目。

E<sub>3</sub>-171号住

番号	形種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	形種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器杯	12		現高3.5		褐色	土	18	土師器壺	20.5		31.2		赤褐色	中央部直
2	土師器杯	13.8		4.2		褐色	北東部直	19	土師器壺	19.4	4	38.8		灰白	中央部直
3	土師器杯	13.5		4.7		灰白	壺内	20	土師器壺	20.4	4	38.7		灰白	壺右端直
4	土師器杯	13		4.1		赤褐色	土	21	土師器壺	19.8	4.6	38.2		灰白	壺口天部直
5	灰室器杯蓋	13.4		3.8		灰	土	22	土師器壺	19.6	4	39.1		灰白	壺右端直
6	土師器杯	13.8		4		灰白	内側表面	23	須恵器壺	22.8		現高18		灰	土
7	土師器杯	13.3		3.8		灰白	土	24	管玉	径1.8	径0.65	孔徑0.15		褐色	土
8	土師器杯	14	8	2.7		赤褐色	土	25	土師	径4	径1.7	孔徑0.6		褐色	土
9	土師器高杯	13.6	9.4	9		赤褐色	北東部直	26	石製模造品	長2.39幅2.6	厚0.6	孔徑0.3		褐色	土
10	土師器鉢	15.7		6.8		灰白	表面	27	石製模造品	長2.51幅3.3	厚0.8	孔徑0.3		褐色	土
11	土師器鉢	21		11.3		灰白	中央部直	28	石製模造品	長2.51幅3.4	厚0.25	孔徑0.5	2孔	褐色	土
12	土師器鉢	13.5		6.8		褐色	土	29	白玉	径1.3	厚0.15	孔徑0.35		褐色	土
13	土師器壺	22		現高7.5		灰白	土	30	白玉	径1.3	厚0.1	孔徑0.3		褐色	土
14	土師器壺	22.2		現高13.5		灰白	土	31	白玉	径1.3	厚0.15	孔徑0.35		褐色	土
15	土師器壺	36.2	7.4	18.4	18.3	赤褐色	中央部直	32	白玉	径1.2	厚0.1	孔徑0.4		褐色	土
16	土師器壺	19.7		3.6	38.2	灰白	壺右端直	33	白玉	径1.3	厚0.1	孔徑0.4		褐色	土
17	土師器壺	22.7	4	37.5		灰白	壺口天部直	34	磁石	2.3	3.0	1.2	穿孔	褐色	壺内

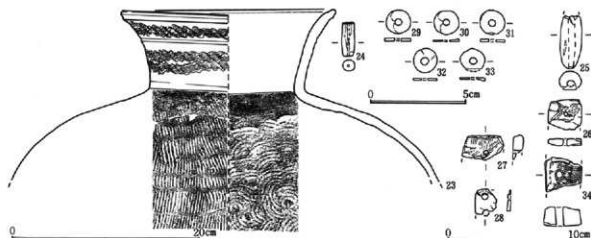
第158图 E<sub>3</sub>-171号住居跡出土遺物(1)



第159図 E-171号住居跡出土遺物(2)



第3節 古墳時代後期の遺物



第160図 E3-171号住居跡出土遺物(3)

E3-177号住居跡 (第161・162図 P.L.49・50)

土師器環・鉢・甕・瓶がある。

環 A類 (1~3) (1)は体部に丸味をもつ。(2・3)は体部扁平で内外面黒褐色塗彩。B類 (4~9) (7)は内外面燻し焼成。(8・9)は内外面黒褐色塗彩。

鉢 A (10) 内外面燻し焼成。B類 (11) 内面放射状寛磨き、内外面黒色処理。

甕 B類 (12)。C1類 (13・14)。C2類 (15・16) 小型で胎土粗い。D2類 (17・18)。D3類 (19・20) (19)は胎土粗い。

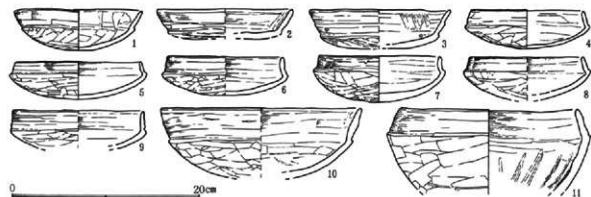
瓶 A類 (21)。

(22)は粗雑な作りで筒状になろうか。用途不明。

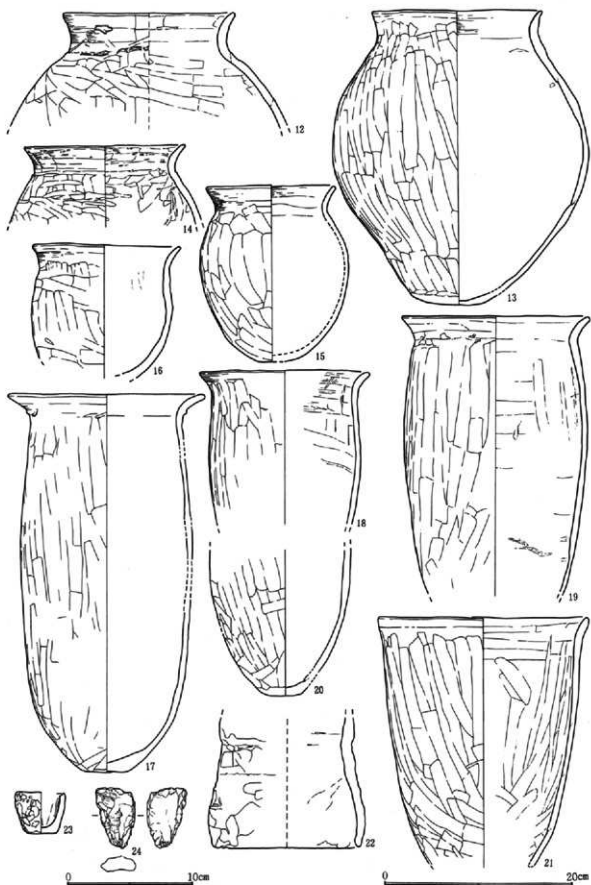
E3-177号住

番号	器 種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	土師器環	13.6		4.3		灰白	甕石段床面
2	土師器環	14.4		3.2		赤陶	甕石段床面
3	土師器環	15		4		赤陶	埋土
4	土師器環	12		4.1		赤陶	甕石段床面
5	土師器環	13.4		4		赤陶	甕石段床面
6	土師器環	12.2		4.1		赤陶	甕石段床面
7	土師器環	13.1		4.9		灰白	甕石段床面
8	土師器環	13		4.5		赤陶	甕石段床面
9	土師器環	14		4		灰白	埋土
10	土師器鉢	21.4		現高7.5		灰白	甕石段床面
11	土師器鉢	18.7		現高9		赤陶	甕石段上層
12	土師器甕	18.2		現高12.2		灰白	埋土

番号	器 種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
13	土師器甕	18.2	7.6	40	27	灰白	甕石段床面
14	土師器甕			現高8.6		灰白	埋土
15	土師器甕	13.8	3	18.5		灰白	甕石段床面
16	土師器甕	15.5		現高14.4		灰白	甕石段床面
17	土師器甕	21	4	40.1		灰白	内付込床面
18	土師器甕	18.1		現高16.3		赤陶	甕石床面
19	土師器甕	20		現高29.4		灰白	甕石段床面
20	土師器甕		4	現高15.4		灰白	甕石段床面
21	土師器瓶	22.4	10.5	26.1		單孔	甕石段上層
22	土師器管状製品	15.5		現高13.5		灰白	中央床面
23	土師器瓶状土器	8.4	3.1	4.4		灰白	埋土



第161図 E3-177号住居跡出土遺物(1)



第162図 E-177号住居跡出土遺物(2)

E<sub>1</sub>-182号住居跡 (第163図 P L.50)

土師器杯・甕・土製球の他、古墳前期に属する小型鉢がある。

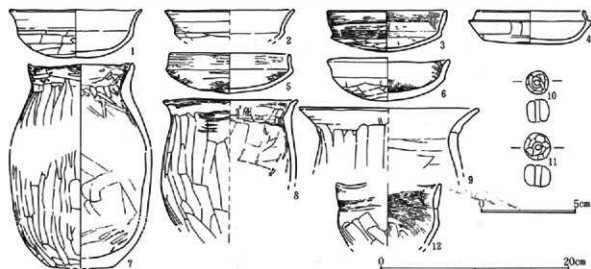
杯 A<sub>1</sub>類 (1・2) 胎土緻密細土。A<sub>2</sub>類 (3)。B類 (4・5) 内外面黒褐色塗彩。D類 (6) 内面放射状磨磨き、黒色処理。

甕 (7・8) は口縁部が外傾し作りが粗雑。D<sub>3</sub>類 (9)。

(10・11) は土製の球体製品、孔は貫通する。用途不明。(12) は古墳前期小型鉢。刷毛目後寛削り。

E<sub>3</sub>-182号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器杯	14		5		橙	埋土	7	土師器甕	11.3		7	21.7	灰白	葎草灰胎体
2	土師器杯	13.8		現高3.2		橙	埋土	8	土師器甕	14.3		現高15.2		灰白	葎草灰胎体
3	土師器杯	12.8		4.3		赤褐	甕内	9	土師器甕	19		現高7.3		灰白	埋土
4	土師器杯	11.4		3.5		灰白	南西斜面	10	土製丸玉	径1.2cm				孔径0.25	埋土
5	土師器杯	13		4.3		灰白	埋土	11	土製丸玉	径1.4cm				孔径0.3	埋土
6	土師器杯	13.1		4.5		灰白	北西斜面	12	土師器鉢	11.2		現高6.5		灰白	埋土

第163図 E<sub>1</sub>-182号住居跡出土遺物E<sub>1</sub>-197号住居跡 (第164図)

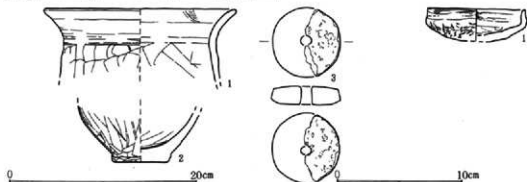
甕 D<sub>3</sub>類 (1)。(2) はC類になろうか。(3) は角閃石安山岩製紡錘輪。

E<sub>3</sub>-197号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器甕	20.4		現高15.5		赤輪	圓形	3	石製紡錘輪	径0.5cm	厚1.5cm	孔径1.3cm			埋土
2	土師器甕		6.2	現高13		灰白	圓形								

E<sub>3</sub>-203号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器杯	10.4		3.4		灰白	埋土

第164図 E<sub>1</sub>-197・E<sub>3</sub>-203号住居跡出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

E<sub>3</sub>-204号住居跡(第165・166図 P.L.50・51)

土師器・鉢・鉢・壺・甕・瓶・須恵器・杯身・鉢・甕の他1対耳環がある。

杯 A<sub>1</sub>類(1・2) 胎土緻密細土。A<sub>2</sub>類(3~8) (3~5)は内面に放射状寛磨き。(3・5~8)は内面燻し焼成または黒色処理。

鉢 A類(11)。D類(12) 胎土緻密細土。

壺 A類(13)。

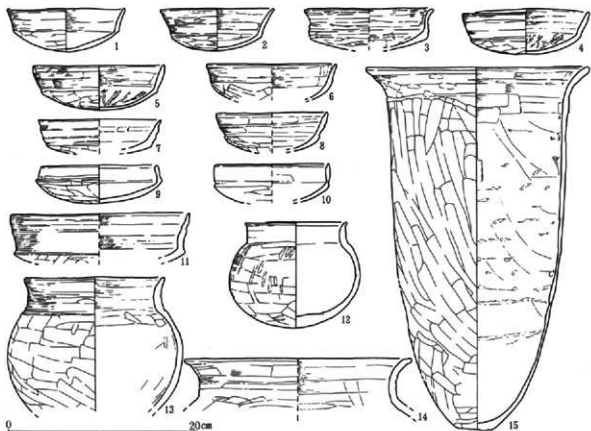
甕 B類(14)。D<sub>1</sub>類(15・16)。D<sub>2</sub>類(17・18)。

瓶 A類(19)。A<sub>3</sub>類(20)。

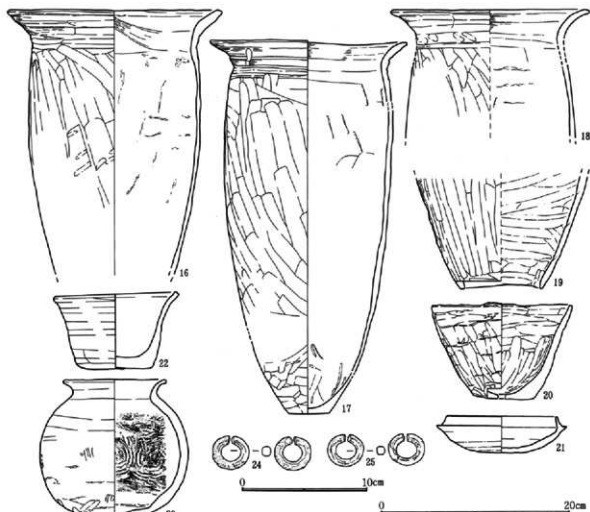
(21)は口縁部の立ち上がりがない須恵器杯身。(22)は鉢。(23)は小型壺でやや軟質で色調は灰白。(24・25)は銅地金箔張り耳環で1対になろう。

E<sub>3</sub>-204号住

番号	器種	口径	底径	器高	刷漆地	色調	胎土位置	番号	器種	口径	底径	器高	刷漆地	色調	出土位置
1	土師器杯	12.6		4.6		赤褐色	胎土	14	土師器鉢	24		器高6.7		赤褐色	内面磨漆面
2	土師器杯	12		4.4		赤褐色	胎土	15	土師器鉢	24	3.5	39.4		灰白	内面
3	土師器杯	13.8		4.3		灰白	胎土	16	土師器鉢	22.8		器高27.8		灰白	南側壁部
4	土師器杯	13.5		4.8		灰白	胎土	17	土師器鉢	21	4.4	39.5		赤褐色	南側壁部
5	土師器杯	14		4.7		赤褐色	胎土	18	土師器鉢	21		器高14.2		赤褐色	胎土
6	土師器杯	13.8		3.8		灰白	胎土	19	土師器瓶		8.6	器高12.6		灰白	胎土
7	土師器杯	13		3.6		灰白	胎土	20	土師器瓶	14.8	6.4	10.2		灰白	胎土
8	土師器杯	11.7		4.2		灰白	胎土	21	須恵器杯	11.6		3.8		灰	胎土
9	土師器杯	12.4		4		赤褐色	胎土	22	須恵器鉢	13.3	8	7.9		灰	行成穴脇
10	土師器鉢	12.2		4		灰白	胎土	23	須恵器壺	11		15	15.8	灰	行成穴脇
11	土師器鉢	19		器高5.1		赤褐色	胎土	24	耳環銅地金箔	外径3	内径1.5				胎土
12	土師器鉢	10.8		11.1	13.7	赤褐色	胎土	25	耳環銅地金箔	外径2.8	内径1.5				胎土
13	土師器壺	14.8		14	18.5	赤褐色	胎土								



第165図 E<sub>3</sub>-204号住居跡出土遺物(1)

第166図 E<sub>3</sub>-204号住居跡出土遺物(2)E<sub>3</sub>-209号住居跡 (第167・168図 P L. 51)

土師器杯・甕・模造土器がある。

杯 A<sub>2</sub>類 (1・2)。B類 (3) 内外面黒褐色塗彩。(4) は形状B類に似るが内外面とも調整が粗雑で、なお磨きを施し内外面を黒色処理でやや異質である。

甕 D<sub>2</sub>類 (5)。D<sub>3</sub>類 (6)。E<sub>3</sub>-209号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径値	色調	出土位置
1	土師器杯	13.7		4.4		灰白	浅層砂礫土
2	土師器杯	13.9		4.5		赤褐	浅層砂礫土
3	土師器杯	12.1		取高2.2		灰白	粗土
4	土師器杯	13		5.5		灰白	浅層砂礫土
5	土師器長胴甕	20	4.6	35.5		赤褐	甕穴口内面
6	土師器長胴甕	20.2	5	34.6		灰白	甕穴口内面
7	土師器模造土器	8.3	8.4	3.8		灰白	甕右輪上

D-212号住居跡 (第168図 P L. 52)

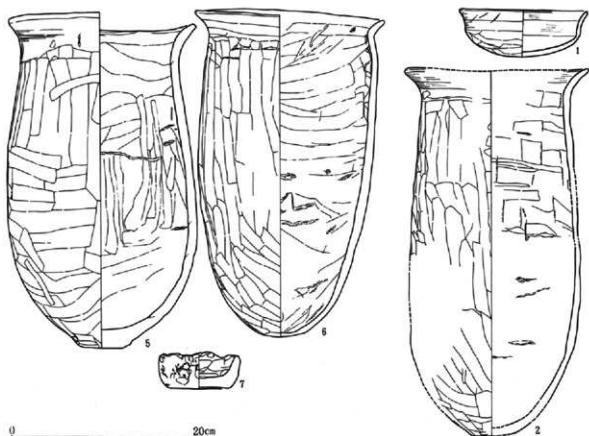
土師器杯 A<sub>1</sub>類 (1) 胎土緻密細土。甕 D<sub>2</sub>類 (2)。

D-212号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径値	色調	出土位置
1	土師器杯	13.6		5		橙	甕右側断面
2	土師器長胴甕	19.6	4.5	39		赤褐	甕穴口内面

第167図 E<sub>2</sub>-209号住居跡出土遺物(1)

第3章 検出された遺構と遺物



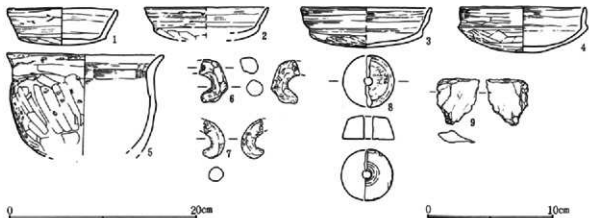
第168図 E-209・D-212号住居跡出土遺物

D-214 (224) 号住居跡 (第169図 P L. 52)

土師器坏 A<sub>2</sub>類 (1~3) (1)は胎土緻密細土。B類 (4) 内外面黒色処理。鉢 C類 (5)。鉢 C類 (5)。(6・7)は土製勾玉の残欠。(8)は滑石製紡錘輪。

D-214号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器坏	11.8	9.4	3.9		橙	甕丘南面	5	土師器鉢	16.7		碗高10.7		灰白	甕丘上
2	土師器坏	13.2		3.5		赤褐色	甕丘南面	6	土製勾玉						甕丘上
3	土師器坏	14		4.3		灰白	甕丘内	7	土製勾玉						甕丘上
4	土師器坏	13.4		4.7		灰白	甕丘南面	8	石製紡錘輪	上径3cm	下径4cm		孔距0.7cm		甕丘上



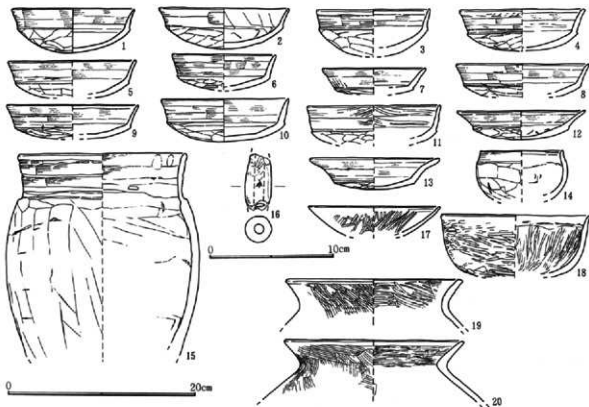
第169図 D-214号住居跡出土遺物

## D-215号住居跡 (第170図 P.L.52)

土師器杯 A<sub>1</sub>類 (1~9) (7~9) は体部扁平。A<sub>2</sub>類 (10~11) (10) は内面黒色処理。C類 (12~13)。  
 甕 A類 (15) 内面剥離痕多い。(17~20) は古墳前期に属しよう。(17) は高坏坏部で内外面施磨き、  
 (18) は鉢か、内外面に丁寧な施磨き、(19) 甕も口縁部内外面に施磨きが施される。(20) 甕は刷毛目。

## D-215号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径色	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径色	色調	出土位置
1	土師器杯	13		4.7		灰白	床面	11	土師器杯	14.2		4		灰白	埋土
2	土師器杯	13.8		4.3		灰白	床面	12	土師器杯	13.5		3		灰白	床面
3	土師器杯	12		5		灰白	埋土	13	土師器杯	13.8		3.2		灰白	埋土
4	土師器杯	13.2		4.4		灰白	埋土	14	土師器鉢	8.6		現高5.2		灰白	埋土
5	土師器杯	13.6		4		灰白	埋土	15	土師器甕	18		現高21.4	20.3	灰白	甕法堀内層
6	土師器杯	11		3.8		灰白	埋土	16	土製磨	現長4.5	部2.1	孔徑0.8			埋土
7	土師器杯	11		2.8		灰白	埋土	17	土師器高坏	14.0		現高3.1			埋土
8	土師器杯	14		3.6		灰白	埋土	18	土師器鉢	15.7		6.7			埋土
9	土師器杯	14		3.5		灰白	埋土	19	土師器甕	19					埋土
10	土師器杯	13.6		4.5		灰白	床面	20	土師器甕	19					埋土



第170図 D-215号住居跡出土遺物

## D-218号住居跡 (第171図 P.L.52・53)

土師器杯 A<sub>1</sub>類 (1)。B類 (2・3)。鉢 D類 (4)。甕 D<sub>2</sub>類 (5)。(6・7) はC類になろうか。(7) は胴部中に張りをもつ。

## D-220号住居跡 (第172・173図 P.L.53・54)

土師器杯・鉢・甕がある。

杯 A<sub>1</sub>類 (1~14) (11~13) は内面黒色処理。(14) は内外面焼し焼成。(4) は焼成後に底部穿孔の可能性ある。

第3章 検出された遺構と遺物

鉢 A類 (15~17) 体部深めで作りは丁寧。

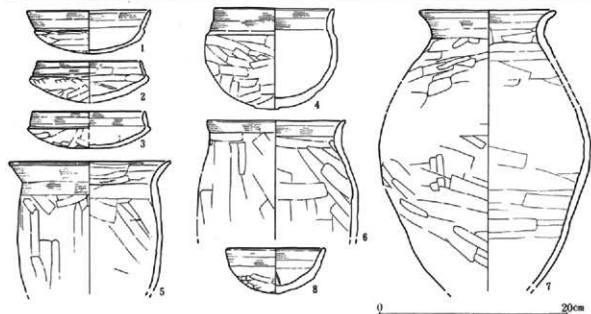
甕 B類 (18・19) 小型で胴部丸く張り、下腹れ風丸底気味。C類 (20~25) 胎土には砂礫など比較的混入物が少ない。20の口縁部には対の穿孔(焼成後)がある。D a類 (27・28) 胎土は粗い。D c類 (26)。

D-218号住

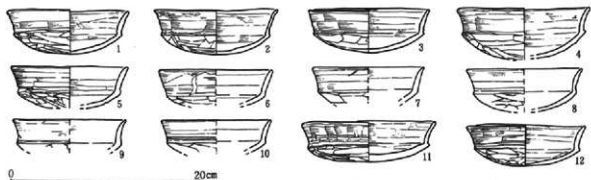
番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器杯	13.1		4.5		灰白	床面	5	土師器鉢	17		現高13.5		赤褐色	床面
2	土師器杯	11		4.4		灰白	埋土	6	土師器鉢	14.7		現高12.2		灰白	床面
3	土師器杯	12		4		赤褐色	床面	7	土師器鉢	14.5		現高29	22.2	赤褐色	床面
4	土師器鉢	12.7	3.5	10.5	14.1	灰白	床面	8	刺蝟造土器	10.6			4.8	灰白	床面

D-220号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器杯	12.9		4.8		灰白	床面	15	土師器鉢	21.5		8.1		灰白	甕前床面
2	土師器杯	13		4.2		灰白	若狭丸底床面	16	土師器鉢	17.9		8.7		灰白	床面
3	土師器杯	12.8		4.2		灰白	床面	17	土師器鉢	21.2		10.8		灰白	甕前床面
4	土師器杯	13.7		5.4		灰白	甕前床面	18	土師器鉢	13.8		16.5	17.4	灰白	甕前床面
5	土師器杯	12.5		4.4		灰白	甕前床面	19	土師器鉢	13.6		18.2	17.3	灰白	甕前床面
6	土師器杯	12		現高3.8		灰白	埋土	20	土師器鉢	11.4		現高7.2		灰白	埋土
7	土師器杯	11.8		現高3.6		灰白	埋土	21	土師器鉢	13.4		現高6.7		灰白	埋土
8	土師器杯	12.2		現高4.3		灰白	埋土	22	土師器鉢	15		現高11.6		灰白	埋土
9	土師器杯	12		現高3		灰白	埋土	23	土師器鉢	14.9		現高9.7		灰白	埋土
10	土師器杯	11.8		現高3.4		灰白	埋土	24	土師器鉢	13.2		現高4.6		灰白	埋土
11	土師器杯	14		4.3		灰白	床面	25	土師器鉢	18.2		現高8.8		灰白	床面
12	土師器杯	12.6		4.3		灰白	甕前床面	26	土師器小口甕	14.5		現高18.3		灰白	甕前床面
13	土師器杯	11		4.4		灰白	甕前床面	27	土師器鉢	21.4		現高4.5		灰白	床面
14	土師器杯	13.3		4.4		灰白	床面	28	土師器長胴甕	20.3	4.6	38.8		赤褐色	甕前床面

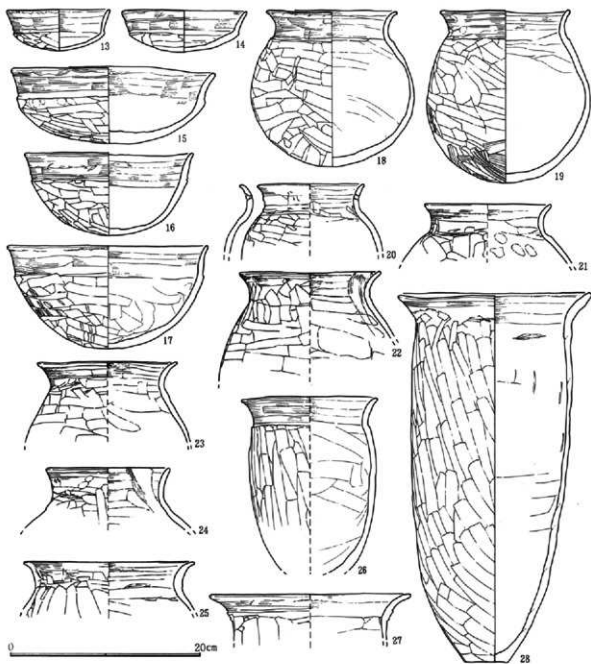


第171図 D-218号住居跡出土遺物



第172図 D-220号住居跡出土遺物(1)





第173図 D-220号住居跡出土遺物(2)

E-226号住居跡 (第174図)

E<sub>3</sub>-226号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器杯	14		4			埴土	3	土師器模造土器	2.6		現高2.7			埴土
2	土師器模造土器	4.5		6			埴土								



第174図 E<sub>3</sub>-226号住居跡出土遺物

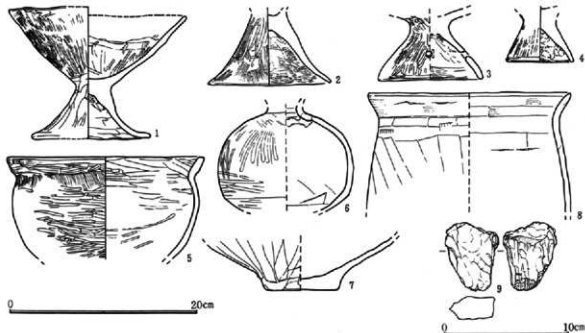
第3章 検出された遺構と遺物

D-87号住居跡 (第175図 P L.54)

当跡の出土遺物のうち多くは埋土中の出土で、甕(8)のみが竈想定箇所から検出されている。高坏(1~3)、台付甕台(4)は弥生終末期式土器の系譜と考えられる。

D-87号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	高坏	19.1	12.7	14		埋土		6	甕			規高11	14.3		埋土
2	高坏坏部		13	規高7.8		埋土		7	甕底部		7.6	規高6		埋土	
3	高坏坏部		11	規高7.4		埋土		8	甕	21.4		規高12.5	21	甕	
4	台付甕台部		7.2	規高5.9		埋土		9	礫石塊	5.6	4	1.8		埋土	
5	鉢	21		規高10.8	20	埋土									



第175図 D-87号住居跡出土遺物

E<sub>3</sub>-129号住居跡 (第176図 P L.42)

当跡は本来古墳前期の堅穴住居跡の出土遺物である。埋土より多くの古墳後期に属する遺物があり、この項で掲載する。

土師器・坏・甕・瓶・模造土器・須恵器坏蓋・高坏・鉄器がある。

坏 Ab類(1)。

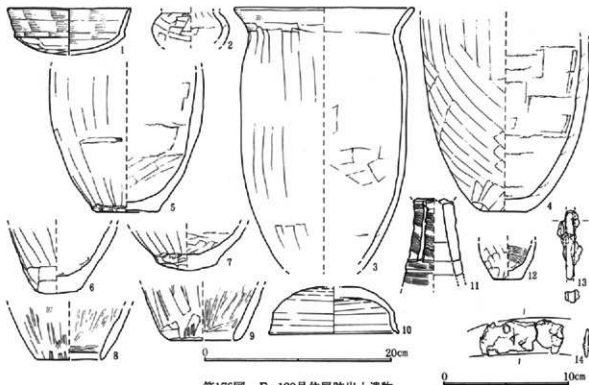
甕 D類(3~7) (4)は器内厚く重量感がある。(6・7)は底部の厚みが顕著。

瓶 A類(8・9) 内外面に寛磨きを施す。

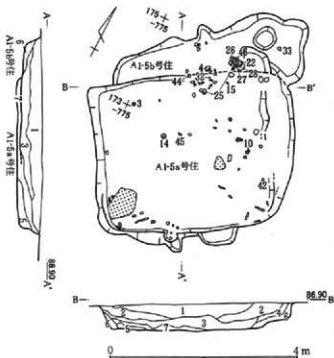
(2)は小型壺にならう。模造土器の可能性もある。(10)の須恵器坏蓋は口縁部外反し、口唇内面に明瞭な段を作る。11は高坏脚部で長脚2段造かしにならう。外面に拂磨きを施す。

E<sub>3</sub>-129号住

番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置	番号	器種	口径	底径	器高	胴径他	色調	出土位置
1	土師器坏	13		4.9	6.6	赤褐色	埋土	8	土師器瓶		7	規高5.5		灰白	埋土
2	模造土器			規高3.5	8	灰白	埋土	9	土師器瓶		7.5	規高5.5		灰白	埋土
3	土師器甕	19		規高20	18	灰白	埋土	10	須恵器坏蓋	13.8		規高5.3		灰	埋土
4	土師器甕	4.5		規高20.3	17.5	灰白	埋土	11	須恵器高坏脚部			規高9.3		灰	埋土
5	土師器甕	7		規高15	16.3	灰白	埋土	12	模造土器		3	規高4		灰白	埋土
6	土師器甕	4.5		規高7		赤褐色	埋土	13	鉄製品角釘	長5.4	幅1.5	厚1.5		埋土	
7	土師器甕	6.5		規高6.3		灰白	埋土	14	鉄製品鋸	長6	幅2.6	厚0.6		埋土	



第176図 E-129号住居跡出土遺物



- A-5a住
1. 黒褐色土 Loam粒多量・土器片多量混・土粒粗・締
  2. 黒褐色土 弱粘質・Loam粒多量・炭化粒・C軽石混
  3. 暗褐色土 粘質・Loam粒・炭化粒・C軽石混
  4. 黒色土 弱粘質・C軽石少量混・締
  5. 黒色土 C軽石少量・Loam粒・焼土混・軟・粘質
  6. 暗褐色土 弱粘性・Loam粒多量混(壁崩落土)
- A-5b住
7. 純黄褐色土 弱粘質・Loam多量混・締

第177図 A-5a・b号住居跡

### 3. 円形周溝遺構

いわゆる平地式建物とされる遺構である。幅の狭い溝で円形形状に巡り、全周するものと一部開放部の例が知られる。

#### A-1号円形周溝遺構(第178図)

座標値  $X = 162 \sim 167$ ・ $Y = -769 \sim -775$  の範囲にある。東端は現道(調査時)下にかかり全容は検出されていない。溝は全周すると思われるが南縁の一部が跡切れる。15cm足らずの間隔であり、土坑との重複による削平とも考えられる。平面形状は東西方向に若干の長軸をなす。規模は長軸5.5m $\pm$ 、短軸5.8m、検出周溝内面積は約20m<sup>2</sup>、溝内外での検出面には高低差はない。長軸方位はN-85°-Eを示す。溝幅は法面が小さく30~40cm、箱形の断面形で深さは15cm前後である。底面には連続して径20~30cm、深さ15cm前後の小穴が穿たれる。小穴の間隔は中心間40~50cmが多く、1m前後にな

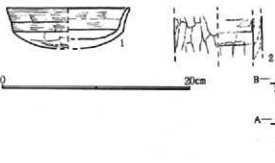
る部分もあるがそこには規則性は窺えない。溝埋土は下位にLoam塊を混じた暗褐色土が見られるが調査所見からは突き固めなどの状況は得られていない。周溝内は土坑状の落ち込みなどの重複で不明な部分が多く柱施設等は検出されていない。

E-2号円形周溝遺構 (第179図 P.L.22)

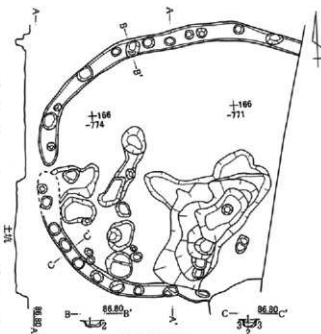
座標値 X=014~026・Y=-765~-771の範囲にある。E3-110号住居跡(古墳後期)と西縁で接するが新旧関係は不明である。平面形状は溝が全周し北西~南東方向に若干の長軸をもつ略円形を呈する。規模は長軸6.5m・短軸5.8m、床面積は溝内径で約20㎡、溝内・外域での検出は同一面で高低差はない。長軸方位はN-25°-Wを示す。溝幅は上縁40~60cm・下縁は僅かな狭・広はあるものの25~30cmである。断面形状は部分的に多少の変化がみられ、U字形・箱堀形の箇所がある。深さは25~30cmを平均にするが、底面には数カ所に小穴状が穿たれる。最深のもので約60cmを測り、溝との新旧関係はなく当跡に伴うものとする。溝の埋土は3~5層からなりLoam塊の混入が多いが締まりはなく突き固めたような痕跡はない。

周溝の内側は平坦で周辺に比べ踏み締まりなどの痕跡は認められなかったが、削平による可能性はたかい。内径縁辺に近く溝に沿って弧状に10数個の小穴が検出されている。径30cm前後で深さは約20cm程度が多い。やや規則性に欠けるが結線の形状では8ないしは9角になる。これら小穴のほかに施設は見られない。

出土物は周溝内より土師器坏・甕などの細片が出土しているが、周溝内側平坦部からはない。

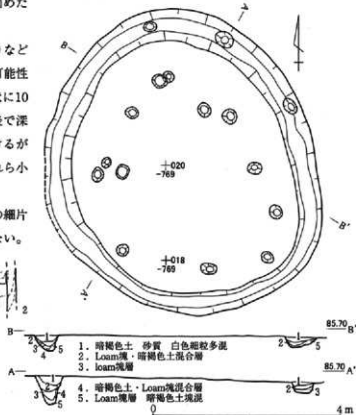


第179図 E-2号円形周溝遺構・出土遺物



- A1-1号円形周溝遺構  
 1. 黒褐色土 C 軽石多混  
 2. 褐色土 Loam粒多混  
 3. 純黄褐色土 粘質・Loam主体

第178図 A1-1号円形周溝遺構



0 20cm

- 85.70 B  
 1. 暗褐色土 砂質 白色細粒多混  
 2. Loam塊・暗褐色土混合層  
 3. loam塊層  
 85.70 A  
 4. 暗褐色土・Loam塊混合層  
 5. Loam塊層 暗褐色土塊混  
 0 4m

## 4. 土 坑

## D-195号土坑 (第180・181図 P L.54・55)

座標値  $X=125-129 \cdot Y=-768 \sim -773$  の範囲にある。北東隅部にD-149号住居跡と重複するが新旧関係は不明である。平面形状は略長方形を呈し、規模は長軸5.5m、短軸2.5m、深さは検出面よりやく80cmで底面は緩く波打つ。長軸方位は  $N-46^{\circ}-E$  を示す。粗土は6層からなり、下位の7層中からは土器器坏類をはじめ土鉢・土製勾玉が多量の炭化粒・焼土塊とともに出土している。遺物は底面より10cmほどの高さで集中しており一括廃棄的な出土状況である。

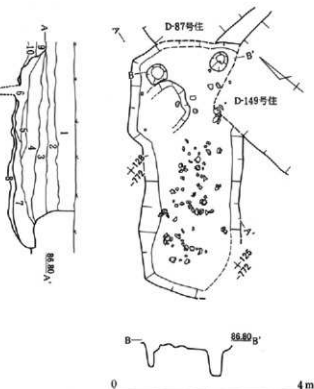
出土土器は大半が土器器坏で占められるが鉢・甕・模造土器がある。土器胎土の色調は数点の褐灰色、または燻しか二次被熱による淡赤色を呈するもの以外は灰白色系の焼成発色である。

環 A<sub>1</sub>類 (1-22)。(16)は唯一の二次被熱資料である。(19・20)は燻し焼成と考えられ暗灰色を呈する。(22)はやや赤みがあり淡赤色である。(21)は口縁上端に連続する籠押し状の圧痕が観察され、輪花を思わせる。A<sub>2</sub>類 (23)は燻し焼成で暗灰色。B類は (24)一点のみである。深い体部をなす。C類 (25-29)。(26)は黒色処理。(27-29)はA<sub>1</sub>類にも通ずるが体部の浅さと口縁部の丈高で本類とした。D類 (30-32)。

鉢 C類 (34)。(33)は小型ながらD類。甕 (35)はD<sub>1</sub>類になろう。(36)は環B類の模造と考えられる。

## D-195号土

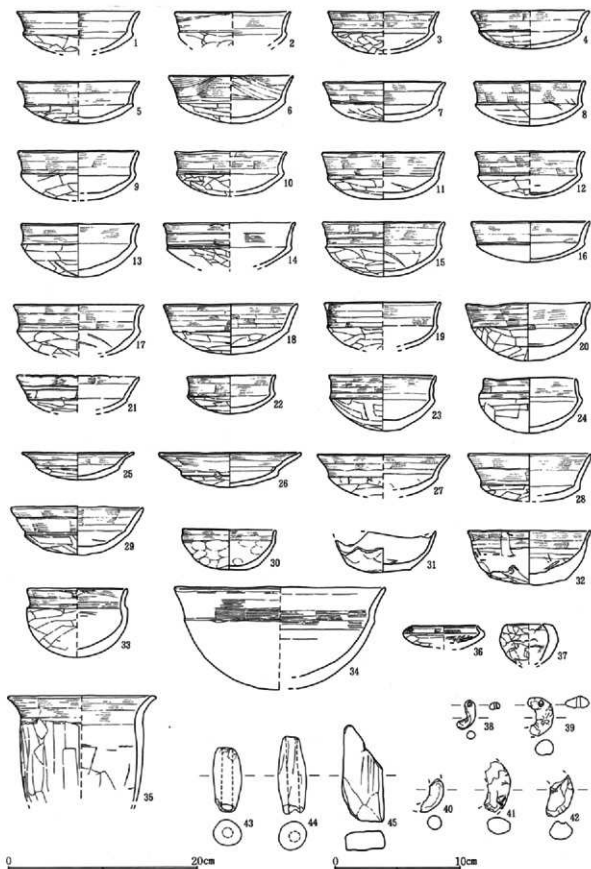
番号	器 種	口径	底径	器高	胴径	色調	出土位置
1	土器器坏	13		4.5		灰白・埋土	
2	土器器坏	12.4				灰白・埋土	
3	土器器坏	11.8		4.5		灰白・埋土	
4	土器器坏	12.4		4		灰白・埋土	
5	土器器坏	13		4.4		灰白・埋土	
6	土器器坏	13.2		5		灰白・埋土	
7	土器器坏	13		4.2		灰白・埋土	
8	土器器坏	11.8		4.7		灰白・埋土	
9	土器器坏	12.8		5.3		灰白・埋土	
10	土器器坏	11.9		4.8		灰白・埋土	
11	土器器坏	13		5		灰白・埋土	
12	土器器坏	11.6		4.9		灰白・埋土	
13	土器器坏	12.5		5.6		灰白・埋土	
14	土器器坏	14		5		灰白・埋土	
15	土器器坏	13		5.8		灰白・埋土	
16	土器器坏	12.6		4.3		灰白・埋土	
17	土器器坏	13.8		5.3		灰白・埋土	
18	土器器坏	14.2		5.3		褐灰・埋土	
19	土器器坏	12.4		5		褐灰・埋土	
20	土器器坏	13.1		6		褐灰・埋土	
21	土器器坏	13		4		赤黒・埋土	
22	土器器坏	9.3		4.1		橙・埋土	
23	土器器坏	11.4		6		褐灰・埋土	



- D-195土坑  
現代使用面・道路
1. 黄褐色土 白色粒多・Loam粒混
  2. 暗褐色土 白色粒・角閃石・F Aor F P 少量混
  3. 暗褐色土 白色粒・Loam粒混
  4. 褐色土 白色粒・Loam粒混
  5. 暗褐色土 黒褐色土多・炭化物・焼土塊少・粘土塊微量混
  6. 褐色土 Loam粒少混
  7. 黒褐色土 炭化物 (床面多量)・焼土塊・灰褐色粘土微量混
  8. 暗褐色土 Loam粒多混 (床)
  9. 褐色土 白色粒少混
  10. 黄褐色土 Loam・暗褐色土混土

第180図 D-195号土坑

第3章 検出された遺構と遺物



第181图 D-195号土坑出土遺物

## 5. 谷地出土遺物 (第182~206図 P.L.55~68)

ここに掲載する遺物は土器類と木器類に大別され、古墳時代後期に属するものでA区とした西縁部谷地内からの出土である。出土層位は谷地内堆積の浅間山降下火山灰B軽石層と同降下火山灰FA層間に介する堆積層中である。遺物群は層序的に下位のFA層の上位堆積層である黒色土中にその多くが検出されている。遺物は大半の土器器と若干の須恵器類で、その形態から台地上に展開する古墳時代後期の住居跡出土の遺物群と同類であることから、その出自は集落の存続に関係すると考える。

土器器 A1類 (1~114)。口縁部が外反する須恵器杯蓋の模倣形態である。口縁部形態は多種多様である。胎土の色調では大括りで3種、土味では2種に分かれる。(1~52)の色調は比較的鈍のない橙で、胎土は砂粒等夾雑物のほとんど見られない精製土である。焼成が甘いためか、また風化による土質変化からか、器表面の擦れが顕著である。(53)は内外面黒彩、(54)は内黒処理。(55~64)は赤褐色で胎土に砂粒など混入物が多く焼成は硬い。(65~114)は灰白色で胎土は均一で焼成は硬い。A2類 (115~145)。口縁部に段または凹線をもつ。(115)は橙色の精製土。(116~118)は赤褐色で黒色塗彩。(119~145)は灰白色で(141~145)は内面または内外面に黒色塗彩。B類 (146~171)。須恵器杯身の模倣形である。(146~148)は赤褐色で(147~148)は黒色塗彩。(149~171)は灰白色で(158~169)は内外面黒色塗彩を施す。C類 (172~173)。灰白色で(173)は褐色塗彩。D類 (174~182)。E類 (183)。

鉢 A類 (185~190)。(189・190)は内面黒色処理。B類 (191・192)。C類 (199・200)は焼し焼成または内面黒色処理。D類 (193~196)。E類203。F類 (201・202)。(202)は台付G類の可能性ある。(204~207)は前期古墳時代に属する可能性がある

壺 A類 (209~217)。ただし(215)は異種。

甕 A類 (218~219)。B類 (220~235)。C類 (236~244)。D類 (245~250)。

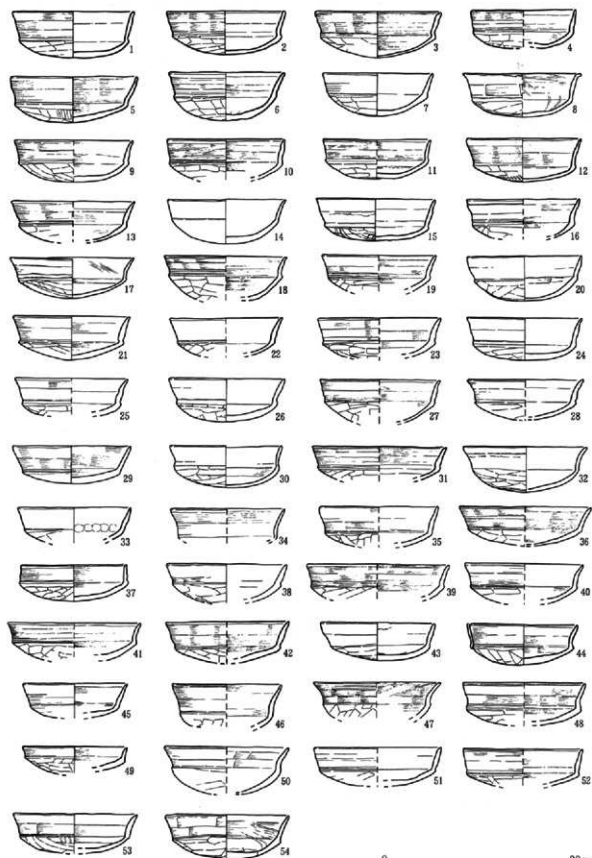
須恵器 (269)は直口壺で口縁部1条、胴部3条の波状櫛掻き文を施す。軟質で胎土である。(272)は頸部に補強帯を持つ。頸部剥離面に降灰溶解が見られ焼成段階での破損品が遺跡内に持ち込まれたものと考えられる。

## 古墳後期 谷地

番号	器種	口径	高さ	器径	胴径	色調	番号	器種	口径	高さ	器径	胴径	色調
1	土器器杯	12.9	4.9			橙	37	土器器杯	11.2	3.8			橙
2	土器器杯	12.5	4.1			橙	38	土器器杯	12.8				灰白
3	土器器杯	13.4	4.9			橙	39	土器器杯	15.4	4.1			灰白
4	土器器杯	11.1	4			橙	40	土器器杯	12.4	4.2			橙
5	土器器杯	13.4	4.9			橙	41	土器器杯	14	4			橙
6	土器器杯	13.9	4.9			橙	42	土器器杯	13	4.4			橙
7	土器器杯	13.9	4.9			橙	43	土器器杯	12.2	4			橙
8	土器器杯	13.5	4.6			橙	44	土器器杯	11.8	4.0			橙
9	土器器杯	13.9	4.9			橙	45	土器器杯	13.2	4.2			橙
10	土器器杯	13.9	4.9			橙	46	土器器杯	11.5	4.2			橙
11	土器器杯	11.4	4			橙	47	土器器杯	13.9	3.7			橙
12	土器器杯	12.1	4.6			橙	48	土器器杯	12.4	4.6			橙
13	土器器杯	13	4.7			橙	49	土器器杯	11.2	3.9			橙
14	土器器杯	13.5	4.7			橙	50	土器器杯	13	4			灰白
15	土器器杯	13.6	4.3			橙	51	土器器杯	13.4	4.1			橙
16	土器器杯	12	4.1			橙	52	土器器杯	12.6	4			橙
17	土器器杯	13.1	4.3			橙	53	土器器杯	12.1	4.2			橙
18	土器器杯	13	4.6			橙	54	土器器杯	13.5	4.7			橙
19	土器器杯	12	3.8			橙	55	土器器杯	12.2	3.3			赤褐色
20	土器器杯	12	4.7			橙	56	土器器杯	12.2	3.7			赤褐色
21	土器器杯	13.2	4.6			橙	57	土器器杯	13.9	3.3			赤褐色
22	土器器杯	12	3.9			橙	58	土器器杯	12.8	4.3			赤褐色
23	土器器杯	12	4.1			橙	59	土器器杯	13	3.6			赤褐色
24	土器器杯	13.1	4.5			橙	60	土器器杯	13	3.9			赤褐色
25	土器器杯	12	4.2			橙	61	土器器杯	13	4.3			赤褐色
26	土器器杯	12	3.9			橙	62	土器器杯	13.2	4.2			赤褐色
27	土器器杯	12.3	4.6			橙	63	土器器杯	14.6	4.2			赤褐色
28	土器器杯	12.8	4.5			赤褐色	64	土器器杯	14	3.5			赤褐色
29	土器器杯	12.6	4.5			赤褐色	65	土器器杯	12.6	3.2			灰白
30	土器器杯	13.4	4.7			赤褐色	66	土器器杯	13.4	3.5			灰白
31	土器器杯	13.2	4.5			赤褐色	67	土器器杯	13.2	4.8			灰白
32	土器器杯	13	4.8			赤褐色	68	土器器杯	13	3.2			灰白
33	土器器杯	11.2	3.6			赤褐色	69	土器器杯	13.9	3.4			灰白
34	土器器杯	13	3.7			赤褐色	70	土器器杯	13.9	3.9			灰白
35	土器器杯	12.8	4.2			赤褐色	71	土器器杯	13	4.6			灰白
36	土器器杯	13.9	4.2			赤褐色	72	土器器杯	10.8	4			灰白

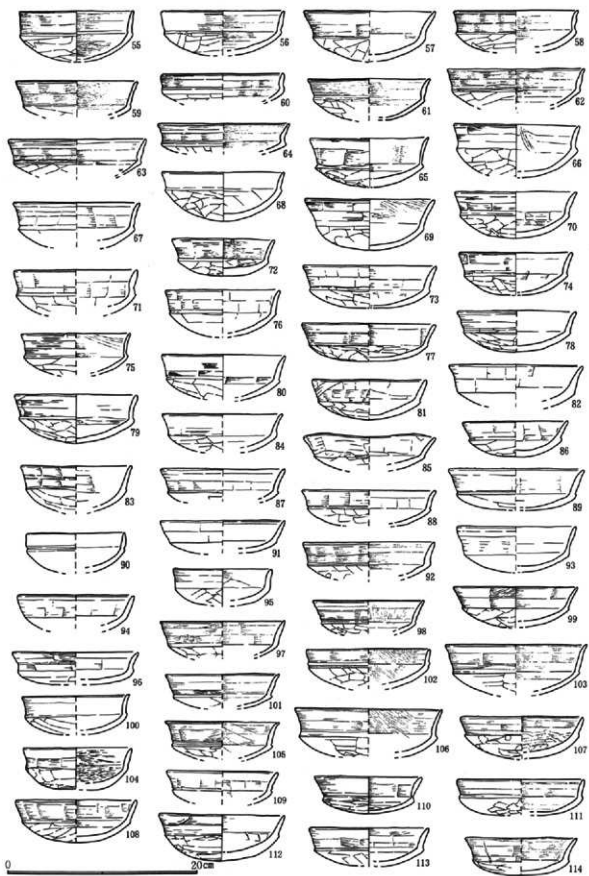




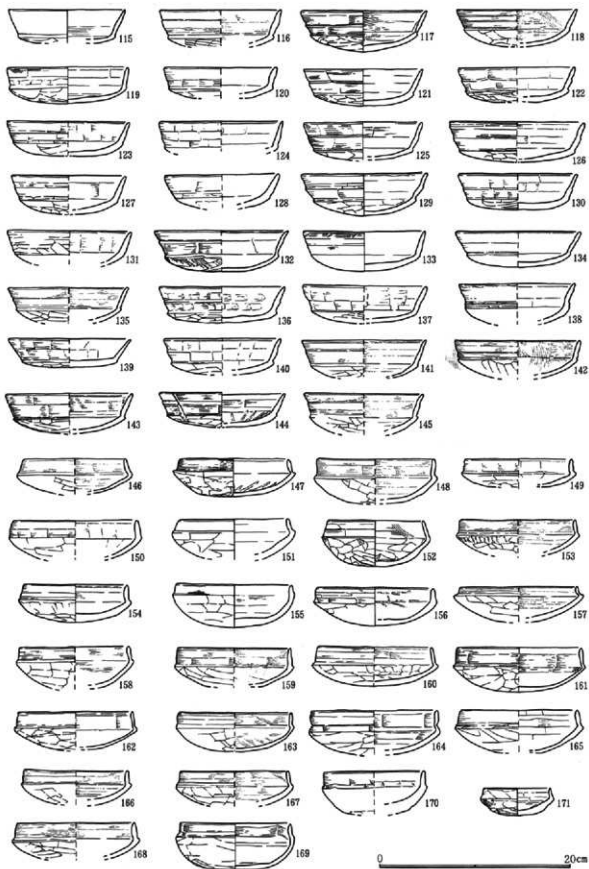


第182図 谷地出土土器(1)

第3章 検出された遺構と遺物

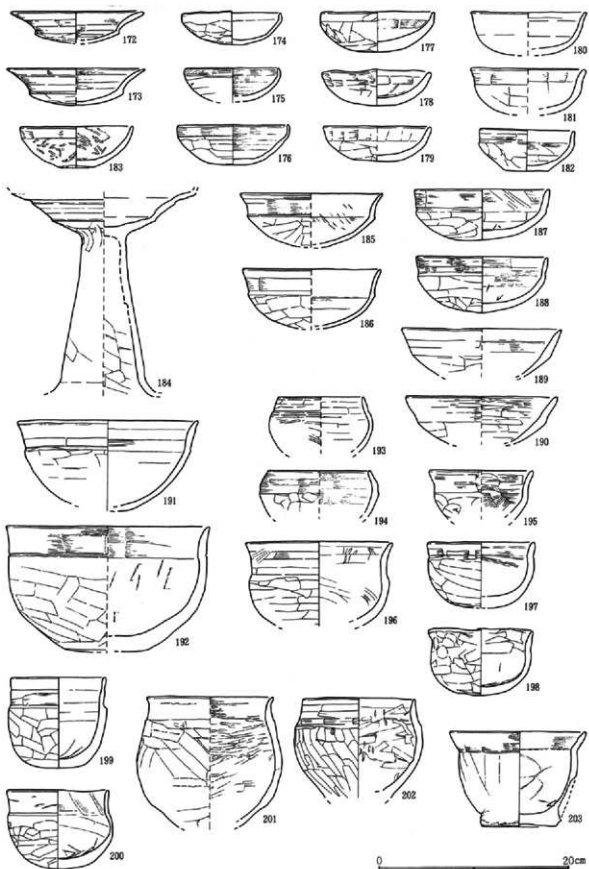


第183図 谷地出土土器(2)

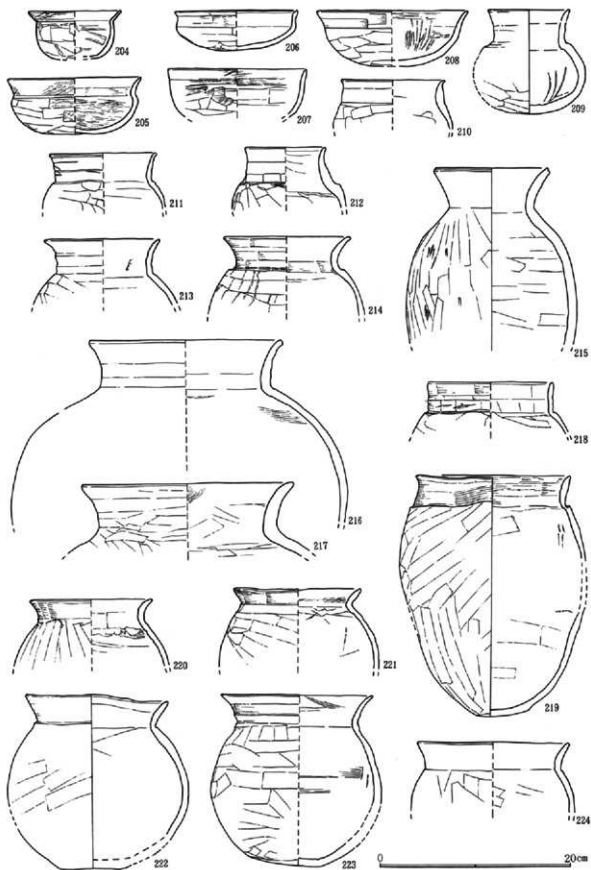


第184図 谷地出土土器(3)

第3章 検出された遺構と遺物

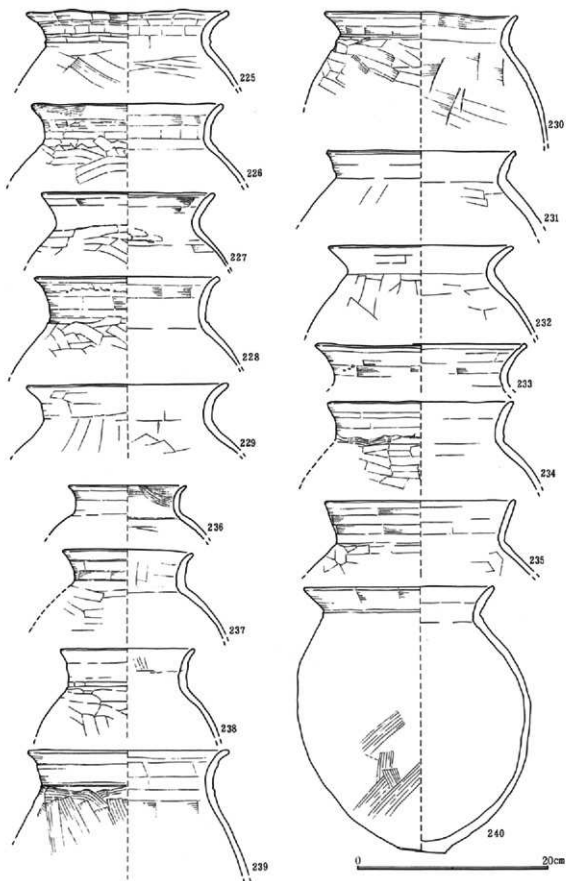


第185図 谷地出土土器(4)

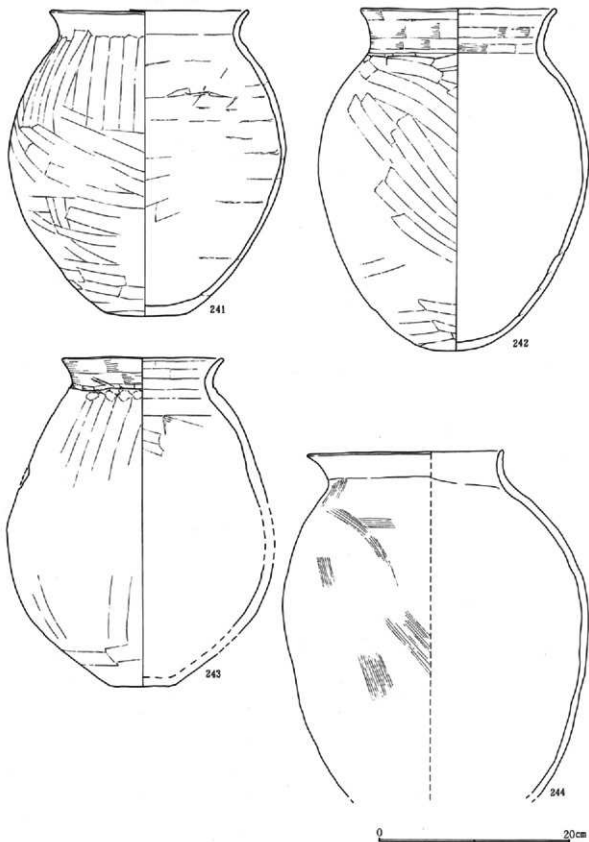


第186図 谷地出土土器(5)

第3章 検出された遺構と遺物

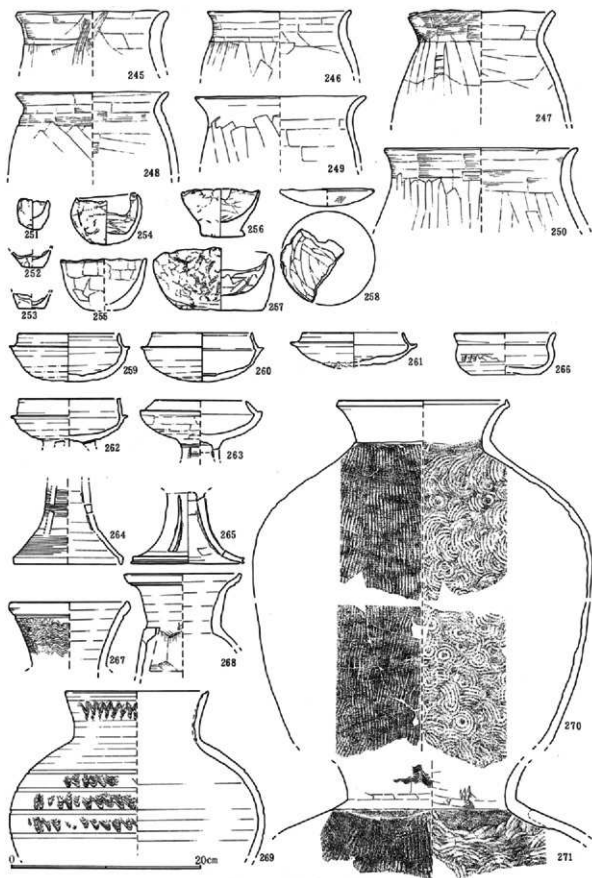


第187図 谷地出土土器(6)



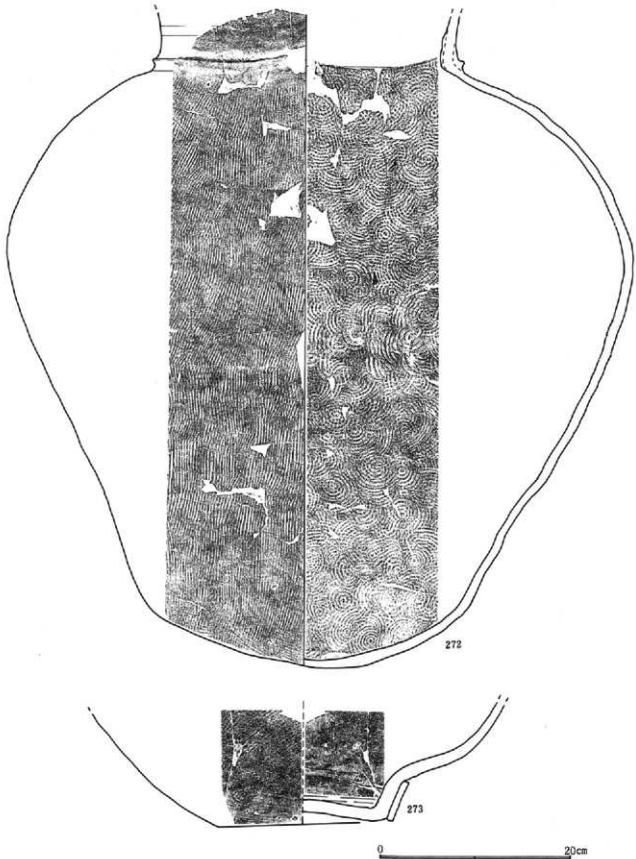
第188図 谷地出土土器(7)

第3章 検出された遺構と遺物



第189図 谷地出土土器(e)





第190図 谷地出土土器(9)



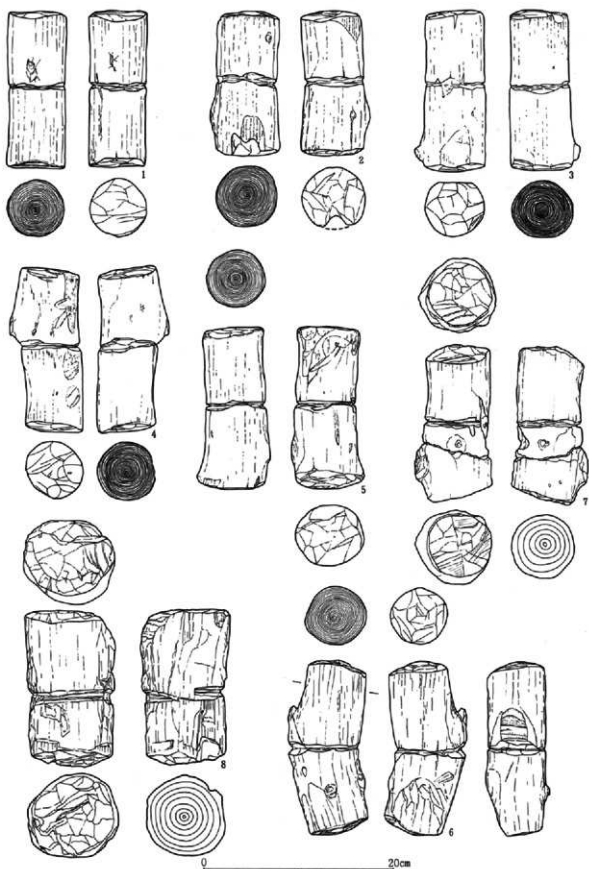
第3節 古墳時代後期の遺物

地区	遺構・層位	時期	品類	材質	備考	地区	遺構・層位	時期	品類	材質	備考
A-3	6					A-1					
A-3	7			アゲヤ							
A-3	8			アゲヤ							
A-3	9			アゲヤ	横or縦に歪い部分						
A-3	10			タリ	横or縦に歪い部分						
A-3	11			タネヤ							
A-3	12			タリ							
A-3	13			タネヤ							
A-3	14			タネヤ							
A-3	15			タネヤ							
A-3	16			タネヤ							
A-3	17			タネヤ							
A-3	18			タネヤ							
A-3	19			タネヤ							
A-3	20			タネヤ							
A-3	21			タネヤ							
A-3	22			タネヤ							
A-3	23			タネヤ							
A-3	24			タネヤ							
A-3	25			タネヤ							
A-3	26			タネヤ							
A-3	27			タネヤ							
A-3	28			タネヤ							
A-3	29			タネヤ	横or縦に歪い部分						
A-3	30			アゲヤ							
A-3	31			アゲヤ							
A-3	32			アゲヤ							
A-3	33			アゲヤ							
A-3	34			アゲヤ							
A-3	35			アゲヤ							
A-3	36			アゲヤ							
A-3	37			アゲヤ							
A-3	38			アゲヤ							
A-3	39			アゲヤ							
A-3	40			アゲヤ							
A-3	41			アゲヤ							
A-3	42			アゲヤ							
A-3	43			アゲヤ							
A-3	44			アゲヤ							
A-3	45			アゲヤ							
A-3	46			アゲヤ							
A-3	47			アゲヤ							
A-3	48			アゲヤ							
A-3	49			アゲヤ							
A-3	50			アゲヤ							
A-3	51			アゲヤ							
A-3	52			アゲヤ							
A-3	53			アゲヤ							
A-3	54			アゲヤ							
A-3	55			アゲヤ							
A-3	56			アゲヤ							
A-3	57			アゲヤ							
A-3	58			アゲヤ							
A-3	59			アゲヤ							
A-3	60			アゲヤ							
A-3	61			アゲヤ							
A-3	62			アゲヤ							
A-3	63			アゲヤ							
A-3	64			アゲヤ							
A-3	65			アゲヤ							
A-3	66			アゲヤ							
A-3	67			アゲヤ							
A-3	68			アゲヤ							
A-3	69			アゲヤ							
A-3	70			アゲヤ							
A-3	71			アゲヤ							
A-3	72			アゲヤ							
A-3	73			アゲヤ							
A-3	74			アゲヤ							
A-3	75			アゲヤ							
A-3	76			アゲヤ							
A-3	77			アゲヤ							
A-3	78			アゲヤ							
A-3	79			アゲヤ							
A-3	80			アゲヤ							
A-3	81			アゲヤ							
A-3	82			アゲヤ							
A-3	83			アゲヤ							
A-3	84			アゲヤ							
A-3	85			アゲヤ							
A-3	86			アゲヤ							
A-3	87			アゲヤ							
A-3	88			アゲヤ							
A-3	89			アゲヤ							
A-3	90			アゲヤ							
A-3	91			アゲヤ							
A-3	92			アゲヤ							
A-3	93			アゲヤ							
A-3	94			アゲヤ							
A-3	95			アゲヤ							
A-3	96			アゲヤ							
A-3	97			アゲヤ							
A-3	98			アゲヤ							
A-3	99			アゲヤ							
A-3	100			アゲヤ							

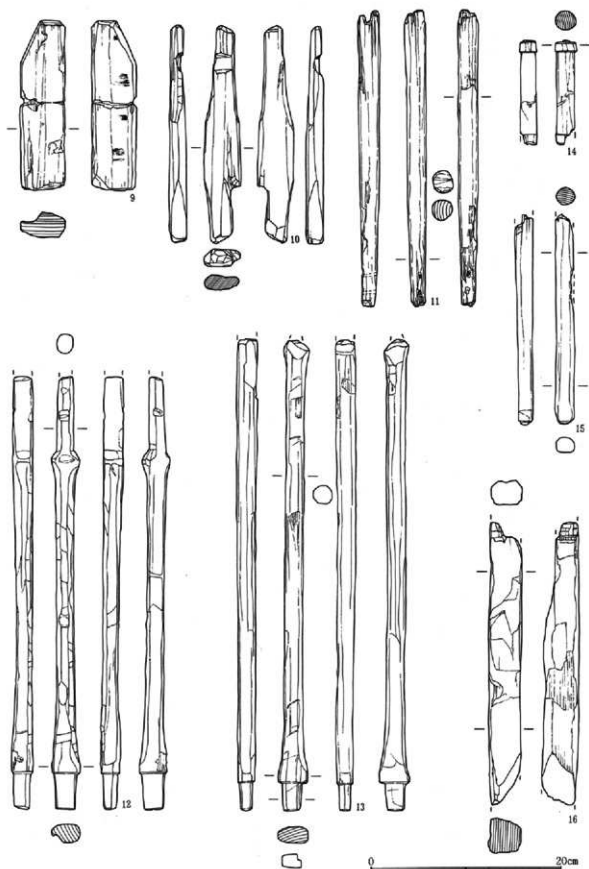
表3 木製品と自然木とてみた樹種成

樹種	木製品			自然木			樹種	木製品			自然木		
	数	割合	計	数	割合	計		数	割合	計	数	割合	計
(計測樹種)	1	2	3	2	1	3	ナラ	1	7	8	1	7	8
アゲヤ	2	2	4	ハンノキ	23	23	タネヤ	1	1	1	1	1	
モミ	11	15	26	タリ	5	5	サクラ	2	1	3	3	3	
スギ	1	1	2	タリ	1	1	ナドリノキ	1	1	2	2	2	
ヒノキ	3	1	4	タリorコナラ	3	4	カエデ	1	1	2	2	2	
カバ	3	1	4	コナラ	14	16	クナボク	1	1	2	2	2	
カヤ	3	1	4	タネヤ	41	127	クサ	3	3	3	3	3	
村栗	1	2	3	アケヤ	2	35	トネリコ	6	6	6	6	6	
(以て)				ブナ	10	10	広葉樹	1	1	1	1	1	
オニグルミ	1	15	16	ツグミ	3	17	広葉樹	1	1	1	1	1	
ヤナギ	1	1	2	ムクノキ	4	4	広葉樹	1	1	1	1	1	
イヌシラ	1	1	2	エノキ	4	4	広葉樹	1	1	1	1	1	
アマシ	1	1	1	ケヤキ	1	1	不明	2	1	3	3	3	
							総計	100	321	421			

第3章 検出された遺構と遺物

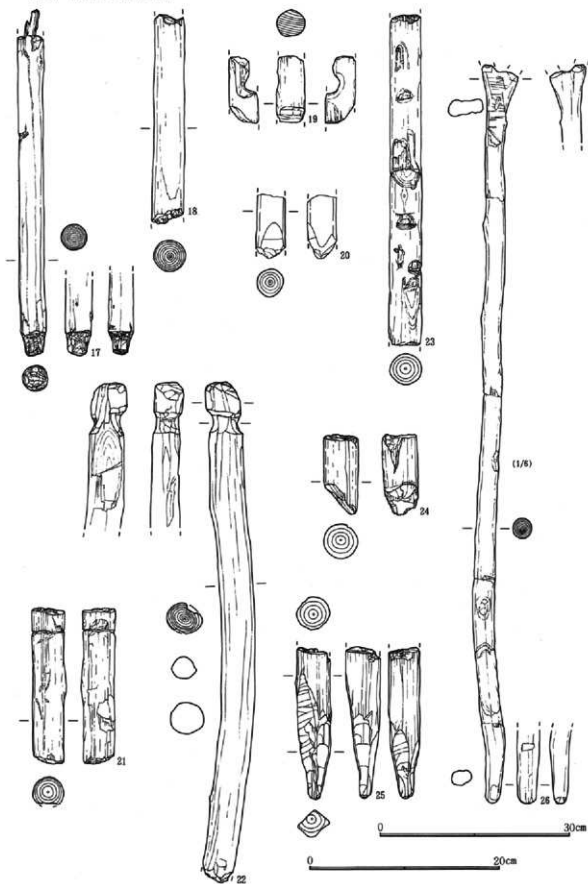


第191図 谷地出土木器(1)



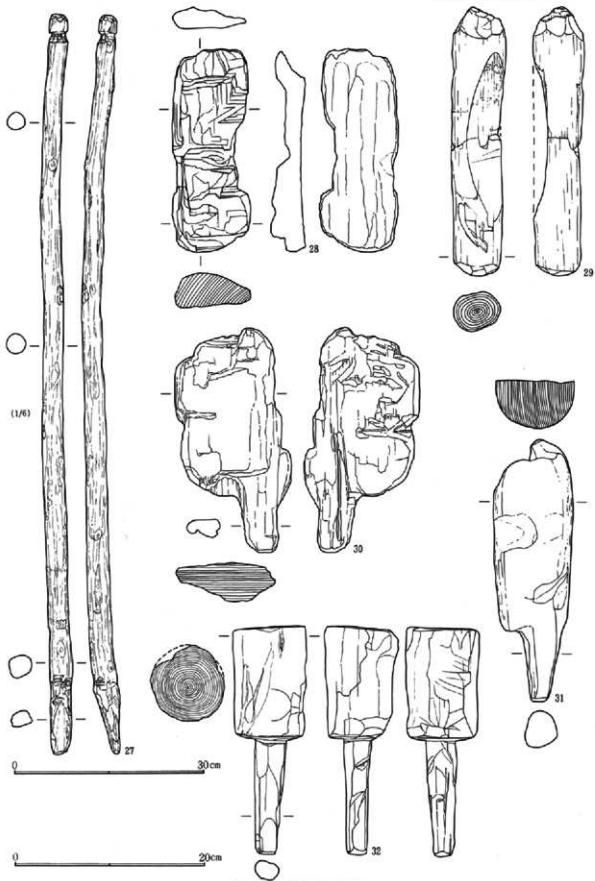
第192図 谷地出土木器(2)

第3章 検出された遺構と遺物

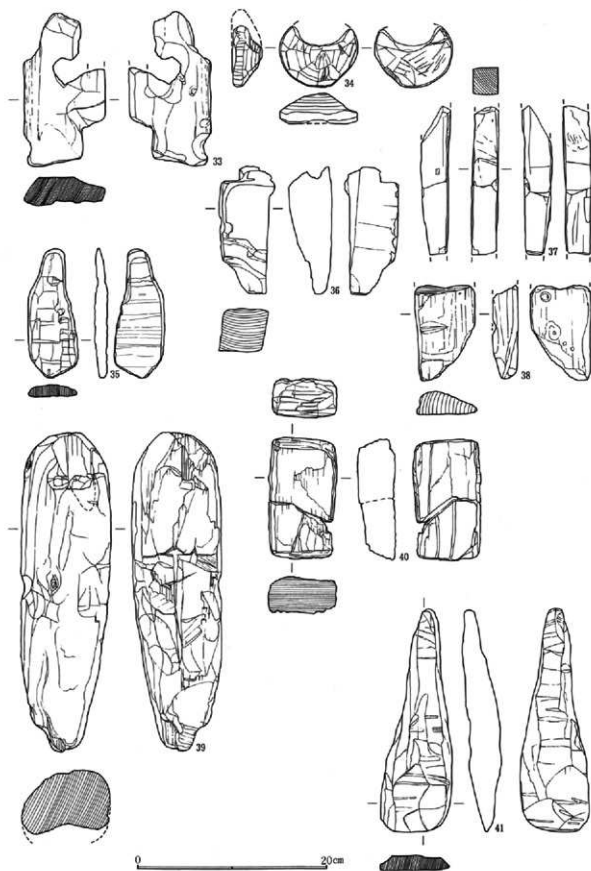


第193図 谷地出土木器(3)

第3節 古墳時代後期の遺物

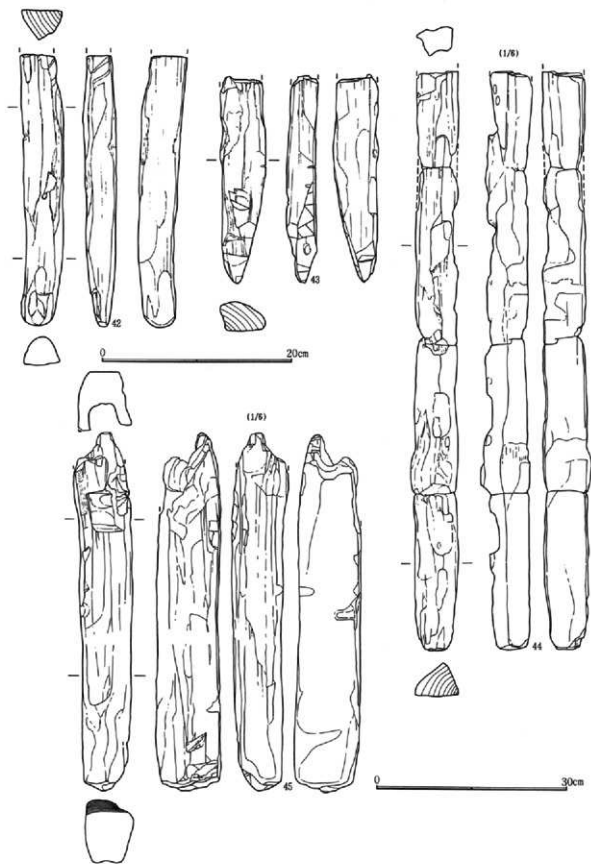


第194図 谷地出土木器(4)

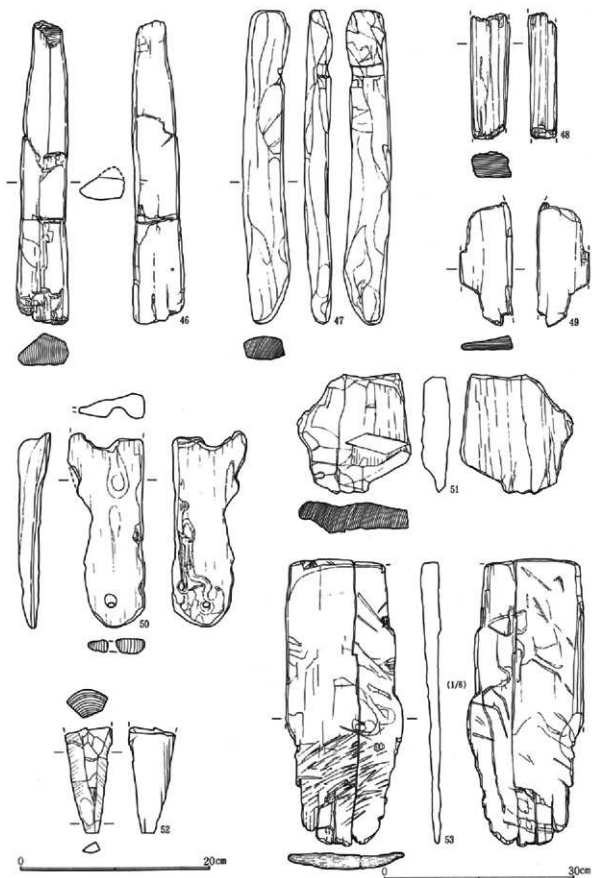


第195図 谷地出土木器(5)

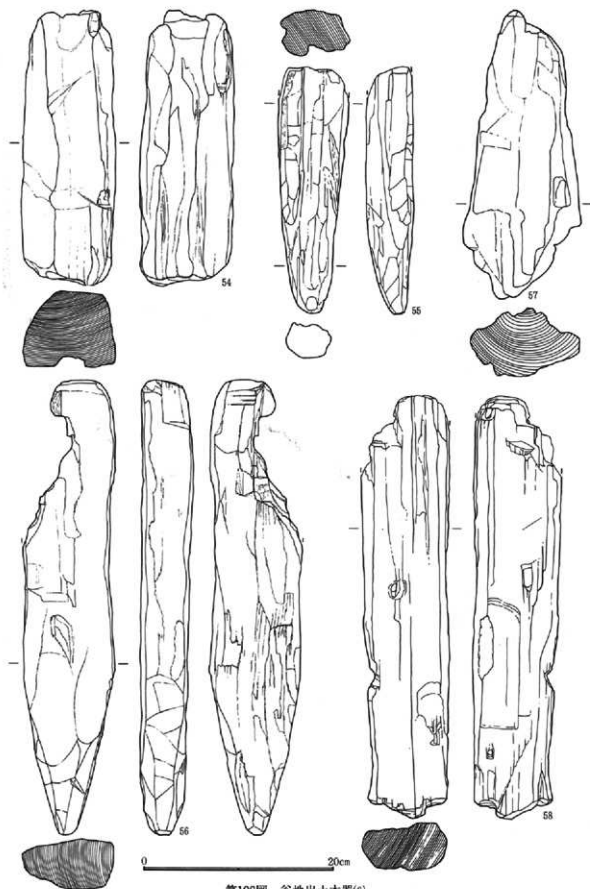




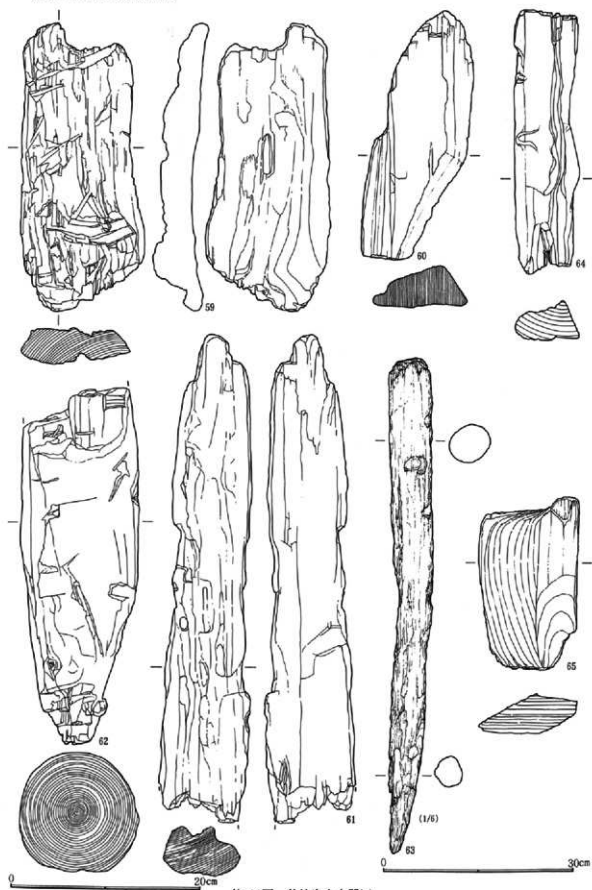
第196図 谷地出土木器(6)



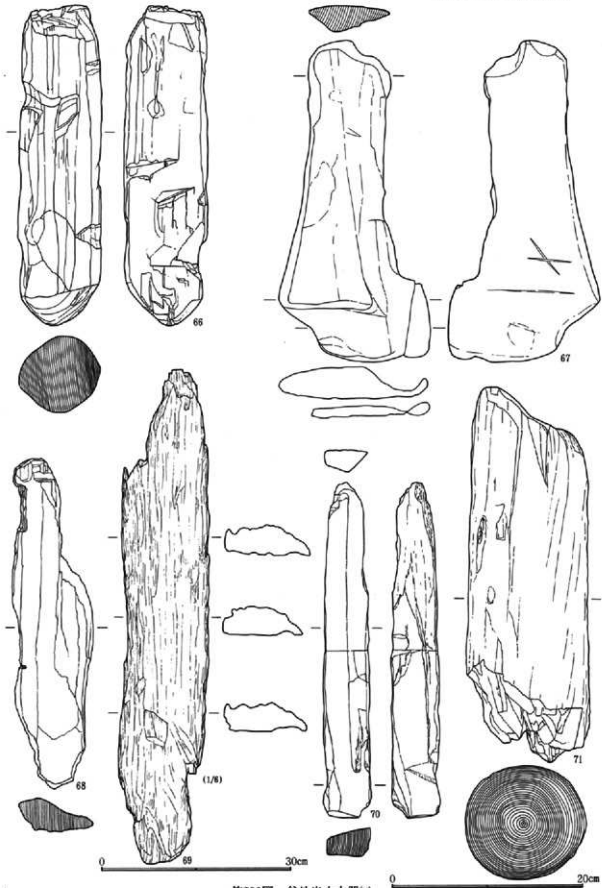
第197図 谷地出土木器(7)



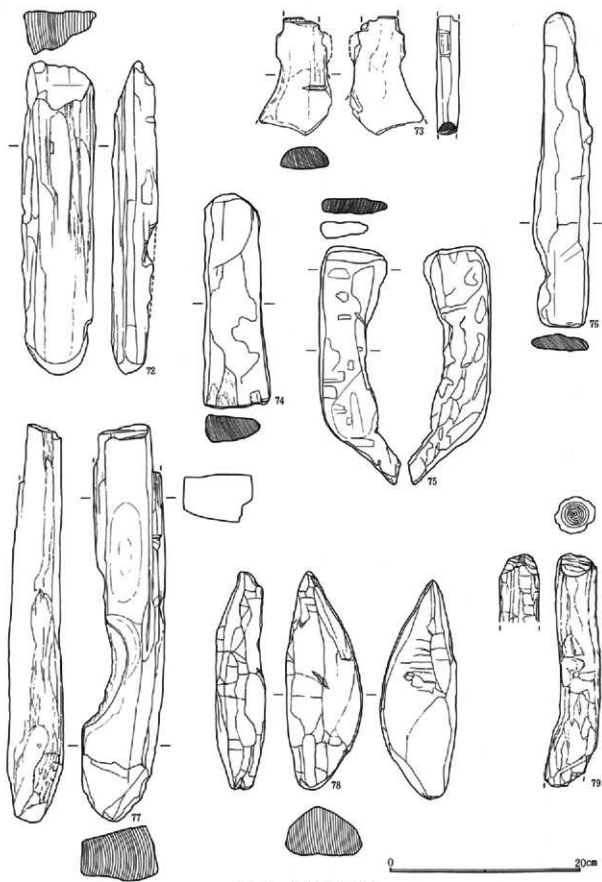
第198図 谷地出土木器(8)



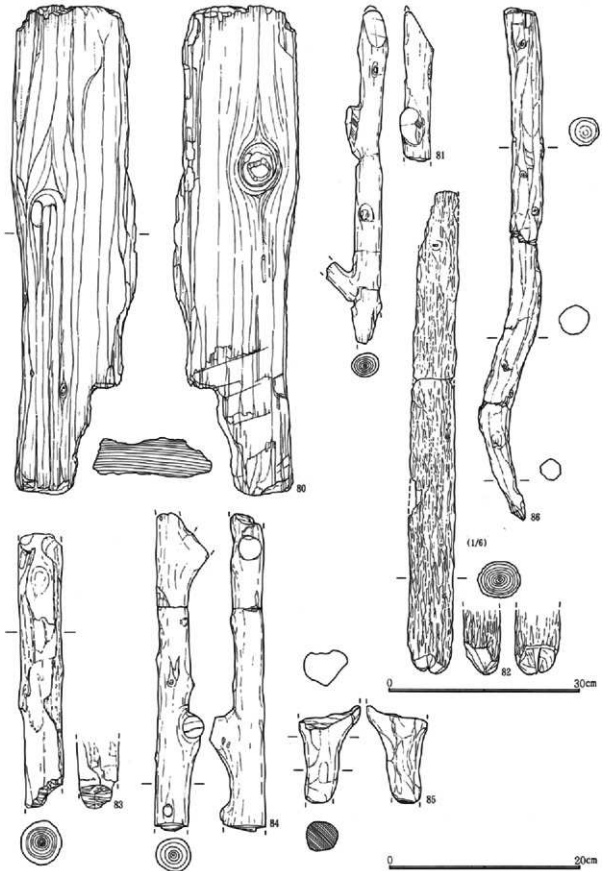
第199図 谷地出土木器(9)



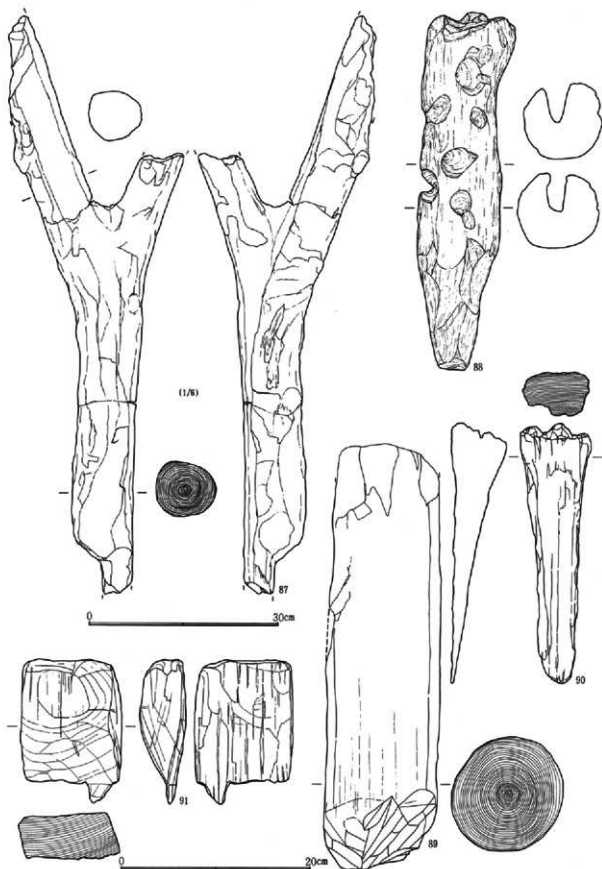
第200図 谷地出土木器00



第201図 谷地出土木器01

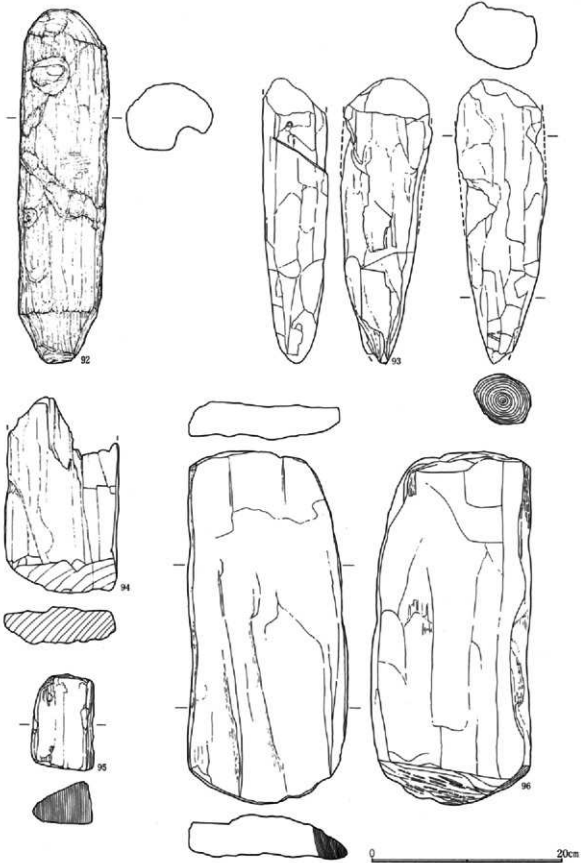


第202図 谷地出土木器(2)

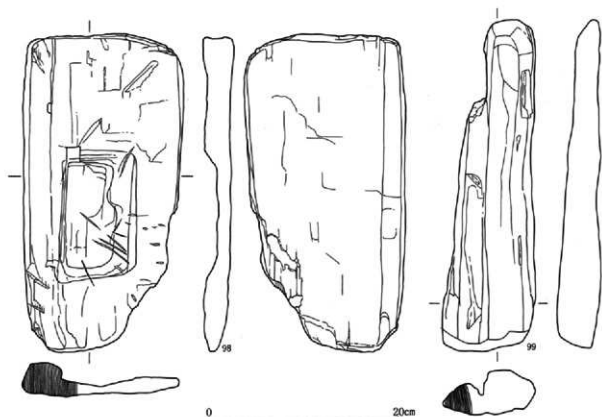
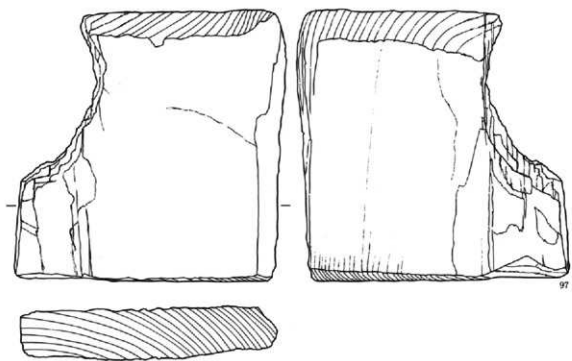


第203図 谷地出土木器03

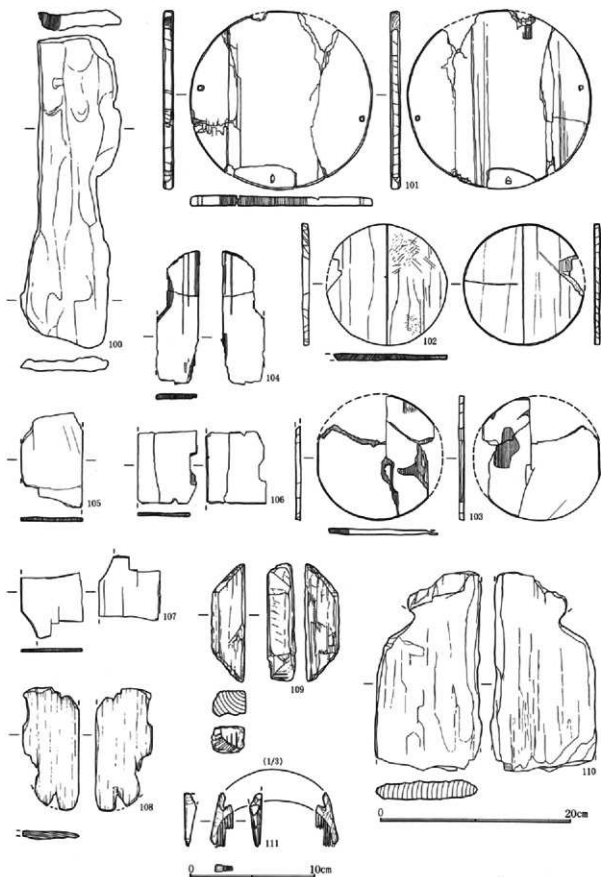




第204図 住居跡柱材(1)



第205図 住居跡柱材(2)

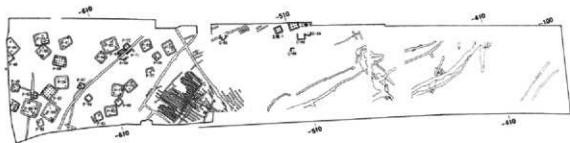


第206図 中世井戸出土木器

第4節 古墳時代前期の遺構



第207図 古墳時代前期遺構分布図



古墳時代前期に属する遺構には約149軒の竪穴住居跡と10基の方形周溝墓・前方後方形周溝墓の他、畝跡と考えられるさく状の遺構がある。竪穴住居跡を中心とする遺構分布は遺跡地内の東・西線を区切るように発達した谷地地形の間、中央部をほぼ東西方向に長く分布し、かなりの密集度を呈する。西線を区切る谷地をはさんでさらに西側の低台地上にも1群を形成している。周溝墓と竪穴住居群とは明瞭な墓域・居住域の区別が意識されていた状況は無く重複のまま生じている。ただし重複関係からは周溝墓に住居跡が先行する事例が調査段階では多く報告され、時間的経過の中での現象も考慮されなければならない。

### 1. 竪穴住居跡

古墳時代前期に属する竪穴住居跡は149軒を数えるが本遺跡の北側に続く三和工業団地遺跡（『三和工業団地Ⅰ遺跡』1999群埋文）では同時代に属する124軒の住居跡が検出されている。さらに東・西城では同名の遺跡が調査されており、その実数は把握できていないが、竪穴住居数300軒以上を擁する大規模集落となり、当該地域の中核的集落としての位置づけができよう。集落景観については古墳時代後期と同じく狭小な範囲による概観にすぎない。ただ、本遺跡は周辺遺跡の中でも大凡中心的な範囲を占めることが窺われることから、見通しとしての一端は負えるものと考えられる。

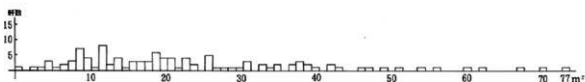
本項では前項につづき古墳後期の竪穴住居群で概説した集落景観に触れたいが、住居群の段階的変遷把握は後期と同様で現状では遠くおよびない。遺構の密集度はまして濃く、墓域をも含む複雑な様相のため、より抽象的に成らざるを得ない。

### 第3章 検出された遺構と遺物

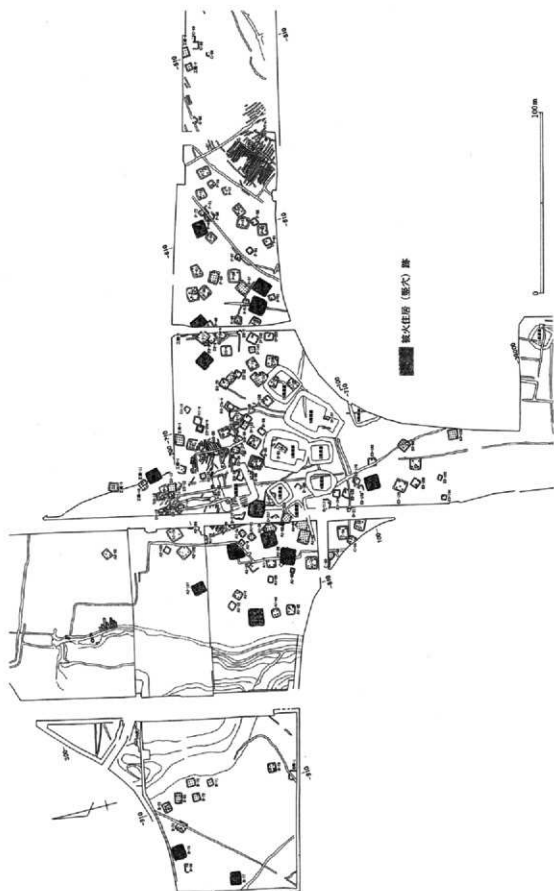
当該期の集落分布状況は上述したが、一般的な集落遺跡の平面形状はその立地する地形条件に大きく関係するようである。しかし、当遺跡において後期・前期の住居群分布を比較した場合両者にはやや異なった分布傾向が見られ、両者を比較的視点によって見ると、その異同がより鮮明に看取できる。後期のそれは南北方向へ延びる舌状の台地地形の長軸に沿うようにして南北に展開するが、これに対して、前期ではほぼ台地を東西に横断するような形状である。この相違がどの程度実体として捉えうるかの確証はないが、附会すれば後期段階では台地西縁地帯を集落構成の主体にし、これに先行する前期では東縁地帯を構成の主眼においていた可能性が強い。ちなみに、西縁・東縁は湧水起源の谷地地形であり、後・前期の集落はともにこの湧水または谷地をそれぞれに指向していたと考えられる。この蓋然性の根拠の一事例として、東縁谷地内より前期集落と同時代的な祭祀関連の遺物が検出されており（『三和工業団地Ⅰ遺跡』1999群理文）西縁谷地からは後期集落段階に属するこれもまた祭祀行為に関連すると思われる遺物群が見いだせることである。自然条件としての湧水や谷地への異なる指向を規定した要因の一つには、生活に必須条件となる湧水の活性と枯渇の問題が考えられ、これには谷地形成過程・変遷と両期集落成立時との相関関係解明の検討が不可欠である。

前期集落の構成形態は大略、大・中・小規模住居が複合体としての単位集团的編成をとるようであり、その意味では後期集落構造に通ずるところがある。住居規模については最大70㎡におよぶ大型住居も存在するが、10㎡以下から各規模段階の住居割合は後期のそれと基本的には軌を一にしていると思われる（第208図）。しかし、後期段階では各単位集団が塊りとして集約的な配置関係をとるのに対し、前期では弧状一線に配置される形態をとり単位共同体における経帯の古段階の様相が窺われる。また、前期集落に看取される弧状単位が同心円状に二重ないしは三重の構造帯を成すが、これが集落本体の拡張か縮小のいずれを示すかは現状では明らかではない。また、この重層的構造をもつ住居群が複数単位として形成されており、後期的の共同体単位分化への変遷過程として捉えうる可能性がある。当該期の基本的単位集団の配置形態としては、西縁谷地で区切られる西端の低台地に見られる一帯の住居のあり方が典型として考えられる。

舞台遺跡における個々の住居構造については住居の基本的施設の炉跡を有さない遺構や柱穴の検出が無い遺構などの機能的問題と、少なくともは被災住居のとらえ方など検討課題は多岐におよぶ。ただ、被災住居については構造材としての炭化材の質弱さと遺棄される遺物の出土量や小片化の状態から、事後的な状況よりは意図的な廃屋整理に伴う放火行為に理解がおよぶものが多い。



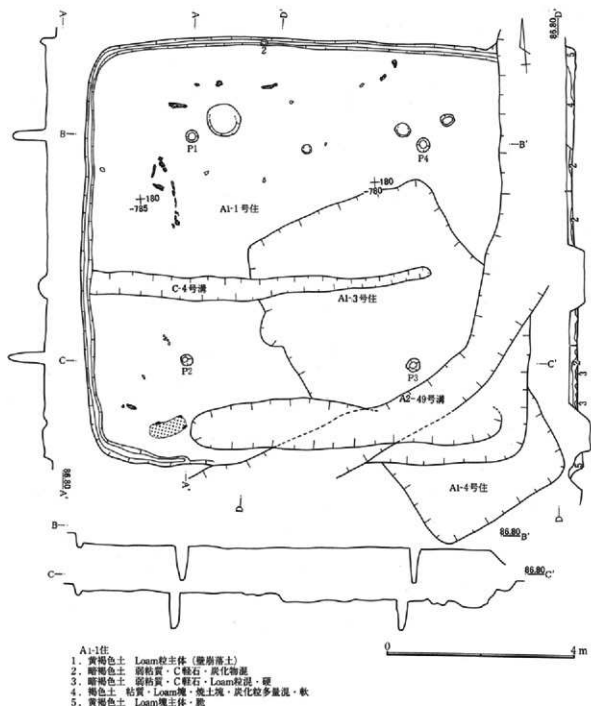
第208図 古墳時代前期住居跡面積分布



第209図 古墳時代前期被火住居（竪穴）跡

A1-1号住居跡 (第210図 P.L.69)

座標値  $X=174\sim 183$ ・ $Y=-776\sim -786$ の範囲にある。東縁はA2-49号溝 (平安時代以降) との重複で大半は消失し、他に重複関係が著しくC-4号溝 (平安時代以降)・A1-3号・6号住居跡 (古墳時代後期)・A1-4号住居跡 (古墳時代前期) がある。平面形状は東西方向に長軸を持つ方形を呈する。規模は長軸9.4m・短軸8.8m、床面積77.3m<sup>2</sup>の大型住居である。確認壁高は15cmで浅い。長軸方位はN-85°-Wを示す。埋土は床土に似るLoam塊の混じる暗褐色土である。



第210図 A1-1号住居跡



炉跡及び貯蔵穴はA<sub>1</sub>-3号住居跡によって消失したためか検出されていない。

床面は平坦をなす。壁下溝は全周すると思われるが、東～南壁部分はA<sub>2</sub>-49号溝によって消失する。幅15～20cm・深さは均一ではないが約10cmである。柱穴は4穴が検出され、径25cm前後、深さ70～80cmで柱痕径は15cmになる。柱間寸法は北列（P1・P4）・南列（P2・P3）が4.9m、東列（P3・P4）4.6m、西列（P1・P2）4.7mを測る。北西及び南西部の床面に近く若干の炭化材が残るが、残存遺物の量の少ないことを考え併せれば、廃屋後に意図的な焼き払いが行われたと考えられる。

出土遺物は極めて少なく、器台・甕などの破片である。

#### A<sub>1</sub>-4号住居跡（第111図 P L.69）

座標値X=172～175・Y=-776～-780の範囲にある。北壁線はA<sub>2</sub>-49号溝（平安時代以降）とA<sub>1</sub>-3号住居跡（古墳後期）と重複し消失するが、平面形状は東西方向に長軸をもつ方形を呈しよう。規模は長軸3.2m・短軸2.6m+ $\varnothing$ 、床面積は6.8m<sup>2</sup>+ $\varnothing$ 、確認壁高は20cmで直立に近い。長軸方位はN-64°-Eを示す。埋土は大別2層で混入物の少ない黒～暗褐色土からなり、自然堆積であろう。

炉跡は検出されないが、貯蔵穴と思われる穴は南東部にある。60×40cmの方形で、深さ20cmである。

床面は平坦をなすが堅牢さは無い。床下掘形は浅く、床土はLoam混土の暗褐色土を充填する。柱穴・壁下溝は検出されない。

出土遺物は少なく、貯蔵穴埋土上面に甕口縁部が、また縁辺床面には二重口縁蓋口縁部が検出されている。

#### A<sub>1</sub>-5a号住居跡（第177図 P L.69）

座標値X=170～175・Y=-771～-775の範囲にある。A<sub>1</sub>-5b号住居跡（古墳後期）と重複し、平面形状は定かではないが東西方向に長軸をもつ不整形を呈する。規模は長軸4.1m・短軸3.3+ $\varnothing$ m、床面積は115+ $\varnothing$ m<sup>2</sup>、確認壁高は50cmで壁縁部の崩落が進み壁面法幅が不安定になっている。長軸方位はN-61°-Eを示す。埋土は大別4層で、中位層には多量のLoam粒が混じり破片化した遺物も多く検出される。人為的埋土とともに遺物の投棄が行われたものと考えられる。

炉跡は検出されていない。

床面は東壁に沿って幅50cm、落差15cmほどの平坦な高まりを設ける。床面全体には堅牢さはない。床土はLoam土を多く混する鈍黄褐色土である。被火住居で焼土薄層や炭化物が床面近くに検出されるが、分布は局所的で家屋構造材に匹敵するような量ではなく、残材整理等を目的とした意図的な放火であろう。貯蔵穴・柱穴・壁下溝などは検出されていない。

出土遺物は埋土中位層堆積段階での一括投棄と考えられる。器種・量とも多く、鉢・平底甕・S字口縁甕・器台の多さが目立つ。

#### A<sub>1</sub>-7号住居跡（第211図 P L.69）

座標値X=181～186・Y=-802～-808の範囲にある。平面形状は長短軸長差の無い方形を呈する。規模は軸長4.5m、床面積は18.6m<sup>2</sup>、確認壁高は15cm足らずで掘り込みは浅い。北西面壁線に直交する軸線方位はN-45°-Wを示す。埋土は壁際での順次堆積が観察されLoam粒・塊の混入が多く人為的埋土が考えられる。中央部黒褐色土には混入物が少ない。

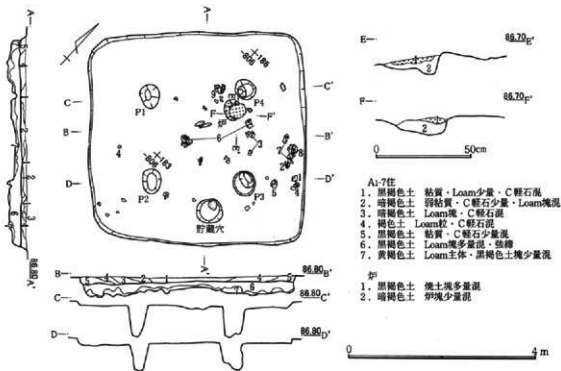
炉跡は北寄りで柱穴P4に近接してある。径45cm・深さ10cmの略円形で皿状に窪む。火床焼土面の厚さ

第3章 検出された遺構と遺物

は4cmで、基底はLoam塊を混じえる床土となり、地床炉である。貯藏穴は東壁寄り中央にあり、径50cm、深さ25cmの略円形である。

床面は平坦である。床下掘形は10~20cmと深く、東から西へT字状に高まりを残す。床土はLoam塊を混える黒褐色土を充填する。柱穴は4穴で、径50×40cmの楕円形または径50cmの円形をなし、深さ40~60cmである。柱間寸法は北列(P1・P4)・南列(P2・P3)が2.0m、東列(P3・P4)・西列(P1・P2)が1.75cmと1.7mを測る。

出土遺物は少量ながら床面に近く、器台・高坏・台付き埴・二重口緑壺・寛・S字寛などがある。



第211図 A<sub>1</sub>-7号住居跡

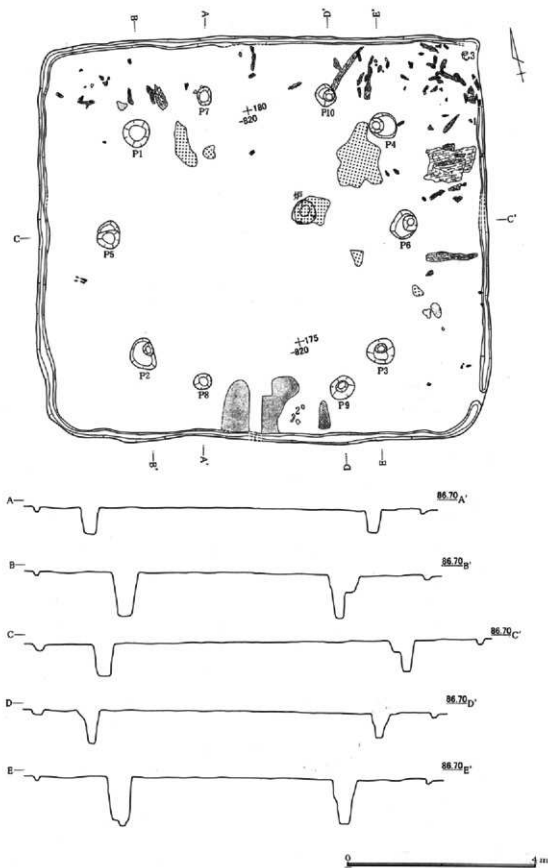
A<sub>1</sub>-10号住居跡 (第212図 P L. 69)

座標値X=172~181・Y=-815~-825の範囲にあり、A<sub>1</sub>-13号住居跡(古墳後期)と重複する。削平が深く壁線がかりうじて辿れる遺存状態である。平面形状は東西方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸10.5m・短軸8.5m、床面積77.1m<sup>2</sup>、壁線は痕跡程度である。長軸方位はN-100°-Eを示す。

炉跡は中央やや北東寄りにある。径50cmの浅い窪みで火床は赤化面を生成する地床炉である。

床面は平坦をなす。北壁から東壁沿いおよび中央部に炭化材が遺存し被火住居跡である。炭化物には家主構造材を思わせる材は見られずまた、遺物残存も希少なことから崩屋に伴う放火と考えられる。柱穴は10穴で、主柱穴は通常形態を示す4穴(P1~P4)に住居跡長軸方向中央列のP5とP6にならうか。このP5・P6柱列線は短軸主柱(P1・P2)と(P3・P4)間を等分する。P7~P10は長軸方向主柱間にあり、補助柱穴にならう。なお、P5~P10はP1~P4の主柱穴結束線より外側に配され、全柱穴結線は10角になる。隣接柱穴の位置関係は主柱穴間と補助柱穴間にはほぼ等間主・補助柱穴それぞれも等間となっている。主柱穴間は北列(P1・P4)と南列(P2・P3)が5.0m、東列(P3・P4)は4.7m、西列(P1・P2)は4.6mを測る。壁下溝は全周し、幅12~15cm、深さ10cm前後である。

出土遺物は少ないが、二重口緑壺・ひさご型壺などがある。



第212図 A1-10号住居跡

A<sub>1</sub>-12号住居跡

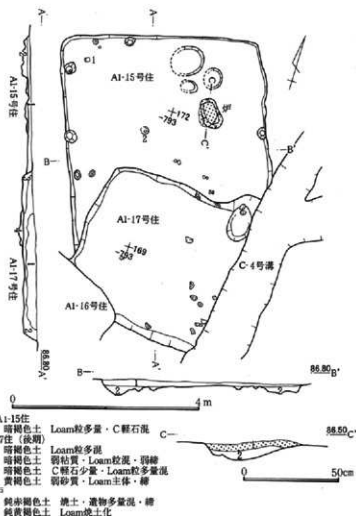
座標値 X = 185 ~ 189 · Y = -706 ~ -713 の範囲にある。削平が著しくその存在は住居跡床土と考えられる黒色土の分布と炉跡の確認によって認定されたものである。柱穴などは検出されず詳細は不明である。確認規模は北西～南東軸は約 4 m、北西～南西軸は 3.8 m ほどである。長軸北西～南東方向は N-42°-W を示す。炉跡は地床炉になろう。出土遺物は無い。

A<sub>1</sub>-15号住居跡 (第213図)

座標値 X = 168 ~ 173 · Y = -790 ~ -795 の範囲にある。南側で A<sub>1</sub>-16号住居跡 (歴史時代)、A<sub>1</sub>-17号住居跡 (古墳前期) と、南東部で南北走る C-4号溝とも重複し南壁線は消失している。平面形状は定かではないが南北方向に長軸をもつ方形を呈すると考えられる。規模は長軸 4.5 + 0 m、短軸 4.3 m、床面積 19 + 0 m<sup>2</sup>、壁高はかろうじて壁線を確認する程度である。長軸方位は N-20°-W を示す。

炉跡は北東寄りにあり、径 65 × 35 cm の楕円形で僅か皿状に窪む。炉底は厚さ 10 cm ほどの焼土が形成される地床炉である。

床面は平坦をなす。床下掘形は浅く、Loam塊を混ざる暗褐色土を充填する。主柱穴となるべき穴は検出されず、東・西・北壁沿いにそれぞれ 1, 2, 3 の小穴が認められるのみである。壁下溝、貯蔵穴なども検出されていない。



第213図 A<sub>1</sub>-15号住居跡

出土遺物は少量で、台付き壺・器台がある。

A<sub>1</sub>-19号住居跡 (第214図 P L. 69)

座標値 X = 158 ~ 163 · Y = -791 ~ -796 の範囲にある。A<sub>1</sub>-16号住居跡 (平安時代)・A<sub>1</sub>-25号住居跡 (古墳後期) と重複し、東縁は C-4号溝 (中世以降) によって消失する。平面形状は南北方向に長軸をもつ方形を呈しよう。規模は長軸 5.1 m、短軸 4.5 + 0 m、床面積 20.0 + 0 m<sup>2</sup>、確認壁高は 10 cm である。長軸方位は N-11°-E を示す。

炉跡は中央わずかに北により、径 70 × 35 cm の楕円形で深さ 5 ~ 6 cm の浅い窪みをなす。皿状の底面は焼土化の痕跡程度である。炉跡内及び周辺に数個の小児頭大円礫が検出されているが、原位置を保たず炉材